

また一緒に笑い合えるように

ハルノブ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アルスとの最終決戦より早三か月、ヒロトはマギーとの会話でイヴとのやり取りを振り返る。振り返るとイヴの言動は彼女がやりたい様にやったとは思えなくて……？

「もう、諦めたりしない」彼の決意、その先にはきつと……。

※奇跡オンリーでは納得がいかないので『ある程度』納得がいくであろう要素を加味します。

※本編完結、後日談（新章）『今、この空の下で』更新中

目次

また一緒に笑い合えるように

やりたい事、やらなければならない事。

大切に、楽しい記憶達

大切に、悲しい記憶

記憶を希望にする為に

奇跡を『起こした』ダイバー

知る事、そのリスク

奇跡を『起こす』為には

意思を示し、走り出す

意志の連鎖

言葉を重ねて

起こりうる未来

同盟準備

AVALONのフォースネストにて

BUILD DIVERS || AVALON同盟

暗闇の夢から

オフライン会議

何の為に泣いたのか

GMとの出会い

想い、託して

伝わる想い

声は、伝わって

変わる未来

星の海で

218 205 189 181 172 163 151 143 134 125 115 107 97 86 72 64 57 50 37 29 19 9 1

小さな恋人

—————

229

家族

—————

241

一緒に歩く未来

—————

251

今、この空の下で

打ち上げ

—————

261

夏のある日・前編

—————

275

夏のある日・後編

—————

285

デート

—————

293

お茶会

—————

303

また一緒に笑い合えるように
やりたい事、やらなければならない事。

ヒロト達がアルスとの最終決戦を終え、早くも3か月が経った。

ここ3か月の間にGBN内の出来事として二つ目のビルドダイバースとしては正式に元祖ビルドダイバースと同盟を組むといった結構なイベントがあった。リアルでのイベントは学生であるヒロト自身とカザミの試験期間が迫ってきてログイン頻度が落ち、今度は気楽なオフ会でもしようという話もあったが日取りが上手く決まらずにいる。

そんな体感としてはかなり早めな3か月を過ごした今日、ヒロトはフォース『アダムの林檎』リーダーであり上位ランカーのマギーのバー入口まで来ていた。

マギーは個性の強い人物であるが、初心者の手ほどきを行ったりダイバーの悩み相談に乗ったりと良心的ダイバーとしても名をはせている。

実際アルスとの決戦前、大規模シミュレーションを行う事が出来たのはマギーの人脈が有ればこそだった。

『本日貸し切り♡』と札がかかっているドアを開けて中に入る。

「あれ誰も居ない?……マギーさん!居ますか!」

「はーいーごめんね、ちょっと待ってえ!」

どうやらマギーは奥にいるようだ。

ヒロトは椅子に座っているのか悩み、なんとなく店内を見渡す。以前初めて来たときは店の内装に気を遣う余裕など無い状況であったが、シンプルながら大人の雰囲気漂うバーだ。と感じても未成年のヒロトに実際バーなんて行った経験はない。

壁に掛けられているイラストに目が留まる、イラストと言うより英語で書かれた文章が額縁に収まっているだけの物だ。

英文は簡単に和訳はすぐにできた、わざわざGBNのバーに飾られてくるくらいなのだ、おそらくガンダム系のネタで間違いはない。

そして1分もない間にバーの奥から朗らかな様子でマギーが出てくる。

「ユアウエルカーム♪ヒロト君、いらっしやーい。あ、それやっぱり気になっちゃう？」

「ええ、まあ」

「ここに来るの初めてで気が付いた人、皆同じ顔をするわ。その後、私にこう言うの、あれ何で飾ってるんですか？って。聞かれた私は目に『止まっちゃう』からって返す。ここまでテンプレよ、100回はやっ
たわ」

「つぶ」

英文は和訳すれば『止まるんじゃねえぞ』であった。

マギーの淀みないトークにヒロトは思わず笑いが込み上げて、すぐに飲み込んだ。

「……改めてこんばんは。シミュレーションの件、改めてありがとうございます
ございました」

「どういたしましたして、気楽にしていいわよ。さ、座って、どーぞどーぞ」
「あ、はい」

促されたヒロトはバーカウンターの小高い椅子に座る。

マギーはカウンターの向こうで飲み物を出しながら、ちらりとどこか所在なさげにするヒロトを見てクスリと笑った。

「あ、座りにくかったらその普通の席でもいいわよ？」

「いえ大丈夫です」

「そう、炭酸って飲める？」

「飲めます」

「じゃあとりあえずこれかしらね」

ヒロトが受け取ったグラスには濃いめの青いジュースが入ってる
ようだった。

「ブルーハワイ？」

「そう、イメージ的には貴方のアースリイガンダムね、飲みやすい炭
酸よ。……あざとすぎるかしら？」

「いえ、嬉しいです」

「良かった、じゃあ乾杯」

「……乾杯」

グラスが合わさって軽い音が鳴る。場慣れしてないヒロトには不思議な音色に思えた。

「何か話があるって事でしたけど……」

「あら、そんな難しい話じゃないのよ?」

「そうなんですか?」

何の話をするべきか話題を持ってこれなかったヒロトは、この流れなら雑談だろうと辺りをつけて内心でホッと一息入れた。ブルーハワイを口に運び、飲み込む前に味を確認すると割と好みの味がする。

「ただのよくある恋バナよ」

「……へあ?!」

狙い済ましたかのようなタイミングで放たれたマギーの言葉に撃ち抜かれたヒロトは、身内でもなかなか聞かないような声を出してしまった。

「あら、そんなに驚く?」

「いや急に何聞いてるんですか!」

予想外の話題の振り方に焦るヒロトは大きな声で質問を返す。

マギーはだって、と肩をすくめると

「メイちゃんの話だとエルドラに巫女服の女の子、ヒナタちゃんだっけ?を招待したって聞いたし。ちよつと好奇心わいちゃって」

「ヒナタは幼馴染で、そういう関係じゃないです。家族みたいな……」

「あら、そうなの。じゃあ、メイちゃんは?」

「メイは仲間ですよ!」

「あら、異性として好ましくない?」

「……良い人だとは思いますが、そういう目では、ちよつと」

「うふふ、そう。なら……」

「……まだ続くんですか、この話題」

必死で真摯に返すヒロトはまだ次があるのかとすでに疲れを見せている。

そんな彼の様子にマギーはクスクス笑う。

「本命はイヴちゃん？」

「ッ!!」

滅多に感情を荒立たせないヒロトだが、誰にでも踏み込まれたくない領域はある、イヴの話題はまさにそれだった。

ガタンと大きな音を立て彼は立ち上がり、俯いて歯を食いしばる。傍から見ると亡くなった想い人をたかが恋バナに出されたヒロトは怒って良い、この話を聞いている人が他に居ればさらに怒ってマギーを強く咎めるだろう。

しかしこの店は本日貸し切り、誰も居ない。

「……もう帰ります」

「あら、本当に帰っていいの？」

踵を返そうとするヒロトをマギーは素早く引き留める。

「何が言いたいんですか!？」

「……どうしようもないから諦めるの？」

荒ぶるヒロトに対しマギーの声色は変わらず落ち着いたものだった。

二年程前に起こった第二次有志連合戦の終盤、オープン回線から聞こえたリク達の言葉は否応なくヒロトを打ちのめした。

『好きを諦めない』彼らはそう言っ、最後まで抗い続けていた。

だが、あの時点でヒロトには選択肢などなかった。

イヴが何かの事情を抱えているのは察していたが、まさか異星から地球の電脳空間にやってきたなど想像できる訳もない。

これからずっと仲良く遊んでいられる、やりたい事だってある、希望に満ちていた時間は突然に終わりを告げた。

しかし、イヴの死は消して無駄になっていない。サラは救われ、世界は救われ、多くのELダイバーが生まれるきっかけの一つとなった。

こうするしかない、今あることを喜ぶ他にどうすればいいんだ。

怒りに身を震わせたヒロトは、持ち前の冷静さをすぐに取り戻した。感情を理性でコントロールできるのはヒロトの長所であり、この場において何より痛ましい事であった。

「イヴは自分のやりたい様にやっただと思います、俺はそれを尊重したいんです」

「……そう」

声は少しだけ震えてはいるが、ヒロトは努めて冷静に自分の考えを述べた。

その少し震えた声とヒロトの痛ましくも素晴らしい理性にマギーは一粒涙を落とし、それでもあえて言う。

彼の今の声を聴いてさらに踏ん切りがついたのだ。

「あなた鈍感って言われたことない?」

「え?」

「やりたい様にやっただってなによ?」

鼻を鳴らすマギーにヒロトは一瞬ポカンとしてしまう。

「……イヴは自分の身をかけてGBNを守ったんです、それを」

「そんなのやりたい様にやっただとは言わないわ」

「え、は?」

「それは彼女自身がやらなくては駄目と思ったから、だからやっただけよ」

「っアンタに何がわかる!!」

言葉の綾を取るマギーにヒロトの憤怒は再度湧き上がった。

だがマギーは今にも掴み掛りそうなヒロトの怒りをまるで気にしない。

「それはまあ、女の気持ちかしらね」

「ふざけるな!」

「ふざけてないわ、ちょっと聞きなさいな。あなた本当は気づいてるんじゃないの?」

「……何を?」

「聞いた話によれば、第一次有志連合戦よりずっと前から貴方とイヴちゃんは一緒に遊んでいた、きつと生半可な時間じゃないんでしょうね。その中でいろんなアーマーを作ったりデイメンションを巡ったりしていた。そうした話の中で宇宙で超長距離を移動できるようなアーマーを作りたいと思えるようなことがあった」

「……ネプチューンの事ですか？」

「そうそのアーマー。完成しなかったのはともかく、どうして彼女のために作ってみようと思ったの？」

「二人で一緒に銀河の果てまで行きたいって、そう言っていたから……ダメでもとものつもりだったけれど……」

「ああ、ロマンチックねえ。……ねえ、これで気が付かない？」
「え？」

「やりたい事とやらねばならない事の違いよ、やりたい事は二人でこの先も一緒に居たい、やらねばならない事はもうやったわ」

ヒロトは過去の事をあまり深く思い出すとどうしても気分が重くなるので、過去を自分で振り返り咀嚼しなおすができていなかった。

イヴはこれからやりたい事ははっきり口に出す性格だ。思い返せばヒロト自身最初の方はGBNでやりたい事が上手く見つからず、イヴの提案に乗っているんな場所にとにかく向かっていた。プラネットツシステムのアーマー達は殆どその時に着想を得ている。

「いやでも、二人でこの先も一緒に居たい、とは言っていないような？」
銀河の先まで行こうと言ってるだけじゃないか、と再度記憶を掘り起こしてみるが、やはりそう言っている筈だ。

いつの間にか自然に怒りが収まり、いつも通り落ち着いた調子を取り戻したヒロトにマギーは内心ホツとする。

「あら、本当に鈍感」

「……ええ？」

「あのね、銀河の向こうにまで仮に行けたとして、どれくらい時間がかかるのよ？そんな長時間誰も居ない場所で二人でいたいなんて、ほとんど告白じゃないの。ただの男友達にそんな事を言う女はいないわ」
「え!?!そんな……ええ」

マギーがヒロトのグラスにお代わりを注ぐついでに、注意深く彼の表情を伺うが怒りは本当に消し飛んだようだ。

それどころか思わぬ過去の解釈を示唆されて顔は真っ赤に染まった子供のそれである、表情を押し殺しているより遥かに健全だろう。「嘘だと思えば本人に確かめてみなさいな」

「……どうやってですか？」

彼女の体は既に存在せず、データは四散してGBNの何処かを漂い、ほぼ形を成していない。メイの持っていたあのイヤリングはほぼ奇跡の産物だ。ここまで焚きつけたからには具体的な案もありそうだが、とヒロトは期待してマギーに問うが

「知らない」

マギーの答えは素早かった。

「ええ!?!」

「私はプログラマーじゃないもの、まるで具体案ありますよね? みたいに聞かれても困るわあ」

「それは……そうですね」

「やり方も自分で考えなさいな。いえ、自分達で考えなさい。その上で誰か探してほしいならもちろん手伝うわ」

マギーは微笑みながら応援する。

ヒロトはマギーの持つて回った言い回しでなんとなく思い当たることがあった。

「もしかして、メイから何か相談されたりしたんですか？」

「あら、気づいちちゃった? 気づいちちゃったついでにその他もう二つ来たわ、似た相談」

ヒロトはああ、と呻いた。

マギーはその様子について悪戯心が沸いた。

「パル君からはヒロトさんが時折すごく悲しい雰囲気を出すときがある」

「パル……」

パルは優しく聡い、ヒロトの様子に察するところもあり思わず相談に来たのだろう。

「カザミ君からミッション終わった後にディメンションを見渡してる事がある」

「カザミ……」

最初は本当にどうかと思ったが、今となってはなかなか頼れるリーダーになったカザミは周りを見ることをしっかりと覚えたようだ。

「メイちゃんからヒロトがうじうじしてる」

「メイ!？」

メイは表情が少しは動くようになったり、感情がどんなものかを理解しつつある。言いたいことをはっきり言うのも個性だろう。

「ふふ、要はみんな気が付いてるって事よ、貴方が諦めたくないって」
「……やるだけやってみます、今度こそ。ご迷惑をおかけしました」
「いえいえ、お気になさらず。……それにね、私自身諦めない事には一家言持ちなの」

「そうなんですか？」

「そうよお。私、オカマ、男だけど女。ほら諦めてないの権化でしょ？」

朗らかに言うマギーは、ヒロトから見て強く輝いているように思えた。

「今度は『二人』で来なさい、甘いお話、期待してるわあ」

「それはちよつと……」

マギーから粹な心遣いを感じはしたが、流石にその期待には素直に領く事の出来ないヒロトであった。

大切で、楽しい記憶達

マギーから発破を貰い、ヒロトがイヴを救うためにもう一度あがいてみると決意した2日後。

BUILD DIVERS全員の予定が空いたのでGBNで集合することになった、いつもならば気楽にミッションにでも向かうところだが本日は事情がまるで違う。

「よっしゃあー！全員揃ったな！ではこれより、イヴさん、を救うミッション開始だ！やるぞ、おー！」

「おー！」

「おー」

カザミがぐつと拳を突き上げて宣言すると、パルとメイがそれに同調して拳を突き上げる。

メイは声が平坦ではあったが、拳を突き上げているあたりやる気は満ちているようだ。

今回の目標は言わばヒロトの願望を叶える為であり、そんな仲間たちの想いに彼はありがたい気持ちを抱きながら、同時に先日マギーから聞いた心配をかけていたという事実からくる少し申し訳ない気持ちがせめぎ合って流れに乗れなかった。

思わず、頭が下がる。

「よろしく頼む、皆」

「おうよ」

「頑張りましょう！」

「任せておけ」

現在四人がいる場所はフォースで使えるブリーフィングルーム。

4人の小規模フォースという事もあってルームに大きな空間はないが、眼前にモニター兼ボードがあり図に示しながら作戦会議を行う事ができる。

カザミはボードの前に出てペンをとった。

「で、何すればいいんだ？」

まず何をする、をカザミはボードのど真ん中に書く。

そんなともかく行動する事を地で行くカザミの様子に仲間が少し笑う。

「あ、一番初めにいいでしょうか」

パルが声を上げた。

「どうぞ、パルヴィーズ君？」

「えっと、今回のイヴさんを救出する話なんですけど、ヒロトさん以外の僕たちってイヴさんの事詳しく知らないんですよ」

ヒロト以外の三人が（あの時はフレディもいたがこの場に居ない）イヴの事を知った時はヒロト自身話しにくい過去を話し、加えて感情が荒れている面もあり中々要領を得ていなかった。

すぐく大事で悲しい思い出があった事と、その顛末がヒロトに深く傷を残しているということを察するまでが精々だった。

「……そうか、すまない」

ヒロトはあまり仲間には伝わっていないなかつただろうと、当時の状況を振り返り思う。

当時のヒロトの様子を思い出し、思わずパルはへによりと耳をしておれさせる。

「いえ。……そういう事なので、その、すぐく話しにくいとは思うんですけど。まずどういう人でどんな事を一緒にやったのか教えてもらえませんか？」

パルは慎重に言葉を選びながら意見を出す。

話したくない過去を誰でも持っていることを彼はすでに知っている、現実で足が動かなくなつた当時の状況を説明しろと言われたら自分だって嫌な気分がするからだ。例え、今の状況が飲み込めていても、それとこれとは別問題に決まっている。

「口に出すのはいいかもしれない」

そんなパルにメイが同調する。

「頭の中で思い出すのと声に出して確認しながら考えるのは、後者の方が効果的だとママも言っていたぞ。インプットばかりではなくアウトプットしていこう」

「よし、その中で使えそうな事は俺が書きだすぜ」

「……わかった、でも長くなると思うぞ」

「おうよ、どんとこいだー!」

仲間たちの真摯な意見に後押しされ、ヒロトはまず出会いから説明することにした。

「俺は元々GPDをやってたんだ、そこから移行してGBNを始める直前にちよつとした出来事があって、そこから着想を得る形でコアガンダムを作ってダイブしたんだ」

「……フルスクラッチだろ、コアガンダムって。当時としてもすげえな」

SDとは言えないくらいにリアル寄りでありつつ、他のMSと比べると変わった風貌をしているコアガンダムに当然基になる機体などない。

各アーマーもそうだが、コアガンダム単体でもどれだけ手間と時間かかったんだろう、と今にしてカザミは思う。

「ありがとう、でも最初はコアガンダムって名前も付けてなかったんだ。ともかく試運転で平原のデイメンションを飛んでただけで、仕上がりをきっちり確認してなかったから落ちた」

「整備不良か、ヒロトもその手のミスをするのだな」

「もちろん。で、その時にイヴと会って」

「……フィールドに一人でいたのか?」

「ああ、変わった子だなとは俺も思ってたよ。それで、名前を聞かれて」

「なるほど、それでお互い自己紹介を」

「パルはそんな出会いだったのか、と少し興奮しながら続きを口にしてしまう。」

「いや、俺の名前じゃなくて、ガンプラの方」

「そつちかよ!?!」

「思い返せばイヴと話す時変な間が空いたりしたような気がするな」

「確か声をかけられたときに、ヒロトは先に君は?と返したが答ええられた記憶はない。」

カザミはイヴさんは天然?とボードに書く。確かに今の話ではそ

うとしか思えない。

「……で、その後、急にガンプラの名前を聞かれたから、名付けしてなくてその場でコアガンダムって命名した」

「そんな思い出があったんだな」

カザミは感心すると途端にざつと青ざめる。

その、まるで何か途轍もない事に気が付いてしまったかのような表情に何事かと緊迫した雰囲気が一オース全体を襲った。

「ヒロト」

「どうした？」

「俺、初対面の時、変なガンプラとか言ったよな。二人に対しても碌な事言っただけだよな。……本当にごめんなさい！」

そんなカザミの心からの謝罪に、そういえばそんな事もあったなあ、と他の三人は懐かしく思う。

緊迫の雰囲気はどこかに吹き飛んだようだ。

ヒロトは苦笑すると

「もう気にしないよ」

と、カザミに言う。他の二人もうんうんと頷いている。

初対面の頃は正直問題児ではあったが、カザミは確かに成長した。そんな彼を見てきた仲間たちは責める事も弄る事もなかった。

「続けると、その後にはコアガンダムを作った理由を聞かれて」

「作った理由？」

「そう、小さなガンプラでどんな事ができるのか確かめたいと思って作ったんだ。……ああ、そうだ、どんな理由で作ったのか彼女に聞かれて、俺は強いガンプラにしたいとか適当に誤魔化したんだけど、イヴはそれを見透かして」

「……建前ではなく本質を見ていたという事か」

メイはイヴの行動を分かりやすく表現する。

すかさずカザミはガンプラに関して見る眼を持っている、とボードに書き入れた。

「それで、その。コアガンダムが、作ってくれてありがとうって思ってるってイヴは言っただけ。その後も色々あったんだが、そういう事もある

のかなって、そう感じたんだ」

ヒロトが少し恥ずかしそうにガンプラのへの想いを紡ぐ、それを聞いてパルはハツとする。

「ヒロトさん、じゃあ、あの時は」

「あ、ああ、そうだ。イヴの事があったから、何か助けになるんじゃないかって」

「なら僕も会って、ぜひお礼を言わないと」

「……そうしてくれたら、きつと喜ぶよ」

メイとカザミは話についていけずポカンとするが、二人の会話は短く完結してしまう。

良く分からないがヒロトとパルの間で意思疎通は取れている、何の話か興味はあるが深く突っ込めば趣旨の外れた話になりそうだ。同じような考えに至った二人はともかく続きを促す。

「で、次はどうなったんだ？」

「すまない。それで、お互い自己紹介して」

名前を聞かれ、ヒロトと答えた。名前を聞いて、イヴと答えられた。何かおかしい、とヒロトは再度記憶を探る。

「ヒロト？」

「いや、今思い出したんだが、イヴが自分の名前を言う時も変に間があって、それが不思議なんだ」

「なるほど……、一般ダイバーならハンドルネームに慣れていないかもしれないが、姉さんはその時点で自分が常人では無いとわかって居た筈だ。……なら、その場で考えたんじゃないのか？」

「ああ、確かに。言われてみれば、そうかもしれない」

コアガンダムの名前を聞かれたヒロトの様に、イヴはあの時点で自分の名前をはっきりとは持っていなかったように感じられる。

パルは二人の会話とボードに書かれたことを見比べて、あ、と声を上げた。当然三人から視線が向かう。

「イヴさんは天然じゃなくて、答えにくい事を避けてたから間が空いたりするのでは？」

「——言われてみれば、そうかもしれない」

イヴは時折ヒロトの質問に対して答えたなかったり、まったく別の話題に強引に変えるような時があった。

妙なテンポを持った女の子だな、とヒロトは当時感じていた。こうしてパルに言われて彼女の事情を加味した上で振り返ると、確かに答えを窮することを避けていただけに思える。

ヒロトは無性に情けない気分になった。

「全然わかってなかったんだな、俺」

マギーと会話した時に、荒立った感情のままアンタに何がわかる！などと偉そうに口にしたが、その割には誤解したままの記憶がすぐに出てきた。

パルはそんなヒロトの様子を見て

「今はイヴさんの事情もなんとなく分かっていますし、仕方ないですよ」と、柔らかい言葉をかける。

続けてカザミ、メイが

「これから分かる努力をすればいいじゃねえか、もう隠し事する理由はないんだからよ」

「アウトプットの成果は出ているぞ、現に解釈に余地が出てるじゃないか」

過去に目を向けている中ではあるが、それは先を見る為に振り返っているだけの事。彼らは、ヒロトは進んでいると確信していた。

「……そうだな、これからが本番だ」

「おお、その意気だぜ」

ヒロトの奮い立つ様子にカザミは合の手を入れる。

「ともかくいろんな事をやってみようって、イヴからの後押しもあった、その後は本当にいろんな事をやった」

「へえ」

それからも順調に過去の見直しは進む。



「最初のアーマーとして、万能タイプと近接タイプ、重武装タイプのアーマーを作って——」

「アース、マーズ、ヴィーナスの事か？……最初は名前なかったんだ

な」

「そうだ、名付けはちよつと先の話になる」

「狙撃アーマーでザクからプチッガイ守ったりも——」

「あー、あのミツシヨンな、やった事あるぜ、昔。……失敗したけど」

「水上にある街を一緒に巡ったりしたときもあったっけ、イヴはすごく楽しんで——」

「そんな事があつたんですね！」

「氷像をつくるイベントがあつたから、大きいドリルだけ作って掘ったり——」

「それもしかしてサタニクスのドリルか？」

「そう、あとで流用したんだ」

「剣を持つて様になるポーズコンテストがあつたから、それにも——」

「今やれば俺のイージスナイトが圧勝だな」

「月面都市の喫茶店のケーキが美味しくて、二人で何度も——」
「ぜひまた皆で行きましょう！」

「水中専用のアーマーで深海に潜ったりも——」

「メルクワンはそこで作られたんですね」



話が進む中、やはりイヴの立ち振る舞いには違和感が多く存在した。

彼女の事情を加味すれば当たり前前の事ではあるが、ヒロトに行動を促してついでに行く事はあつても、自分がガン普拉を持っていないので同乗するか遠くから見守っているかのどちらかだった。

ヒロトは自分でガンプラを作ってみる気はないのか、とイヴに勧め
る事はあったがまともに答えを貰っていない。

そんなイヴの様子からリアルについて深く話すことはなかった。

そうやって記憶を振り返りながら情報を確かめていくと、話はプラ
ネッツシステムの名付近まで行き着いた。

「そんな風にいるんな事をやって、少し二人でのんびりしてる時に、イ
ヴが銀河の向こう側まで行きたいって言ってたんだ」

「……それであのアーマーを？」

「そう、間に合わなかったけど発想はそこからだった」

ヒロトはずいぶん長く話したな、と一息つき、ネプテイトガンダム
でエルドラの宇宙に上がった時を思い出す。

「そういえば、あの時」

「あの時って？」

「ああ、エルドラの大気圏離脱の時に、……幻覚かもしれないけど、イ
ヴが助けてくれたような。……それ以前にもイヴの声を聴いた気が
する。」

ヒロトの言葉にカザミとパルはどう答えたものかと思い悩んだ。

特に悩まず答えたのはメイだった。

「人の念か、すごいな」

「……そんな、ニュータイプみたいない能力俺にはないよ」

身体が消滅し、実質死んだともとれる状況でそれでもなお力を借り
る事ができるのは、それこそガンダムのニュータイプの様なものだと
ヒロトは考える。

そんなヒロトの諦念にメイは小さく首をかしげて、自分を指さす。

「じゃあELダイバーとはなんだ、電子生命体など、それこそ今まであ
り得ない事だったんだらう？」

「……それはそうだが、俺は普通の人間だよ」

「異世界を救った人間が普通なのか？」

「それは」

メイから寄せられる指摘にヒロトは言葉を詰まらせた。

「ヒロト、お前は特別だ。言わば異星人に想いをはせる一般人など私

はお前の他に一人しか知らないぞ」

ELダイバーを地球人に含めるのなら、ではあるがとメイは結んだ。

ヒロトは自分の好意が筒抜けになる事に未だに慣れない気持ちなので、はつきり突き付けられるともごもごするしかない。マギーには文句を言いたい気分だ。

「マギーさんから聞いたのか？」

「何を？」

「俺が、その、イヴを好きだって」

「聞いてない」

え、とヒロトは驚く。

ふとボードのそばの椅子に座っているカザミがものすごいジト目でヒロトを見ていることに気が付いた。

「ヒロト、お前隠してるつもりあったのか」

「そ、そんなに分かり易かったか？」

「思いつ話してる時、淀みがなかったぞ。波みたい中途切れねえ」

ほれ、とカザミはホワイトボードをペンで指し示す。

カザミは途中から使える情報を分別するのが面倒になったのか、ともかくホワイトボードに書き出していた。

あまり視線をやっていないうちに、かなり隙間なく文字で埋められている。

使えない情報の代表格として、イヴはむくれ方がわかりやすい、などと書かれてある。

「内容は全部イヴさんについてだが、半分は『あの時のイヴ』は可愛かったなあ、が透けて見えるくらいだったわ」

「異国情緒な町で遊んでたと話してたが、それはデートと言うのではないか？」

仲間二人からの指摘に、ヒロトは頭を抱えた。

「俄然当人に会うのが楽しみになって来たぜ、イヴさんに聞いた方が面白い事聞けそうだ」

「姉さんが絡むと、どうやら表情が変わりやすいらしいな」

「お二人共、程々にしましょうよ」

「……う、続けるぞ」

止めにパルのフォローが刺さり、ヒロトはさらに呻きそうになってしまったが堪えて何とか続きを話す。

続きを話そうとすると、自然と冷めた。

「その時だったかな、イヴの身体が変にブレたのは」

「——っ！」

三人に緊張が走った、ヒロトの苦々しい口振りでもヒロトとイヴの別れはこのブレの行きつく先だと強く伝わって来たからだ。

「……その後に、さっき言った銀河の向こうまでってという話をそのまま使って、アーマーとシステムに命名をしたんだ」

「だから星の名前なんだな」

「ああ、無理矢理なネーミングもあるけど、そうだ。……少し休憩にしようか」

これから先の話はヒロト自身嫌な記憶を思い出しながら話さなければならぬ。

準備の時間が、欲しかった。

大切で、悲しい記憶

各々の休憩が終わり、再度三人が席に着く。カザミがいったんホワイトボードに書かれたことを画像として残し、ボードを初期状態に戻した。

「イヴのブレが起こって、しばらく後、イヴにフォースに入ること勧められたんだ。時期は、大体第一次有志連合戦より少し前だ」

「AVALONか？」

メイはアルスとの決戦前に行った大規模シミュレーションを思い出しつつ、続きを述べた。

「ああ、そうだ」

「やっぱり、元AVALONだったんだな。……いきなりすげえフォースに入ったもんだ」

「俺も当時はまさかとは感じたよ」

ヒロトはAVALONに入った時の事を思い出して、少し苦笑する。

コアガンダムがキョウヤの眼に止まったのは、プラネッツシステムが状況に合わせて進化するAGEシステムと重なる要素が多くあった事が大きい気がしたのだ。振り返ると、ヒロトはキョウヤがチャンピオンになる以前からAGE系のMSを使い続けていたとカルナに聞いた事がある、大規模シミュレーションの時も一貫してそこは変わらなかった。よほどAGEに思い入れがあるのだろうか。

「それで、その事をイヴに報告しに行つて、イヤリングを渡して、写真を撮つたんだ」

イヤリングの話に、メイは自分の腕に巻き付けてある物を意識せざる得なかった。

同時にパルは写真の方に興味を示す。

「写真って？」

ヒロトはパルに目をやると、席に備え付けられた端末を使い、イヴとの写真をホワイトボードに表示する。

その写真にはコアガンダムの元にイヴがヒロトの腕を引く形で走

り出している様子が写されていた

「彼女がイヴ姉さんか？」

「彼女が、イヴだ」

仲間たちはイヴの姿を知らない、三人とも息をのんだ。

自然と三人はヒロトに目を向ける、机の上に置かれたままの彼の手が固く握りこまれているのが見えた。この先の話はヒロトの深い傷そのものだと思える。

これ以上話を聞けば、ヒロトを追いつめる。

分かっていた事だった。

「私たちがエルドラに居たあの時ヒロトから聞いたのは、イヴ姉さんの存在と、消えてしまった事、その後の有志連合戦の撃たなかった選択、この辺りを細かく話すのは苦しい事だろうが……」

三者三様にヒロトがイヴの事で未だ思い悩んでいるのではないかと気が付き、各々がマギーに相談を持ち掛けた。それは自分では上手く切っ掛けを作れないと判断しての事であった。

メイは、人の気持ちがいまだ上手く判断できず、助けるどころか傷つけるかもしれないと判断したから。

パルは、ヒロトの傷を開く事でより深い傷になるのでは、と恐怖を感じて自身で切っ掛けが作れそうになかったから。

カザミは、口が過ぎてしまう自分では、さらに傷をつけるのではないかと思っただから。

だから、ヒロトからイヴを助けたいという意味が確認できるまで動くことができなかった。

マギーはそんな三人に臆病と叱咤する事はなく、意を汲んで動いてくれた。きっかけは作られた、ならば三人に引き下がる道などない。

引き下がれば、やると決めたヒロトの想いは無駄になる。

「続きを話せるか、ヒロト？」

「ゆっくりでいいぞ、落ち着いて——」

優しく言葉をかけるメイとカザミ、パルは心配そうにヒロトを見ている。

そうして三人が続きを促すまでのほんの数秒で

彼の記憶の蓋は、もう開いていた。

ヒロトの情報処理能力は、同年代の人間に比べたら極めて高い部類に入る。

ある程度自動化は仕組んでいるが操縦の複雑なシステムと機体の制御を行い、同時に状況を確認して戦い方を考え、それに応じて仲間に指示を飛ばす。エルドラや騒動が終わった後のミッションでも遺憾なく発揮されていた能力。それが自分の内側へと向かい、固く閉じられた記憶の蓋をこじ開けた。

イヴが居なくなつた後、1年程は何をしてても空虚だった。あの時と同じような状態になるかもしれないと分かつていながら、それでもヒロトは踏み出した。

なぜなら、今引き下がれば自分を助けると言ってくれた仲間の想いが無駄になるからだ。

彼女が消滅するとき何を言っていたのか。なぜあの時諦めてしまったのか。気になる発言はなかったか。なぜ見捨ててしまったのか。それはイヴを救う時に役立つことか。なぜ裏切ってしまったのか。

高い処理能力を持ち合理的に考える能力に富みながら、同時にヒロトは感情を持った一人の人間だった。

ヒロトは考えと感情がせめぎ合い、脳が熱を持つのを感じた。

ヒロトの異常に気が付いた三人は思わず声をかけようとしグツと口をつぐんだ。

「イ、イヴは……、俺の住む世界にはいない、ここで生まれて生きてると言っていた。定着できない身体？ いやこれはもつと後だ。星の導きがきつかけ？ どこでもない場所に居た？ バグが、いや、GBNが大事で。バグ、私が巨大なバグになる前に、助け……？ 違う、俺が消したんだ、それで彼女を助けられるって、でも、俺は、彼女は妹を守つてと、それを、俺は」

ヒロトの発言は支離滅裂だった。

涙をぼろぼろとこぼし、呼吸はかなり荒い、座っていても身体はがたがたと震え、今にも崩れ落ちそうだ。

隣に居たメイがヒロトの背中をさする。

「もう十分だ、ヒロト」

ヒロトは、メイを見た。

彼は力なく首を横に振った。

「お、俺が、考え、ないと、俺がやった事、だから、俺が、救わないと」

「ヒ、ヒロトさん！後は僕たちで考えますから！今日はもう……！」

今までのヒロトの様子とその悲痛な声は、パルの身体を貫いて思わず声を上げさせていた。

これ以上は見えていられない、三人の気持ちはすぐにそろった。

「そうだぜ、ヒロト、あとは俺達で考えっからよ、今日はもう休め！」

「でも、俺が考えないと」

「ヒロト、姉さんを救う前にお前自身が壊れては意味がないんだぞ。あとは任せるんだ」

メイの言葉は少し強めのものであったが、一刻も早くヒロトを休ませたいという思いがあったからだだった。

ヒロトの脳内は未だ荒れたままだったが、三人に任せろと言われ頷く。

「じゃあ、頼む」

「うちの車、迎えに行かせます。自分で歩かないで、席でゆっくり待っててください。ログイン場所はいつものところですよね？」

ヒロトは頷くと、そのままログアウトする。

「ごめんなさい、すぐ戻ります」

「すまん、頼む！」

パルはカザミの声に頷くと、ヒロトを追ってログアウトした。

メイとカザミ二人きりになって、カザミは大きく息を吐いた。

「まずったなあ、オフ会の方がよかった。そうしたらすぐに送って帰せたつてのに……」

カザミは思わず頭を掻く、リーダーとしての段取りの悪い自分に嫌気がさした。

自分を落ち着かせ、ふとメイに目をやってみると、どこにも視線をやってなさそうに前を見て座っていた。

「メイ、お前は大丈夫か」

「私は問題ない、ただ大事な人が居なくなつた時のエルドラの人たちを思い出してな」

「ああ……」

カザミにとつても、仲間の誰にとつてもあの瞬間は強く焼き付いている記憶だ。

崩壊した村、泣く声、涙、涙。

ヒロトはあの瞬間をもっと身近な人物で先に経験していたのだ。

「ヒロト、あいつ、あんな重いもん、ずーつと抱えてたんだなあ」

にじみ出ていた自己嫌悪と罪悪感。堪えに堪え、誰にも吐き出せず。

それはどれ程の痛みだったのか、彼の様子を直で見ただけの自分ですらもう辛いというのに。

エルドラに居た時は彼の負担を軽くさせる手伝いをするには手が足りなかったが、それなら落ち着いた時点で気を回すべきだったと後悔する。

カザミは自分の頬を両手で挟むように叩いた。

「さ、やることやっちゃおう。今日の相談内容、あとで見直せるように録音してたから、これ使つてさっきの文章化するぞ」

「なんだ、カザミも録音してたのか」

「も、つてことは、メイもか」

「恐らく目的も同じだ」

カザミは、今回の相談がヒロトの負担になる事くらいは予想していた。二度と話したくない事もあるだろうと考え、先んじて録音しておいたのだ。

結果としてはもつと入念に準備すべきだったが、ともかく録音しておいて良かったと二人とも感じていた。

「パルが戻る前にやるぞ、あいつも途中から震えてたしな」

「……パルは優しいからな、気持ちをもそのまま受け止めたんだろう」

カザミは録音を完了させて、先ほどのヒロトの発言を再生できる時間に合わせる。

そうしてる時に、少し手が震えてる自分に気が付いた。

「話し方が無茶苦茶だったし、自動書記は使えねえだろうな」

「自分で打ち込めばいいだろう」

「わーってるよ、自分達だけ楽できるかってんだ」

「……私がやるか？」

「いや、一緒に一回で終わらせるぞ、タイピングよーい、ドン」



「戻りました！」

「おう、おかえり、パル」

「おかえり、パルは大丈夫か？」

「ええ、大丈夫です。迎えも滞り在りません」

返事をしながらパルがボードの方を見ると、単語や文の一部がばらばらに置かれていた。

「これは、先ほどの？」

「ああ、ヒロトの発言をそのまま文章にしたんだが、まあ、滅茶苦茶だったからな、今から整理する所だ」

「……なるほど、じゃあ早速やりましょう」

「イヴ姉さんはGBNを守るために消えた、とエルドラでヒロトは言っていた。何か私たちの認識との違いもあるはずだ。あそこまで追いつめられるなら、やはりあの時すべて話されたとは思えない」

ホワイトボードにある一つ一つの欠片を読んでいくと、程なくしてカザミが疑問点を上げる。

「イヴさんが異星人、要はELダイバーみたいなもんだって話だよなこれ？」

「僕にもそんな風に読めます、でも、この、最後の消したってどういう事でしょう？」

「助けるとも言ってたな、巨大なバグになる前に消した」

カザミは思わずうなると、とりあえず分かる所から並べていく。

「えーっと、現実に身体がない、GBNで生まれた、そこで生きてる。ここまではELダイバーだな」

「星の導きが切っ掛けって、イヴさんはエルドラの古代文明に関りが

あったのでしょうか」

「サラ姉さんより、イヴ姉さんの方が早くGBNに居た筈だ。そういう事もあるのかもしれない」

二人の発言を受けたカザミは、イヴは星（エルドラ？）の導きを受けて来たE.L.ダイバー？、とボードに書き入れた。

「バグのせいでイヴさんが消滅したって事か？ブレが起きたのはバグのせいだよな……ん？」

カザミは、ともかく思いついたことを言うが、それだとヒロトがそこまで追いつめられる理由がない事にすぐ気が付いた。

「過去を思い出したくないってことは、嫌な事があったからだだよな。……あんな追い詰められるんだから、相当」

「そうだな。ヒロトは取り返しの付かない事をしたと、自分で自分を長い間罰してるように思える。エルドラでアルスのアースリイと戦った後、そんな風に話して泣いていたのはお前たちも見ただろう」「自分が嫌いになるようなことで、罪悪感に包まれることかあ……」

カザミは唸りながら想像力を膨らませている。

メイは今ある欠片や今までのヒロトにヒントがないか思い返している。

「あの時、感情をぶつけようとした、とも言ってましたよね。狙撃ライフルになにか良くない思い出があるようにも見えましたが」

パルも当時を思い出して、ともかく呟くも三人とも考えが煮詰まりつつあった。

そのまま十数分黙り込み、急にパルが立ち上がった。

「もしかして、いや、でも、だったら——」

「どうした、パル」

「いやでもこんな——」

「おーい？」

パルはぶつぶつと呟きながらホワイトボードの前に出ると、背伸びをして字を書き始めた。

何度か主語や接続を確かめるように書き直されはしたが、そのうちに文の欠片が組み合わせって形を成してくる。

半分ほど完成した時点で何が書きたいのかを理解してカザミは目を見張った。

そうして出来上がった文章は

イヴは俺の住む世界で身体がなく、星の導きをきっかけにして生まれてきたと言っていた。俺と一緒に時間を過ごす裏で彼女はバグに侵されつつあった、そうしてしばらく時間が経ちGBNに定着できない身体になり、そのまま巨大なバグになりかけていた。その時俺にGBNに致命的なダメージが入る前に私を消してと頼んできた、その時はその頼みに頷くしかない状況で、消える間際に妹を守つてと頼まれたのに有志連合戦で撃ちかけた。

文章を書ききってパルはその場にへたり込んだ。

出来上がった文章の中には三人にとつては先に知っていた事や想像がつく内容もあつたが

「確かにこれなら全部つながるな」

「あいつ、自分でイヴさんを消したから何より自分が悪いと思つてるのか……」

「……消滅した理由は聞いたが、その過程が、これか」

カザミは出てきた答えに慄いた。メイも目を見張る。

蹲るパルは涙をこぼした。

「ヒロトさんとイヴさんは、なんでこんな目に合わなきやならなかつたんでしよう。ただ、そこで、生きてただけなのに……こんなの、あんまりですよ」

「……なら、俺たちのできることをやって、二人を助けようぜ」

カザミはパルの手を掴んで立たせると、改めて文章に注目する。

そうしてカザミは、ふと考えついた。

「そもそもなんだが、いや思い付きだけだよ」

「なんでしよう?」

「先に身体作った方がよくね? イヴさん用の奴」

「……賛成だな、イヴ姉さんの身体は今消滅しているが、復元して再構築するなら器はあつた方がいい」

カザミの提案をメイは迷いなく肯定した。

「モビルドールの作成を依頼しよう、その辺りはやっておく」

「お、じゃあ頼むぜ」

「よろしくお願いします!」

モビルドール作成をホワイトボードに書き入れる。

「イヴさんのデータをなんとか収束させて再構築したいが、俺たち別にプログラマーじゃないしな」

「そもそも触る権利がないぞ」

「データもどこに散らばってるのかを全部見つけるのは流石に無理ですよね」

「私のようなELダイバーにはある程度イヴ姉さんの因子も含まれている筈だが、私一人では大したサンプルにはなるまい」

カザミはうーんと唸る。そしてメイを見やると

「ELダイバー権限で運営と掛け合えないか?」

「この場を借りて生まれた私たちにそんな大きな権利はないぞ」

そのタイミングで軽いSE が鳴り、メッセージウィンドウがカザミの前に出てくる。

「あ、やべえ、一日のGBN利用制限時間突破しそう」

「タイムアウトか、しかしどの道詰まっているところだ、今日は解散だな」

「……誰かに意見を聞きたいですね」

パルはしよんぼりと尻尾を下げて、困った声で言う。

カザミがうんうん頷いていると、メイが

「ママに頼むか、少なくとも場所は借りれる。話してたら横から口を挟んでくれるかもしれない」

「あの人ホントに頼りになるなあ!」

自分の店を持っていて、言わずと知れた有名ダイバー、人脈もすごく広い、性格も優しい、オカマ。

属性盛りすぎだろ、とカザミはつくづく思う。

その後、カザミはポンと手を打つと

「あ、しばらくヒロトには休んでもらうように言っておく」
「お願いします」

「では、また招集をかける」

記憶を希望にする為に

「お邪魔します」

「今日はお世話になります」

「ただいま」

「あら、いらつしやーい。と、おかえりー」

店に入ってきたのはメイ、パル、カザミの三人だった。

マギーは彼女たち三人を笑顔で迎え入れると、店内の設定を操作して入口に貸し切り札を掛けた。

と言っても、実際入場制限は掛かってない。マギーのバーは様々なダイバーの駆け込み寺の様な場所なので、切迫した相談をしている状況でもなければ入店できる様配慮されていた。

事前に三人には今回は相談の場所貸しとオーデイエンスの様な立ち位置をお願いされている。なので、マギー自身はあまり気を張らずに構える事に決めていた。

三人が席に着き、マギーが飲み物を配ると少し離れた椅子に座った。

メイは二人の様子を確認し、ともかく最初の一手を決める。

「とりあえず、全員で読み返して気になる所を言っていこう」

「頭の方にある、星の導きつていうのも気になるんだが、昨日言った新しい身体を作るってこの部分は解決できそうだな」

カザミが文章内の『GBNに定着できない身体になってしまった』、という部分を指で刺して言う。

「ああ。イヴ姉さんはバグによって身体の崩壊が始まり、それがブレという形で表に出ていたのかもしれない。モビルドールという枠を作って保護をすれば同じような目にあう可能性はほぼ無くなる筈だ」

「あ、そういや、モビルドールの話はどうなったんだ？」

「手配はした。今、返答を待ってる」

「なら、とりあえずそこは順調か。よおし、一歩前進」

カザミは共有ウィンドウを一つ増やすと、モビルドールの件は順調、と書き入れる。

その間にメイは文章に目をやり、一つ気が付いた

「ここは解釈が変更できるかもしれない、彼女はバグに侵されつつあった、とあるが……」

メイが少し言葉が淀む様子に、二人は少し身構えた。

「GBNを守るためイヴ姉さんは消えた、ヒロトは言った。という事はつまり、自分が何のために消えるか理解してる様子があったと言う事だ、なら」

「……守るために、自分を捨てた、か」

「犠牲になりつつあった、に変更だな」

カザミとパルは沈痛な面持ちで頷く。

メイは文章を書き替える、同時にパルが手を挙げた。

「さつきカザミさんも指摘していましたが、星の導きつていうのはエルドラの古代文明人が使った、身体を電子生命体に変える装置でしようか？」

「恐らくそうだろう。それを使ってデータの身体になって、偶然GBNに入り込んだ」

「今の状況はともかく、そうやってヒロトに会ったって言うのはすげえ奇跡だな。あ、運命的？……いや、どっちでもいいか」

カザミは改めて異星人に巡り合うという事実、言葉では言い表せないような壮大さを感じ取った。

パルはそんなカザミの言葉にうんうんと力強くうなずいた。

「奇跡、か」

メイも自分の産まれた経緯もそう言い表すことができるのだと実感を覚えた。

そうしてふと思いつく。

「ママ」

「あら、どうしたの？」

呼びかけられたマギーは、首をかしげる。

他の二人もこのタイミングでマギーに話を振る意図がわからなかったが、とりあえず成り行きを見守る。

「例えば、魂になって世界を漂っている人の意思を集めるなら、ママは

「どうする?」

「あら、またすごい質問ね」

壮大でかなりフワツとした質問内容にマギーは少し笑った。

他の二人は同時にイヴ復活に関して言うとその表現であながち間違いないにしろ、状況説明まったく足りていないんじゃない?と考えたが、口を挟む前に会話が進んだ。

「私ならサイコフレームとか、GN粒子を使うかしら」

「なるほど、確かに人の意思を集めるものに違いはないな、ありがとう」

「おーい、メイ。この会話どういう意図だ」

案の定頓珍漢な答えが出てきてしまったではないか、とカザミは呆れる。

同時に一人のガンダムファンとして、その解答には同意する所はある。

「意図も何も、イヴ姉さんを救うために決まってるだろう」

メイは何を言ってるんだ、と言わんばかりにカザミに言う。

「……いや、その為のどこにサイコフレームとかGN粒子が関係あるんだよ?」

じろりと見られたカザミは一瞬仰け反るが、やはり意味が分からなかった。

パルも困惑して黙り込んでいる。

「そういう物なんだろう?サイコフレームやGN粒子は」

「ガンダムの世界の設定の話だからな、それ!フィクションだ、フィクション!」

「ここはGBNだろう?実際あるじゃないか」

伝わらねえ!とカザミは頭を抱えた。パルも困惑したままだ。

メイもカザミに意図が伝わってないらしいと察して、言葉を探す。

三人の状況が固まったのを見て、マギーは手を一回叩く。

全員の意識がこちらに向いたのを確認して、マギーはまず分かり切った質問をすることにした。

「まず目標はイヴちゃんの復活よね?」

「そうだ」

三人とも頷く。

「で、今は復活方法の模索をしているわけね？」

「そうっすね」

ここまでは三人の共通意識だ。

マギーは、今日の前で起こったすれ違いを加味して次の質問を考える。

今の三人は、イヴの復活方法を模索するという共通の答えを見出そうとする中でカザミ・パルはメイの突飛な発言に困惑している、という状況にある。

ではなぜ、メイはあの変わった質問をするに至ったのか？

「うーん、メイちゃん」

「何だ」

「あなた、復活の手段思いついたの？」

マギーの質問にカザミとパルは、え、と小声でつぶやいた。

「そうだ」

「いや、ちょっとまってくれよ、メイは——」

カザミは先ほどの良く分からない話がまた繰り返されるだけだと考え、さらに口を挟む。

その瞬間、マギーがカザミを視線で黙らせた。

「カザミ君、まず、全部、聞きなさい。それから、案を出す。誰かが話してる最中にいちいち口を挟んでたら、考えは伝わらないわ。メイちゃん、貴方も自分の意見を口にするときは、私が意見を言うから聞いてくださいって一言最初に言いなさい、区切りを入れれば貴方のペースについてきてくれる人はぐっと増えるわ。パル君は今回の事覚えておくといいわよ、大人になってもできない人すごく多いんだから」

「「……はい」」

「あら、いい子達ね、いいのよ、若さゆえの過ちってやつ、どんどんしなさい。次に活かせたら、もう大人よ。」

そんな事を赤い人が言ってたわ、とマギーがぐてまた見守り体制に

戻った。

そんなマギーを見送って三人は一瞬沈黙したが、さっきの話の発端であったメイが軽く手を挙げた。

「とりあえず、私の考えを話すが良いだろうか」

「ああ、さっきは口挟んで悪かった」

「どうぞ」

二人の返答に、メイは頷くと

「イヴ姉さんの復活には障害が多くある、まず姉さん自身の身体が今はなく、データは四散してサーバーの中の何処にあるのかわからない」

彼女がここまではいいか、と二人に視線を送ると、真剣な頷きが返ってくる。

合の手までしちやいけなとは言っていないんだけど、と他二人の様子を見てマギーは苦笑する。

「その上運営の力を借りられるかは正直今は望み薄だろう、そんな状況下で助けるとなれば奇跡の一つも必要だろうか？だからその助けになつてくれそうな物を探した方がいいと考えたんだ」

「……なるほどな」

「……考えは伝わりました」

メイの話は、二人からすると最後の一手が些か飛躍した手段とはいえ、問題の捉え方は合っていると感じられる内容だった。

形が成せなくなったものを再度形にして個人を蘇らせようというのだ、考えてみればそれは奇跡以外何とさえいいいのか。

「メイの考えはイヴさんの復活の為には、奇跡を起こす必要があるって要約して間違いはないか？」

「ああ、そうだ」

カザミの確認にメイは頷いた。

そうは言うが奇跡を意図的に起こす、その明確な手段がすぐに思い当たる訳はなかった。

「そもそも奇跡って起こせるものなのか？」

「私が居るだろう、奇跡で生まれているとしか思えない」

メイは自分を指さしたが、そのメイの言葉にはパルが首を横に振る。

「メイさんの場合は奇跡を『起こした』というより、『起きた』と言った方がいいと思うんですね。そう、偶然に近いという表現ですかね。意図して起こされたものではない、例えばイヴさんがGBNに来たことや、身近な事で言う僕たちが出会ったのだって、偶然じゃないですか」

受動と能動には大きな違いがある様にパルには見えてならなかった。

カザミもその意見には確かに、と頷く他にない。

「奇跡は起こせないものなのか？」

メイはそう疑問視する。

カザミはうーんと深く唸ると

「方法がまるで思いつかない、っていうのがな。現実味が――」

「あー」

何かに気が付いたように、思いがけない方向から声を上げたのはマギーだった。

三人は驚いてマギーの方に目をやった。

「……ごめんなさい、急に。ちよつといいかしら、私、奇跡を『起こした』瞬間見た事あるかも」

「え!？」

カザミが驚きに声を上げた。

マギーは記憶を探りながら話し始める。

「あなた達は多分よく知らないと思うんだけど。昔、第一次有志連合戦って大規模な戦闘があったのよ。その戦闘目的はとても簡単に言うとGBNを破壊しようとする目論んでたクラッカーの拘束だったわ。相手は入念な仕込みをする人間で、チートツールを使ってやりたい放題やってたの。ものすごい大きなビグザムや無限に回復し続けるMSなんかで足止めしてきて戦況は敗色濃厚だったわ」

マギーは一呼吸置くと

「そこで敵はさらにGBN自体を攻撃してきたの、バトルフィールド

自体に大きな亀裂が入ってたわ。あとから聞いた話だと他のサーバーにまで同じような影響は出てたみたいね。そうやってバグはほとんど広がったんだけど、急にバグが収まったの」

「それが奇跡が起こした瞬間？」

「ええ、そう。その奇跡の中心点に居たのは、サラちゃんとリク君よ。機体から大きくて綺麗な翼が出てきて、それがバグをかき消した事を直で見たわ」

「そんな事があつたんですね……」

「あの時どんな事があつたのか、サラちゃんならきつと把握してると思うわ。詳しく聞く価値はあると思う」

「では、すぐ聞いてみよう」

「頼む！」

カザミは両手を合わせた。

メイはすぐにフレンドリストを開くが、軽いため息をついた。

「姉さん、来てないな」

「あらま、じゃあ彼も来てないわね」

サラがログインしてないと聞いて、マギーが即座に断言する。

「……もはや確認するまでもねえのな」

「明らかに恋人ですもんね、あの二人」

マギーの断言にカザミとパルは笑うしかない。

ロータスチャレンジャーエルドラの後も何度かあつたが、リクとサラの関係性はありありと見せつけられたくらいだ。本人たちにはそんなつもりはないのだろうが、もうすぐく伝わってくるのだから仕方ない。

「ま、期待が持てるだけ進展したって事だな。順調順調」

「ですね！次の目的は決まりです！」

パルの尻尾は機嫌よさそうにパタパタと揺れている。

「メイ、会う予定だけ立てて置いてくれ。今日は解散だ、連日話し込んで皆疲れてるしな、休もう」

「ああ、任せておけ」

「お疲れさまでした」

「みんな、お疲れ様。気を付けて帰るのよー」
そうして解散した後、カザミはエルドラに向かった。
休むにはエルドラに行くのが一番いい、それが理由だ。

奇跡を『起こした』ダイバー

「ああ。——おう、こっちは順調だ。——いや、いいからお前は休んでろって。——まだ声がぼんやりしてるから駄目だ。——おう。——よし、こつちも例の件詰めたら報告するからよ、ちゃんと休めよ。——ああ、また電話する」

カザミは電話を切って携帯をバックの中に入れてと、持ってきたものがすべて入っているか確認する。財布、イヤホン、スケジュール帳、イヴ復活の為の情報を自分なりにまとめたノート、全部ある。

GBNにダイブしている最中は、現実側から仮想空間へと意識が飛ぶことになる。

ダイブしている人間が他人に触られるとセーフティが働いて意識が強制的に現実へと戻る仕組みになっているが、身体に触らずに手荷物だけを器用に奪い取られる事件が起きニユース沙汰になった事があった。

それ以降はGBNダイブ機が置かれていた店にはサイズはまちまちとは言え暗証番号付きのロッカーがセットとなって整備され、今はそこに手荷物を預けておくのがルールになっている。

店に入り、利用申請を済ませて手早くロッカーに荷物を詰め、しっかりとロックする。

準備完了、あとはイージスナイト共にGBNへダイブするだけだ。手の中にあるイージスナイトをちらりと見て、カザミはふと最近の会話を思い出す。

「ガンプラに、心がある、か」

馬鹿げた話、とカザミは思わない。

今の仲間たちと出会う前、あの話を聞いたらどう感じていただろうか。

「ま、そんな事はどうでもいいか。……一緒に頑張ろうな、悪いけどしばらくバトルは我慢してくれや」

イージスナイトに聞こえる様にだけ呟くと、気合を入れ直してカザミはGBNにダイブした。



ログイン地点は各ダイバーそれぞれの設定による。

フォースネストを所持していないBUILD DIVERSメンバーはミッシュョンカウンターのあるロビーをログインの初期位置に設定しており、その場で合流する事が大半だ。

「あ、カザミさん！こっちはです」

「お、パール！」

ロビーの混み具合によってはパールは小さくてどこにいるのかわからない時がある、しかしカザミが大柄で目立つアバターをしている為、毎回問題なく合流できている。

今日もパールがカザミを見つけて声をかけ、しばらくすれば何処からともなくメイが寄ってくる。

「来たぞ」

「よう、メイ」

「こんばんは、メイさん」

パールが尻尾を振ってメイを迎える。

普段なら大体と同じようなタイミングでヒロトも来るのだが

「じゃあ、事前報告な。俺からはヒロトは今日も休ませた、それだけだ」

「……ヒロトさんの具合はどうでしたか？」

「まだ疲れてそうな雰囲気、って感じだったな。電話越したが、声の張りが気持ち弱い目の気がした」

そもそも落ち着いた声だから判断難しいけどな、とカザミは笑う。少なくとも悪化はしてなさそうだと、パールは安堵した。

「私からも一つ、例のモビルドールの制作依頼が通った。できれば外見資料がもつと欲しいとは言っていたが、ヒロトが居ないなら後回しだな」

メイの報告は吉報だった。外見資料はメイの言う通り後回しにする他にない。

「なら、とりあえずはまた一步前進ですね！」

「よおし、じゃ、もう一步進めに行くか！」

「ああ、二人はフォースネストの船に居るようだ、行くぞ」

三人は手早くウィンドウを開くと、BUILD DIVERSが所有するフォースネストまで転移する。

フォースネストの初期転送位置は船着き場の上だ。

「僕たちもいつかフォースネスト手に入れたいですね」

「だよなー」

海に浮かぶ大きめの島はのんびり過ぎすもよし、人を呼んで催しを開くもよしのなかなか良い条件のそろったフォースネストだ。

いつか自分たちも手に入れたいな、と思うのは自然だった。

それはともかく先の事として、リクとサラの二人は船の中に居るらしい。

「そこまで大きく無いがいい船だよな」

「秘密基地って感じが伝わってきますよね、こういうの僕も好きです」
「情緒という物か？まだよくわからないな」

三人は話しながら船に上がり船室のドアをメイが迷いなく開けた。ノックぐらいしろよ、とカザミは思ったが開けてしまったものももう仕方がない。

メイを先頭に次にカザミが中に入ると

中ではソファに二人並んで腰かけながら、なぜか両手をお互いに握り合っているリクとサラの姿があった。

リクが素早く反応してドア側に視線を向かわせ、結果カザミとぼつちり目が合ってしまう。

「あ失礼しましたあー！」

カザミは素っ頓狂な声を上げてメイの腕をつかみ、後ろから来たパルの身体を押し戻し、船室のドアを勢いよく閉めなおす。

「メイお前ノックぐらいしろよー！」

「姉さんは遠慮せずに入って来いと前に言ってたじゃないか」

「ああいう場面に出くわさないようにワンテンポ入れるべきなんだよー！」

「なぜだ、出くわしたらダメなのか？」

「気まずいわー！」

「え、中で何が起こってたんですか？」

あまりの居心地の悪さに声を荒げるカザミ、怒っている理由が納得できずに困惑するメイ、パルはカザミの背中に防がれて船内はほとんど見えなかった。

何か二人は中でもとんでもない事をしていたのかとほんのり顔を赤くする。

騒いでいると、船の中からドアが開いた。

「あの、もう大丈夫です」

カザミと同じようにすごく居心地の悪そうな顔をしたリクが、三人に声をかける。

ほんの少し頬が赤い。

「う、うっす。お邪魔します」

「入るぞ」

「お、お邪魔します?」

リクは中に引っ込み、足早にサラの近くへと戻っていった。

席を手で勧めつつ、リクはあれ?と小首をかしげる。

「ヒロト、今日は来れなかった?」

「ああ、あいつはちよつとな」

「……?そっか」

今のヒロトの事情をリクに説明する気にはなれず、カザミは言葉を濁した。

そんな様子に何か事情があるのだな、と察したリクは頷くだけでそれ以上深く聞いてこない。

「姉さん、さっきは何をしてたんだ?」

「おいしい!」

メイの疑問に対し、せつかく空気が戻りかけていたのに!と言わんばかりにカザミが叫んだ。

聞かれたサラの方はふんわりとほほ笑むと

「リクのアバター、現実のリクの身体に合わせて調整してるの。またちよつと掌が大きくなったから確かめてたの」
「なるほど」

カツとリクの顔が赤く染まる。

そんな彼の様子にカザミは、見られた実感が強ければ流石に恥じるんだな、と今更実感した。

パルはそんなことしてたんだ、と苦笑する。

片やメイとサラはまるで気にしてないし、止まりもしなかった。

「それでね、手を合わせてたらリクが私の手を握ってきてね、小さくて、って言った時にメイたちが来たの」

「あああああ!!サラ!それダメだって!」

リクが絶叫する。

そんなリクにサラはきよんとすると

「ダメ?」

「いや、その」

ここで説明すれば恥ずかしさはさらに増える。

思わず言いよどむリクの様子に、サラは何を思ったのか青ざめた。

「……私の手がダメなの?」

まるでこの世の終わりが来たかのようなサラの様子に、今度はリクはギョツとする。

「え?!いや、そんな事ないよ!」

「本当?リクが気に入ってくれないなら、私……」

「本当、本当!さつきは小さくて可愛い手だね、って言おうとしたくらいだし!」

「そうなの?ならよかった」

サラはめっぽう機嫌が良くなった。彼女の花開くような笑顔にリクは思わず微笑む。

急にできた二人の世界に置いてけぼりを食らったカザミとパルはどうしたらいいのかわからずに、もう無言でなり行きを見守るしかない。二人は部屋の一部となり、努めて無に徹した。

一方メイはうむ、と頷くと

「ほら、仲が良いのは良い事ではないか」

「そこ蒸し返すんじゃない!」

「……ごめん、どこかに穴は無いかな、飛び込みたいんだけど」

「危ないよ?・リク」

「落ち着いてくださいリクさん!」

この後、騒ぎは結構な時間が経ってようやく収まったが、その間に男三人はひどく疲れる羽目になった。



「改めて、今日はどうしたんですか? ミッション協力とか対戦申し込みって様子には思えないけど」

「えーつと、あれ? ……ちよつと待ってくれ」

カザミはどこから話したらいいのか予定をすっかり考えて来ていたが、今の騒ぎで全部真っ白になってしまった。

「第一次有志連合戦でリクさんとサラさんが起こしたかもしれないっていう、奇跡の話ですよね」

「……奇跡? 俺達が?」

自分達が起こしたかもしれない奇跡、と言われてリクは首をかしげるも、第一次有志連合戦という条件からすぐにそれらしき事を思い出す。

「あ! あの翼の事?」

「そうそう。光の翼が出てバグを一気に押し返したって奴。今日はその話を聞きにできるだけ状況をも含めて詳しく聞きたい」

「なるほどね、懐かしいなあ」

リクはその時を思い出して、しみじみと感傷に浸ってしまう。

しかしそれはほんの少しの間の事で、カザミの質問に答える為に記憶を掘り起こすことに集中し始めた。

カザミたち三人は緊張した面持ちで彼の言葉を待つ。

「あの時、ブレイクデカールで強化された敵はものすごく強かった。俺は仲間たち、チャンピオンやロンメルさん、他にもたくさんの人と一緒に抵抗してたんだ。でも、今振り返って思うよ、あの瞬間はともかく必死だったけど——」

リクは再度感情を振り払う為にぶんぶんと首を横に振った。

「勝ち目はなかった。それに間違いはないと思う」

チャンピオンや智将ロンメルといった実力のあるダイバーが居る

状況下でも絶望的な戦況だった。

ここまででは三人がマギーから聞いてた通りの事ではあった。

「チャンピオンは自分の機体にもかなりダメージを受けてたし、俺よりもっと状況を正確に判断してたと思う。それでも、諦めるな、皆でGBNを守ろうって声を上げてた。俺はそれを聞いて、何が何でも諦めない気持ちが強くなった、俺もGBNが好きだったから」

今もそうだよ、とリクは笑う。

「その時、ダブルオーダイバーが答えてくれたんだ」

「ガンプラが？」

カザミは思わず声を上げてしまう、ガンプラが心を持っているというのはつい最近も聞いた話だ。

リクは苦笑すると

「嘘みたいだけ——」

「嘘だとは思わねえ、俺達は、そうは思わない」

カザミは断言する、パルとメイも頷いた。

リクは力強い言葉に思わず目を大きくするが

「そっか、嬉しいな、信じてくれるんだ。……ともかく、ダブルオーダイバーと一緒に全力で戦う為にトランザムを起動して、戦った。でも、駄目だった、相手にはダメージの一つも入ってなかったと思う、武器は折れるし、殴るとダブルオーダイバーの拳が壊れた」

リクのなりふり構わない攻撃でも、ダメージは一つも入らなかった。でも、

「その後、皆が助けてくれたんだ、皆もGBNが大好きだったから、絶対諦めない！って。きつとあの時、皆の想いは一つだった」

リクはサラを見ると

「サラも、一緒に諦めたくないって言ってくれたんだ、だよね？」

「うん、私も皆と、リクとずっと一緒に居たかったから」

サラは嬉しそうに頷く。

「そうしたら、あの翼が出たんだ。俺は諦めなかっただけで、コントロールしてたとかそういう訳じゃないよ」

詳しく話せるのはここまで、とリクは締めくくった。

サラはリクの言葉を補足するために言葉を選んで言う。

「その頃私はモビルドールの身体を持っていなかった、自分の事も良く分かってなかった。自分でやろうって思った訳じゃないけど奇跡のきっかけにはなったかもしれない。……もうそういう事はできないけど。それに、私のなんかより皆の想いがあの奇跡を起こしたと思うの」

「なるほどな……」

カザミは、うーんと唸り仲間二人に問いかける。

「今の話、どう思うよ?」

「……リクさんのダブルオーダイバーに翼が宿った理由って何でしょう? どうあれバグが消失すれば結果は同じですよね? わざわざ一つのガンプラに宿る理由がわかりません」

パルは必死に頭を使って、奇跡が起こった時の納得できない部分を指摘する。

メイはパルの疑問に頷くと、仮説を立てる。

「リクの機体はダブルオーダイバー、つまりGN粒子を使ってる。そこに皆のGNを守りたいという意味が集まって、奇跡が起こった。ダブルオーが元ならGNドライブは二つ付いてる、メビウスを見る限りGNドライブは両肩にある筈だ、そこに粒子や想いが集まれば翼らしくなるんじゃないか?……これならどうだ?」

凄く速さで話が展開していき、訳も分からず当然ついて行けないリクとサラはポカンとしている。

メイの仮説に、カザミは以前のメイの『奇跡を起こすために理論』が案外しつくり来る事に少し驚きながら頷く。

「有りだな、俺も賛成。……こうなってくるとGN粒子マジで使えるかもしれないねえな」

「だからそうだったろう」

「頭が固くて悪かったな!……パルはどう思う?」

「はい! 僕も急に説得力が出た気がします」

三人の意見は一致した、カザミは、おお、と感嘆の声を上げると。

「って事は！皆の想いをGN粒子で集めるって手段は！」

「当然、有りだな」

「すげー！今度は大きく前に進んだぞ!!」

「はい！もつと今の話分析して、使えるところがないか考えましよう！」

イヴ復活のための手段がまるで分らなかったころとは大違い、その事実三人の興奮は頂点に達していた。

カザミは席から勢いよく立ち上がる。

「こーしちゃいられねえ！一回ブリーフィングルームで作戦会議だ！あっちの方がやりやすいしな！移動すんぞ！」

「はい！すぐ行きましよう！」

「もう一つか二つ、何か可能性を高める手段が欲しいな、二人とも感謝する、ではまたな」

メイの言葉にサラは良く分からないまま勢いに押され頷いた。

そのまま三人が共立ち上がった段階でリクが自分を取り戻した。

「いや、ちよつと待って！何の話をしてたの今の!?!」

「え、何言ってるんだ、そんなもん決まって……あれ、誰も説明してなかったか?」

リクとサラの思わぬシーンを見てしまい、話を聞くための台本が真っ白になっていた。

話が終わった時も、思わず議論に速発展し、その結果にテンションが上がってしまったりして、そもそも一体何のために今回の話を聞きに来たのか説明するのを省いてしまっていた。

「あ、そもそもなんで今回の話聞きに来たのか説明してないな」

「うん、気が付いてもらってよかった」

置いてけぼり食らう所だった、とリクは苦笑いする。

カザミはそんなリクに対し

「イヴさんを復活させたいんだ」

端的にリクとサラにすれば衝撃的な発言を投げつけた。

簡単に説明する発言をしまつてから、カザミはまたも今までの自分のミスに気が付く。

「え、イヴさんって、ええ!？」

「姉さんを!？」

「そうだ、いやー、今日は助かったぜ、じゃあ、またな」

カザミは二人を促して、足早に出ていこうとするが

「いや、だから待って!」

リクは衝撃を呑み込めないまま、再度引き留める。

彼はともかく口にせねばならない事があった。

「俺も手伝う!」

「私も!」

「もう手伝ってもらったぞ」

「もつと手伝う!」

「……気持ちだけでいいよ、今は」

リクの必死の声をカザミは冷たく切り捨てる。

パルは怪訝な面持ちでカザミを見ると

「カザミさん、そんな言い方しなくても」

「いや駄目だ、ヒロトが望むとは思えない」

そんな事あるだろうか?とパルは首を傾げた。

メイはカザミが頑なにリクからこれ以上の助力を拒む姿を見て、その理由を考えてハツとする。

そしてメイはパルの耳元に小声で

「ヒロトの過去が詳しく知られるぞ、そうすると二人はどうなる?」

「あ」

リクとサラは優しく良い人たちだ。それは接すれば自ずとわかる

ことだし、助力に惜しみなく全力を注ぐだろう。

しかし、復活の案を考えるのであれば一から十まですべて情報を共

有し、その上で試行錯誤しなければならぬ。

つまり、深く助力してもらおうとなれば、ヒロトのあの記憶をもとに

した文章はリクとサラの目に触れる、そうなれば確実に二人を打ちの

めす事になる。

イヴはなぜ自分の身を投げたのか、その行動は何を生んだのか。

ヒロトに傷を残してしまった事実はあるだろう、だがGBNを守り

それが結果としていろんな素晴らしい出来事の礎となった事も紛れもない事実だ。

せめてもの救いはそこにしかない、ならばその一点は絶対に守らなければならぬ。

パルは遅く察した自分を恥じ、リクとサラに深く頭を下げる。

「ごめんなさい、お二人を迎える事は、どうしてもできません」

メイも同調して深く頭を下げた。

「姉さん、リク、気持ちは有り難いんだが分かってくれないか」

カザミも深く頭を下げる。

「すまん！さっきの俺の態度は悪すぎた、でも、無理なんだ、すまん」

どさくさ紛れに離れられたら二人に対して余計に波風を立てる事は無かったが、もうこうなってしまうたら真摯に伝える他にない。

三人に頭を下げられてしまい、リクとサラは困惑する。

三人の態度は不可解な事ではあるが、ともかく三人には自分達の意思は強く伝わったように見える、それでも無理だという事は何か計り知れない事情があるのだろう。とリクとサラは感じ取った。

ここで自分たちが引かなければ、むしろ三人を傷つけかねない。

「分かりました、俺達はこれ以上踏み込みません、サラもそれでいいね？」

「うん……」

「ありがとう、気持ちは受け取ったから」

カザミはお礼を言うのと再度頭を下げた。

リクは、必死で考える、まだ言える事は無いのか、と。

第一次有志連合戦の『奇跡』について話を聞いたがっていた、さっきの三人の話し合いは奇跡を起こす事でイヴを救い出すという明確な目的を持っていた。

自分だけが言える事、彼らが知らない事は何だ？

リクはこの状況で言える、必要な言葉を考え出した。

「奇跡にはリスクがあります、正直、偉そうに俺が言える事じゃないんだけど……」

「どういう事だ？」

メイは歯切れの悪いリクの言葉の意味を聞く。

「あの大きな奇跡の後バグは確かに押し返せた、でも押し返しただけで、結局またバグは溢れかえってしまった。そのバグはブレイクデカールとはまた別の種類の物だけど、ともかくそういう『反動』が起る可能性があるんだ」

サラの手を軽く握りながら、リクはその後起きた事を掻い摘んで伝える。

別種類のバグとは、当時のサラの記憶や感情に起因して引き起こされた物だった。

「大事な情報だ、助かるぜ」

「リク、今回はきつと大丈夫だと思おうの」

「え、サラ?」

カザミは表情を険しくせざる得なかったが、リスクに関しても考えていかなければならないのはどのみち避けられない事だった。

しかし、そのリクの言葉に対し反論したのは意外にもサラだった。「だって、姉さんはGBNを守る為に自分の身を賭けたんだもの、姉さんがGBNを傷つけるような事、絶対しないっ!」

希望的観測ではあったが、サラの言葉は確信の響きを持っていた。

リクは確かに、と笑う。

「サラの言う通りかもしれない、万事丸く収まる可能性もあるよね」

「はは、まあ、確かに的を得た意見ではあるよな。それも頭に入れておくぜ」

「今日はありがとうございました!」

「姉さん、リク、また会おう」

カザミも笑いながら、パルも改めてお礼をして、メイはいつも通りに挨拶をしてそれぞれに踵を返す。

三人が出ていこうとすると、リクは後ろから声をかける。

「頑張れ、BUILD DIVERS!いつでも手を貸すから!」

カザミが片腕だけ突き上げて返答し、三人と連れ合い船から出ていった。

船着き場に降りた三人は早速転移しようとするが、メニューを開い

たカザミは緊迫した声を出した。

「今日早く帰らないとダメなんだった」

話が盛り上がりすぎて時間を見てなかった。

パルは転びそうになった。

「お、お疲れさまでした」

「俺ホント、もう自分が嫌だ、何一つスマートにできねえ、だつせえ俺……」

リクの善意からの言葉に対して冷たく返してしまうし、応援に対して格好つけて返したというのに早速この有様である。

ひたすらに自分が情けなく思えた。

「あ、あの、ヒロトさんの事を慮る事が出来たのは、本当にすごいと思いますよ。僕あの時ヒント無しじゃ気が付きませんでしたし！」

「……フォロー、ありがとよ……」

パルからの必死のフォローにカザミの肩がガクーンと下がった。

メイはカザミの背中をポンと叩くと

「その件に関しては私より判断が早かったぞ、やればできるじゃないか」

「お前はフォローする気あんの、ないの!?!てか時間やべえ!また次ない！」

「ヒロトさんには僕の方から電話して様子を確認しますので、カザミさんは気を付けて帰ってくださいね」

「また声をかける、ではな」

「頼む！」

カザミは返事もそこそこ、速攻でログアウトする。

「大丈夫でしょうか」

「……まるで締まらないな」

「まあ、それも僕たちの個性なんじゃないですかね……」

パルは遠い目をして、メイと別れるのであった。

知る事、そのリスク

「——ああ、今日はダイブするつもりだ。——体調は大丈夫、もう問題ない。——心配かけてすまない。——そうなのか、じゃあ期待しておく。——うん、じゃあまた夕方に」

ヒロトは学校に向かいながらしていた電話を切ってポケットに携帯を入れる。

「おはようヒロト」

後ろから来た声は、ヒロトにとって馴染みのある声だった。

ヒロトが振り返ると、ヒナタが手を小さく振りながら足早に追いついてきた。

「おはようヒナタ、今日は遅いんだな、朝練は無し?」

「今日は休みー、ヒロトは今日の夕方もGBN行くの?」

「うん、そのつもり」

先ほどの電話の相手はパル、彼は例の件からヒロトの負担に対し強く心配しており、昨日の夜と今朝も連絡をしてきた。

ダイブする意思を伝えた時はヒロトの容態を気にしながらも、同時にヒロトの気持ちも慮りダイブに対し拒絶する様子はなかった。

パルの気遣いや配慮の姿勢に、ヒロトは尊敬の念を覚える他にない。年齢など関係なしにパルはメンバーの誰より大人びた行動をする時が度々ある。

「ちよつと前にすごい豪華な車がうちのマンションの前に止まってたつて噂になってたよ」

「へえ」

ヒナタの話にヒロトは頷き、話を流そうと試みるがヒナタのこちらをのぞき込む目に、これは無理だなと素早く判断する。

「実はパルが、詳しくはわからないけどすごくいい所の子供らしい。GBNから帰る時、ついでだからって送ってもらったんだ、やっぱり目立つよな、あの車」

「……そうなんだ」

半分嘘、半分本当のヒロトの答えにヒナタはとりあえず納得した様

だった。

過去を無理に引き出した反動でヒロトはしばらくの間思考が落ち着かず、上の空になっていることがどうしても多かった。

その間もヒナタに接する機会があった、詳細はともかくヒロト達が何かやっている事には気が付かれていてもおかしくない。

「今度は危ない事じゃないから、そう心配しないでいいよ」

「ふーん？」

ヒナタに余計な心労を追わせないためにヒロトは伝えれることを伝えるが、それが逆にヒナタの疑心をくすぐった。

危ない事ではないのは確かだろう、とヒナタはその点に関してヒロトの発言を信じるが、しかしつい数日のヒロトの上の空っぽりは尋常ではなかった。

危険ではないが、ヒロトの悩みになりうる事。

あの上の空っぽり、どこを見ているのか分からない様子。

見るに堪えないほどの様子はなかったが、あの顔には覚えがある。

ヒナタは答えを悟った。

「写真のあの子は見つかりそう？」

「——っ！」

僅かな情報で殆ど正解までたどり着かれてヒロトは言葉に詰まってしまう。

その様子を見てヒナタは少し笑う。

「なあに、そんなびっくりしちやって？」

「……いや、どうしてそこまでわかるんだ？」

ヒロトの疑問にヒナタは彼の目をじっと見つめ質問で返す。

「どうしてだと思っ？」

「……うーん」

そう聞くが、ヒロトの返答は学校が見えてきても形にならなかった。

話を切り上げるタイミングが来てしまい、ヒナタは思わずため息をつきそうになったが表には出さなかった。

「また会えたら、紹介してよね」

「……わかった、約束する」

ヒロトの返事にヒナタは満足すると、足早に学校に向かった。

あの写真の子と会って、その後に何がしたいのか、ヒナタ自身ですら分からない事だった。



夕方になって、早速G-CAFEに向かい店長との挨拶もそこそこにヒロトはGBNにダイブした。

ロビーにたどり着いてフレンドリストを開いてみると、すでに三人ともダイブしてきている様だった。

辺りを見渡して程なく、大柄で目立つアバターのカザミがキョロキョロ辺りを見渡しているのが見えた。

「カザミ」

「お！ヒロトか、調子はどうだ？」

「もう大丈夫だ、心配かけてすまない」

ヒロトはカザミの質問に対しきっぱりと答える。

またぼんやりしていると思われ、やっぱり帰れと言われると困る。

ヒロトの返答は気持ち声色が強かった。

「元気ならいいんだが、一々謝んな」

「す、いや、ありがとう」

返答として謝りかけたヒロトにカザミはチョップの構えを見せ、ヒロトは焦って返事を変えた。

カザミはそんなヒロトに大様に頷く。

「ならよし」

「ヒロト、カザミ」

「こんばんは、皆揃いましたね」

二人がそんな話をしているとパルとメイが近寄ってきた。

メイもヒロトの容態が気にはなったが、同じ様な事を他の仲間がすでに聞いているだろうと判断して何も言わなかった。

メイは合流するまでの間に、今日は少し人の入りが多い事に気が付いていた。

「とりあえず、ブリーフィングルームに移ろう」

「ああ、そうだな」

ヒロトがいったん休んでいた時は合流時点で簡単な報告をしていたが、今回は彼との情報のすり合わせだけでもかなり時間がかかりそうだ。

ヒロトもゆっくり話の出来る場所が欲しかったので、その意見に賛同する。

4人は手早くブリーフィングルームに転移して、各々席に着いた。カザミは定位置であるボードの前に陣取っている。

「えーっと、どっから話したもんかな」

カザミは腕を組むとメイが手を上げる。

「私がやろう、それでいいか？」

「お、そんじゃあ任せるわ」

「お任せします」

「……?よろしく頼む」

メイの発言に二人が頷く。

ヒロトとしては事のなり行きを見るしかない。それはともかく、メイが手を上げてから発言した姿を見て、以前からそうだったろうかと疑問を浮かべはしたが。

「ヒロト、これから話す事は、勿論お前が話してくれた過去が元だ。先にそこは明確にしておくぞ」

「ああ」

ヒロトが頷く姿を見てから、メイは続きを話す。

過去についてはおおよそ理解したと伝えるだけでいい、深くその件について確認するつもりはカザミ・メイ・パルには無かった。

ヒロトも仲間たちの様子に、あの支離滅裂になってしまった発言をうまく解釈してくれたらしいと判断する。

彼は頭を下げた

「ありがとう」

「いいさ、気にするな。では改めて話すぞ。イヴ姉さんを復活させるにあたって、予想される障害は多い」

「……そうだろうな、皆はどんな障害が出ると考えたんだ？」

メイの説明にヒロトは頷き、深く聞く姿勢をとる。

「そうだな、とりあえずもうすでに排除できつつある障害を先に一つ説明する。復活した後のイヴ姉さんの保護手段だ」

「保護……。モビルドールか？」

保護手段と言われ、ヒロトはすぐに答えに行きついた。

「そうだ、すでにELIバースセンターに発注してある。問題は外見情報不足していることだが——」

メイは指を二本立てる。

「解決方法は二つ。一つ目はヒロト自身の手でモビルドールを作る。お前の腕なら可能だろう、姉さんの外見を一番知っているのもヒロトだ」

様々な案を実際に形にする事においては、仲間の中でヒロトは頭一つ抜けている。

メイは彼の腕を信用している、その上製作者の思い入れが籠るのであればイヴの身体を作ることこれ以上適役も居ない。メンテもヒロト自身の手で行えるとなれば、何かあつて破損した時のフォローも素早い筈だ。

カザミとパルも自然と頷いてしまう。

懸念としては思い入れが強い分だけあれこれ悩んだりしないか、という可能性があるがそれは本人次第としか言えない。それに負担になるかもしれないが、同じくらい前向きな気持ちを作る理由にもなる。

「……もう一つはそのままか？」

ヒロトは二つ目の解決策を予想はできたが、一応聞く。

「ああ、外見情報を追加で渡す。……他に姉さんが写った画像はあるか？」

メイが首をかしげる。

「いや、無いな。……俺が作った方がよさそうだ」

「そうか、ヒロトが作ってくれたらきつと姉さんも喜ぶと思うぞ」

メイは珍しく嬉しそうに微笑んだ。きつと渾身の力作になるだろう、今から見るときが楽しみだと彼女は考えた。

ヒロトはメイの表情に微笑み返すと

「ああ、そうだといいな。……モビルドールを作る時に規定だったり、仕込んでおかないといけないギミックはあるのか?」

「その辺りはモビルドールを製作してくれている者に聞けばいい」

「ああ、それもそうだな。……その人の連絡先を教えてくれないか?」

ヒロトの要請を聞く間にメイはいつもの表情に戻ってしまった。

「いや、必要ない。すでに私たち全員知り合っている。モビルドールの制作者は、コーイチだ」

「コーイチさんが!? そうだったんですか?」

パルは予想外の名前を聞いて驚きの声を上げた。

急に出てきた身近な知り合いに、ヒロトとカザミも驚きを隠せない。
い。

「そうだ、あともう一人いるが、そちらは出てこないだろうな。まあ、そもそもやり取りをする必要もないが」

「……? そうか、コーイチさんならいろいろ話しやすそうだな。」

ヒロトはメイの様子に疑問を抱いたが、ともかく連絡を取るべき相手がコーイチであることに安堵した、ヒロト達のやろうとしている事にコーイチは驚きはするだろうが、あれこれと詮索する性格の人間ではない。

その上互いにビルダーとしての腕は自然と把握している、話も当然通りやすい筈だ。

少し段取りを考えているヒロトの裏で、メイも考えていることがあった。

シバ・ツカサの行いを把握しているのは、4人の中でメイ以外に居ない。

ブレイクデカルル事件は、今までの話を振り返るに浅からずイヴに負担をかけているように考えられるが、それを知ればヒロトがどう動くか予想ができない。

どうなっても少なくとも彼にとっては大きなストレスの元になることは間違いない、ならばなるべくヒロトの負担にならないように動いていく必要がある。

自身が知っているからと全てを安易に口に出すと、さらに被害や悲しみを生みかねない、衛星砲の事やヒロトの過去を通じてメイが学んだことだった。

後でコーイチに根回ししてシバ・ツカサの行いがヒロトに絶対に伝わらない様にしておく。そうすれば滅多な事にはならず、自然とヒロトの負担は無くなる、そうメイは判断した。

「では、モビルドールはヒロトに全て任せる事にする。これで障害の一つは除外でいいか？」

「ああ」

「賛成だ」

「僕もそれでいいと思います」

四人は頷き合い、話は進む。

カザミはモビルドールの件はヒロトに任せる、とボードに書く。

「では、続けよう。姉さんの復活の為に四散したデータを集める手段についてだ」

「ここからが今日の本番だな」

メイが示した次の話に、カザミが合の手を入れる。

彼らの議論は次の段階へと進む。

奇跡を『起こす』為には

「四散したデータを集めるにあたって、数多くの障害がある。まず前提として、姉さんの身体は消滅し構成していたデータの行方がほとんど分からない」

「ああ」

メイが上げた障害はヒロトもここ数日休んでる間に少しは考えていた事だった。とは言え問題点が把握できていても、その解決策までは考えていない。

イヴの因子は少しはメイや他のELダイバー達にも受け継がれている、だが当然その他にも行方知れずになったデータが大半だろう。「私たちの方では、GBNを管理している運営組織の力を借りる、という話が挙がったが、そちらはあまり現実味がない。ELダイバーに共生の場を与えてくれてはいるが、だからと言って優遇してくれるわけではないからな」

「……うん、そうだろうな」

メイの纏まった意見に対しヒロトは納得する。

カザミは運営の力を借りる事は現実味がない、とボードに記した。「以上の条件から、プログラム上から姉さんをサルベージするのはできそうにない。それらを踏まえ、どうするか——」

今朝方にヒロトに掛かってきた電話で、パルはイヴ復活に当たって何らかの有効な手段を思いついたようなことを言っていた、通学中で落ち着いて話す余裕もなかったが、今から話される内容が恐らくその事だろう。

ヒロトは自然と姿勢を正す。

「私たちは奇跡を起こせば良いのではないかと考えた」

「……奇跡？」

「ああ」

メイは力強く頷いた。カザミとパルは同時に頭に手を当てた。メイの言いたい事はすでに理解しているし賛同もするが、だとしてもやはり結論の伝え方が突飛すぎた。

考えてもいなかった単語に面を食らって、ヒロトは珍しく思考停止に陥ってしまうが、持ち前の理性で立て直す。

自分の為に仲間達が考えてくれたことなのだから、ともかく説明を最後まで聞いてみよう、説明を促した。

「……えっと、つまりどういう事だ？説明を続けてくれ」

「ああ、だがその前にヒロトは昔AVALONに居たと話していたが、第一次有志連合戦には参加したか？」

メイからの質問にヒロトは首を傾げるが、すぐに肯定する。

「マスマイバー達との戦闘には参加している」

「そうか、なら話はある程度省けそうだな。勝敗の決め手になった光の翼は見たか？」

「光の翼？ああ、あれか、少し遠くからになるが見たな」

メイが聞くと、ヒロトは印象深い光景をすぐに思い出した。

ブレイクデカールで巨大化したビッグザムから放たれる枝分かれするメガ粒子砲を何とか掻い潜り、ジュピターヴガンダム姿勢を整え直していた時にあの翼は現れた。

そうして振り返る中、ヒロトの脳内にイヴの消滅の間際の発言が蘇ってくる。

「イヴは、あれを皆の想いが重なって産んだ奇跡だと言っていた」

ヒロトの言葉に、三人が目を見張る。

思わずパルが声を上げる。

「イヴさんがそんな事を？」

「ああ、皆の想いが集まればきつと何でもできる、そう言っていた」

ヒロトはその後の暗い記憶を振り払う為に眉根を揉んだ。

「ヒロト、大丈夫か？」

「……ああ、大丈夫だ。続けてくれ」

ヒロトの負担は気にはなるが、心配しすぎるあまりにその都度議論が停止してしまえば先に進めない。

彼の言葉を信じて、メイは話を続ける。

「奇跡を起こす方法を考える中でママからその光の翼の話聞いた。その後、その奇跡の中心点がリクとサラ姉さんだったという話もあった

て、本人たちに詳しく話を聞きに行つたんだが」

「……リク達に？」

「ああ。イヴ姉さんとよく似た事をサラ姉さんも言っていた。それに当時のサラ姉さんはモビルドールの身体を持っていない、自身の状況がよく似ている姉さんたちの所感が重なるなら、皆の気持ちが奇跡を起こしたという話に間違いはないと私は思う」

メイは二人はどうだ、とカザミとパルに視線を向ける。

二人も迷いなく頷く。

「俺もそう思うぜー！」

「同感ですー！」

ヒロトは三人の様子を見ながら、イヴの話を思い出す。

「消える、実際に奇跡の反動でバグが起こっている、とイヴは言っていた。また反動が起こるかもしれない」

ヒロトは苦い声で、奇跡のリスクに対して言及する。

メイはその声に対し

「その危険性は、確かにある、実際リクも指摘していた。だがサラ姉さんは、イヴ姉さんが帰ってくる時にGBNを傷つける訳がない、と言っていたぞ」

「……そうなのか、なら、……でも——」

メイ越しに届いたサラからの言葉。ヒロトの意識の中で、それならばと信じたいという希望と、その反動で起きてしまった悲劇が脳裏を過り、うまく言葉が出ない。

もし反動が生じて、何か被害が出た時、どうすればいいのか。

カザミは、そんなヒロトの様子に慎重に言葉を選びながら声をかけた。

「なあ、ヒロト」

「……？」

「その、さ、全部上手くいく可能性だって、有るんじゃないかなって俺は思うぞ。イヴさんが戻ってきて、その上何も問題が起こらねえ、って。駄目な事が起こるかも、なんて考えてたら何もできねーっていうか。もうちよつと能天気でもいいんじゃないやねえの？それにさ——」

カザミは頭を強く掻く

「なんつーか、お前がずっと苦しい顔してるの、見てらんねえよ」

「え？」

「もしなんかあっても、俺たち一緒にやれる事やるからさ、一人で責任感じる必要はねえよ」

「カザミ……」

「そうですよ！」

パルも大きく声を上げた。同時に彼の目の淵から一筋の涙が零れる。

「ヒロトさんは一人で何でも背負い過ぎですよ！もっと自分がやりたい事とか幸せになる事を考えるべきです！」

「パル……」

「……なあ、ヒロト。お前は、どうしたいんだ？」

二人の言葉の後、メイはヒロトに問いかける。

「……俺は」

自分は、どうしたいのか。

———どうしようもないから、諦めるの？

マギーの言葉が、ふと蘇る。

今度こそやれる限りをやる、あの時、自分でそう答えた。

「イヴに、もう一度会いたい」

「イヴに、君がやりたかったことは、本当にやれたのかって聞きたい」

「イヴに、今のこの世界を見せてあげたい」

「俺は」

「俺は、もう、諦めたりしない、絶対に、諦めない———！」

ヒロトの心の底からの声を聞いて、メイは彼の肩を叩いた。

「ならば付き合おう、どんな結果になってもな」

「いいのか？」

「……おい、そこで聞き返すのは無粋だと、私でもわかるぞ」

ヒロトの返事はメイにとっては不満なものだったが、ヒロトらしくもあるか、と彼女は少し笑った。

カザミとパルも、ヒロトのはつきりとした意思が聞けたことにより一層やる気を高める。

「その言葉を待ってたぜ！ヒロト！」

「成功させましょう！絶対！皆で！」

「ああ……！」

「なんとしても姉さんを取り戻すぞ」

4人は強く頷き合った。

もう一度意識を合わせ、話は進む。

「……リクとサラさんは他に何か言ってなかったのか？」

「さっき言ったとおりの事だが、あとで音声を確認するか？」

「念の為にやろう」

メイとヒロトが頷き合う様子を見て、カザミは先日のリクとサラと会話をする直前に行くわしたハプニングを思い出す。

「メイ、お前どつから録音してた？」

「……フォースネストに入ってからだが？」

「あー、じゃあ前半いらねえな……」

カザミはその時の光景を思い出して苦笑いが込み上げてきた。

「なぜだ、使える所があるかもしれないぞ」

「いやねえよ！絶対ない！」

カザミの断言にヒロトは首を傾げる。

「本題に入る前に何かあったのか？」

ヒロトの疑問に、カザミとパルは苦笑しながら答える。

「いえ、大した事はないんですけど、すごく疲れただけと言いますか」

「……あー、俺たちがフォースネスト手に入れたら、ドア開ける前にノックするのルールにしような」

「え、まあ、それは構わないが」

「親しい友人に遠慮はいらないのではないのか？」

「これルールだから！もう決めた！全員順守な！」

カザミはあの時のサラや今のメイの様子から、ついつい会った事のないイヴにも一抹の不安を覚えるも、無理矢理振り切った。

期せずしてさっきの重い雰囲気はどこかに吹き飛んでしまったよ

うだった。

「で、やるって決めたからには本気で奇跡起こすぞ」

「ああ」

「二人の話から、皆の想いが大切なんですよね？」

「そうだな、なら……」

パルの確認にメイは頷き、少し言葉に詰まった。

「姉さんの事を沢山のダイバーに知ってもらわないと、話にならないだろうな」

カザミはその前提に、だろうな、と頷く。

「想いを合わせてくれそうな人間に当てはあるが、もっと数が欲しい」

メイの言葉は納得の要求だった。

リクやサラを始めとするBUILD DIVERSの面々や、マギーは勿論力を貸してはくれるだろうが、この場の人間と合わせて12人しかいない。そこにフレディとヒナタを加えても14人で、更にマサキがいても15人だ。

ヒロトは力を貸してくれる可能性が高いダイバーが居ないか考える。

「ELダイバーたちはどうだろうか？」

現在で80人以上は存在する筈だ。同じELダイバーの為なら力を貸してくれるかもしれない。イヴの話やその復活の手段に対しても、一般ダイバーより素直に受け入れてくれそうだ。

「なるほど、できるだけ連絡を取ってみよう。他は何か思いつくか？」

メイは頷くと、カザミとパルを見る。

パルはしよんぼりと肩を落とすと

「僕、フレンド、あんまり居なくて、僕個人の当てとなると一人くらいしか……」

「なるほど。しかし一人増えるだけでも、一歩進んでいる、気にするな」

「……メイさん、ありがとうございます」

パルの脳裏に思い浮かぶのは兄の事だ。

現実での事故の後遺症から傷心していた自分をGBNに誘ってく

れた張本人で、きっと手を貸してくれるだろう。

メイはパルの話を聞き終えると、カザミに目を向ける。

「カザミ、動画は使えないのか？」

「あー、それ今考えてたんだがよ……」

カザミは眉根を揉むと

「上手くいけば、それこそすげー人数が手を貸してくれるかもしれないが、変な奴にまわりつかれる可能性もあるしなあ——」

エルドラに関するミッションが終わって以降、カザミのチャンネルは1度荒れた。人目に付き過ぎると変に否定だけをしたがる輩とぶつかる時もあるのだ。

変質的で粘着質なダイバーに目をつけられたら堪ったものではない、カザミ自身は動画を上げています以上覚悟していたが、身内が同じ目に遭う事が嫌だった。

それこそ、一旦は手を貸してくれても、イヴが復活した後に非常識な輩に絡まれる可能性もある。

その辺りまで可能性を考えて、カザミはハツとする。

どうなっても、やれる事をやる、さつき決めたばかりではないか。

「……ここはヒロトの意向に沿うぜ、リターンは確かにでかいしな」
どうする？とカザミはヒロトに伺う。

問われたヒロトの決断は即答であった。

「やろう、身内だけだと数も知れてる。それに、やれる事は全部やるのはさつき決めた事だ」

「——！ああ、だよな！やろうぜ！」

「なら、伝えるべき事の台本が居るな。一から十まで説明する必要はないだろうが……」

「そうですね。……ともかく皆で考えてみましょう！」

意思を示し、走り出す

「じゃ、本番行くぜー。3、2、1」

カザミは録画を開始すると、はきはきとした声で話し始めた。

「よう！動画を見てくれる皆！BUILD DIVERSのカザミから今日も動画をお届けするぜ！……つと言っても今日はバトルの動画じゃねえ。真面目で大事な話だ、ちよつと長くなるかもしれないがどうか最後まで視聴して欲しい。——よろしくお願いします」

彼は毎回最初のお約束としている陽気な始まりからトーンを落とし、今回の動画の趣旨に話をスライドさせていく。

「まず事前情報を伝えていくぜ。……皆はELダイバーって知ってるか？世界的には兎も角、GBN的には名前は知られつつあるし、知ってる人も多いと思うが、念の為に解説しておくな」

カザミは録画面を白い背景のみにして、パルが描いた絵とともに説明していく。

「ELダイバーは簡単に言うとGBNで生まれてきた電子生命体の事だな！ちなみに、どうやって生まれてくるかっていうと——」

白い画面にポンとメイをデフォルメしたイラストが現れる。

その真下には『ELダイバー』と書かれたフリップが添えられている。

「GBNアクセス時にスキャンしたガンプラのデータ、そこから転送した際に生じる総容量100万分の1くらいの余剰データが蓄積されて生まれてくる、らしいぜ」

RX-78-2ガンダムのシルエットとダイバーのシルエットが表示され、矢印で行き先を二つ示し片方はGBN、もう片方はELダイバーの方へと向かわせ、それぞれに『余剰データ』等対応する単語を添える。カザミの発言をイラストの中に組み込んで注釈と簡易アニメーションを用意してなるべくわかりやすくした形にしたものだ。

「今回の話の情報源はうちのメイだ。過去の動画を視聴してくれた人は察しが付くと思うが、彼女はELダイバーだ！今までの話は間違いない事を保証するぜ！」

カザミは話しながら画面を操作して少しだけメイを映す。

メイは普段通りの表情で軽く手を振って応えた。

「今回の本題はそのELダイバーについて、俺達BUILD DIVERSの司令塔ヒロトから話がある。動画撮影には慣れてないからそこは了承して欲しい」

カザミはカメラを操作し、ヒロトとマギーが座っているスタジオセットの方へ焦点を合わせる。

「聞き手は皆さんご存じ上位ランクフォース『アダムの林檎』のリーダー、優良ダイバー筆頭マギーさんだ！二人とも後はよろしく！」

「BUILD DIVERSのヒロトです、よろしくお願ひします」

「はぁーい、マギーよ。よろしくねえ」

ヒロトは固く、マギーはいつも通りの柔らかな挨拶で応える。

会話の口火を切ったのはマギーからであった。

「ヒロト君、今日のお話はELダイバー全体についての事かしら？」

「ある意味では、そうかもしれませぬ」

意味深なヒロトの言い回しに、マギーは小首をかしげる。

ヒロトはイヴと自分が写った画像を壁に投影し、彼女の方を指し示す。

「彼女の名は、イヴ。……恐らく、一人目のELダイバーです」

「っえ!? 一人目はサラちゃんの筈だけど、どういふことかしら?」

マギーはまるで今初めて聞きました、という雰囲気装って話に食いついた。

ヒロトが話し手であるのは当然の事だが、聞き手を抜擢する時に動画制作は一度ストップした。一応仲間内4人で練習はしてみたのだが、カザミは慣れている分ヒロトが浮き過ぎる、パルは緊張してしまつて固い空気になりすぎ、メイと会話すると動画がもの凄く淡々とした印象で終わつてしまう。

そんな事情からある程度の演技が可能で、こちらの事情を改めて説明するまでもなく大方把握しているダイバー、マギーに聞き手をお願いした。

あれこれ頼んでしまう事に4人で申し訳なく感じるところもあつ

だが、マギー本人としては「頼られて嬉しいわ」と快諾してこの場に座っている。

「ELダイバーと呼称されたのはマギーさんの仰る通り、サラさんが初めてでした。イヴと自分は約二年以上は一緒に居ましたが、彼女の抱える事情を最後まで知る事はありませんでした」

「最後まで、という事はその、イヴちゃんの身に何かが起こったのね？」

マギーが神妙な表情で質問すると、ヒロトは固く頷いた。

「イヴはGBNの中で身体を維持できないダメージを受けて、今その構成データはGBN中に散ってしまっています」

「……そうなのね。サラちゃんはイヴちゃんの事は知っているの？」

「伝えてあります。……イヴが、彼女が消えてしまった時期はブレイクデカールを発端とした第一次有志連合戦が終わってすぐ後、当時は運営にELダイバーを迎え入れる体制が成立しておらず、自分自身も彼女が少し変わったダイバーとは思っていましたが、電子生命体だなんて思いもしていませんでした」

「確かに、無理もない話ね。私もサラちゃんの事を知るまでGBNに電子生命体が居るかも、なんて考えてもいなかったわ」

マギーは悲痛な面持ちで頷き、続けて自身の思うところを話している。

「私も第一次有志連合戦の事はよく覚えてるわ。直前は特にブレイクデカールによるバグの被害がいろんな場所で起こっていて、GBNは滅茶苦茶になっていた。今のELダイバーはいろんな手段で保護されているけど、イヴちゃんはバグの影響を諸に受けてしまったのかもしれないわね」

「そうかもしれません。ただ飽くまで俺の感覚だと、彼女の場合は自分からバグを抑え込んでいた様にも思えます」

ヒロトの話にマギーは目を丸くする。

「そう感じるような事があったのね？」

「イヴはGBNの隅々まで好いている様でした、一緒に各デイメンションや色んな催しに実際向かってみて本当に楽しんでいる姿を見

てます。俺はGPDからの移行組で最初はGBNに馴染めませんでしたけど、彼女のおかげでこの世界を好きになることができました。……そういう事もあって彼女はGBNを守る為に身を挺したのかも、と考えています」

事情を凡そ知っているだけに思わず哀愁を感じてしまいそうになるヒロトの言葉に、マギーは優しく微笑んで見せた。

「そう、大切な思い出なのね」

「はい」

今も複雑な感情でいるヒロトに、マギーは今の聞き手という立場で出来る限りの言葉をかけた。

ヒロトはその気遣いに言葉は出せないながら心の底から感謝し、微笑む。

「今回カザミの力を借りて動画をアップロードさせてもらったのは、俺がもう一度イヴに会いたいと考えているからです。……今までの話は俺の主観で、もしかしたらこの世界の何処かで既にイヴは復活しているかもしれない。もし心当たりのある人がいたら是非情報を頂きたいです」

ヒロトは一度画面に向けて頭を下げる。

今までの経験から、現時点でGBNの何処かでイヴが復活している可能性は無いだろうという事はヒロト達も良く分かっていたが、目標である『イヴを復活させる奇跡を起こしたい』という話はどうしても突飛な印象になるので、視聴者から見て意図がわかりやすい言葉を伝える必要があると考えたのだ。

マギーはそんなヒロトの意思に対して、敢えて否定的な意見をぶつける。

「いい情報がなかったらどうするの?」

マギーの試すような言葉は、ヒロトに以前の会話を思い起こさせるものだった

答えは当然決まっている。

「それでも諦めません。情報がなかった時の事も考えてあります、試行錯誤の余地はありますが」

「草案はあるって事ね、どうするの？」

ヒロトの答えに頷き、マギーは短く分かりやすい単語に変える。

「第一次有志連合戦の終盤、光の翼がバグを押し返す様子を見た人はこの動画の視聴者の中にもいるとは思いますが」

彼の発言はマギーは怪訝な顔をしながら頷いた。

「私はあの場で直に見たけど、あの翼がどうかしたの？」

「あれは皆のGBNを守りたいという気持ちが重なった起こり得た奇跡だと、イヴとサラさんの二人が示し合わせることなく同じ見解を述べていました。当時の彼女たちはある程度はシステム側に干渉出来る状態で、俺達BUILD DIVERSはその見解が真実であると感じました。……なのであの時と同じことを意図して起こせたら、きっとイヴにまた会えると考えています」

淀みのないヒロトの説明に対して、マギーは理解する間を置いてから、極めて冷静に言葉を返す。

「皆の想いを一つにする。————きつと簡単な事じゃないわよ」

声のトーンが落ちた、冷徹にも聞こえるマギーの返事は当然の事だった。かつての第二次有志連合戦での対立の光景が脳裏を過る。

ヒロト達自身もそれが如何に困難を極めるのかは、予想も覚悟も出来ていた。

「分かってます。でも、やります！」

マギーの射貫く様な視線に臆することなく、ヒロトは力強く意思を示す。

そんな彼の瞳に宿った覚悟を見据えたマギーは、今までの重苦しい雰囲気を一転させて、普段通りのテンションで満足気に頷いた。

「その意気や良し！私は応援するわ！」

「ありがとうございます、皆さんもどうか協力していただけると幸いです。たくさんの人から支援の意思が上がった後で改めて具体的な方法を説明した動画を上げるので、またその時は宜しくお願いします！」

動画撮影は滞りなく終わりへと向かっている。

この締め括りで動画を撮り終えるかどうか、4人の間でも散々話し

合った、今までの発言では言及していない事が一つあるからだ。即ち、奇跡のリスクについて話すかどうか。

今までの話には『奇跡』という良くも悪くも目立つ言葉があったが、基本他のダイバーに迷惑を掛けないような内容で上手く誤魔化す事が出来ている。

「最後にお伝えします、あの光の翼はバグを押し返した時に、反動も生んでいました。もしかすると今回のイヴの復活に伴い、GBNに予想していない衝撃が及ぶかもしれません。今はそのリスクを回避する手段を思案しています」

「なるほど。——私は全部上手くいく可能性を信じるわ」

これを隠さずに話そうと決めたのは、最終的にヒロトだった。リスクを隠さず話す事で事前に自分達も懸念していると伝え、後から突かれるかもしれない問題を先に明示しておく目的があった。

隠し事は出来得る限りしない事と、例えリスクがあろうとも引かない意思を示す、一種のけじめだ。

そして隠すべき事は、イヴの最期や当時のヒロトの心情など、言えば身内のトラウマを酷く抉り兼ねない事情。

「自分達から伝えられることは、今回は此処までです。——皆さんのご協力をお願いします」

そうして、動画は締め括られた。

カザミが動画の録画を切る。

ヒロトとマギーを見守っていた三人が声をかけた。

「お疲れ様です。ヒロトさん、マギーさん」

「お疲れさん。二人共」

「伝えるべきことは伝えられただろう。良かったと思うぞ」

三人が揃って労う中、ヒロトは椅子に深々と座りこんで緊張感から解放された。

マギーも多少は疲れたようで、背筋を伸ばしている。

カザミはそんな二人の様子に、当然だよなー、と笑いながら動画の出来を確認して、満足げに頷いた。

「動画、なかなか良いんじゃないかな。アップロードしとくぜ。皆後

で動画のURL送るから、当てになる人には送っておけよ」

動画の説明欄に書くべき内容は既に用意してある。

カザミの合図にヒロトは思わず一旦制止しようと思ってしまうが、首を振ってその弱気な意思をか搔き消した。

「ああ、やってくれ」

「おうよ」

カザミは慣れた様子でウィンドウを操作し、動画のアップロードを完了させた。

「まあ、動画上げたって言っても数秒で真つ当な反応は来ねえしな。暫く待つしかねえな」

「確かに。いい反応が来るといいですけど、待つしかありませんからね」

パルは少し不安そうにカザミの意見に賛同する。

マギーはそんな男三人の様子を見ながら、クスリと笑みを零した。

「ガンダムXが好きなのは良い反応くれそうねえ」

絞られた条件にカザミは一瞬ポカンとするものの、マギーの意図を察してニヤリと笑う。

「プラトニックなラブって奴が好き人多そうだよな、ガンダムXのファンは」

「ガロード・ランとティファ・アデイルの関係性、いいですよ。僕もちよつと懂れます」

「……」

『機動新世紀ガンダムX』は、ストーリー全体を通して典型的なボーイ・ミーツ・ガールと成長を描いた作品であり、その主人公とヒロインであるガロードとティファの関係は、数多くのガンダムシリーズにおいても指折りの名カップルとして広く知られている。

そういった作風を好む層には、確かにヒロトのイヴへの想いは少なからず胸を打ちそうだ。

遠回しに揶揄われたと理解したヒロトは、皆から顔を逸らして沈黙を貫いた。その表情は想像するまでもない。

「いい大人が多いのよな、あの作品。大体のキャラの年齢設定凄く若

いのが違和感あるようでいて、戦後の恐ろしさが垣間見えるというか」

「ニュータイプの解釈も宇宙世紀と違ってて面白いですよね」

「ほう、話せることがいろいろとあるのだな」

思わずカザミとパルがガンダムマニアアトクに突入する中、メイが興味を示して参入していく。

賑やかになってきた現状に、注目の眼が逸れたとヒロトが安堵して視線を戻すと、綺麗なくらいにこやかな表情でマギーが覗き込んできた。

「我が道を走るのも、時には大事よ」

ウフフ、と楽しそうに笑いながらマギーは立ち上がり、ファツションモデル宛らの歩みで飲み物を取りに向かう。

「我が道を走る、か」

今はまだ駆け出したばかりで道は長く続いている。

それでも、進んでいく。その決意を反芻したヒロトは、取り敢えずは揶揄されない様にと、仲間達のマニアアトクに参入していった。

意志の連鎖

「調子良くねえなあー……」

ELダイバーイヴの情報収集・復活援助を求める動画をアップロードした日の夜の事。カザミは自室で寝ころびながら自身の動画のコメント欄を読んで唸っていた。

カザミが見る限り、状況は芳しくない。

「こいつら好き勝手言いやがって……!」

コメント欄を見返して思わず舌打ちしてしまう。少なからず好感触なコメントはあったが、大半が酷い物だ。

『妄想乙』

『このチャンネルとは動画の趣旨ずれてんだろ』

『見たけど復活手段カルトじみててワロタ、創作と現実の区別くらいつけろwwww』

『こんななんでもいいからバトル動画あくしろよ』

『質、落ちましたね(笑)』

『ELダイバーにガチ恋とかwwwwキモwwww』

『妄想男に付き合うマギーさんも大変ですね』

『0人目のELダイバー(激寒(激寒))』

『要は死んだんだろw』

コメント欄の流れは一番最初に騒ぎ始めた数人が特に重要だとカザミは考えている。今回は巡り合わせが悪かったようで、アンチ側のダイバーに勢いが付いてしまったようだ。

ここ最近バトル動画を上げる暇もなく、更新も滞っていた。視聴者の期待を裏切ったと言われれば、流石に全否定はできない。多少の文句コメントはあっても我慢するしかないだろう。

それでも、此処まで酷いコメントを残される謂れはない。

「人が真剣に話してる事すらわかんねえのかよ!」

ふざけている様な動画にはしていない。なるべく分かり易い様に話せるところを話した。ヒロトも真摯に情報を求め、助けを求めていた。

携帯を放り出し、畳を拳で叩いたカザミの気は晴れなかった。

「リンクもコメント残してくれてるのに……」

BUILD DIVERSのリンクは動画をアップロードして1時間以内にはヒロトの発言が真実であると認め、全面的に支援するとの旨が書かれたコメントを残してくれていた。

ELダイバーを一番初めに助けた人からの応援コメントが在る状況でこの反応、アンチは動画や他のコメントをちゃんと見ているのだろうか？とカザミは疑わざるを得ない。

今日動画をアップロードし、そう時間が経たないうちに再生数はなかなかの数字を出ている、広く発信するという意味では調子は一応良いくらいではあるが。

「あーもー！凹んでもしょうがねえよなあ！」

カザミはやる事はまだいくらでもある、と考え直して己を奮起させる。

風呂でも入ってさっぱりするか、と思ったカザミはのっそりと身体を起こして携帯を拾いなおす。

「メッセージ？おお!!キャプテン・ジオンからじゃねえか!!」

魂の師匠からのメッセージに思わずカザミは大声を出してしまう。

あの人ならば話を聞いてくれるかもしれない、とメッセージを送った甲斐があった。

急いで確認するも、内容はごく短い物だった。

「今は耐えよ。……って、あれ？……こんだけか？」

何の話だろうか、と一瞬考えるが、きつとコメント欄の荒れ具合をキャプテン・ジオンも憂慮してくれているのだらうと思いつた。

合点のいったカザミは短くも熱い激励にくうーつと感嘆の声を上げる。

「熱い激励感謝するぜ!!!キャプテン・ジオン!!!」

そのあまりの音量に階下の家族から『うるせえ!』と怒声が飛んできたのはその直後の事であった。



そして次の日も時間を示し合わせて、4人はミッションカウンター

に集合していた。

挨拶もそこそこに、お互いの状況報告を行う。最初はカザミから。「じゃあ、俺から。動画の再生数は順調に伸びてるぜ、まあ、コメントは正直嫌な流れだが——」

皆逐次動画の状態は確認している筈なので、敢えて隠す事もせずカザミは思うところを述べた。

三人も同じ感覚を覚えており、多少落胆の雰囲気は放っていた。

空気が暗くなると予想していたカザミは、その流れを断ち切るかの様に明るい話題へと話を持っていく。

「だが！あのキャプテン・ジオンから激励のメッセージが昨日の夜届いた！届く人には確実に届いているぜ！以上！」

ヒロトはその言葉に嬉しそうに頷き、後を繋げる。

「俺からは、昨日の解散間際にも話したけど、リクから返事が来たこと。夜にAVALONのカルナさんからもいい返事を貰っている。他にもロータス卿や知らない人から、まあ数は少ないけど。あとモビルドールもコイイチさんに色々話を聞きながら設計している段階だ」「そうか。お前の腕なら問題ないとは分かってはいたが、実際に順調だと聞けたのは良かった」

「……ああ、このまま進めていく。情報は駄目だった、報告はそれだけ」

モビルドールの進捗を聞いたメイから微笑みが零れる。

初対面の頃と比べると遥かに感情表現が豊かになっているメイに、三人は感心すると同時に彼女と同じく微笑みを浮かべる。

続いてパルが手を上げた。

「僕にも、良いメッセージが来てます。と言うより、物凄く乗り気で既に復活させる方法に興味を持ってくれてるみたいなんですよね。……いろいろまだ詰めた方がいいとは僕も思うんですけど、触りだけ伝えていいですか？」

「ふーん？まあ、そこまで勢いある人なら、話してもいいんじゃない？」
「俺もいいと思う」

パルの言う良いメッセージというのは無論兄からの物だった。

イヴ本人に興味を示したというよりも、『ヒロトからイヴへの強い愛を感じた』と、相変わらずだが冗らしい独特な感性からの応援ではあったが、何にせよ心強い応援であることに変わりはない。

三人の同意を確認してパルは頷き、そのまま別の話題へと繋げていく。

「あ、あと、クアドルンさんの翼の様子、そろそろ見に行きたいなあつて」

控えめな提案だが、他の三人も気にしている内容ではあった。

「確かに、窮屈になってるかもしれないしな」

「以前はまだ余裕があるとは言っていたが、そろそろ外すべきかもしれないな」

「私も同意見だ、パル他に何かあるか？」

「いえ、僕からは以上です！」

パルは三人と意見が一緒だったことに喜び、尻尾がその感情を表現している。

最期はメイの報告で締め括られる。

「最後は私だな。……ELダイバーの大半から既に返事が来た。概ね色よい返事をもらっている。ELダイバーにも勿論其々の個性があるからな。全員から、とはいかなかったが」

「……他人事じゃねえ、つてELダイバーの中には思う奴も居るだろうしな」

「ああ。返事の中にはそういった考えのELダイバーも居た」

保護されていない状態で消滅してしまえばどうなるか、というのはELダイバーからしてみれば背筋が凍るような話であるが、同時にイヴ姉さんの復活が上手くいけば、一転して福音を齎す話になる。

賛同しておいて損はない、そう考えるELダイバーが大多数であった。

カザミの意見にメイは頷き、話を続ける。

「報告は以上で、次は提案だ。昨日皆と別れた後にママから言われたんだが——」

「お！妄想ダイバース！」

「ああん？誰だてめえ、おい待てこらー！」

急に挟み込まれた言葉に四人で反応するが、声を上げたと思わしきダイバーはさっさとその場を立ち去ってしまった。

カザミは思わず追いかけてしようとするが、ヒロトとメイが同時に腕を掴んで止める。

「相手にするな」

「ヒロトの言う通りだな。あの手の輩はコメント欄にもいただろう」

「つけ！わかったよ」

パルはハラハラと事の成り行きを見守っていたが、カザミが落ち着いたのを見て安堵する。

メイは何事もなかったように話を続ける。

「ママから言われたのは、皆で息抜きした方がいい、との提案だ」

マギーからのアドバイスに、カザミも頷いた。

「最近頭使ってばかりだったしな、賛成」

今のでイライラしたし、とは態々言わなかった。

パルも思わずため息を吐く。

「エルドラに行きましょうか、翼の様子も見れますし、息抜きになりますから」

「私もパルと同意見だ。それで決まりでいいか？」

「ああ、行こう」

ヒロトも賛同して、エルドラに行くことになった四人はあの路地裏へと向かい始めた。

「そういや、マサキは何だつて？」

「……皆の意思を束ね、大いなるうねりを共に乗りこなそう。今は耐え忍ぶ時期だが、熊の冬眠期間に比べれば遥かに短い筈だ、ってメツセージが返ってきた」

「いや良く分かんねえよ！しかもまた熊か！……まあ、とにかく協力してくれるって事か」



4人が路地裏に向かい、少し話しながら待っていると黒い背景のウインドウが出現する。

「ふふっ、今思ったんですけどこの黒いだけの画面、クアドルンさんの身体のどこかなんですかね？」

「ああ、なるほど。そうかもしれないな」

フレデイが呼んでくれる時は顔がはつきり見えるが、クアドルンに呼んでもらうと毎度なぜか真つ黒な画面になってしまう。自分の思い付きで笑うパルを見ながら、ヒロトからも笑みが零れた。

ウインドウにカザミが触れると転送が始まり、4人はエルドラへと辿り着く。

——水上都市セグリ。当時のエルドラの文化を象徴していたであろう、かつての都市が存在した場所にミラーグの山は降りていた。

「毎回、お休みのところすみません」

転送されてすぐにパルがクアドルンにペコリと頭を下げた。

クアドルンはまるで気にしない様子で楽な姿勢に戻り、深みのある落ち着いた声で4人を迎え入れた。

「大した手間ではない。……存分に羽を伸ばすと良い」

「ありがとうございます！」

ヒロト達四人の呼び出し手がフレデイとクアドルンの二人に分かれたのは、アルスとの決戦を終えて暫く経った後の事だった。

かつてセグリが在った場所、今はミラーグの山がある場所からフレデイの故郷までは距離がある。ガンプラ程の便利な移動手段もない中で、エルドラに行く度にフレデイに迎えて貰うのはヒロト達としても心苦しくあった。祭壇を自分の住処としているクアドルンが呼び手として名乗りを上げてくれたおかげで、4人はふと気分が赴いた時にもエルドラに行くことが出来るようになったのは2か月程前になる。

祭壇の周囲を一瞥して、クアドルンは少し残念そうに確認してくる。

「今日もマサキは居ないのだな」

「マサキさんは、まだ本調子では無いですから。でも、彼ならすぐ調子を取り戻してまたここに来ると思っています」

「時間はある、焦るなど伝えておいてくれ」

「はい、必ず」

クアドルンの温かい言葉をヒロトは嬉しく感じた。

パルはクアドルンの話が終わったタイミングで、ここに来た目的の一つを話し始める。

「翼の調子はどうでしょうか？」

「悪くない」

「窮屈になつてはいませんか？」

「問題ない」

「確認してもいいですか？」

「……好きにしろ」

ぶつきらぼうに答えたクアドルンはそれきり目を閉じて動かなくなつてしまった。

種族や外見の話を抜きにすれば、まるつきり偏屈な爺さんと健気な孫の絵だな、とカザミは思った。

パルはそんな感想を抱かれている事に気が付かず、他の三人に向かって声をかける。

「確認は僕だけでも出来ますから、皆さんは先に村に向かつてください」

パルの言葉には気遣いもあるが、自分がやりたいという彼の意思も同時に自然と見えた。

三人はパルの意思を汲んで頷く。

「じゃあ、先に行つてるな」

「ではまた近いうちに来ます、クアドルンさん。パル、後は頼む」
「待っているぞ」

パルを残して三人はガンプラに乗り込み、フレデイの故郷へと足を進めた。



「みなさーん！」

ガンプラで移動して村の中に着地させると、フレデイがまつしぐらに駆け寄ってヒロト達を出迎えた。

「よう、フレディ。皆の調子はどうか？」

「変わりありません！村の皆も元気です！」

嬉しさを表現するフレディの尻尾は、パルよりも感情表現が豊かであった。

相変わらず元気一杯の様子に、三人とも現実の実家に帰ったかの様な安心感を覚える。

「今日はパルさんが居ないんですね」

「ああ、いや、来てはいるんだ。ただ翼のメンテナンスがあるから、それが済んだら来る」

「なるほど、そうなんですな！」

ヒナタがエルドラに来る事は稀だが、普段は4人揃って来る事が当たり前と認識しているフレディにとっては当然の質問であった。ヒロトの答えに納得したフレディは、4人揃っている事に嬉しそうに笑う。

「うちに行きましょう！歓迎しますよ！」

「お邪魔させてもらおうとするか」

カザミはフレディの誘いに頷き、2人を促してからついて行く。

先導するフレディはフンフンと鼻歌を口遊み、独特なリズムに合わせて彼の尻尾が左右に揺れる。

「カザミさんが来るとマイヤ姉さんが一日くらい怒らなくなつてすぐ助かります！あ、もちろん皆さんが来てくれただけで僕はすっごくうれしいですよ！」

「——へえ」

フレディのご機嫌の理由が明かされると、鼻歌のテンポが更に上がる。

一方カザミの方は気が気ではなくなった、ヒロトの方から意味深な視線を感じたからだ。

「んだよ」

「何も言っていないじゃないか」

「へえ、とか言ったじゃねえか」

カザミが食って掛かる様子に、ヒロトは表情を崩さないまま淡々と

答える。

「感心しただけだろ」

「何にだよ」

居心地悪そうなカザミに、ヒロトはつい笑みを零しかけるが、持ち前の理性でなんとか押し留める。

「言っつていいのかわ？」

「……勘弁してください」

「何か言う事があるんじゃないのかわ？」

「これからは控えます、はい」

「よし」

小声でいろいろ言葉を抜かしてカザミとヒロトは会話したが、二人はこれ以上なく通じ合っていた。

メイはそんな男子二人の会話についていけず、首を傾げると。

「フレディ、マイヤとカザミについてくわ——」

「だから蒸し返すなって言っつてんだろうが！」

「わあ!?! 皆さんどうかしたんですか!?!」

「いや、特に何も無いよ」

◆◆

ヒロト達がエルドラに向かい、息抜きを始めた頃。

BUILD DIVERSのフォーネスストにて、コーイチはカザミがアップロードしたヒロトの動画のコメント欄を確認し、溜息を吐いていた。

「僕たちだけじゃダメか……」

さてどうしようか、とコーイチは思案する。

事前にモビルドール・イヴの制作依頼が来た時、E.Lダイバー本人に会わせず、画像のみを送ってきたことを不思議には感じていた。

彼女の隣に写っていた今より少し幼い顔立ちのヒロトを見て、その時何か深い事情があるのだろうと詮索はしなかった。少し時間が経ってヒロト本人からモビルドール制作に関する質問を受け、続いて件の動画を知り、——全ては繋がった。

『ツカサとヒロトを絶対に会わせてはならない』という、メイからの

一文が送られて来た時は釈然としなかったが、今ではその意味が良く分かった。確かに徹底した対処が必要だろう。

カザミの動画はどうやら妙に粘着質なドライバーに目をつけられている様だ。

肯定的に捉えるコメントに一々反対意見をぶつけている辺り、随分と手間の混んだ、贅沢な時間の使い方であった。

しかもそれが、一人ではなく複数人。配信動画が一億再生を突破している事でも有名なカザミの知名度が、今回に限ってはデメリットとして強く出たようだ。

『その情熱をもっと有意義に使えば良いのに』と内心で呆れ果てるが、それを聞くような相手とも思えない。そもそも、そんな相手であるならば、こんな贅沢な時間の使い方はしていない筈だ。

ただ、ヒロト達の想いは確かに伝わってくる。今回の件は何としても上手く行って欲しいと思う位には。

考えに耽っていると、急に扉が大きな音と共に開け放たれる。突然の事にコーイチは驚いて、椅子から転げ落ちそうになった。

入ってきたのは見るからに興奮状態のモモと、彼女とは対照的に落ち着いた様子のアヤメだ。

「コーイチさん！」

「びつくりするなあ、もうちよつと静かに開けてよ、モモチちゃん」

「そんな事はどうでもいいの！見てよこれ！」

空間上に表示されたディスプレイを、モモはコーイチの顔面に叩き付ける勢いで押し付ける。

「近いって。……ああ、これか。今僕も見てたよ」

押し付けられたディスプレイに表示されているのは、ちょうどコーイチが見ていた動画のコメント欄だった。

「どうにかしてくださいー！」

「いやどうにかって言われても、この手の人は言っても聞かないよ、でも一応——」

手段は考えている最中、とコーイチは繋げようとするが、モモの表情を見て言葉を続ける事は出来なかった。

「こんなひどい事言うなんて！この人達どうかしてる！絶対おかしいんだから！」

潤んだモモの瞳から、ポロポロと涙が零れ落ちる。

コイイチがディスプレイをよく見てみると、その中心点は『要是死んだらw』と心のない一言が書かれたコメントだった。

「———そっか、サラちゃんと重ねちゃったんだね」

「うん……」

ヒロトから動画に関するメッセージがリクに送られた直後、BUI LD DIVERSはメンバー召集の上でリクから全員に説明があった。ヒロト達の現状について何が起こっていて、本命がどこにあるのかという内容だった。リクはその説明の際に『死んだ』という言葉は一切使っていない。明朗快活な彼にしては歯切れが悪く、『ヒロトとイヴさんは会う事が出来ない状況にある』と、何とか言葉を紡ぎ出している程であった。当時のリクの心境としては、ヒロトとイヴの現状に自分とサラを重ねてしまい、「死」や「消滅」などの表現に強い抵抗感があったのだろう。

心無い言葉は、人の心を酷く傷つける。

「うろうろうう」

泣きじやくるモモを、アヤメは宥めながら抱きしめる。

「大丈夫、きつと上手くいくわ」

アヤメはモモを慰めながら、彼女の頭を優しく撫でている。アヤメとしても複雑な感情を抱いているのは同様で、それでも自分まで取り乱す訳にはいかないと気丈に振舞っているが、不意に不安げな眼差しでコイイチに縋る。

そんな二人の様子を見て拳を握り締めるコイイチ。仮想空間だと言うのに、その掌から酷く痛みを感じた。

「———ごめん、ちよつと出てくるね」

コイイチはリクの様に積極的に行動を起こすタイプではない。冷静な思考と広い視野から物事を把握した上で最適な行動を選ぶ慎重派である。今回の件についても、冷静な彼らしく『時間を空けて様子を見る』という考えがあったのだが、今ではその気がさっぱりなく

なった。

ヒロト達も同じだ。動画の様子から察するに、彼らは自分達以上に辛い思いをしているに違いない。

やれる事はやるべきだ、彼等と同じ様に。

それに、——目の前の2人が辛い思いをしている現状に、コーイチは黙っている事が出来そうになかった。



ヒロト達がエルドラに向かい息抜きを始めた、ほぼ同時刻。

AVALONの談話室のソファに座っているカルナにエミリアが近寄ってきた。

「カルナ、送ってくれた動画、今見たわ。私も是非手伝いたいとは思うけど……どうしたのそんな顔して？」

「——エミリアさん。俺、今気づいたんですけど。……いやもつと早く気が付けよって話なんですけど」

深刻な表情を浮かべるカルナに対しエミリアは何事かと心配する。

カルナは言いたい事が纏まらないのか少し黙ったが、やがて重苦しそうに口を開いた。

「第一次有志連合戦の後に、——このイヴって子は消えたんですよね？」

「そうね。そう言っていた様だけど？」

「でもあいつ。——ヒロト、第二次有志連合戦に出てるんっすよ」

カルナに言われた言葉により、そういえばそうだったとエミリアは記憶を探っと思いつ出した。あの頃はヒロトのログイン頻度が唐突に下がっていたので、いつの間にか居ないと思いつ込んでいたらしい。

その辺りまで彼女は冷静に思い出しているだけだったが、その記憶が今カルナの言わんとするところ克明に告げた。

「——ああ!?まさかつ、何て事……!」

「エミリアさん、もつと俺らに出来る事思いつきませんか?こんなんじやヒロトに合わせる顔がない……!」

第二次有志連合戦のあの時、カルナは事情が分からないなりに親身に接していたつもりだったが、結局はヒロトに追い打ちを掛けていた

だけかもしれないと気づくに至った。

エミリアもAVALONのあの時の立場そのものが、ヒロトを追いつめていた可能性に気が付いた。

悪意は誰にもなかったが、だからと言ってそうだったのかと、それだけで済ませる訳にはいかない。例えヒロトに自分達を責める意思がなくても、これでは仲間である彼に申し訳が立たない。そんな2人が覚えた葛藤は全く同じだった。

「2人とも、どうしたんだ？」

2人が閉口してしまいがらもどうするかと思案している最中、G BNのチャンピオンでありAVALONの隊長、クジヨウ・キヨウヤが談話室に入ってきた。

キヨウヤは副官の2人が悲痛な面持ちで考え込んでいる様子を察して、彼等が放つ雰囲気からすぐに声をかけた。2人を良く知っている彼をして、明らかに尋常な様子ではなかったからだ。

「隊長！ヒ——」

「どうした？……本当に何があつたんだ？」

ヒロトが、何と言えればいいんだろうか。カルナは言葉に詰まった。彼にとってキヨウヤは頼りがいのある隊長だと心の底から思っている。第二次有志連合戦の折りもキヨウヤの為に戦っていた。

しかし今から話す事は、言い方を間違えてしまえばキヨウヤとヒロトの両者を同時に傷つけかねない。

普段ならば容赦なく意見を述べる2人の副官が、珍しく言葉に詰まっている様子を見ていて、キヨウヤは徒ならぬ事態だと見解する。エミリアさえも未だに言い淀んでいる辺り、事の深刻さは更に増していると確信するに至った。

「二人とも、とりあえず僕の部屋で話を——」

聞こうか、と勧めようとした時、談話室の扉が大きな音を立てて開かれた。

思わず3人が視線を向けると、普段から門番の役割に徹しているフォースメンバーが、何かから逃げて来たかのように青ざめた表情で駆け込んできた。

キョウヤが何事かと訊ねる前に、フォースマンバーの方が声を張り上げる。

「隊長！BUILD DIVERSのコーイチって人が隊長に会わせろって！」

「コーイチ、BUILD DIVERSの？構わないが、何も直接呼びに来ないでいいんだぞ」

「いやそれが、怖い位に凄い剣幕で！てかもう入って来てるんですよ！」

何？とキョウヤが驚いて聞き返しそうになった時だった、開け放たれた談話室に件のコーイチが足を踏み入れる。

幾ら何でも不躰が過ぎると、眉を顰めたエミリアが糾弾しようとしたが、コーイチを見た瞬間に口を噤んでしまう。

何故ならば、

「突然の来訪失礼致します。キョウヤさんに火急のお話がありました、無礼を承知の上で押し入らせて頂きましたが、今お時間を宜しいでしょうか？——出来れば、其方のお二人にも同席して頂けると非常に有り難いです」

「……すぐ部屋に案内しよう」

感情を感じさせない程に冷徹な表情で眼鏡を直すコーイチの眼光が、あのキョウヤですら気圧される程の圧と化して彼を射殺す程であったから。

言葉を重ねて

ヒロトたち三人がフレディに連れられ、彼の自宅へと向かう際の事。

村人二人が悩み事を話し合っていた。

「まだ来ないな。……やっぱり、なんかあったのかな」

「どっかで立ち往生してるのかも知れんな」

「どうやら来るべき物が人が届かない事を心配している様だった。

ヒロト達が思わず歩みを止めると、メイがすぐに声を掛けに行つた。

「何かあったのか？」

「ん？おお、あんた達か。いやどうってことはないんだが」

話し込んでた一人がポリポリと頭を掻くと、もう一人の方がムツとして声を上げる。

「どうってことはあるだろ、あれが届いた方がいいんだし」

「……お前そんな事言ったら気を使ってくれて言ってるようなもんだろうが」

「そんなつもりはないけどよ、でもこっちに来るまでの道中で止まっていたら助けようがないだろ。今乗り物が出払ってて確認にも行けやしないんだぞ」

話の流れから凡その事情が分かったヒロトたち三人は視線を合わせる。

「助けるか？という事ではなく誰が行く？という一瞬のアイコンタクトだった。

諸々対応力のある自分が行くべきだとヒロトが名乗り出ようとしたが、メイに手で制止される。

「私が行こう、その物資が通るルートは決まっているか？」

「いやすまねえな、厚かましくて」

「いや、いい。大した手間ではない」

片方は申し訳なさそうに、ほら見た事かともう一人を小突いたがもう一人の方も別に間違っちゃいないだろ、と小突き返す。

「地図見せながら話す、こっちにきてくれるか。実際そんな大きい荷物でもないし、むしろ運んでる奴が心配なくらいだ」

「わかった。二人は先に行ってくれ、片付けて戻ってくる」

「ああ、頼む、メイ。ありがとう」

「頑張ってくださいーい！」

「待つてるぜー」

メイはひらひらと軽く手を振って、村人たちについて行った。

彼女に気を使われたな、とヒロトは感じはしたがその点について話している余裕は村人にはなさそうなので素直に見送る他にない。

「メイさんは優しい人ですよー！いつつも手際が良くてとってもカッコいいですー！」

フレディはメイの素早い対応を見ながら、目をキラキラさせ見送っていた。

カザミはそんな興奮するフレディに笑いかける。

「確かに、あいつの落ち着きっぷりはヒロトと張るよな」

「何だ、急に？」

カザミに間接的に褒められたらしいヒロトがくすぐったさを感じていると、彼がガッと肩を組んでくる。

「誉め言葉は素直に受け取っとけっての！」

「……実はさっきの件でゴマ搦ってるとか」

「そんな素直じゃねえ奴はこうしまーす！」

「痛い痛い」

カザミはヒロトの穿った言葉に半笑いしながら、肩を組んでる事を利用してそのままヒロトの頭を締め上げる。

かなりの力で頭を締め付けられたヒロトはカザミの腕をタップして早々ギブアップした。

フレディもそんな二人の様子に楽しそうに笑い、カザミの意見を肯定する。

「ヒロトさんは頼れる司令塔ですよー！」

「……そうか。ありがとうフレディ」

表裏のないフレディに褒められてしまったのは、自分に対して厳しい

評価を下しがちなヒロトも受け止めざる得ない。

「我がフレディに言われたら素直に聞くしかねえよな」

「えへへ」

「逆にフレディに嫌いって言われたらすげえ凹むだろうけど」

「ええ!? そんなこと言いませんよ!!」

フレディがワタワタする様子に二人が笑っている時、小さい三つの影が近寄ってきた。

アシャ、トワナ、フルンの村のちびっこ三人組だ。彼らは飛ぶように走ってきてカザミを取り囲む。

「カザミが居るー!」

「カザミだー!」

「カザミちよつとこつちきてー!」

「……はいはい、分かったから引つ張るなつて」

三人に手を掴まれて引つ張られ、カザミは笑いながら対応する。

ヒロトとフレディが手を振ると、二人に見送られる形で子供たちについて行った。

「あはは……。忙しい村ですいません」

「いや、いいんだ。そもそも今日は息抜きが目的だから、遅かれ早かれ皆好きに動いてた」

「そうなんですな……では、ヒロトさんは何かしたい事ありますか? このまま家に来るのもいいですけど!」

「したい事? そうだなあ」

ヒロトは顎に手を当てると、なんとなく空を見上げた。

今日のエルドラは空が高く、気持ちのいい風が吹いている。

「高い所」

「高い所?」

ヒロトはここに来た当初にもやった事を思い出しながら、話す。

「この村の風景が一望できるところに行きたい」

「なるほどー! うーん、ではあの上に行きましょう!」

フレディが村を囲んでいる壁を指す。

フレディの提案にヒロトはコアガンダムで飛んだ方が早いな、と

さつと結論出す。それに歩きでも登れる手段はあるのだろうが、生粋の山の民に比べヒロトは体力がない。フレデイに疲れ切ったみつももない姿を見せそうで、ちよつと複雑な気分になったという事も加味している。

「ここまで来たのに悪いけど、コアガンダムのところに戻ろうか。飛んだ方が速そうだな」

「はいー」

フレデイの方はそんなヒロトの思惑に気づくことはなく、ちよつとでもガンプラに乗れることを喜んでいようだった。

二人は話しながらコアガンダムの元に戻る、フレデイは早足で嬉しそうに前を進んでいった。

フレデイをコアガンダムの手に載せ、ちよつと余計に飛んでから崖の上に着陸する。

「空を飛ぶって気持ちいいですよーね！」

「……ん？うん、そうだな」

ヒロトはフレデイの感想を聞いたとき、自分は誰かのガンプラの手の上で運んでもらった経験がない事に気が付いた。

気が付きはしたが、誰かを乗せて運ぶというのは色々気を使う事は有るにしろ心地いい事に変わりは無い。ヒロトにとってはそれでは無かった。

ヒロトは崖のふちに座って、村の方を眺めた。当然だが高い建物は無い。

こうやって俯瞰してみると、何か家を作っているような場所がある事に気が付く。

「あの辺りにはまた家を作るのか？」

「あーあそこは最近夫婦になった二人が住むんです！皆で家作ってるんですよー！」

「そうか、良い事だな」

ヒロトが聞くと、フレデイが嬉しそうに教えてくれる。

「農場、こう見ると結構いろんな場所にあるんだな」

「はいー！食べ物は大事です！」

「そうだな。……あれは水場か、井戸もあるんだな」

「そうです！でも、あの井戸調子悪くて。……近々調べる計画を皆で立ててます！」

「あれは——」

ヒロトが目につくところをあれこれと聞くと、フレディは喜んで一言一言返してくれた。

一通りヒロトの目についた場所の説明が終わると、フレディはヒロトの方をじつとのぞき込んでいた。

「どうした？」

「高い所がお好きなのかなあって思ったんですけど、ヒロトさんは風景を見るのが好きなんですわね！」

「……そうだな、好きだ」

フレディの言葉に、ヒロトはイヴと過ごしていた時の事を自然に思い出した。

あれはなんだろうか、これはなんだろうか。

ヒロトが聞いて、イヴが答える。イヴが聞いてヒロトが答える。

見たい場所より少し高い所や一望できる場所で、そうやって二人でよく話していた。

遠目から見て予想を立てているだけなので、実際に近くに行ってみるとまるで見当外れな答えだった時が少なからずあった。そうやって、遊んで笑っていた。

もうずいぶん前の話になるな、とヒロトは思わず懐かしんでしまう。

ヒロトが村を見ている様で見ていない時、フレディは急に何を考えたのかポツリと呟いた。

「誰かを好きになるってどんな気持ちなんでしょうね……」

「えっ!？」

「ええっ!？」

ヒロトが驚いて声を上げると、まさか彼がそのような声を上げると思っていなかったフレディの方も目を真ん丸にして驚いた。

隣で鏡に映った自分の様に驚いているフレディを見て、自分の話

じゃないなどヒロトはすぐに気が付いた。ヒロトは最近イヴに関する思いを見破られる事がたまにある物だからつい過剰反応してしまった。

「いや、何でもないんだ。どうしたんだ、急に」

「いえ、あの、その」

ヒロトは必死に取り繕って、フレディに今の発言の意図を問う。

フレディは少し落ち着かなさそうにしたが、思い切って全部言う事に決めたようだ。

「さつき新しい家を作ってるって話がありましたけど、そこに住む予定の二人を見て何かこう」

「うん」

「僕は家族の皆や、村の皆の事大好きで、ヒロトさん達の事も勿論好きですけど、そういう気持ちとは別な気がして。前にマイヤ姉さんに聞いたときは特別な好きなんだから違って当たり前だって答えてましたけど、それもなんだか分かるようで、分かんなくて」

「……そうか」

「というか、マイヤ姉さんちゃんと答えてくれてはいないんです！なんか適当っていうか！」

ヒロトはフレディ越しにマイヤの様子を察し、何ともコメントしにくい気持ちになった。

「ま、まあ、フレディの言う事は何となくわかるよ」

「分かってくれますか！」

フレディはヒロトに自分の悩みを肯定してもらって、ちよつと嬉しそうに尻尾を振る。

そして彼はハツとすると

「……これ恥ずかしい質問だったりします？姉さんが答えてくれないのは、そういう事だから？」

「うーん。まああんまり聞かれたくないことかもしれない」

「やっぱりー！じゃあ、謝らないと！」

「いや、謝るのもやめた方がいいかもしれない」

多分余計拗れる、ヒロトはとっさに思った。そしてその手の質問さ

れた時の自分やカザミの様子も含めて親身に伝える。

自身に非があれば素直にとりあえず謝る性格のフレディはどつちつかずの答えにワタワタと反応した。

「えええ!? ならどうしたらいいんですか!？」

「あえてそれ以上その話題に触れないって選択肢もあるんだ、謝るのが正解とは限らない」

ヒロトの答えにフレディはあまり納得できないでいたが、彼がそういうならと頷き、少し経つと自分なりに纏める事が出来た様だった。

「人との関わり方って難しいですね」

「……フレディは賢いなあ」

自分がフレディと同じ年だった時にここまで聴かった気がまるでしないヒロトは、心からフレディを褒めた。

褒められたことにフレディはめっっぽう上機嫌になると

「ヒロトさんは、特別の好きになる気持ちって分かりますか?」

「え!？」

この話は終了した気でいたヒロトはまだ終わってなかったことにまた声を上げて驚いた。

フレディはそんな彼の様子に気まずそうになると

「ごめんなさい! ヒロトさんはマイヤ姉さんとは違うから、答えてくれるかもって思ったんです」

「……ああ、なるほど」

「答えたくない質問をしたならごめんなさい……」

フレディはしょんぼりと肩を落とし、項垂れてしまった。

そんな彼の様子を見て、自分が恥ずかしいだけの気持ちで考えを伝えない事にヒロトは多少罪悪感を感じてきた。

ため息をついて、自分の気持ちを言葉にする努力をしてみる。

「どうだろう、特別な好き、か。考えるから、少し待てる?」

「はいっ!」

やはり誰かから一度は真面目な意見を聞きたかったのだろう、フレディはすごく嬉しそうにヒロトの言葉を待っている。

イヴへの気持ちは色々ある、感謝と後悔、記憶も色々ある、楽しい

事悲しい事。

ヒロトはふと、また空を見る、今日はやっぱりいい天気だ。

「空模様みたいなものかも、特別に好きになると、その人にいろんな感情を抱くんだと思う」

「空模様？ 天気のことですか？」

「うん、うまく言えないけど——」

一拍、言葉を探す暇を入れて

「ほら、今みたいにすごく晴れていたり、曇ったり、雨が降ったり、嵐が来たり、後に虹が掛かったり」

「変わっていくって事ですか？」

「俺にとってはそうだった、ん……、いや、今もそうだ」

「！」

フレディはヒロトの些細な言葉の言いなおしに、彼が今誰かを好きでいる事に気が付いた、その誰かの事も何となくわかった。この質問はやはり聞くべきではなかったかもしれない、思い当たったおかげでヒロトが涙したあの時の様子を思い出して、つい悲しい気持ちが沸きあがってくる。

でも、もっと聞いてみたいとも感じた。もし嫌そうなら、沢山謝ればいい。

「もう少しヒロトさんの考え、嫌じゃなければ、聞いていいですか？」
「構わないさ。そうだな……」

ヒロトは自分の複雑な心境はともかく、フレディには明るい気持ちでいずれ来るだろうこの気持ちに向き合ってほしかった。

「その人と一緒に居れば、楽しい気持ちで入れる時間の方がはるかに長いと思う。二人で色んな物を、見て、聞いて、触って、一緒に居ると世界が広がってもっと色がついて行くような——」

離れた時は、世界は小さく、望みもなく、色まで無くなってしまうけど。それでもあの日々は紛れもなく、ヒロトにとって
「楽しかったな、俺は」

そう言葉に出して、彼は強く実感する。

「俺は本当に——」

イヴが、と言いかけたが飲み込む。

「それが、特別な好きだと、俺は思うよ」

「……すごいんですね」

フレデイは今聞いたことをうまくまとめられない様に、それでも感想を述べた。

そんなフレデイを見て、あまり上手く伝えられなかったんじゃないかとヒロトは思い、むしろ彼の感想の方がよほど分かり易いような気がして少し笑う。

「ああ、ともかくすごい。フレデイなら、きつとなればすぐわかる」

「そうでしょうか?」

「できるさ」

別れて、一度無理に納得して、やっぱり違うって気が付いて、諦めないってようやく少し前に言えたばかり。そんな遠回りしている自分とは違って、きつと。ヒロトは自然とそう思えた。

そんなヒロトの応援に、フレデイはグツと涙をこらえ答える、その応援はフレデイからするとすごく悲しい気持ちになる物だった。またヒロトからヒロト自身に対する想いが見えて、無性に悔しかった。

「ヒロトさんも、できますよ……!」

「……え?」

「だって、ヒロトさんは皆を守ってくれたすごい人じゃないですか! マサキさんを助けて、アルスさんを助けて! ヒロトさんのおかげで変わったって、前にもカザミさん達も言ってたじゃないですか! だから

———」

フレデイは必死でヒロトに言葉を投げかける。

「そんな風に自分が凄くないって! 自分が大したことないって! まるで自分の事を嫌いみたいに言わないでください! 僕ができるとか、そんなの関係ないです! 自分を諦めないでください!」

「……あ」

「僕は色んな人が真剣に、貴方を想って伝えた事を素直に聞けてないヒロトさんは嫌いです!」

興奮し、こらえ切れず涙を流しながら、フレデイはなりふり構わず

最後まで言いたい事を言いきった。

ヒロトもそんな彼の様子と、必死で伝えてくれた言葉に思わず涙が零れた。自分を軽く見る気持ちを見透かされて、それでフレデイが傷ついた事が苦しくてたまらなかつた。

「ごめん、なさい」

「変われますか？」

「……すぐには変わらないだろうけど、努力する」

ヒロトの言葉に、彼の誠実さを感じたフレデイは涙をぬぐわずにこりと笑った。

「そう答えてくれるヒロトさんは好きですよ」

「ああ、ありがとう、フレデイ」

ヒロトが笑顔でフレデイにお礼を言うと、彼は気恥ずかしそうに顔を手で拭った。

「言わないって言ったのに、すぐ嫌いとか言ってしまった。その上なんか偉そうにしちゃいました」

「いや、フレデイはおかしくない。俺の方がどうかしてた」

フレデイはヒロトの返事にムツとする。

「ヒロトさんが悩んでたことは僕にもちゃんと言わってます、なのでそういう言い方も良くないとは思いますが。けど、今日は大目に見てあげます、説教は短い方が伝わるって村のお爺ちゃんも言っていました」

「……ああ、そうかもな。実際痛い刺さった」

「そんな意地悪言っても僕は謝りませんからね！」

フレデイは気丈に胸を張っている、その様子にヒロトも分かっているよと笑った。

ヒロトはフレデイを通して自分を見つめるきっかけを得た。フレデイはヒロトを見て、痛くても触れた方がいい事もあると学んだ。何より、フレデイとヒロトは、また仲良くなることのできた。

他の三人が集まって来たのは、それからほんの少し後の事になる。



「さっきの話二人はどう思った？」

「隊長こそ、どう思ったんですか。たまには自分の意見を先に出して
くださいよ」

「……」

「以前も報告はありましたが、ELダイバーは確実に保護できるよう
ですね。今回は、復活とGBNに対するダメージが無い、もしくはコ
ントロールする事ができれば目標は達成です」

「できると思うかい？」

「あー、隊長が居てくれたら心強いなーとは思いますが」

「隊長がダメっていうなら、仕方ないですねえ」

「……君たちそんな意地悪だったかな？」

「あの時の事思い出して俺思う事があるんっすよ」

「あら、私も一緒な気がするわ。せーの」

「偶にはわがまま言ったらどうなんです？」

「……分かったよ。まったく、困った部下達だなあ」

起こりうる未来

「翼、治りきるまであと少し時間がかかりそうですね」

「そう言っただろう」

クアドルンの治りかけの左翼はパルから見ても疑似翼とはまだ干渉していなかった。

ここまで治るのに時間がかかっていると、やはりアルスをクアドルンが一人で止めるのは無理があつたのだろう。

パルが内心そんな風に感じている事を見透かすかのように、クアドルンは目を開けてパルの方に視線をやった。

「治癒に関して特に焦る必要がなくなった。だから時間に任せているだけだ」

「あ、はい！失礼しました、ごめんなさい！」

翼の治癒に関しては何としても間に合わせていた、とクアドルンは主張を曲げない。

超常の力を持つ竜を自分の縮尺で測ってしまった事に気が付いたパルは焦って謝る。エルドラを守るという使命から来る矜持は並大抵のものではない。

「……この翼も悪くない、前にも言ったがな」

「あ！ありがとうございます！本当に光栄です！」

使命と矜持を帯びながら長い時を生きていたクアドルンは、これでも素直な方なのかもしれない。

パルが現実で接してきた大人の中には、血筋や立場がある事を前提にして考えたとしても悲しくなるほど冷たくなってしまった人が少なからず居た。クアドルンは長く生きながらも温かみを損なっていない、彼の感謝は不器用な物だったがパルにはそれでよかった。

「じゃあ、降りますね。失礼しました」

「……」

クアドルンはパルが彼の身体をよじ登って翼を見に行くときも、今降りようとしている時にもクアドルンはパルから目を離さないようにはしていた。そんな温かみのある仕草はパルにもしっかり伝わっ

ていた。

パルが無事に自分の身体から降りるのを見届けてクアドルンはまた目を閉じてしまった。そしてすぐにパルが動く様子がない事に気が付く。

「……まだ何かあるのか？」

「えっと、ちよつと質問したい事があるんですが」

「何だ？」

クアドルンは目を開けてパルに問いかける。

パルは周囲にある召喚台を見て、ふと思いつく事があつたのだ。

「あの、あんまり話したくない話題かもしれませんが」

「良い、言ってみろ。お前たちには大きな借りがある、答えられることは答えよう」

「はい、では——」

クアドルンの協力的な言葉を得て、パルは踏み出す勇気を得た。

パルが聞きたいのはエルドラの古き民についてだ。

今から行う質問は答えてもらっても、イヴ復活の為に必ずしも役に立つとは限らない。はるか昔に有った戦いに関する話を思い出させてしまうかもしれないのは忍びないが、ヒロトの為仲間の為やれる事をパルはやっておきたかった。

「以前クアドルンさんに初めてお会いした時に話してくださいました、電子生命体になる事を選んだ古き民についてお話を聞きたいんです」

「……？私が知る限りで話す事自体は構わない。しかし、なぜそんな事に興味を抱く？」

クアドルンが疑問に思うのは当然の事だ、パルもできるだけ分かり易く答えようと言葉を選ぶ。

パル自身はヒロトの過去を自己判断で全部話す気になれなかったが、掻い摘んで話す必要はあるだろうと判断する。

「ヒロトさんが、その古き民に会ってるかもしれないんです」

「何だ？」

パルの思いがけない言葉にクアドルンも流石に驚き、目を見開いた。

「今からお話しする事は僕たちの推測が混じっています、でも状況から見るにそうとしか考えられない気がするんです」

ここからパルが話した内容は自分達が普段過ごしている空間が電脳空間であること、その中でヒロトが出会ったイヴの存在、その消滅の間にイヴが発したという星の導きという単語、そして今自分達が何を目指して行動しているかと言う事。

どれもここ数日で皆で一丸となり考えて来たことだけあって説明自体は淀みがなく、その上クアドルンもともかく全てを聞く姿勢をとってくれた、そうした気遣いも相まってかなり手早く話す事が出来た。

パルが説明を終えた後、クアドルンはしばらく何も言わずに情報を咀嚼していたが、数分で飲み込んで見せた。

「つまり、お前が聞きたいのはそのイヴという娘を再構築するための手段もしくは手助けになる事か？」

「はい！仰る通りです！ただ、どちらかというお手助けになるような事が知りたいと思つて居ます」

「ふむ、なるほどな……。再構築の当てはすでにあるのか」

パルからの肯定を受け、クアドルンは身じろぎして召喚台の方へと視線を向け話し出す。

「悪いが、手助けにはなれそうにない。思い当たる術がないのだ」

「……そうですか」

「すまないな、何かしてやれたらよかったのだが」

「いえ！」

クアドルンが心苦しい気持ちで謝罪する様子を見て、どういう答えでも責めるつもりは微塵もなかったパルは焦つてしまう。

「えっと、例えば、その召喚台でイヴさん呼び戻す！とかはどうでしょう？」

「それは考えた、だが無理だ。……私は古き民からこの星に未だ生きている古いシステムにある程度は介入できる様に配慮されている。しかしそれは彼らの旅の足跡を追える程度で、彼らに対して深く干渉出来るものではない。アルスをシステム面から止める事が出来な

かったのがいい例だ」

「……あ」

クアドルンの複雑な感情が込められた説明に、彼の謝罪に驚いてパルは焦って手段を上げてしまったが、考えてみれば聞くまでもない事だったと言われてから気が付いた。

パルが縮こまる様子を見て、クアドルンはあまり気にしない様にと自分の言いたい事を言い切る事にした。

「彼らが二つの道に分かれて旅立っていた後も、私はこの星で残り続けた。彼らがどこかで生きていて、いつか帰って来た時にはそのシステムを介して私に合図が送られ、その合図を起点にこの地まで安全に導く約束だった。彼らは私が深くシステムに対して干渉させることができると言っていた。……だが彼らの提案を私は断った、お前たちの声を待っているだけでいいと、そう伝えた。すべて私が考えた事だ」

「……はい」

だから気にするな、とクアドルンはわざわざ最後までは言わなかった。

パルは長い時を過ごして友人達を待っていたクアドルンの気持ちがおほんの少しだけ分かった気がした。彼が生きていた時間は長く、自分では想像もできない苦難とそれに対する心境があったらうと、感じたのだ。

パルが途方にもない長い時間をほんの少し実感していると、クアドルンは少し唸った。

「むう」

「どうかしましたか?」

「私から話せることは今話した、そして私もいずれお前たちに言わなければならぬと考えていた話がある。今までの話とは凡そ関係ない話だが」

クアドルンがなんだか歯切れの悪い会話の切り出し方をしているとパルは感じ、もしかして言いにくい話題なのかもと察する。パルはどんな話か不安にはなつたが、いずれその話は聞かざる得ないのなら

今聞いてしまった方がいいと判断した。クアドルンに話しにくい事を話させてしまつて、自分だけが逃げるわけにはいかないという気持ちもあつた。

「聞かせてください」

「……いいだろう」

クアドルンはパルの答えを確認してから話し始めた。

「星の導きと、娘は表現していたな。お前は私たちがほんの偶然、星の導きで出会い今こうやって話し合っている事を得難い奇跡と思うか？」

クアドルンの質問に対して、パルは迷いなく頷く。

「それは勿論、そう思います」

「そうか。では、この奇跡が何時まで続くか、考えた事はあるか？」

「え……？」

パルはクアドルンの言っていることが一瞬理解できない言語の様に感じた。

そしてそのように感じた理由をパルはすぐに理解した。

「……考えていませんでした、いえ、考えなくなっただけかも」

「今日や明日にも別れの時が来るといふ話ではない、現状道は安定している。だが努々忘れるな」

クアドルンが付きつけた言葉は、厳しい現実を示す言葉であつた。

例えばGBNがサービステーション停止になればエルドラに来る手段は当然なくなる、他にもエルドラのシステム側に不調が起こればメンテナンスできるわけもなく道は閉じる。

あえてその現実を示したのはクアドルンなりの配慮があつての事だろうと、パルは感じた。

「皆でよく話し合うようにしておきます。……すぐには受け入れられないかもしれませんが」

「時間はある」

パルの返事に、クアドルンはただ事実のみをもう一度示し、また楽な姿勢に戻つていった。

「でも、道が途切れたとしても僕たちは皆さんの事忘れたいしません

から……！」

「……」

「それに、絶対もう一度道が繋がらないか色々試します！やれるだけやります！」

「……ふっ、お前たちの好きにするがいい」

パルの諦めの悪い言葉に、クアドルンは本当にわずかだが笑うのだった。

そしてパルは感傷的な気持ちを振り切り、再度何かに使えるかもしれない事がないか考えて、召喚台周りなど古き民が残した物のスナツプショットを取る。

写りを確認して、目を閉じたクアドルンにぺこりと頭を下げて、三人に追いつこうと愛機に近寄る。

「お前たちなら、成し遂げる事ができるだろう」

「っ！はい！ありがとうございます！」

ふと後ろから来た優しく温かい竜の激励にパルは喜び、場を後にした。



「へえー！そんなことをしていたんですね！」

フレデイはヒロトから今行っているイヴ復活計画の事を聞いて、感嘆の声を上げていた。

彼はヒロトの言ってる事すべてを理解する事は出来なかったが、成功してしまえば間違いなくヒロトにとっていい事であり、ヒロトが喜ぶなら自分にとってもいい事なのだと感激していた。

カザミはそんなフレデイの様子を見て、ヒロトの肩に腕を回して後ろを向かせ屈んで小声で話す。

「おい、フレデイに言ってる良かったのか？いろいろあるだろ、ほら」

フレデイの身内も含めて多くの人が亡くなってしまったあの悲劇からさほど時は立っていない。彼の事を思うと、復活という単語が死を連想させて良くないのではないかとカザミは思ったのだ。

だがそう思いながら、大事な仲間隠し事をしたくないという気持ちも相反してあった。なので、ヒロトが伝えてしまった事を強く咎め

る気はない。実際フレディ自身少しも気落ちした様子は見せていないし、結果としては問題なかったのだろう。

「いや、やりたい事を隠す方がフレディは怒りそうだから」

「まあ、それは一理あるけどよ」

カザミが複雑そうにうなずくと、ポンポンと後ろから腕を叩かれる。

感触で分かる、明らかにフレディの手だった。カザミが確認してみるとフレディは一転して不機嫌そうな顔でムスツとしていた。

「きーこーえーてーまーすーよー!」

「ぎゃあ!」

「勝手な思いやりで自分達がやりたい事を誤魔化さないでください! 全然嬉しくないです!」

フレディは鼻息荒くフンフンと怒りを見せている。

カザミは自分勝手な事をしたのは俺だったな、とその姿を見て感じ取り、両手をパン!と合わせた。

「ごめんなさい!」

「はい!許します!」

「ほら、怒るって言ったじゃないか、カザミ」

「俺は俺なりにだなあ!いえ、なんでもないです、はい、ってあれは!」

そんな話をしていると、ウオドムポッド+とエクスヴァルキラランダールが飛んできていた。

ウオドムポッド+は小型の乗り物を手に持ってそのまま村の中に着陸し、エクスヴァルキラランダールはヒロト達の近くへと着陸する。

「お、あいつらも戻ったな」

「パルさーん、こっちですよー!」

フレディがぶんぶん機体から降りたパルの方に腕を振ると、パルは小走りでこちらに近づいてきた。

「やあ、フレディ。元気そうだよかった」

「パルさんもお元気そうで何よりです!」

相変わらずのフレディの様子にパルは思わず笑顔になり、すぐに表情を曇らせた。

三人がパルの様子に気づいて、フレデイがすぐに心配の声を上げる。

「どうかしました?」

「……いや、その、そう!クアドルンさんに。あ、いや、ヒロトさんフレデイは?」

パルは三人から見てかなり不審な様子のままカザミ一瞬視線を向け、そしてすぐにヒロトに質問する、言葉は短縮されていたが彼が聞きたい事をヒロトはすぐに理解して頷く。

「もう知ってる、大丈夫だ」

「ああ、えっと、なら、話しますね。クアドルンさんにイヴさんの復活で何か手掛かりがないか聞いてみたんですけど、思い当たる事は無いつて、あとヒロトさんの事色々勝手に話しちゃいました。ごめんなさい」

「それは構わない。わざわざ聞いてくれてありがとう、パル」

ヒロトがパルの行動に感謝すると、パルはヒロトを見て小首をかしげる。

心なしかヒロトの纏う雰囲気により明るくなっているとパルには感じられた。

「ヒロトさん、もしかして何かありました?」

「……ああ、フレデイに怒られたり、いろいろ」

「えええ!? いったい何やったんですか!」

「お前何やったんだよ!」

パルとカザミはヒロトの衝撃発言にもものすごく驚いた。

ヒロトはフレデイに説教された内容を掻い摘んでパルに伝える。

「簡単に言うともっと自分がやりたい様にやれって怒られた」

「……なるほど。それは良かったですね」

「あー、なるほどなあ」

「ああ、少し気は楽になったよ」

ヒロトが明るい顔をするのを見て、パルはとりあえずホツとする。

そしてパルはすこしこめかみを引きつらせた、そんな様子の変化を正面から見ていたヒロトは不思議に感じた。

「どうかしたか、パル」

「いえ、まだ足りない様なら僕も怒りますよって、それだけ」

「……冗談？」

「冗談に思います？」

ニコツとパルが笑顔になり、ヒロトは息を呑んだ。

そんな時カザミがポンとヒロトの肩を叩く、当然の様に笑顔だ。

「ちなみにその時は俺も怒る」

「う、急にはできそうにないんだ、努力はする」

「あんまり焦らせちゃだめですよ、お二人共！」

「……しゃーねえな、フレディ先生に免じてゆっくり見ててやるよ、ん？」

カザミは一番最初にヒロトに強く言葉で伝えたいフレディの発言に、偉そうに頷いた。

パルもうんうんと頷いている。

そうしている間に、今度はウオドムポッド+が飛んでくるのが見えた。さつきと同じ要領でフレディが呼びかけてメイが答え、すぐに寄ってくる。

そうしているほんのわずかな間に、ヒロトにメッセージが届いた。

「なんだ？……カルナさんから？」

「おう、おつかれ、メイ。結局運んでたやつは何だったんだ？」

「壊れた乗り物。積み荷は話を聞く限り無線機だな、最近使い方が分かった遺物だ」

「無線機！それがあつたらエルドラの人たちもすごく助かりますね！」

「おおー！」

話を聞いたカザミとパルはその便利さを現代人としてよく知っているの思わず興奮してしまう。

フレディは首をかしげると

「無線機って言うのはなんででしょうか？」

「遠距離に居る者同士が、距離を無視して会話できる機械だ。今は良く分からないかもしれないが、使えば便利さに気が付くだろう」

「……うなるほど、なんだかすごいそうなのは分かりました！」

フレディはメイの説明にカザミとパルが力強く頷いてるのを見て、ともかく凄い物であるのだと判断する。

そんな時、会話に参加していなかったヒロトの方から声が上がった。

「ええっ!?!」

ヒロトが驚きで大声を出す事は滅多に無い、他の四人はギョツとして視線を送ると、ヒロトはメッセージをもう一度読み返している様だった。

当然他の四人も気になって、メイが声をかける。

「ヒロト、何があったんだ?」

「いや、それが、今カルナさんからメッセージが来て——」

答えながらヒロトはメッセージを再度読み終えて、こんな事があるのかという感情をにじませる。

「AVALONが俺達と同盟組んでイヴ復活の事手伝ってくれる、かもしれないらしい」

「えええー!?!?」

カザミとパルの大きな叫びは村にまで木霊した。

同盟準備

AVALONの隊長にBUILD DIVERSとの同盟を結ぶ意志あり、現在団員の意思を確認中だが期待大。短く纏めるとそんな内容のメッセージがカルナからヒロトに届いたその日の夜。

ヒロトは夕食を食べて風呂に入って楽な格好に着替えた後、ベランダに出て考え事をしていた。

いつも落ち着きを保っているヒロトもAVALONとの同盟が結べるかもしれないというメッセージに強く動揺し、パルとカザミはそれ以上に興奮して結局息抜き処ではなくなってしまった。メイがそんな三人の様子を見ると一度頭を冷やす為に今日は解散するべきだと自分の考えを話し、三人に何も言わず事無くそのまま解散になった。

フレディはまるで話題に着いて行けてなかったが、そんな状況でもめげず自分に何かできる事があれば遠慮なく言ってくれと応援し4人を見送っていた。

普段通りの生活を流している間にヒロトの動揺は完全に収まった。カルナのメッセージには団員の意思を確認中だという記述があった。

隊長のキョウヤは自分の意向だけでフォースを動かす事は滅多に無い、日頃から団員達と丁寧に意思疎通を図る性格しているからだ。

なので、普段ならAVALONの全ての団員たちの意向を取り纏めるにはそれなりに時間がかかる。

少しの期間とは言えAVALONに所属していた事のあるヒロトは、その事を知っていた。そして隊長が部下からの慕われている様子も。

今回のように普段自分を出さない隊長の意向が示されれば団員たちは一二もなく頷く筈、と自然に予想もできる。

となれば、AVALONが動き出すまで時間はそう多くないだろう。

AVALONとの同盟が叶い全面的な支援が受けれるならば、今ま

でよりさらに大きな規模で物事は動かせるかもしれない。

同盟を組んだ後どうするべきかを考えようとしたが、その前に情報共有の準備をしていなければならぬとヒロトはすぐに思い直した。副隊長のエミリアは間違いなくBUILD DIVERSが持つ今の詳しい考えや状況の把握を優先するはずだ。

ヒロトは携帯を操作し、仲間たち3人に同盟する際に提示する今までの行動をまとめた資料を明日作りたいとメッセージを送る。

すぐにそれぞれから返信が来て、明日やる事は決まった。

ヒロトがそうしていると、隣の部屋の窓が開いてヒナタが出てきた。

彼女はベランダの縁に持たれ、横にヒロトが居る事に気が付いた。

「今日も一日お疲れー、ヒロト」

「ああ、お疲れ、ヒナタ」

二人で今日一日を労い合う、別に大した事はしていないが夜にここで会うと稀にこんなあいさつをする時があった。そのままヒロトは携帯をしまい、小さくあくびをした。

ヒナタはそんなヒロトを小さく笑う。

「もう眠いんなら、本当に疲れてるんだね」

「うーん、俺は大した事してないんだけど」

フレディからの説教とか、カルナからのびつくりメッセージとかいろいろ大きな事はあった。心境と状況が入れ替わる出来事がほとんど同時に起こり、ヒロトも多少の気疲れしてしまった。

「あー、色々あったの?」

「まあ、そんなとこ」

「ふーん」

ヒナタは何があったのか深く聞くことはなかった。ヒロトの顔を見るにトラブルではなく良い事があったのだろうと何となく察する事ができたからだ。

「最近ガンプラ作りの調子はどうなの?」

「……母さんから聞いた?」

「うん、遅くまで何かやってるーって」

「やっぱり。まあ、焦らずにやってるからどうって事ないよ」
モビルドールの制作は先が長い。

イヴが復活した後、その意識を宿す器になる事が決まっているのでどうしてもあれこれ細かく考えてしまう。関節の可動範囲と強度を両立させる、重心バランス、デザインはこれで良いのか、少し考えるだけでも課題は多くある。パーツの一つ一つをあらかじめ作り出すだけでもかなり時間がかかる。

コアガンダムの調整とはまた別の心持で、ヒロトは真剣になおかつ楽しく作業しているためつい遅くまで作業にかかりきりになっていた。その辺りを母親が気付いて、ヒナタと雑談で話したのだろう。

「あの子は見つかりそう？」

ヒナタはヒロトの方を見ずに、ベランダから見える景色をぼんやり眺めながら聞く。

「うん、望みはある。きっと見つけられる」

ヒナタの質問に対し、ヒロトは力強く想いを込めて答える。

そんなヒロトの声でヒナタは彼がまた少し変わった事に気が付いた。

「そういえば名前は？」

「ん？ああ——」

ヒナタ質問しながらヒロトの顔を伺うと、彼は月の方をジッと見つめていた。

「名前はイヴ」

「……？イヴさんって言うんだ、なるほど」

長年の付き合いもあってヒナタはヒロトの声・表情・雰囲気、元気だな、悩んでいるな、と彼の体調や心境を何となく察する事が出来た。だが珍しく、今はその感覚が働かなかった。

違和感を覚えたまま、彼と同じように月を見上げてみる。月には雲がかかっている、綺麗に見えないとヒナタは感じた。

「今日は天気良くないねー、お月様が良く見えない」

「え、そうか？」

雲が掛かっているが、月は綺麗だ。ヒロトは首を傾げた。

「……私にも手伝える事あったら、言ってね」

「うん、また頼むよ」



次の日仲間四人が集まって、今までの行動をまとめた資料を作成する作業を始めていた。

場所はいつも通りブリーフィングルームで、ボードに書いた内容もウインドウに出しながら文章化している。

カザミは作業が始まって早々に落ち着かなさそうに声を上げた。

「AVALONから同盟がほぼ確実に来るかも、なんて今でもちよつと信じられないぜ」

そんなカザミの様子にパルも同意して少し頷いた、ヒロトはそんな二人の様子を見て小さく笑う。

「大々的に動くのは珍しいフォースだけど、別に取って食われる訳じゃない。同盟らしく格好つけた乗っ取り攻撃でもないんだから……」

むしろ助けてくれるくらいだし、とヒロトはすでに落ち着き払っている。

カザミは身体を震わせ、興奮してるのか緊張しているのかよく分からない声を出す。

「ううん、やっぱり落ち着かねえ」

「同盟の申請はカザミ、お前に届くはずだ。間違っつて拒否しない様に気をつけろ」

「確かにそんな事したら二度目は無いですよね」

メイとパルが二人そろつてカザミの緊張をより煽るようなことを言う。

カザミは溜まらずヒロトの方に向き直る。

「リーダー権限、要る?」

「……情けない事を言うな」

カザミの様子を見てヒロトは気を楽しにさせる為に、自分が知るAVALONの事を話そうと決めた。

「AVALONはランキングトップのフォースだけあつて入団にも

ちやんと規定がある。パイロットとしてのセンスやガンプラの出来もそうだけど、それよりも素行とか問題行動を過去に起こしたことになるかは徹底的に調べてるってエミリアさんに聞いたことがある」

「……へえ、そうなのか、管理も一苦労だよなあ」

何を言いたいかを察するのではなく、単純に感心してしまったカザミにヒロトはもつと分かり易い言葉が必要だな、と思い直す。パルの方は察したのか、少しホツとしていたが。

「つまり天狗になった嫌味っぽいダイバーは居ないし、ちやんと話は聞いてくれるダイバーが集まってる。少しの間しか入ってなかったけど、ミツシヨン前の会議になったら新参の俺にも発言の機会は平等にあった、当然妥当な案なら聞き入れてくれたよ」

「そっかー、いいフォースなんだなー」

これは駄目かも知れない、カザミのぼんやりした様子を見てヒロトはそう感じた。

だが彼の土壇場での度胸は信用できるとヒロトは知っている、これ以上言葉をかけてもあまり意味がないだろうと判断して作業を続けることにした。

今度はパルが苦笑いしながら、カザミに声をかけた。

「すぐく目立てますよ、きつと」

「ジャンルがちげーわ！俺の中ではちげーわ！」

「同盟を結んだからと言って、人が大勢押し掛けてくるわけでもあるまい。なぜそんな気を張るんだ？目的は姉さんの復活だろうか？」

メイはいつも通り落ち着いている、そんな彼女を見て上がり気味だったカザミも少し落ち着いた。

「肝の座り方は俺たちの中じゃメイがトップか」

「違うない」

「ですよ、メイさんはいつもクールです」

カザミの言葉に男子二人が同意すると、メイは首を傾げた。

「ん？……ああ、誉め言葉か、ありがとう」

「何だと思ったんだよ……いや、気は楽になったし、雑談はここまでだな」

全員の気が引き締め治ったところで、今日の作業の話に変わる。

「……今までの俺たちの行動をまとめるって言うがどこまで書くんだ？エルドラの事はどうする？」

「僕はイヴさんの復活にはあまり必要ない情報に感じますね、それに混乱してしまいそうだな」

「私もそう思う、ヒロトは？」

「そうだな——」

三人の話にヒロトは唸る。パルの意見であるエルドラの事を説明すると混乱を呼ぶだけであまり意味がないかもしれない、というのは正論と感じつつ別の考えも浮かんできたからだ。

「パルの言う事も分かるけど、聞き手によっては全部話した方がいいかもしれない」

「聞き手というのは？」

「キョウヤさんと副隊長二人、カルナさんとエミリアさんだけならしっかり飲み込んでくれるとは思うな」

「……ヒロトがそう言うんだったら、準備しておいた方がいいか」

「ですね、二つのパターンで」

「……？いや、待て。お前たちおかしな考えになっているぞ」

メイが手を上げて三人の話を遮る。

「同盟ならあちらが上の立場と言う訳ではないはずだ、ならば聞き手は指定できる筈ではないのか？」

「あ！それもそうですよね！」

「確かに言われてみれば！」

「……俺の考えも勝手に施される側になってた、ありがとうメイ」

AVALONを自分達より上だと感じるのはGBNで過ごす以上仕方ないことではあるが、同盟とは飽くまで対等な関係であると保証しなければ成り立たない。つい先ほども吸収合併のような話ではないとヒロト自身言った筈なのに、三人纏めて思考が妙に弱気な方へと持っていかれてしまった。

「乗っ取り攻撃じゃないって、自分でも言った上でこれか」

「フォースとしての規模が違い過ぎるからな、吞まれちゃうのもしよ

うがねえ気はする」

「でも、メイさんのおかげで気が付くことができましたし、次は気を付けましょう」

三人で少し申し訳なさを感じつつメイに頭を下げる、彼女は特に気にした様子もなく頷いて続きを促してきた。

「おかしくなって来たらまた指摘する、話を進めよう」

その後、話がおかしな流れになる度にメイは自身の宣言通り指摘してくれた。そうして都度話の軌道を修正する形で、説明用の資料を作り上げるまで2時間ほどかかる事になる。



作業が終了して、資料を見返しながら軽く息抜きをしているとカザミとヒロト同時にメッセージが届く。

「うおおお!!ホントにチャンピオンからメッセージ来たー!!わかっててもビビるー!!」

「こっちはカルナさんからだな、早く動くだろうとは思ってたけど」
チャンピオンからのメッセージは文章がそこそ長く固い文面のようにカザミは黙って読み込み始めた。ヒロトに届いたカルナからのメッセージは正式な同盟申請ではなくあくまでフレンドとしての物だったので、少し目を通しただけで内容が理解できるほど文章は単純で分かり易い。

面倒ならこちらを読めばいいというカルナからの気遣いに間違いはないだろう。

パルとメイも文章の内容が気になるのか、メッセージが送られてきた二人に視線を交互に送っている。ヒロトの方が先に読めてしまったので、文面を説明する事にした。

「申請システムを使って明日の0時から同盟スタート、その前に軽く情報交換したいからAVALONフォースネストまで手が空いてるならすぐ来て欲しいそうさ。あと、これをさらに細かく詰めた内容が隊長からカザミに送られてるけど、どうなっても悪いようにする気はないからあまり気にしないでいいとも書かれてある」

「い、今からですか!?!」

「手は空いてる、行くしかないだろう、カザミ」

「わ、わかってるよ！」

四人中二人は再度緊張している様であったが、何とか立ち上がる。

ヒロトはすでにAVALONから脱退しているがフォースネストへのワープ登録を解除していない、色々あつて忘れていただけだが期せずしてまた役に立つ日が来たことが少し嬉しかった。

「カルナさんには返事をした。ワープするぞ」

AVALONのフォースネストにて

「……実際に来てみるとさらにでかく感じるな」

カザミはあんぐりと口を開けてAVALONの所有するフォースネストの門を見ていた。

一方彼と同じように緊張していたパルは建物大きさ自体にはそこまで驚く様子はなかった、現実の方で何度も豪華な建物を目にした事があるからだ。パルの緊張は自分が粗相をしてしまわないかという不安が大きな原因となっていた。

何度も来たことのあるヒロトと物怖じしないメイはカザミの背中を小突いて前に進ませる。

「進め、カザミ」

「行こう、中でカルナさんが待っている」

「おうー」

カザミはここにきて覚悟が決まったのか、ずんずんと三人の前を進み始めた。

ヒロトはカザミの背中を見ていつもの調子に戻ったなど、安心する。

開かれている門を通り抜けて、城の大きな正面口にたどり着いた。

正面口の両端に長槍を携えた衛兵二人が直立しており、こちらに声をかけてくる。

「お名前と要件を伺っても宜しいでしょうか」

「BUILD DIVERSのカザミだ、副隊長のカルナさんに呼ばれて来た」

「貴方方が！話は聞いています。すぐにカルナへ連絡します、中でお待ちください」

「おう、じゃあ入らせてもらうな」

「んくっ」

カザミとパルはその対応にちよつと感動して声を漏らしそうになるが冷静に振舞う。

メイはこのやり取りに意味があるのかと首を傾げ、ヒロトは必死で

笑いを押し殺している。

「衛兵なんているんですね。ダイバーですよね、あの人たち。……え？」

少しだけ雰囲気にもれ感動していたパルであったが、玄関ホールに入っただけなのに今の衛士の存在そのものが不審だと気が付いた。

ヒロトもAVALONの相変わらざるの様子に笑いそうになりながら、パルの違和感に答えを示す事にした。

「そういう役割に乗っ取って遊んでるんだよ、あの人たち」

パルがその答えにやっぱりと頷き、カザミの方はヒロトとパルの会話を首を傾げた。

そんな話をしている間に目の前にカルナがワープしてくる。

「よく来てくれたな、BUILD DIVERS。……あいつらまた遊んでやがったのか、すまん」

「相変わらずですね、こっ」

「どういう事だ？」

カルナの少し居心地悪そうな苦笑いに、ヒロトは思わず笑って答えた。

そして未だ事情が呑み込めていないカザミはなおも首を傾げたままだ。カルナはそんなカザミに対して申し訳なさそうに頭を掻くと

「門番にダイバー2人を配置する意味なんてないんすよね……」

「……？あぁー!!」

「あいつらもカザミさん達を馬鹿にしてるわけじゃないんだ。なんと
いうか、自分達の遊びを優先してるだけで、いや、ほんと申し訳ない」

「うわー、雰囲気でやられちゃった。いや、それにしてもなんだあの演技力」

「いやー、申し訳ない。……あいつらクオリティは妙に上げてくるから腹立つんだよなー。注意しても自分達は真剣に業務を遂行してるだけであります！とか答えてくるからエミリアさんでも途中で笑っちゃって」

一応来客の肩の力をいい感じで抜かせるという意味で、あの妙に演技力のある衛兵達は一役買っており、そういったメリットもあるので

本気で禁止される事が無い。ヒロトはさらに内側の事情も知っていたがわざわざ補足はしなかった。

カルナはほぼ半笑いで四人に頭を下げて、エホンツと空咳をして表情を引き締め直す。

「改めて、AVALON副隊長カルナです。BUILD DIVERSの皆さん、お待ちしていました。どうぞこちらへ案内します」

「お邪魔しますー！」

「って言ってもそんな硬くならないでいいし、見た通り変なのが普通にいるフォースだから」

カルナは少し硬くなるカザミに笑いかけ、目的地まで案内するため四人を促して歩き始めた。

カザミは廊下にちらほらある装飾品や吊られたシャンデリアなどを見て、一々凝ってるなあと感心していた。

ヒロトは少し懐かしく気持ちで居たが、目についた花瓶でふと思いつ出したことがあってカルナに聞いてみる事にした。

「カルナさん、花瓶って前と同じですか？」

「おー、覚えてたか。AVALONの奴から見たらあれは投票箱だ、変わってねーよ」

「投票箱？」

パルが話の展開について行けずに思わず声を上げると、カルナは少し笑う。

「実はな、あれ触るとうちの談話室で流す予定のBGMのタイトルが5つ出てくるんだ。その中で来週流してほしい奴を皆で決める為に毎週投票してんだよ、日曜日集計月曜日BGM変更で」

「へえ、素敵ですね！いかにフォースらしいですー！」

「だろー……この中へどうぞ。隊長！BUILD DIVERSの皆さんをお連れしましたー！」

AVALONのブリーフィングルームに入ると中に居たのはカルナと同じ副隊長のエミリア、そして隊長のキョウヤだった。

他に人は居ない、その事実にかザミは内心ほっとする。名目の上は同じ立場とはいえ聞き手にしたい三人以外に退室を促す行為はやは

り反感を招いてしまいそうで気が進まなかったからだ。

「やあ、あの時の打ち上げ以来だな。来てくれてありがとう、BUILD DIVERS。AVALONの隊長として歓迎させてもらおうよ」
「こちらこそAVALONに声かけてもらって、本当にありがたいです！」

四人がキョウヤと直接会って会話するのはアルスとの決戦後にAVALON主催の打ち上げパーティーが盛大に開かれた時以来だった。

流石のカザミもいつもの口調は鳴りを潜め、かなり固い言葉遣いになっている。

二人はしっかりと握手を交わし、お互いに席に座る。

まず口を開いたのはキョウヤの方だった。

「さて、同盟を結ぶ前の情報交換を始めよう。先にこちらからエミリアが主体になって見解を話すか、BUILD DIVERSは誰が話すか決まっているかな？」

キョウヤに聞かれたカザミはヒロトに視線をやる。

視線を受けたヒロトは、カザミに頷いて返事をする。

「自分が」

「わかった、エミリア」

「はい」

エミリアは立ち上がってボードの前の方に出ていく。

すでに見知った仲ではあるが、エミリアは奇麗に一礼した。

「AVALON副隊長、エミリアです、よろしくお願いします。お互いの情報共有の効率化を図るため以降の会話は録音させていただきます、ご了承ください。」

エミリアはウィンドウを操作して、ボードにヒロトが上げた動画を映し出した。

「AVALONが今回の件でBUILD DIVERSと同盟して全面的に支援しようと思った切っ掛けは、この動画です。我々はこの動画を見るまで第一次有志連合戦の後から第二次有志連合戦の間に、E Lダイバーの犠牲者が出ていることを認識していなかったわ」

エミリアは淡々と説明を続けていく。

「でも当時の状況では運営ですら助ける事は叶わなかったでしょう。ELダイバーサラの騒動は今更説明するまでもなくBUILD DIVERSの皆さんはご存じと思います。我々は当時ELダイバーを削除するために動いていました。ですが、今回は貴方たちに力を貸す事でELダイバーを救おうとしている。行動の逆転に至った理由は、時間制限の有無」

ボードに表示されている情報が切り替わり、第二次有志連合戦直前に起こっていたバグによる影響が示される。

「当時我々はGBNを守る事を最優先にしました、なぜならELダイバーサラからサーバーへの浸食が止まらずGBNが遠からず崩壊してしまうのではないかというほどに時間が無かったから。ですが今回は、すでに散ってしまったELダイバーの救出が目的で、時間制限は特に無い。探索に成功すればそれでよし、復活させるならば反動が起こる事を最初から念頭に入れて準備できます」

エミリアは表情にまで感情を浮かべる事は無かったが、少し申し訳なさを込めてヒロトの目を見た。こうして過去を振り返りつつ説明しても、2年程前のヒロトに当時のAVALONの立場が負荷をかけていた要素は消しきれない。

しかし、この場で深く言及するべきではない。今回情報交換の場に立ち会うAVALON側のダイバーの総意は事前に決まっていた。

BUILD DIVERSが話し易い様に、彼ら、特にヒロトと少なからず行動を共にしたことのある幹部だけでこの場を固めたのはせめてもの謝意だ。

「客観視すれば彼女の身体が崩壊しデータが四散した時点で状況は最悪でしょう。とは言っても諦めるには早すぎる、最悪の状況なら後は上がりきればいい。AVALONとしての見解は以上です」

エミリアが話すべきことを話し終え、続けてキョウヤが発言する。「カザミ君に送ったメッセージにも記載したが、我々の目的は君たちの支援、つまりはELダイバー・イヴの探索の人員貸し出し。もしそれが望みなしとなれば、君たちの言う『奇跡』を起こす為の支援とそ

のコントロール手段の模索となる。それを踏まえた上で、BUILD DIVERSには君たちが今抱えている問題点を聞かせてもらいたい」

「……はい、分かりました」

キョウヤは暗にBUILD DIVERSのイヴ復活に馳せる想いを肯定し、特に後者のあり得ないと言える手段を有効であると認めると、ヒロトに伝えていた。

復活目的の奇跡が現実的であるかどうかの話し合いが要らないのであれば、説明すべき事はグッと短く分かり易く済ませる事ができる。

エミリアとヒロトがボードの前に立つ位置を交代する。ヒロトはウィンドウを操作して、自分達が作った資料をボードに表示し、同時に聞き手三人にも同様の物を送る。

送られた三人は彼の相変わらずの準備の良さに少し感心していた。「質問の回答前に、キョウヤさん達には伝えなければならない事があります」

「わかった、聞かせてもらえるかい？」

「BUILD DIVERSとしては、イヴを探索するという方法に関してはほぼ望みがないと感じているという点です」

「……なるほど、その根拠はなんだろうか？」

キョウヤの問いにヒロトはイヴと自分が写った写真をボードに表示する。

そして指し示すのは、ヒロトがイヴにプレゼントしたイヤリングだ。

「これは二年程前に、イヴが消えてしまう前に、俺がイヴに送ったイヤリングです。メイ」

「ああ、私がE.L.ダイバーだというのは、動画を見てもらったならもう知っていると思う。そして私が生まれた時にはこのイヤリングは手元にあった、当時はなぜこれが私の元に現れたのか良く分からずに居た。ヒロトと会うまで姉き、いや、イヴの存在も当然知らなかった」

メイは普段腕に括りつけてあるイヤリングをキョウヤたち三人に

見え易い様に手で翳す。この説明をするのは決まっていたので、彼女は事前に自分の手でイヤリングを持っていた。

キョウヤはそのイヤリングを見て、写真で示されたものとメイが持っている物はどうやら同じものらしいと判断する。

ここでふと思いついたのはGBNのプログラマー、トリーから聞いたELダイバーが生まれるきっかけになった『何か』についての事だ。「……ELダイバー・イヴのデータ片が彼女の生まれに関わっている、かもしれないと言う事か？」

今から話すべき事の一端をキョウヤが今の僅かな話だけで早く察したことに四人は少し驚いたが、ヒロトはともかく頷いた。

「そうです。……ここからお話するのはそもそも彼女たちELダイバーがどこからきたのか、そしてイヴが消える間際に何を言ったのか。前者は特に推測混じりで話も少し長い、信じられない様な事も説明しなければいけません、それでも探索にほぼ望みがないと感じた根拠を示す事はできません。聞いてくれますか？」

「うん、思うように話してくれ」

キョウヤの了承を得てヒロトは話し出す。

エルドラが紛れもない異星であると言う事、そこで戦う中で知った事、イヴの散り際に発した「データの海に帰るだけ」「私はどこにでもいる」という発言からくる推測と、その結果。

なるべく分かり易く、余計な隠し事はせず。

ヒロトの言葉は淀みが無かった、中には以前思い出した時より更に詳しくイヴの消滅間際の事に振れている内容もあったが、以前ほど強烈な反動が無い。

イヴともう一度会って、聞きたい事を聞き、今のGBNを見せたい。例え目の前にどんな困難があっても諦めないという意味は、彼をより強くしていた。

キョウヤは先にGM達からある程度情報を回されている事もあってそれを基にした疑問を投げかけはしたが、ヒロト達の推測を否定する事は無かった。

アルスの襲撃、あの戦いを経験したカルナとエミリアは大規模ミツ

シヨンにしてもエルドラ関連には随分不審な点がある事に気が付いていたのだろう、同じ様に真剣に最後まで聞くことを選んでくれたようだった。



「うーん、色々衝撃的な話題だったな。……まあ、異星人とかそういう話はともかくとして続けるか。要は探索は奇跡って単語を柔らかく伝えるための前菜みたいなもので、本命は復活ってことか。」

「はい、俺達の目的は最初からそうです」

カルナは長い話を聞いて色々思う所は有ったが、ともかくヒロト達の伝えたいところは理解できた。カルナは頷いて、キョウヤたちの方へ意見を伝える。

「人集めるってだけならそんな難しい話でもないですよね、隊長」

「うん、まあそうだな」

キョウヤはカルナの意見に頷く。

「AVALON主催で大会でも開ければいい、エミリア、何か賞品でも見繕っておいてくれ」

「はい。後は目玉イベントでも考えておきますね」

「……軽い提案ですでに規模がすぎえ」

カザミは目の前で繰り広げられているAVALONの影響力を改めて感じた。

キョウヤはそんなカザミの様子に少し笑った。

「使えると思うなら遠慮なくどんどん使っていけばいい、やりがいのある話になって来て燃えてくるだろう?」

「ありがたいです」

カザミは神妙にお礼する。

話の流れが進む中、ヒロトは改めて抱えている問題点を示す。

「今の問題点の一つとして動画のコメント欄はアンチ側に偏ってます、そこは——」

「ああ、それは心配しなくていい」

ヒロトが示した問題点に、キョウヤは強く断言する。

「私がカザミ君の動画をフォローして、それらしい応援コメントを残

しておこう」

「同盟締結と同時にコメントを残せば、一気に応援側に流れが来るはずよ」

「……チャンピオンって本当にすごいんですね」

キョウヤの案をエミリアが補足する。

パルはその影響力に慄きながら感嘆の声を上げる、するとキョウヤは苦笑いした。

「影響あり過ぎて、気に入った動画を気楽にフオローできないのが僕の悩みなんだ。良くも悪くも荒れてしまうからね。でも、今回はその悩みが功を奏するという事になる」

「しようがないっすよ、隊長、諦めましょう。で、あとは復活の反動か？」

「はい、頼ってばかりで申し訳ないですが、俺達もその点に関してはまだ案が出ていません」

「だよなー……」

カルナの指摘にヒロトも固く頷き、現状を報告する。

どうしたものかと、カルナが考え始めると同時にキョウヤがふと机の上にあるシャンデリアを見上げた。エミリアはそんなキョウヤの様子に首を傾げた。

「隊長、どうかしましたか？」

「……部外者は立ち入り禁止だ」

見たところ何もないシャンデリアをキョウヤは睨みつけ、まるでそこに誰かが居るかのよう警告する。

全員が何事かと視線を向けると同時に、シャンデリアの上に金色の鳥が姿を現した。

「ミスター・キョウヤ、貴方実はXラウンダーなの？明らかに私のこと見てたでしょう」

驚きと呆れを入り混じらせた感情を呟きながら、金色の鳥は机の中央へと降り立った。

「まさか、カマかけですよ。貴方の事だ、件の動画もすでに見てるんじゃないかと思つてね」

「……だとしても外したら一生の恥になりかねないのによくやるわね、思わず出てきてしまったじゃないの」

トリーはキョウヤの胆力に呆れながら、ヒロト達の方を向いた。

「盗み聞きなんてしてごめんなさいね」

「えっと、貴方は？」

唐突な登場とマイペースな発言にヒロト達は未だついて行けなかった。

声を掛けられたらしいヒロトは、戸惑いながらも返事をした。

「私はトリー、GBNのプログラマーよ。以後よろしく、BUILD DIVERS。」

トリーはそのフォース名に因果を感じながら、キョウヤ以外にとつては衝撃的な自己紹介をするだった。

BUILD DIVERS || AVALON 同盟

「……GBNのプログラマー？」

ヒロトがトリーの発言に驚愕を隠せずオウム返しにする、キョウヤはこの場に居る全員から強い困惑を感じトリーに説明を促す。

「……トリーさん、ともかく何をやる為に来たか説明してください。皆困惑している」

「そうね、でもとりあえず」

トリーは金色の鳥の姿をしている事から顔やしぐさがない、声色もごく落ち着いた様子でまるで緊張していない様だった。トリーがブリーフィングルームの入り口に目を向けると、入り口が青い光に包まれていった。

「GMに察知される前に私の部屋に案内するわ、あの扉に入って」

「……皆、着いて来てくれ」

トリーの発言から、キョウヤは彼女がどうやら今回の件は味方に付いてくれるらしいと判断し先陣を切る。

他の全員は急な展開に困惑したままであったが、キョウヤがトリーの言葉に従った事でもかく言われたとおりにすることに決めた。

変質した扉をくぐったさきは、大きな止まり木がある書斎のような部屋だった。

トリーはその止まり木に移動し、全員に着席を促す。

「ここはGMに関与されず、会話ログも残らずに話し合う事ができる、私個人の空間よ。どうぞ座って」

席の数より入ってきた人数の方が多かったが、椅子と机の配置と数が一人でに切り替わって部屋に入ってきた全員が窮屈さを感じずに座る事が出来た。

キョウヤが説明を視線で促し、トリーが話し始める。

「ミスター・キョウヤの指摘の通り、私はあなた達BUILD DIVERSがアップロードした動画を見ました。……ELダイバー・イヴの復活、協力させてもらおうわ」

「!?」

突然の登場、そして当然のような協力宣言にヒロト達は驚いてばかりだ。

キョウヤはそれも当然の反応だと、一人皆の様子を見ながら苦笑し「トーリがどのような立場であるのかを補足する。」

「トーリさんはGBNの開発者、メインシステムを作り上げたプログラマーだ。ELダイバーにまつわる最初の騒動の時も、彼女はリク君たちに付いてサラ君を助ける為に動いていた」

「……そういう人もいたんですね」

ヒロトはキョウヤの話に感心の様な、そしてほんの少しだけ羨む様な、複雑な声を出した。

件の動画を見たり今回の情報交換を聞いていたトーリは、ヒロトに対し憐憫と申し訳ない気持ちを抱かざる得なかった。もつとGBNの隅々に気が付いておけば、と彼女はどうしても考えてしまう。だが、謝ったとしてもそれは私なら救う事が出来たと、まるで神を気取るような傲慢な発言にしかならず、彼の慰めには決してならないだろう。今できるのは彼らの目指す奇跡を手助けする事だ。

「貴方たちの話を聞いて必要があると感じたのは、まず彼女の身体。データを再構築するにしても、集まるポイントが有った方が良いでしょう」

トーリの指摘は正しい物だった。

イヴが復活した後の保護策としてモビルドールを作ってはいるが彼女が言っているのは恐らくGBN側での身体の事だろう、と予想しながらヒロトは答える。

「俺たちにできる事としてモビルドールは作成しています」

「なるほど、それも確かに後で必要になりますね。そちらがお任せできるなら、GBNでの身体、つまりアバターを今作ってしまいませんか」

「合？？」

トーリが部屋の空いた空間に目を向けると、空間が切り取られた様に立方体があらわになり、そこにキャラメイク時の女性アバターの素体が浮かび上がってきた。

「あの写真を見る限り、背はもう少し低い、髪はこのくらいの色で長め、顔も少し幼い、目はこう。服装は……ああ、GBN初期の頃から有ったドレスですね」

トリーが言ったこと全てが次々に女性の素体アバターに反映されていく。

背の高さが調整され、髪がぐつと伸びて二つに纏められて色が切り替わる、輪郭が調整され、目の形と色が変わる。服装に関してはGBN内で着用できる種類が膨大になっている為、彼女も一瞬戸惑ったがすぐに見つけ出した。

「ミスター・ヒロト、イヴの外見・服装に何か気になる点はありませんか？件のイヤリングは勿論ありませんが、それ以外はこの通りかと」

「……あ」

出来上がった『イヴ』を見て、ヒロトが思わずふらりと立ち上がる。

ヒロトに見え易い様に移動させられたアバターは間違いなくイヴだった。

その目には何も映っておらず、何の表情もなかった、今はまだ抜け殻でしかない、そんな事は分かっていた。でももしかしたら、今にもまた笑いかけてくれるかもしれない、そんな思いがヒロトの中に沸き上がって止まらなかった。

自然に手を伸ばし、頬に触れてみて、そして何も変わらない事を実感して彼は手を下した。

ヒロトの複雑な感情を込めた行動はこの場に居る全員の胸を打った。

男性陣とメイは固唾をのんで見守るしかなく、エミリアは見ていられなくなり俯いてしまった。

ヒロトは感傷的な気持ちを切り替える為に、首を振ってトリーに答える。

「……イヴの外見はこれで間違いないと思います」

「ありがとうございます。……辛い事をさせてしまって、ごめんなさい」

「いえ」

トリーが沈痛な声で謝ると、ヒロトは微笑んだ。

「こうやって力を貸してもらえてありがたいと思つて居ます」

強い子だな、とトリーはその言葉を聞いて心の底から思った。

あと一つできる事がある、日の目を見るかどうかはともかく伝えなければとトリーは考えていることを話す。

「奇跡の反動についても当時の第一次有志連合戦のデータ、もう一度洗つてみるわ。対策を講じれるかはわからないですが、全力を尽くします」

「……ありがとうございます、でもどうしてここまで？」

トリーの献身的な手助けは本当にありがたい物と感じてはいたが、ヒロトに返せるようなものはない。

そんなヒロトの言葉にトリーはキョトンとしながら答える。

「命を救う事に理由が必要でしょうか？」

ともすれば子供っぽい理由に全員が一瞬答えあぐねたが、キョウヤは変わらないなど小さく笑う。

「彼女はそういう人なんだ、生まれる命を祝福し、助ける事を厭わない」

「私は聖人を気取るつもりはないわ、ミスター・キョウヤ。彼女はGBNを身を挺して庇ってくれたのだから恩返しも兼ねています。この件の報酬があつて然るべきだというなら何か……ああ、イヴの在り方に興味がありますから、彼女が落ち着いた後に少しお話しさせていただきます」

「それでいいなら」

報酬が有った方が納得しやすいならと、今とつてついただけの様なトリーの要求はほんの些細な要求でしかなかった。

キョウヤはトリーの報酬に対する表現が気になり、質問を投げかけた。

「トリーさん、イヴの在り方に興味というのはどういう事でしょうか？」
「分かり易く言うのであれば……、サラとイヴはモビルドールという保護枠を持たなかったELダイバーという同じ立場でありながら随分と違う点があります。サラは子供の様に未熟で、スポンジの様に感

情を学び、記憶を得て、それがブレイクデカールを抑え込んだ奇跡と相成ってGBNを圧迫するという原因になった」

トリーは一呼吸置いて続ける。

「でもイヴは同じ様な存在でありながら、確固とした自我を最初から備えていたように思えます。ミスター・ヒロトの動画に有ったイヴ本人が自分からバグを抑え込んだという発言、それは自分が何者であるか何ができるかを知らなければ打てない方法でしょうか？その行動の根幹は貴方たちが話していたイヴがエルドラに過去存在した古代文明人のである事を示しているのかもしれませんが、仮にこの推測が正しいなら異星に住んでいた文明人と会話できるというのは——」

トリーは好奇心旺盛な人間であった、サラに目を付けたのもこういった知的好奇心からくる面があった。

彼女はここまで話して質問した当人のキョウヤも周りの人もついで行けてない事に気が付き、つい興が乗ってまくし立ててしまったている自分を少し恥ずかしく感じ始めた。

「得難い……。ああ、ごめんなさい、つい。とは言え彼女が話したくない事であれば無理に聞くつもりはありません」

とってつけたような要求を装いながら内心かなり興奮していたトリーからは明確な彼女の考えが次から次に出てきた。

無理に聞くつもりはないと自分の好奇心を抑え込んでしまうあたり、好奇心旺盛な性格ながら根っこから善人であることも同時に示していた。

金色の鳥という表情のないアバターで居るが、不思議と表情が見えた様にヒロトは感じた。

「ともかく、私の出来るかぎりで貴方たちを助けましょう」

「ありがとうございます」

トリーが改めて協力を宣言すると、ヒロトは強い信頼と共に礼を述べた。

キョウヤは顎に手を当て、何事かを考えてからトリーに声をかける。

「GMはどう動くかな」

「あら、想定はできてるんじゃないやなくて？」

「まあ、そうだが」

「カ……GMは目先の問題解決に尽力する人よ。今回の件少し文句は言うでしょうけど、うまく動けば逆に引き込めるわ」

「トリーさんもそう思うか」

「……そもそも今回のAVALONの強引な動きはそれを狙ったものでしょう？」

トリーはここまでのキョウヤの発言と様子でなんとなく思惑を見抜いた。

GMを巻き込む話には騒然となった。AVALON側のカルナ・エミリアも聞いていない展開に流石に面を食らってキョウヤに食い掛る。

「……どういふことつすか隊長!？」

「奇跡の反動の話が出ただろう、それに関して私なりに対抗策として考える事があったんだ」

「GMを巻き込むことがその対抗策になると？」

エミリアの疑問に、キョウヤは頷く。

「ああ、これは僕自身の経験から考えたGMの癖を利用する作戦だ。GMは目の前にある問題に実直に対処する、時には非情な判断を断固実行する覚悟もある、敵にすると厄介だ。奇跡のリスク、この一点に対しGMは遅かれ早かれ苦言を呈しに来るだろう、もしかするとやりたい事を妨害されるかもしれない」

キョウヤが予想するGMの動きに一同が頷く。

「となれば、逆に復活させることがすでに決まった事としてGMに対処させたらどうなるか。運営は復活のリスク軽減に努めるはずだ、そうなれば私たちとよく話し合っつて方策を練っていく方がよっぽど合理的だと判断するだろう。GMは味方にするところ以上ないバックアップになる」

「AVALONの決議、かなり急いでるなと私も思いましたが、それは運営に関与させる隙を与えないため？」

エミリアはここ最近のキョウヤがやりたい事を決めてから行動す

る速さには違和感を感じていた。

「うん、彼らはどこで聞いているかわからないね。今はまだBUILED DIVERSの声の下火でアンチの声も大きいから見逃しているのか、気が付いていないだけかどちらかは分からないが、ともかく彼らは油断している。そこで我々の影響力の高さを利用して一般ダイバーを味方に引き込む、皆がELダイバー・イヴの復活を望むとなれば必ず運営はその声を見無視できない。そうしてGBNを守る事とダイバーの大きな一つの声両方を天秤に乗せて考えたくない運営は、さも好意的である様に私たちの手助けをするだろう、リスクを少しでも軽減する為に。それともうすでに始まってしまった事、多くのダイバーの意思だからと言い訳を使って、それでもなお全力で対応したと言ひ張れるように」

「……おお、流石チャンピオン」

カザミはキョウヤの周到な説明に感激した。

しかしキョウヤが珍しく黒い計画を実行しているのを見て、彼を知っているトリー・カルナ・エミリア・ヒロトはそろって首を傾げた。四人は感じていた、やけに準備が良すぎると。

そんなキョウヤエミリアはおずおずと質問する。

「隊長、今までの話自分で考えたんですか？」

「……何の話かな？」

エミリアの質問にキョウヤは一瞬頬を引きつらせて、すぐ笑顔に戻った。

その様子で彼女はこの作戦を考えたのは誰かを何となく察して、ホッと溜息をついた。

「……ですよ、まったく驚かせないでください」

「何も言っていないじゃないか」

「ああ、分かっちゃったー、なるほど、びつくりした」

「だから何も言っていないじゃないか、私が考えたことかもしれないだろう……!」

「はいはい、かもしれないかもしれない」

カルナとエミリアがこめかみを引きつらせる様子を見て、キョウヤ

は頭を搔くと

「黙ってて悪かった、でもさつき言った通りどこで運営が聞いてるか
わからなかったんだ、今日はトリーさんが来てくれてよかったよ」

「もう察したから言わなくていいのに、隊長はこれだからな……」

「世話が焼けますね、ホント。ああ、BUILD DIVERSの皆さん、
ダイバーの取り纏めの事は私たちに任せておいてください。誰と
は言いませんがかなり頭の回る人が動いてくれてるみたいです、万事
うまくいくでしょう」

「お、おう、お願いしていいなら」

カザミが身内にチクチク言われているチャンピオンに少し夢を失
いながら頷く。

エミリアは一つため息をつき、今日の情報交換の締めに入った

「色々驚くことはありましたが、同盟前の情報交換はこれで終わりに
します。以降は運営の動きに注意しながら誘導して、あちらを引きず
り込んでからですね」

「……本当にいろいろお世話になります」

BUILD DIVERSとしては結局AVALONに頼りきり
になってしまう事実にも、ヒロトは深く頭を下げた。

同調して他の三人も頭下げる。

エミリアはそんな四人の様子にクスリと笑うと

「いいのよ、気にしないで。私たち真剣だけど楽しんでるから」

「でかいイベントってわくわくするよなー！ねえ、隊長もなんか言っ
たらどうですか？」

「ん？そうだなあ。……君たち以外誰も聞いてないしログにも残らな
いんだ、同盟への決意表明代わりに言っただけじゃあおうか」

キョウヤは周りを見渡して、小さく笑った。

「私が言える事ではないけどね。僕は実は、大の為なら小を切っても
仕方ないって考え、好きじゃないんだ」

チャンピオンとしての考えではなく、クジヨウ・キョウヤ個人の考
えを聞いたのはヒロトは初めての事であった。

第二次有志連合戦でサラを切る決断をした事について、キョウヤは

未だに思う所があった。すべてが終わった後も彼女は彼の事を責める事はしなかった。

イヴを救い、あの戦いの裏で犠牲になっていたヒロトを救いたい。コーイチの話を聞いてすぐに考えていた事だ。何より二人の為にもなる、そしてそれができた時あの事件はようやく自分の中で決着する気がした、カルナとエミリアの二人も偶には我儘を言えればいいと、背中を押してくれた。

「だから精一杯応援させてもらおうよ、ヒロト、BUILD DIVER S。一緒に奇跡を起こして見せよう、道は困難だが私たちには必ずできる」

「はい、一緒に頑張りましょう……！」

ヒロトが力強く返事をする、キョウヤはその手をガシツと掴んで握手の形に持っていく。

手を掴んでくると思つてなかったヒロトは目を白黒させ、カルナはその様子に呆れて言う。

「隊長、そこはカザミさんと握手すべきでしょうに」

「あ、間違えた」

そんな締まらない最後から数時間後、BUILD DIVERS II AVOLON同盟が正式に結ばれた。

暗闇の夢から

真っ暗で何も無い空間でヒロトは佇んでいた。

ここはどこだ、当然そう考えながら、辺りを見渡す。

闇は深く、何も見えない。

それでも誰かいると感じた。

目の前を、歩いている。

知っている誰か、懐かしい誰か。

「イヴ？」

返事はない、だが確かにいる、前を歩いている。

彼女は自分に気が付いていないのか？どこに向かっている？

「イヴ、待ってくれ、どこに行くんだ！」

いつの間にか彼女との距離がグツと離れてしまった。

走って追いかける、追いつけない。

その先に進んではいけない、ヒロトは自然にそう感じた、もうすでに分かっていた。

「行くな！イヴ！この先には！——！」

「!?……イヴ？う、わっ……」

ヒロトは冷や汗の不快感で目が覚めた。

背中がべつとりと濡れている、頭がぼんやりしてるのに奥の方が痛かった。

「……夢？」

随分生々しい夢だった、ヒロトは体を起こして頭をガシガシを掻いた。かなり昔に似たような夢を見た事がある、イヴが苦しんでいる夢だ。

「弱気になってどうする……！」

もう諦めないと決心し、行動して、ようやくグツと前に進むきつかけを掴めたというのに。

ヒロトは自分を叱咤しながら、立ち上がった。

洗面所へ向かおうとして歩き出す。ふいにぐらりと足の力が抜け、普段作業している机に身体を軽くぶつけた。

「痛っ」

机の上で立っていたコアガンダムがカタンと軽い音を立てて倒れた。



「よお、ヒロト!」

「カザミ。機嫌がいいな」

その日の夕方、ヒロトがGBNにダイブすると、カザミが数秒と立たずに近寄ってきて声をかけてきた。

カザミは見るからにハイテンションで挨拶も機嫌のよい声だった。

「そりゃ良くなるって、当たり前前だろ?」

「……何で?」

「あん?……お前コメント欄見てねえのか? まあ、見てみなって」

カザミがウィンドウを操作して件の動画のページを開きコメント欄を表示させて、ヒロトにグイッと押し付けた。

ヒロトが一步下がってそのウィンドウを覗いてみると、コメント欄の流れが以前とは大違いだった。

『過去の動画見返したけど、ヒロトすげえ、良くあんな立ち回りできるな』

『ガンプラは彼女と一緒に作ったんだろ? まさしく、愛(の結晶)だ!』

『イヴちゃん可愛い、お付き合いしたい』

『他のELダイバーはどう思ってるの? 気になるんだが』

『チャンプは悩んでいる仲間をもっと早く見つけるべき』

『ELダイバーを助ける組織ってもうあるんでしょ? 運営何してるの? 怠慢じゃね?』

『動画ちゃんと見ろよアンチ勢、声がマジじゃん。聞けば妄想じゃないってすぐ分かるだろ』

『AVALONに入れたのなら素行に問題はないって証明できるな。今もチャンプが応援してるくらいだし、変なダイバーじゃないべ』

『ガンダムX大好き人間として、一途な男子はいつでも応援する。そ

んな俺の愛機は勿論ドートレス」

『(たかがオンラインゲームでガチの悲劇はいらないです)』

ザっと見るだけでもこんな内容がヒロトの目に入った、しつこくヒロト達を否定・罵倒していたアンチはどこかに消えてしまったようだ。

AVALONとの同盟が結ばれて半日と少ししかたっていない、影響力があるのは分かっていたがまさかここまで。ヒロトは目を丸くして驚いた。

「すごいなこれは、うわ」

「だろ。……どうした？」

「いや、メッセージが凄い量届いてる」

大量のメッセージがヒロトのメッセージボックスを圧迫していた。流星に全てを今確認する気にはなれなかったが、適当に選んで中身を読んで、それを十回ほど繰り返す。

ヒロトが確認した限り動画のコメント欄と雰囲気は一緒だった。

「応援メッセージばかりだな」

「AVALONマジすげえな、ってかホントにまだ一日経っていないだよな……?あ、チャンピオンのコメント固定したほうがいいな」

カザミは驚愕と感動に包まれながらボーっとコメント欄を眺めている。

ヒロトも更に他のメッセージを確認し始めて、二人ともつい押し黙ってしまう。

受信メッセージの中に『イヴちゃんを紹介してください、お付き合いしたいです』などと書かれた物を見つけた。それを即削除したヒロトの指の動きに一切の迷いはなかった。

「ヒロト、カザミ」

「お待たせしました、コメント欄凄いですね!」

パルとメイが近寄ってくる。

パルは少し興奮した面持ちで、尻尾を嬉しそうに振っていた。

「こりや期待するしかねえよな!」

「うん、あ、エミリアさんからもメッセージが来てるな。経過順調、こ

のまま待機されたし。らしい」

カザミがパルの言葉に笑って返事をし、ヒロトがエミリアから来たメッセージを見つけ出して読み上げる。

彼女からの簡単なメッセージに疑念の余地もなく、三人は頷いた。

パルは首をかしげて、今日の予定を問う。

「今日はどうしましょうか」

「待機してる間に奇跡について、もっと方法を詰めておきたいが……」

メイは答えながら、何ができるかを考え始めた。

ヒロトは今日見た夢の事が気になっていた。彼は学校に居る間もあの夢に何らかの意味があったのではないかと考えてはいたのだが、妙に生々しい感覚を覚えたが同時に良く分からない夢であり結局自分だけでは冷静に分析できずに終わった。

「ちよつと相談したい事がある、皆聞いてくれるか？」

「あ、やっぱり様子が変わだとは思ってたんだよな」

悩んでいることを打ち明けたヒロトに、カザミは自分の感覚が正しかったと確信を得た。

ヒロトの方もカザミから何かを伺うような目線を向けられている事に気がついては居た。

パルとメイは迷いなく頷く。

「では、そうしましょうか」

「いつもの場所です——」

「BUILD DIVERS、応援してるぞー！俺も探してやるからな——」

「おお？おう、応援感謝するぜー！」

メイの言葉を打ち消す形で大きな声で四人に見知らぬダイバーから声援が届く。

カザミは一瞬戸惑ったが、大きく手を振ってこたえた。

「行くか」

「ああ」

メイが少し嬉しそうにしながら三人を促し、ヒロトが頷いた。

会った事の無いダイバーだったが、その声はBUILD DIVER

RSの背中を力強く押ししてくれた。

四人がいつもの様にブリーフィングルームに移動し、それぞれが定位置に着く。

三人がヒロトに視線を向けると、彼もどう話したものかと戸惑いながらではあるがともかく説明を始めた。

「実は妙な夢を見て」

「夢？姉さんの？」

「ああ」

ヒロトの頷く様子に、メイは首を傾げた。たかが夢か、と笑う人間はここにはいない。

以前ヒロトにはイヴに関してのみニュータイプじみた感應能力があるかもしれないという話があった、今回の夢もこれからの行動のなんらかの助けになる可能性がある。

彼が説明しにくそうにしているのを見て、メイはともかく最初の切り口になればと思いつく質問を試してみる。

「何が見えた？」

最初の質問にヒロトは首を振る。

「何も見えなかった、暗すぎて。でもイヴは居た気がする」

「暗い、か。姉さんはどんな風だった？」

カザミはボードに暗い場所にイヴが居ると感じるような夢を見た書き込む。

パルが真剣な顔で見守る中、メイの質問はさらに続く。

「歩いて行った、奥の方に。……そんな風に感じただけなんですけど」

「止めたか？」

「……声はかけた、でも俺が居る事に気づいてないと思った。走って追いかけたんだけど、追いつけないまま。目が覚めた」

カザミは更にイヴは暗闇の中、奥へと進んでいった。ヒロトには気付かず、追いつけなかった。とボードに書き込む。

ヒロトは眉根を揉みながら、三人に申し訳なきを感じた。

「すまない、このくらいしか分からない。でもなんだか嫌な感覚がして」

「構わねえよ、なんか如何にも意味ありげじゃねえか」

「……例えば、イヴさんからのヒロトさん当てのヘルプコールであるとか」

パルが首をかしげながらではあるものともかく仮説を立てる。

メイがその仮説に首をかしげ、疑問点を突いた。

「そうだとしたら、ヒロトの声に応じるなり、止まるなりするのではな
いか?」

「……確かに、じゃあ今の仮説は無しですね」

メイに仮説をすぐに打ち崩されたパルはすぐに引き下げた。カザ
ミはイヴさんのヘルプコール説×とボードに書いた。

四人はしばらく押し黙ったが、メイがふと口を開いた。

仮説が思いついたわけではなく、彼女がしたいのは今の状況の確認
つもりだったが、有る事に気が付いた。

「誰かがこの夢をヒロトに見せたとする。だが状況からすると見せた
のは姉さんじゃない。……姉さんが危機だとヒロトに伝えているの
か?」

「つてなると見せたのはイヴさんのこと知ってる誰かって事か?」

カザミは首をかしげて今の状況からくる疑問を浮かべた。

パルは顎に手を当てると、更に仮説を立てる。

「動画を見た人は多すぎるので考えないとして、イヴさんが危ない事
に気づく人。サラさんとか?」

「ありそうだけど、だったら直接言うだろ」

「……ですよね、僕も言った瞬間にそう思いました」

カザミの筋の通った反論に、パルは苦笑いした。

ヒロトはそんな会話を聞いて、とりあえずイヴの事を知っている人
を並べていこうとしたが、また新しい事に気が付く。

「イヴを知っていて。……ん?俺の事もよく知っている人だな、じゃ
ないとおかしい」

「あー、言われてみればそうだな、お前に見せてるくらいだしな」

「カザミ、メイ、パル、ヒナタ、フレディ、マサキさん、リク達の誰か、
キョウヤさん、カルナさん、エミリアさん、トリーさん」

「全員直接言えばいい人間ばかりじゃねえか、夢で伝えるってなんでそんな回りくどい真似を」

カザミの発言にヒロトは何か引っかけかりを覚えた。

「……直接言えばいい？夢で伝える？」

「どうしたよ」

「いや、もしかして話せないんじゃないか、その誰かは」

「だから夢で教えて来たって？そんな知り合い俺たちに居たか？」

話せない誰かで、イヴとヒロトの事をよく知っている、イヴの危機を夢で伝えてくる程心配してくれている。その条件に当てはまるように考えた時、ヒロトの背筋にゾワツとした感覚があった。

心当たりが一つだけあった。そうだとしたら、強い危険がイヴに迫っているかもしれないと感じた。

「コアガンダムだ」

「あー！」

パルが思わず声を上げた、今までの話が全部繋がって一気に納得がいったからだ。

メイとカザミは思わず首をかしげるが、すぐに納得して頷いた。

「そりゃあ、ヒロトの事もイヴさんの事も良く知ってる訳だ。心配してるのもおかしくねえな」

「ならコアガンダムからの警告か、これは」

「コアガンダムはイヴが危険な状況だと俺に教えてくれたのかもしれない」

パルはコアガンダムが伝えたい事を理解するべく、もう一度状況を確認する。

「……イヴさんどこかに歩いて行ったんですよね、その先が良くない？」

「先に何があったか分かるか、ヒロト？」

「いや、暗すぎて何も見えなかったから……、でもイヴが危ないという感覚はあった」

「なあ、警告とか置いといてコアガンダムもなんかしたいって思ってるんじゃないかねえのか？」

カザミは気持ちの赴くままに動かせずにいるイージスナイトの事を考えながら、予想を立ててみる。

コアガンダムはヒロトの手によって作られたが、更にその完成度を高める事が出来たのはイヴと過ごした過程があつての事だ。

「育ての親みたいなものだろ、イヴさんつて。コアガンダムからしたらよ」

「……あー」

ヒロトの脳裏に蘇ってきたのは、イヴが最後にコアガンダムに自身を撃たせた瞬間だった。

あの時苦しかったのは、戸惑ったのは、自分だけではない。コアガンダムだつてそうさ。

「今更気づくなんて……！」

「何言つてんだ、今気づけたじゃねえか。上等だろ」

ヒロトが思わず自分を責めると、カザミは呆れた様に首を振った。

「ガンプラの気持ちに気づける奴つてそう居ないと思うぞ」

「……コアガンダムも活かせる手段か、考える事が増えたな」

メイはそう呟いて、顎に手を当てた。

パルの方は奇跡を起こす時の事を考えながら、その具体的な手段がまだあまり決まっていけない事を前提にしてコアガンダムを活かす事の出来る環境を考える。

「コアガンダムが居るなら、広い空間じゃないとダメですよね」

「……広い空間。宇宙とかか？」

「奇跡についても人の想いを乗せたGN粒子かサイコフレームを集める話でしたが、どうやって粒子を散布して集めるんだ」

「あー！その辺全然考えてなかったー！」

カザミは言われてから初めて思い至ったのか大きく叫んだ。

パルは苦笑しながら、頬を搔く。

「僕達奇跡を起こすつて目標はありましたけど、具体的な手段考えなかつたですね」

「AVALONの力を借りれた以上、もう現実味が出てきている。今になつて何のプランもありませんとは言えないだろう」

「その問題もあるが、コアガンダムの事も考えてやりたい」

「うおおおおおお」

三人とも次々に問題や要望を上げていき、どれもこれもが結構切迫していることにカザミは大きく呻いた。

「奇跡の計画もコアガンダムの事も必要ある事は全部やりますオフ会！決行するぞ！おー！」

「おー！」

「おー！」

やる事の多さとその複雑さに半ばやけくそになったカザミからの提案に、三人はともかく腕を突き上げた。

オフライン会議

「やってくれたな、キョウヤ」

「こうなってしまうては成功させるしかないですね」

「ふん、よくもまあ言ってくれる。こちらでELダイバー・イヴの探索を行っては見たが望みは薄いぞ」

「最初から後者が本命ですよ」

「当てはあるのか?……まさか本気で奇跡を起こそうとも言う訳じゃないだろうな?」

「そのつもりです」

「馬鹿馬鹿しいな、できる訳がない」

「そうでしょうか? 実際、我々は奇跡を起こしている」

「ブレイクデカールの渦中か、ELダイバーサラに対する話か。あれがもう一度起こせるとでも? 見える脅威もないのに人の意識が集まるといふ認識は浅はかではないか?」

「脅威に集中させる事だけが人の意識を集める方法ではありませんよ、それに私が言っているのはその二つの話じゃない。もっと前の話だ」

「何……?」

「そしてカツラギさん、貴方もその奇跡を起こした一人だ」

「……?」



オフ会を開催する事になった週末、4人だけで話せる場所をパルが用意してくれた。

コアガンダムに関する作業をするだけなら最初からG-CAFEでいい。しかし、今日話す内容は奇跡を起こす為の手段についてが主。そんな話をしていたら他の客からほぼ確実に変な目を向けられる事になるし、そもそも騒めいた煩わしい環境で話すべき事でもない。

パル自身から自分が会議に適した場を用意すると案を出し、メイは素直に頼る事に決めた。対してヒロトとカザミは思わずその時の出

費や面倒を考えて遠慮したが、仲間に遠慮するんですかと彼にしよんぼり気落ちされて口を塞ぐしかなくなった。

「うわ、高そう」

身も蓋もない表現がカザミの口から飛び出したのは、彼からしてみると仕方のない事だった。

事前にパールから場所を聞いて、ネットで位置と外見を見ただけでも一室貸し出しの値段が見たくなくなる面構えをしたビルだった。

自分の小遣いだとこの部屋を30分も借りればいいほうだろうと予想できるくらいには、会議室内の設備も整っている。件の事を話し合うにはこれ以上ない空間なのだろうが、変に緊張してしまいそうだ。

隣に居るヒロトは何も言わずにはいたが、うわあ……と内心結構戸惑っているのが透けて見えた。滅多にない間抜け面を晒している。

「いい場所だ、ありがとうパール」

メイが端的に礼を述べた事に雰囲気によられていた二人はハツとして続く。

「パールさん、ありがとうごさいやす！」

「助かるよ、パール」

パールはあはは、と苦笑する。

「僕も適当に用意してって言っただけなんですけど……、まあ遠慮せず使いましょう」

当のパールの方もここまでとは認識していなかった。

普段ならカザミがツツコミを入れそうな発言であったが、今も雰囲気のにまれているのか、多少は上品に振舞う事に決めたのか、今日はそういう事は無かった。

ヒロトとカザミが荷物を置いて椅子に座る中、メイはパールの肩から机の上に飛び移り、適当に位置を変えてそのまま座り込もうと動く。そんな彼女の動きを予期していたパールは、すかさずカバンから精巧な椅子のミニチュアを取り出して机の上に置いた。

「メイさん、こちらにどうぞ」

「……感謝する、パール」

「いえ、ピッタリでよかったです」

メイが座る事を前提にして作られた椅子は、彼女の身体を傷つけないように細心の注意を払われて作られた物だった。

椅子に座ったメイが感動している間に、パルは備え付けの机まで用意する。

以前G—C A F Eでメイと出会った時メイが机の上に適当に座ったりしていたのをパルは覚えており、次回があるなら何とか彼女が居心地のいい様にするつもりだった。

「こつちも良ければどうぞ」

「おお……」

「では、皆さん始めましょうか」

パルの至れり尽くせりの対応にメイが言葉を失う中、彼は微笑んで会議の開始を宣言した。

カザミはパルの流れるような紳士対応に開いた口が塞がらない。ヒロトも他人事のように感心していたが、イヴが無事復活してモビルドールで生活するようになったならこういつた配慮が必要だと気が付く。彼の安堵の言葉から椅子も机もパルが制作した物に違いない筈だ。

ヒロトは紳士的立ち振る舞いの一片をパルから学び、これから先も色々見習える点多そうだと素直に感じた。

「ああ、始めるか」

「お、おう」

「おお……」

机を触っているメイはまだ少しの間感動が収まらない様であったが、会議はスタートした。

パルは手を上げると、まず今回の最初の話を何にするか決めに行くために発言する。

「先にコアガンダムに教えてもらった事でしようか？」

パルが首をかしげて言うのと、メイがハツとして感動を振り切り同意する。

「……コアガンダムが何を伝えたいのを考えて、それから奇跡の手段

を模索した方がいいと私も思う。先に奇跡の件を考えても、コアガンダム
の警告内容の解釈よっては水の泡になりそうだ」

「賛成ー」

「俺も賛成だ」

ヒロトは賛成しながら自身の荷物からコアガンダムとネプチューン
アーマーを取り出して、机の上に置く。

急に語り掛けてくることはないだろうが、会議の場にはいて欲しい
とヒロトは思ったからだ。

カザミはアーマーの方を見て首をかしげる。

「お、ネプチューンも持ってきたんだな」

「ああ、なんだか目に入ってた。特に何か考えていた訳じゃないんだ
が」

ヒロトが今日ネプチューンアーマーも一緒に持っていてこうと考え
たのは、本当に何となくであった。

「そのアーマーは元は姉さんの為に考えたのだろう、ならばこの場に
必要なくらいではないのか？」

「イヴさんを助ける話をする為に今日集まるつもりでしたから、その
子も連れてくるのは自然だと僕も思います」

「ありがとう、二人共」

そんなヒロトの何となくに、メイとパルが自身の解釈を述べる。

ちよつとした自身の発言にも良い理由を見つけてくれる二人に、ヒ
ロトは微笑んで感謝した。

カザミはネプチューンアーマーを皆で作る時の努力を思い出しな
がら、そのアーマーの着想の理由に目を向ける。

「銀河の向こうまで行きたい、だったか。イヴさん、エルドラに帰りたい
気持ちとかあったのかなあ」

「……どうだろう、少しはそういう思いもあったのかもしれないな」

カザミの言う通り、イヴのあの時の様子は少なからず望郷の念が含
まれていた様にヒロトは思えた。

そんな風を感じていると、マギーが言っていた実質告白みたいなも
の、という一連の話まで思い出した。思わず微妙に顔が熱くなる。

カザミはそんなヒロトの様子に目敏く気が付いた。

「お前なんで顔ちよつと赤くなってるの？」

「……ちよつと待ってくれ、何でもないんだ」

「一々隠し事するな」

妙な事を思い出してしまった、とヒロトが必死で隠そうとするとメイがすかさず指摘する。

メイの指摘に他の二人もうんうんと頷く、だが今思い出した内容をサラッと口に出せる程ヒロトの羞恥心は死んでいなかった。

「いや使えない情報だから、ホントに」

「僕は以前から本当に常々思ってたんですけど——」

パルはニコツと笑う。しかし伴って吹き出してくる圧は尋常ではないとヒロトは感じた。

「ヒロトさん、一人で勝手に結論付けるのやめられませんか？」

「……ごめんなさい」

ヒロトはパルから見える怒りに少し怯えて謝りながら、でもこれホントに言うの？と強く葛藤する。

そうやって迷ってる間にパルからの圧力がさらに増した。噴火数秒前だ、ヒロトは肌で感じ取り、もはや言うしかなくなった。

「……マギーさんと、ネプチューンアーマーについて話した時があったんだが」

「……？」

今までの会話ではまったく考えてない人名が急にできて、三人が首をかしげる。

「二人で一緒に銀河の向こうまで行きたいって、そういうイヴの発言が発想の元だったってという話をしたんだ。それを聞いたあの人は、それが仮にできたとしてもものすごく時間がかかる、そんな長時間二人つきりで居たいって言うなんて告白みたいなものだって。……あのさ、まだ言わないとダメか？もういいだろ？その時思った事まで説明する必要あるのか？」

「……あー」

もう限界と、ヒロトは顔を両手で隠して俯いた、イヴがどう思っ

その発言をしたのかは本人に聞くまでわかる事ではない。だが今になって好意をはつきりと自覚した彼にとって、あの時のマギーの発言は本当にいろいろ心に来るものだった。

パルとカザミは、ヒロトが隠し事をしている事に少し怒っていたが、一転してかなり申し訳ない気持ちに切り替わった。

メイは、うむ、と頷く。

「姉さんはよほどヒロトの事が好きらしいな」

やめてやれ！とカザミは静止しそうになったが、そもそも自身が口火を切ったような物なのでどういったものか言いあぐねた。

ヒロトがしばらく立ち上がれない心境にまで追い落とされたが、メイの方は気にしていない様だった。

「叶えてやりたいな、その夢」

「まあな……」

「そうですね」

カザミは頷く。ヒロトの羞恥心をくすぐった事に対しては罪悪感はあるが、メイの呟いたことに心底同意できるものであった。パルも同様の気分で頷きながら、ぼんやりと考える。

「銀河の向こう、まさに星の海ですね。GBNで再現できるものではないでしょうか……」

「全ては無理だろう、ある程度の範囲なら再現可能だろうな」

「……運営に手を貸してもらえらるなら、なんか適当な理由つけてそれっぽい空間作れねえかな」

メイが妥当な考えを述べ、カザミも思い付きで発言し始める。

パルはカザミの厚かましく聞こえる発言に苦笑する。

「カザミさん、それは我儘が過ぎますよ、手を貸してもらえらるなら——」

「えー、そうかあ？」

カザミはパルから諫められてもなおも首を傾げた。

「イヴさんはGBNを守ってくれたんだろ、運営も礼の一つはするのが筋じゃねえの？」

「……！」

カザミの反論は個人的な感想に近かったが、パルは思わず黙り込む程考えさせられた。

いつの間にかイヴの夢についての話が始まりヒロトは自分の顔を隠しながら聞いていたが、彼のその発言で熱が冷めて頭を起こした。

メイはカザミの発言に頷く。

「世界一つを守ったのに報酬がない、こうして考えると不自然だ。良いことに気が付いたな、カザミ」

「お、素直に褒められるのは珍しいな」

メイからの賛辞にカザミは嬉しそうに笑った。

「復活が上手く収まったらそのまま報酬も頂こうぜ、ちよつと空間借りるだけだし、別にいいだろ」

「今回の件に紛れさせるなら、復活させる場所は宇宙、環境は星の海と設定しよう」

「いいですね、きつとコアガンダムもアーマーも喜びますよ！」

「……」

三人が盛り上がっている中、ヒロトは一人置いて行かれている気がした。

イヴを復活させたいという願いは、仲間の中の誰より自分の方が強い気持ちを持っている。その筈なのに、この会話はなんだか着いていけなかった。

顔を上げたが黙り込んでいるヒロトに、三人も気が付いた。

なんだか暗い表情をしているな、とカザミは感じた。

「イヴさんが戻ってきた後の事、お前も考えとけよな、ヒロト」

「……ああ」

カザミ言われて気が付いた、自分はイヴともう一度会って、聞きたい事を聞いて、見せたいものを見せた後に何がしたいのか。一緒に居たいとは思って居るが、その具体的な様子まで考えていなかった。

メイは首をかしげ、ヒロトに聞く。

「姉さんに想いを告げないのか？」

「そのうちには」

「それは何時だ？躊躇する意味はあるのか？姉さんの態度は脈ありと

「いう奴ではないのか？」

「……ちよつと待つてくれ」

メイの疑問は次々に続く、最後の表現は恐らくマギーから聞いたのだろう。

ヒロトが呻いてメイを制する様子に、カザミはニヤリと笑つてパルの方を向く。

「俺絶好の機会を思いついたんですけど。星の海で告白つてのは、いかな物なんでしょう？パルヴィーズ先生？」

「急に何ですかその呼び方……。でも、僕は素敵だと思いますけど、雰囲気がいいですね」

「雰囲気は大事だとママも言つてた、絶好のチャンスではないか」

「三人共……」

三人揃つてヒロトの背中を押し始める。

カザミは少し面白がつているが、ヒロトとイヴに上手く関係を再構築して欲しいという気持ちは皆一緒だった。二人が別たれた時の状況があまりに悲しい物で、過去を乗り越えて気楽に笑う二人を見たかった。

その真摯な思いは、ヒロトに届いていた。

「話が凄いい逸れて来てるぞ」

「……そうだな、話し戻すか」

気恥ずかしさを押し殺したヒロトの指摘に、カザミは肅々と頷いた。

「ありがとう」

呟かれた言葉は凄く小さな声だったが、三人にはしつかり届いていた。

何の為に泣いたのか

「コアガンダムの警告の意味について、何か考えがある者は居るか？」
脱線した話を元の話に戻す為、メイはまず最初に意見を募った。

カザミは唸りながらともかく思い当たった疑問を言う。

「あー、そもそもなんでコアガンダムはイヴさんが危険だって報せて来たんだ？そりゃ心配してくれてるのはあるだろうけどよ」

ヒロトも彼と同じ疑問を浮かべていたので、頷いて自分の見解を述べる。

「イヴが、……現状好ましい状態でないくらいは俺、いや皆も分かっている事だ。それを踏まえて危険を伝えている、ということになる」

「……真つ暗な中、良くない場所に向かっていている気がする、ですよね」

コアガンダムの警告内容を推測しようと四人の意見が集まってくると嫌な連想にヒロトが行き当たる。

ヒロトは苦い感情に捕らわれながら、一つの推測を口にする。

「イヴにはもう時間が無いのかもしれない」

「……つまり急げって事だよな。……？いやでもAVALONにも力を借りれたし、むしろ今のところ好ペースなくらいじゃねえの？」

もしかしたらタイムリミットが近づいているのかもしれない、ヒロトの言葉にカザミも思わず苦い感情に捕らわれる。だが、ふと今の現状を思い出し、これ以上早く進む手段があるのかとカザミは首をかしげる。

パルもカザミの疑問点に同意する。

「カザミさんの言う通り、今の僕達って決して遅い事は無いですよね」
「軌道に乗り始めた処ではあるが、動き始めた当初から比べたら差は歴然だな」

メイも頷く。そんな三人の様子を見ながら、ヒロトは2年以上も前に消えてしまったイヴを取り戻そうと足掻いている現状を再認識し、思い直す。

「いや、俺に遅いとコアガンダムが伝えてきたというのはやはり変だな。伝えられるまでもないんだ、俺が遅い事なんて」

それは自分に対して呆れている様な言葉ではあった。しかし彼の顔に自己否定の色は微塵も無い。気にせずに足掻いてやり切るとも決めたのだから。

「……イヴを助ける事に時間制限があるという解釈は間違っただ、自分の推測をすぐに返す事にはなるが、そういう気がしてきた」
「へー、ちよつとはマシな顔するようになったな。……ま、そんなじゃあ考え直しだな」

ヒロトの顔を見ながら、カザミは感心して彼の意見に頷く。パルとメイもヒロトの前向きな変化に好感を抱くが、あまりその点を指摘すると話がまたズレてしまいそうな事もあり、黙って頷くだけに止めた。

コアガンダムの警告が意味する所を理解しようとして四人が思案にくれる。そうしている内に、場の空気に翳りが見え始めた事にパルが気づいた。

「コアガンダムもイヴさんの事絶対助けたって思ってる筈ですよね？」

「ああ、そうだろうな」

メイがパルの言葉に頷いた。

「なら、今のままでと失敗するかも。なんて否定的な報せは不自然じゃありませんか？」

「……まあ、弱気になっても仕方ねえよな」

場の空気を読んだパルなりの気遣いに、カザミはご尤もと苦笑しながら答える。それを察したヒロトもネガティブな思考を一度仕切り直し、明るい解釈の流れに乗る。

「じゃあ、イヴの復活は上手くいくとコアガンダムは感じている、という事にしよう」

「……なるほど、復活した後に対して警告を向けているかもしれないと言う事だな？」

「ああ」

「戻ってきた後かあ。あー、……気を抜くな！とかか？」

カザミは話を聞いてともかく思いつくことを口に出す。

パルはカザミの思い付きに頷きはするが、すぐに首を傾げた。

「あ、確かにそれらしいですね。……?……でもイヴさんが戻ってきてくれたら、後はモビルドールに入ってもらうだけですから、そこまです危険は——!?!」

無いと思いますが、とパルが言おうとして言葉が遮られた。ガタンと、ヒロトが音を立てて立ち上がった事に驚いてしまったからだ。

他の二人も同様で、目を丸くしながらヒロトに視線を向ける。

「イヴは——戻ってこないかもしれない」

「……いやそれはさつき否定したばかりだろ」

ヒロトの言葉にカザミは先ほどの時間制限の話の思い出ししながら反論する。

だがヒロトは強く首を振る。

「違う！戻ってこない事を選ぶかもしれないだ……コアガンダムの警告はこういう事だったのか……!」

「何?……ヒロト、分かるように話してくれ」

「……ああ、すまない、俺が考えた事は——」

ヒロトが話を聞く中、三人は徐々に彼の言わんとすることを理解する事が出来た。

パルが最終的にはモビルドールに入るというゴールを示した時、ヒロトの脳裏を過つたのは、忘れもしないイヴとの別れの間際。

イヴがシステム自体に干渉して外部からコアガンダムを操作し、彼女自身を撃ち抜かせた瞬間だ。あの時のイヴの言葉は当時のヒロトからすれば意味が分からないものだらけで、会話はほぼ成り立っていなかった。

それは当時の彼女が、身体的にも精神的にも追い詰められていた事を示している。

それでもなければ、イヴはヒロトに消されたいと望まない。

それでもなければ、二人で作り上げたコアガンダムに、自分を撃たせない。

彼女が涙を流していたのは、別れたくない気持ちとヒロトとコアガンダムを追いつめてしまった自分を責める気持ちが入り混じっている。

たのではないか？

イヴの身体が無く、精神が散ってしまっているのは、ある意味幸運ですらある。彼女に自分で自分を消す力が今はないからだ。恐らく彼女が自分を取り戻した時、かつてのヒロトとコアガンダムへの仕打ちを悔いて、改めて自身を強く責めるだろう。

消えてなくなりたい気持ちだが、自分を追いつめる気持ちがどんなものか——かつて引き金を引いてしまったヒロトは苦しい程に良く知っている。

コアガンダムは彼女の心に触れ、知った。真つ暗な中でイヴが何か良くない場所へと足を進めていく夢は、彼女の心の行末を示した、ヒロトへの強い警告だ。

そしてそれは、彼女を助ける最後のチャンスだと、同時に伝えてもいた。

カザミは全てを聞いて、敢えて明るく笑い飛ばす。

「んだよ、色々聞いたけどやる事は結局変わらねえ。……助けに行く！そうだろ、ヒロト？」

「ああ、もう迷わない！」

「そう来なくてはな」

「僕たち全力で応援しますから！」

三人はヒロトの決意に対し更なる応援の意思を固めた。

メイは更に話を進めていく。

「姉さんを救出する最後の決め手はヒロトだ。私たちができるのはそこまでの膳立てと、後の迎え入れになる。それを踏まえて詰めていくぞ」

「おうー！」

カザミの威勢のいい返事で、さらに議論は加速する。

一連の話が決着を迎えたのは、その数時間程度後の事だった。



「終わったー、疲れたー」

「自分達で考えて言う事じゃないですけど、この計画かなり滅茶苦茶ですね」

「……運営に力を借りる事は、どうあれ必須だったな。まあ、ある程度修正是指摘されるだろうが、ともかく話さなければ始まるまい」

「そうだな、まず先にキョウヤさん達に伝えてみよう。……お疲れ様、皆ありがとう」

「礼は全部終わった後に取っつけ。あー、腹減ったなあ」

時間をまるで気にしていなかった四人が時計に視線を向けると、正午はかなり前に過ぎ去っていた。

カザミのお腹からグウと大きな音が鳴った。

パルはその気の抜けた音に思わず笑う。

「どこか食事に行きますか？この後G—C A F Eに移動して作業、て、あっ」

「勘弁してくれよ、どこ連れていかれるかわかんねえし。テーブルマナーとか俺分かんねえよ」

「時間ももったいないし、適当なファストフード店で食べた方がいいな」

「そもそも私は食べれない」

メイの当然の発言で場が凍った。

パルは自分で言ってる最中にその点に気が付いたのだろう、途中で言葉が尻すぼみに消えた。本来なら言葉にしないで良い事を考えず話してしまう辺りパルも少し疲れていた。

彼女は三人が押し黙った事に気が付いて、その理由を察した。

「なんだ、今更気になる事か？お前たちが食事している間私は車で休んでいれば良い話だ」

「いやそれは寂しすぎるわ、のけ者みたいじゃん」

「余計なお世話だ」

カザミはメイの言葉に首を振って否定するが、メイにとってカザミの気遣いは彼女の忌諱に触れるものであったらしく、クールなメイにしては珍しく眉を顰める。気遣いを受ける様ではそれこそ本当にのけ者ではないか、と少し傷ついたからだ。

ヒロトは不穏な雰囲気を感じ始め、パルはこのままだと口喧嘩になりかねないと焦る。

「落ち着け二人共」

「メイさん、僕はほら、小食なんで一緒に休みましょう、軽食で十分ですし。ヒロトさんとカザミさんはお腹が空いているでしょうから二人で行ってきてください」

「そうだな、行くぞカザミ」

パルの必死の視線にヒロトは一二もなく頷く。ここは二人を一度引き離す事が最善だと彼もすぐに察した。

カザミの腕を掴んで二人の荷物を取ると、足早にこの場から去る。

二人が見えなくなると、メイはため息をついた。

感情を少し荒立てた自分に少し呆れた。どうという事は無いカザミなりの思いやりを、上手く汲み取れなかった事がなんだか複雑だった。

「メイさんも少し疲れていたんですよ、最近考えてばかりですから」

会議が盛り上がる中、興奮が上手く収まらなかったという事もあるだろう。普段ならこんな妙な空気にはなる事は滅多にない。エルドラで出会った当初の雰囲気を見ると、今は本当に上手くやっていているくらいだとパルは考えている。

メイはパルの優しい言葉に頷きながら呟く。

「人間は難しいな」

「そうですね。……僕も長生きしてるわけじゃないですけど、色々な人と接してきたのでわかります」

「何を言う、パルは少なくとも私の5倍以上は生きているではないか」

「あはは、そうでしたね」

パルは会話がひと段落したところを狙って、執事にメッセージを送り適当に食事を買って来てもらえるように指示する。

彼女がカザミの気遣いに対して複雑な思いを抱いていしまう気持ちはパルには少しわかった。身体が不自由であるという大枠だけで困うなら、彼とメイは一緒だったからだ。

食事できるようになるかはともかく、費用や技術の面がクリア出来ればメイの身体の大きさはどうにか出来るだろうとパルは考えた。

「身体、大きくしたいですか？」

「む、当たり前前だ。タクシーすら止めれないんだぞ、この身体は」

「あー、もう懐かしい、そんな事もありましたね」

「とは言っても——」

メイはぴよんと飛んでパルの肩に上り、腰かける。

「こういう事はできなくなるからな、これはこれでいい物だ」

「確かにそうですね。それに小さいメイさんも可愛らしくて僕は素敵だと思えますよ」

「……本当に事あるごとに褒めてくれるな」

パルの淀みない誉め言葉にメイも少し目を丸くする。

彼女はなんとなくパルの頬に手を当てて話す、少しパルについて心配する点があった。

「パルは他人を褒めるが、自分を褒めているか？」

「……え？」

「ヒロトもそうだ、お前たちは他人に優しくいくせに、自分にやけに厳しい。カザミは自分に甘すぎる気がするが、そちらの方がいつそ健全な気がする」

メイは淡々と、少しつまらなさそうに話す。

パルが答えあぐねている間に、メイの話は進む。

「ヒロトは変わり始めているが、すぐには無理だろう。本人もそう言うくらいだからな。お前はどうか？自分に優しくできてるか？例えばママは適当に記念日を作っては、自分へのご褒美と称して美味しい物を食べたり、お酒飲んだりしていたぞ」

「……どうなんでしょうね」

身体が車椅子を必要としてからというものの、そんな事をした記憶がない。自分達を褒める事があっても自分、まして『パトリック』に関しては。パルは自分でも良く分かっていたが、口に出したくなかった。

メイはそんな彼の様子に呆れてため息をついた。

「やはりか、では私がパルを褒めよう」

「えっ、何ですか!？」

「他人は褒めるのに誉め言葉は受け付けないのか？」

「いやそれは」

「だとしても知らないがな、勝手に言わせてもらう」

「あ、もう決定事項なんですね……」

既に気恥ずかしい気分になったとはいえ、手の平サイズのメイの身体を押しつけてしまう訳にもいかず、パルは諦め半分で身構えるしかなかった。

「パルは紳士的、というやつだな。前に初めて会った時も私の服装を褒めたり、小さい身体をうまくフォローしてくれていた、意図もすぐ汲める察しのいい奴だ。今日も椅子を用意してくれたり、机を用意してくれたり、色々と気を回してくれたな、ありがとう。普段から場がうまく回る様に話してくれているな——」

「……メイさん、後どのくらい続きます?」

「私の気が済むまでだ、決まってるだろう。まだあるぞ」

パルはすでに限界が近かった。お世辞の類なら色々厄介な生まれもあり、それこそ耳にタコができるほど彼は聞き飽きている。しかし、メイの場合は全て彼女自身を感じた事をそのまま述べているだけだ、良く知ってる仲間の事なので余計に伝わってくる。肩に陣取られる事もあって当たり前だが声の位置がものすごく近い、声がどこにも逃げずに直接脳にぶつかってくる。

「あ、あの！ヒロトさんも褒めてあげてくださいね。僕の後でいいんで！」

自分と同じ目に遭う人がいたら気が楽だ、とパルは気恥ずかしさと投げやりな気持ちで身近な人間に被害を波及させようとする。性根から優しい彼からすれば、道連れを作ろうとするのは珍しい行為だったが、それもまた彼なりの仲間への信頼感と言えるのかもしれない。

しかし、メイは迷うことなく首を振った。

「いや、しない」

「なんで?!」

無情なメイの言葉に、パトリックではなくパルとしての口調が出てしまう。

「ヒロトには姉さんが居るからな。こういうのは姉さんとやるべき

だ」

「……またマギーさんですか？」

「そうだ、良く分かったな、やはり察しがいいな。恋人を持つ男性に、あれやこれや誉め言葉をかけるな、とか言っていた。まあ今はどうでもいい、続けるぞ」

「はい、お手柔らかに……」

パルは全てを諦めた。執事が食事を持ってくるまでの僅かな時間が、彼には待ち遠しかった。メイの発言はパルを色々誤解させかねないものだし、指摘しようかとパルは思ったが、したとしても通じなさそうなのでやめた。



その一方で、ヒロトに腕を掴まれて部屋から引きずり出されたカザミもため息をついていた。

「あーあ、また言い方間違えちゃった……。この口どうにかならねえかなあ」

すぐに後悔して変わろうと悩める事が凄い、カザミの発言を聞きながらヒロトはそう思った。自分にはここ最近になってようやく出来るようになってきた事ばかりだというのに。

今思った事をそのまま言えばまた怒られるだろうとヒロトは予期して、フォローの言葉を探す。

「思った通りに行動できるのは悪い事じゃない」

「まあ、俺は単純だからな」

ヒロトの気遣いにカザミは苦笑して、礼代わりに彼の肩をポンと叩いた。

「自分で使い分けできないっていうのが結構問題なんだよ、つい口が滑っちゃう」

「カザミも悩むんだな」

「……お前もメイもフォローしてるのか馬鹿にしてるのか良く分かんねえこと言うよな、そこはどうかと思うぜ」

フォローとか純粋な関心のつもりなんだろうけど、とカザミは一人思った。

悩む事は彼にも勿論ある。イヴ復活の件とは別に頭の片隅で常に考えていることがあるのだが、自分だけではなくBUIILD DiVER S全員に当てはまる問題でもある為、どのタイミングで話したらいいのか分からなくなるような事だ。

消化しきれない思いを抱えているカザミを見て、ヒロトも何か彼の雰囲気がおかしなことに気が付く。

「悩みがあるなら、この際話してしまっただろうだ？」

「あー、バレたか」

カザミは頭をガシガシと搔いて、聞かれた以上は悩みを打ち明ける事にする。

「今やってる事とはあんまり関係ねえよ、妙に気に病んだら悪いから、ちよつと黙ってただけで、いずれ話そうとは思ってたんだ」

歯切れが悪いな、とカザミの声を聞きながらヒロトは思う。よほど言いにくい話らしい。

「ほら——エルドラっていつまで行けんのかなあ、ってさ」

「……確かにな」

「あんまり驚かねえって事は、お前も考えてたのか」

「ああ、まあ、少しは」

カザミの悩みは、ヒロトも頭の片隅で考えていた事だった。

GBNとエルドラが繋がった事は、ただの偶然、それこそ奇跡の産物の様な話でしかない。

二人はパルがクアドロンから同様の指摘を受けていることを知らないが、カザミはマイヤと過ごすうちに否応なく考えざる得なくなり、ヒロトは持ち前の状況に対する観察眼が既にこの考えを導き出していた。

「でもこれ、心配になるだけで、それこそ解決策なんて思い浮かばねえだろ」

カザミはヒロトに話しながらも、不安定な現状を打破できる可能性がある人物について内心で心当たりがあった。……イヴなら古代文明に纏わる遺産を理解し操作できるかもしれない、そのくらいの可能性は既に思いついていた。ただそれをやると彼女がどうなるかわか

らないので、カザミはこの手段は口が裂けても言うつもりはなかった。

ヒロトも同様の可能性を考慮していたが、イヴに及ぶ危険性を考えると当然取りたくない手段になる。

「そうだな。……今回の件が終わったらクアドルンさんに聞いてみようか」

「あ、そりゃいい手かもな、なんか知ってるかも」

「フレデイや皆に会えなくなるのは寂しいからな」

「だよな！」

二人が取りたくない手段は一緒だったが、だからと言って諦める気が毛頭ないのも一緒だった。



「ただいま」

「戻ったぜー」

「おかえり、話があるんだが」

ヒロトとカザミが外で遅めの昼食を取り、元の会議場に戻るとメイがパルの肩に座った状態で早速話を振ってくる。

パルはなんだか焦っているようだが、メイに思いつきり頬を押し込まれており、どうやら一応黙らされている様だ。

「パルが悩んでる」

「あー、エルドラに居た時パルなんかおかしかったよな、そういうえば」

「俺もあの時の事は近いうちに聞こうと思ってた、どうしたんだ？」

「ばれへましたか」

ヒロトとカザミは以前エルドラに息抜きに向かった時、一度各々で散って再度合流した際にパルが挙動不審になっていたことを思い出す。パルは自分の表情を隠せていなかったことに、ちよつと呆れて呻くも、メイに頬を押し込まれて変な発音になってしまう。

カザミはそんな様子にけらけら笑いながら聞く。

「隠す気あったのかよ、でどうした？」

「掻い摘んで言うとエルドラに移動できなくなったらどうしようという話だ」

メイの言葉にヒロトとカザミは思わず顔を見合わせ、二人とも同時に吹き出した。

笑い始めた二人を、パルは怪訝な顔で見る。

「いやすまねえ、ちょうど今さっきその話したばかりなんだ」

「すごい偶然だな」

「……お二人はどう思います?」

パルがおずおずとした質問をする、メイの方は腕を組んでなり行きを見守る事に決めたようだった。

ヒロトとカザミは自然と声をそろえて言う。

「諦めない」

「あ」

「ほら、私の言った通りではないか。……待て何故泣くんだ、パル」

「おお、どうした!?!」

パルは首を振って平気だと示す。メイはその肩の上でぐらぐらと揺れていたが、必死でバランスを保ちきった。

「大丈夫です、なんだか嬉しくて、僕も同じ気持ちでしたから」

パルはあの時自分がクアドルンに返した言葉が間違いでなかったことに深い喜びと安心感を得た。感激して少し涙が出てしまったが、すぐに笑顔に戻る。

パルの気持ちを聞いて、メイも微笑む。

「嬉しい涙はいいものだ」

「ええ、そうですね、メイさん。でもこの件は後回しにしましょう」

「ああ」

「じゃあ、G—C A F E行って残りの作業頑張るぞ!おー!」

「おー!」

「おー!」

GMとの出会い

「こんばんは、キョウヤさん」

「やあ、来てもらって済まないな、ヒロト」

やる事全部やるオフ会からしばらく経った日の夕方。AVALO Nフォースネストにある隊長執務室にヒロトはキョウヤから呼び出しを受けて来ていた。

ヒロトの面持ちは固い、今から行う話し合いによってイヴ復活の計画は大きな進歩を得るかもしれない、また大きな変更を余儀なくされるかもしれない。

エルドラを救うためのプレッシャーとはまた別種のもものがヒロトの肩に重く押し掛かっていた。

キョウヤはそんなヒロトの様子を見て気を軽くさせるために笑いかける。

「二度やると決めたら彼は協力を惜しむ人ではない。大丈夫さ、気楽にしていると良い」

「……はい、お願いします」

「じゃあ、始めようか」

キョウヤはヒロトの肩に手を置くと、はつきりとした声でシステムに対する音声コマンドを起動する。

「クローズドモードに切り替えるーゲートオープン！」

キョウヤとヒロトのアバターの色調が変化し、執務室から余計なものほぼ無い黒い空間へとワープする。

装いは宇宙空間に見えるが重力があり、透明な床を踏んで彼らの身体は立っている。

一般ダイバーでしかないヒロトは勿論この空間に足を踏み入れた試しはない、少しだけ辺りを見渡すと目の前にガンダイバーが現れた。その外見で来ることはキョウヤから事前に聞かされていた、彼がこのGBNのGMだ。

彼と同時にトーリも現れた。彼女は全員と視線をある程度合わせる為空中で羽ばたくことなく静止している、止まり木が無いので不自

然ではあるが、足場の設定を操作しているのだろうと容易に想像はついていた。

「予定時刻通りだな。……細かい挨拶に意味はないな、早速始めよう」
GMは淡々と今回の話し合いの開始を宣言する。GMはヒロトに對してあまり注目している様な事はなかった。

「事前に通達していた通り、近くGBN内で確認された詳細不明のデータ群を切除する為に君たちへ協力を要請する。……なお計画を遂行する中でELダイバーを確認した場合こちらの通常規定に従って対応・保護しよう」

「分かった、運営に協力させてもらおう」

私たちの要望に対しそのまま力を貸してくれることはないだろう、キョウヤはこの場を迎える為に何度かヒロト達と相談する中でそう予想していた。

彼の予想通りGMは名目をすり替え、飽くまで運営はGBN管理の目的の為に動くと言っているが、ヒロト達からすると今回重要なのは発言の後半、ELダイバーを確認したら保護をするという部分だ。それさえ前提条件に含まれていれば、ヒロト達の話し合いの目的は半分成功しているといっても過言ではない。

「事前の通達から、今回の計画に対して我々なりに草案を纏めてみた、参照してほしい」

「確認しよう」

キョウヤから受け渡されたデータをGMとトーリがぎつと目を通す。

トーリの方はすでに内容を知っているので、実質GMが読み切るまでの時間を待つだけだ。

「ミスター・ヒロト、星の海というのはこういった物でよろしいでしょうか？」

トーリが指摘した箇所は、ELダイバー・イヴの復活がヒロト達の実際目的だと理解した上でなおも不可解なポイントだった。彼女はそこだわりがどういう意味を持つのかも事前に認識していたが、このまま放っておけばGMから厳しい言及が入る、その前に話を進め

るためのヒロトへの援護だ。

トーリが視線を空中にやると、空間が切り取られてクリエイトミツションを作る時の様にディメンションが作成されていく。彼女が作り出した星の海は一般ダイバーが作成できる空間リソースの限界をやすやすと超えて広がって、しばらく時間をかけて完成される。

「そうですね、星の位置取りはそちらのやり易い様に操作してもらえれば」

「……なるほど。GBN内にある数多くのディメンションにデータが散らばっている、という事も書かれています。この件は私たちの方でも確認済みです。各ディメンションから切り離されてきたデータの収束がどう起こるかわからない以上、大きく空間を取っておいて損は無いかと、GMはどう思いますか？」

自分より先にトーリに話を進められ、GMはどうやら今回の件も彼女はELダイバー救出に全力を注ぐことに決めたらしい、と察して内心ため息をついた。

トーリのGBN内での行動はGMでもそう簡単に捉える事はできない。捉えたところでGBNのメインプログラムを作り上げたのは他でもないトーリであるという、運営に対しての何よりの強みがある。

本当に敵対して彼女にGBNから去られてしまえば運営側が被る損害は莫大だ。そうした事情もあってトーリの行動はGMですらほとんど文句がつけられない。

彼女は自分のこだわりを貫き通す性格をしていて良くも悪くも曲者だが、そのこだわりの一部がGBNを守ろうという意思に繋がっている事がせめてもの救いだ。

「……空間を捻出する事はそう難しくはないな。GBNのテスト空間をいくつかつなげて宇宙を作る程度ならすぐに出来るだろう。ただそれぞれの星の重力圏や軌道、当たり判定などは無視させてもらう。GBNサーバーの処理能力は余裕を持っておきたい」

「分かりました。では、GMの意見も参考にしてディメンションの構築は私が行いましょう。星をそれぞれ各ディメンションに繋げて先

にデータの通り道を多く作っておくという考えは良いですね、確かにデータ群が無理矢理道を作ればサーバーに対する負荷は避けられないでしょう。……私からは以上です」

トリーはヒロト達の見意の中で一番不可解な点を押し流すと、後は黙る事に決めたようだ。

GMはGBN内に漂うデータ片を誘導するための『的』について注目する。

「ELダイバーたちのデータを参照。彼らの構成要素の重なる部分を複製し、それにアバターという外枠を与え、データと呼び込む。これにはELダイバーたちの多くの協力が不可欠だ、協力者は何人いる？」

「76名です。BUILD DIVERSのメイがELダイバーの中心となっています、ELダイバーについて細かくは彼女と話してください」

「いいだろう」

ヒロト達に自分から協力を申し出てくれたELダイバーは半分より少し多い程度、メイを中心に説得して九割近くが今回のイヴ復活計画に協力すると頷いてくれた。『死』に対して恐怖心が無かったり、他人に対してまるで興味が無いなどかなり個性が強いELダイバー達は頑として頷くことはなかった。

「ELダイバーのデータ参照、複製については運営で行おう」

「GM、アバターは私が用意しましょうか？」

「……では、アバターはミス・トリーに任せる事とする」

今からアバターを用意するとトリーは言っているが、実際はヒロト達と初めに顔を合わせた際にイヴのアバターを作り上げている。

GMは彼女がさかさず提案を挟み込んできたことで、恐らく以前からアバターを作成していたのだろうと察しながらも頷いた。運営としても仕事の一つ減る分、悪い話ではない。

次にGMが草案の中で目を付けたのはその『手段』だ。

「GBNのダイバーたちの意識を集中させて奇跡を起こす。その為に、ダイバーたちで日頃賑わっている都市などにGNドライブ搭載

機、もしくはは粒子拡散機を設置してGN粒子を散布し意識共有空間を模倣する。……言葉にしてみるとやはり馬鹿げているな」

「それでもやります」

文章を確認して少し呆れた反応をするGMにヒロトの返事は素早く強く返事をする。

キョウヤもヒロトの発言に頷くと、GMに問いかける。

「以前私がお話させてもらった事、GMはどう考えていますか」

「あの事か。……言われてみればそうかもしれない、とは私は思った。今更協力を取りやめたりすることはない」

ガンダイバーの姿では表情など読みようが無いが、GMはなんだか少ししよがなさそうに笑って居るとヒロトは思えた。

GMはそのまま確認を続けていく。

「想いを吸ったGN粒子をGNアブソーバーを利用し当件で作成する特設ディメンション『星の海』に設置するELSの『花』を模したオブジェクトに収束させ、カプセルに向かって放出する、か。GNアブソーバーとカプセルはすでに用意してあるのか?」

「ああ、GNアブソーバーについてはすでにヒロトのハッチに用意してある、そちらでデータを複製して使ってくれ」

「カプセルは当日に必ず持つてきます」

「わかった、すぐにやっておこう」

奇跡の手段を模索していく中で大きくネックになった問題点の一つは想いを具象化したGN粒子をどう集めるか、という点だ。ヒロト達が四人で考える中、ガンダム作品の中で『相互理解』『共感』『希望』を分かり易く示す事の出来る、劇場版ガンダムOOのラストシーンでELSが作り出したあの巨大な『花』からダイバーたちで賑わう都市等に根の様にラインを伸ばし、自分達で作成したGNアブソーバー、つまり吸収装置でGN粒子を収束させるといふ案に至った。

この規模の話になってくると運営との協力は不可欠、パルが自分達で考えて置いてこの計画は滅茶苦茶だと評したのも当然だ。

今回のイヴ復活計画に関してはキョウヤたちからは賛同を得る事が出来た物の、GMから少しは反発があるとヒロトは予想していた。

だがその予想は裏切られ、反発の言葉は最後までなかった。

GMはキョウヤの方に視線をやると

「ドライバーたちの意識を一つにできるかどうかはキョウヤ、君次第だ。分かっているな」

「大丈夫だ、私たちに任せてくれ」

「ふん、ではこれをもって今回の話し合いは終了、計画の遂行予定日については後日トリーを介して連絡を取る事にする、君たちからも何か伝えたい事があればトリーを通してくれ」

「お疲れさまでした。ミスター・ヒロト、後で連絡先送ります」

「はい、よろしくお願いします」

わざわざトリーを連絡の間に挟んだのは、その方がヒロト達は話しやすいだろうというGMなりの気遣いだった。

トリーの言葉にヒロトが固く頷くと、クロードモードが解除されて元の執務室へとヒロト達は戻っていた。

キョウヤはヒロトに笑いかける。

「お疲れ様、ヒロト」

「お疲れ様です、キョウヤさん、今日はありがとうございました」

「いやいや、大したことではないよ」

ヒロトは少し倦怠感を覚えたが、キョウヤの方は何食わぬ顔をしている。

GBNのチャンピオンは度量が違うな、とヒロトは感心しながら、先ほどの会話の中で気になった事を伝えてみる。

「そういえば、GMにキョウヤさんが話した事って？」

「ああ、それは。そうだな、当日はヒロト達は私の話を聞く処ではないだろうし、今話そうか。今回のGN粒子を使うだろう、その事について何だが」

キョウヤはヒロトの質問に微笑みながら、自信の考えを説明している。

「——という話だ。ヒロトはどう思う？」

「……言われてみれば、って気がします。他人事みたいだけど、できるかもって」

キョウヤの考えにヒロトは目を丸くして頷いた。

そのヒロトの返事にキョウヤは一層笑みを深める。

「そうだろう！僕も自分で結構良い解釈だと思ってるんだ。……まあ、出来はともかくとして色々根回しは必要だろうな」

「そうですね。……俺たちの方も、イヴについて話を聞きたいダイバーに声を掛けられたときは会うようにしてます」

「流石、準備がいいなあ。……私たちはフォース単位で大きな根回しはできるが、個人単位になると君たちが動いた方が効果的だ、そのままお互い続けていこう」

「はい、これからもよろしくお願いします」

二人は固く頷き合い、ヒロトは仲間たちの元へと戻っていった。

◆◆

「ただいま」

「おかえり、ヒロト」

「おー、戻ったか。お疲れー」

「お疲れ様です、ヒロトさん」

ヒロトがブリーフィングルームに戻ってくると、三人がねぎらいの目を向けてきた。

彼はその視線を浴びながら、椅子に深く座り込んだ。

「話し合いは上手くいった。その時の様子は後で説明するから、先に少し休ませてくれ」

「そりゃ疲れるよなー、ごゆっくり」

ヒロトは仲間たちに迎え入れられて軽い倦怠感が急に重たい物へと変わり、少しぐったりとしながら休むことにした。

他の三人はヒロトがかなり疲れている様子を見て、報告を急かさないう事にした。

そうしてしばらくヒロト以外の三人が雑談している中、カザミが声を上げる。

「キャプテン・ジオンの新作来てる！ちよつとボード借りるぜー！」

カザミの返事を待たない動画上映会が始まり、特に興味のない三人も何となく動画の方に目を向ける。

キャプテン・ジオンの動画は迷惑ダイバーの成敗が主題になっているが、新作もその主題で違いは内容だ。

動画も山場に差し掛かり、迷惑ダイバーたちの罪を切る場面へ切り替わっていく。

「大体俺が何やったって言うんだよ！」

「ヒーロー気取りが！」

「ぶざけんじゃねえぞ！」

「迷惑行為を顧みぬ、その態度と開き直り、マナーと礼節を持って切らせてもらおう！キャプテン・ジオンの名のもとに！ジオニック・ジェネレイション！アナハイム・フュージョン！」

キャプテンジオンが見えを切ると、その体は光となってルージオンガンダムと一体化する。

カザミは興奮して拳を握って震えている、他の三人はそんな彼の様子にある種感心すら覚えていた。

「GM、ガンプラマファイアなどとぶざけた名前のハツカー集団を名乗りながら」

ルージオンガンダムは力強く突進し、一番近くに居た迷惑ダイバーのジム・クウエルに切りかかる。

「やっている事は動画投稿者に対する複数アカウントを利用した——」

「「「近寄るな——」」」

対してダイバーたちはビームライフルで応戦するが、突進してくる深紅の機体には傷一つも付けられていない。

「個人的粘着行為！コメント欄荒らし！全体的にセコイ所業！加えて名前がゲームマスターへの風評被害！」

瞬く間に迷惑ダイバーたちの戦線は崩壊して、武装を破壊されルージオンガンダムから特有のマーキングを受ける。

ルージオンガンダムがその剣を天に掲げ、ついに断罪の瞬間必殺技が繰り出される。

「動画投稿者の真摯な思いに対し、心無い罵声を浴びせるそのやり口！とても迷惑だ！」

「なんだそれー!?」

迷惑ダイバーたちが一様に空を見上げると、明らかに3人相手に使うような規模でない必殺技『アクシズ落とし』が迫っていた。

「マナー違反にアクシズ落とし! 抱け、心の南極条約!」

「うぎゃああ!!」

「守ろう、皆の! G! B! N!」

アクシズ落下に耐えきれぬわけもなく、ド派手な爆発とともに勝負はついた。

動画はお決まりのチャンネル登録を進める宣伝で最後となる。

そんな動画を視聴しきるとカザミは震えて叫ぶ。

「うおおおおお! キャプテン・ジオン!」

「……カザミさんホントに好きですよね、キャプテン・ジオン」

「だっけかつこいいいじゃねえか! パルもそう思うだろ!」

「あはは、そうですね……」

カザミの圧力にパルが軽く身を引いてる中、メイが手を上げて話す。

「今の迷惑ダイバーなんだが、もしかして」

「言わなくていいんじゃないか」

「そうか……」

ヒロトはカザミを生暖かく見守りながら、メイの言葉を遮るのだった。

想い、託して

ヒロトがGMと出会い、更に一か月後。

彼は夕方から夜にかけてGBN内でイヴ復活計画の準備をAVAILON・運営と連携して行い、その後は家に帰って遅くまでモビルドール・イヴの制作をする日々を忙しく過ごした。

計画は着実に進み、イヴ復活の日は今日より二週間後の週末正午過ぎと決定された。

そして遂に完成したモビルドール・イヴの確認をヒロトは自室で行っていた。

イヴをこの身体に移す準備として彼の現状持っている道具・知識ではどうしてもできない部分があり、その最終工程をコーイチが行うための引き渡しの日が今日だった。

コーイチは今かなり忙しい立場にある、イヴ復活の為に必要な奇跡の『的』になるELダイバーの素体データの作成をする為に一役担っている為だ。

元々、イヴのこちら側での身体を郵送する気にならなくてもなれないヒロトは自分の手でELバスセンターに向かいコーイチに引き渡す算段であったが、彼の家にまで取りに行くとコーイチから連絡があった。

とは言われたが引き取りに来るのはコーイチ自身ではない、ヒロトの家に来るのはリクだ。

現実での名前は『ミカミ・リク』、彼は『クガ・ヒロト』とは会った事はない。

どこかで待ち合わせしようかという提案は当然したのだが、リクがヒロトの家に向かう姿勢を見せたためヒロトは早々にその提案をひっこめた。ヒロトが半端に案を出すよりはリクの希望を叶えた方が、彼が喜ぶだろうと判断した為だ。

彼と一緒にサラも来るだろうと予想はつくが、二人共良く知った相手で家に迎え入れる事に関して否やは有ろう筈もない。

もう家の近くまでたどり着いたというリクからのメッセージは来

ている。

モビルドールをすぐに渡し碌に話もせずに帰す様なつもりはないが、一応は初対面である事に間違いはない。再三の確認を終えたヒロトは少し落ち着かない気分でチャイムが鳴るのを待っていた。

やがてその時は来て、家のチャイムが鳴る。

ヒロトが受話器に向かうと、仕事をしている筈のヒロトの父親、オサムが部屋から出てすでに受け答えをしていた。

「——ヒロトの友達？分かった、伝えておくよ。どうぞ入ってきて」

「父さん」

ロビーの自動ドアのロックを解除し、通話を切ったオサムにヒロトが声をかけると彼は勢いよくヒロトの両肩を掴んだ。

「友達の肩の上に小さい女の子がいた！あの子がE.L.ダイバーか！すごいな！」

「先週来るって話したじゃないか」

通話カメラ越しにこの部屋から玄関ロビーは見える、どうやら更はリクの肩の上に居る様だ。

ぐわんぐわんとオサムに肩を揺らされながらヒロトが答えると、彼はハツとして肩から手を離れた。

「いや、聞いてたけどつい目の前にすると興奮して、いやー、ぜひ話をしてみたいなあ！……まあでも、あの子じゃないんだったな」

「まだ先」

「じゃあその時まで我慢するしかないな。……父さん仕事戻るから、気にしないでいいぞ」

オサムは興奮からすぐに冷め、自室へと戻っていく。

先週、ヒロトは両親にイヴの事を出来る限り話した。彼女がどういう存在で、これからどう接していきたいのか。

エルドラの事を分かってくれた両親は、イヴに対する理解も素早かった。

ヒロトのやりたい様にやればいい、自分達はそれを応援する。

両親からの言葉は温かい物だった、ヒロトは生まれた時から変わら

ない両親を改めて尊敬した。

オサムが部屋に戻ってからすぐにリク達が来た。

玄関を開けて、迎え入れる。

「ミカミ・リクです、初めまして」

「サラです、初めまして」

リクは肩にサラを乗せている事もあつて頭を下げる事ができない。代わりにサラがぺこりと頭を下げた。

「クガ・ヒロトです、初めまして」

お互いに堅苦しい自己紹介をして、三人で少し笑う。

ヒロトはリク達を家の中に招き入れる、リクはヒョイと部屋中の奥を見ようとする。

「さつき答えてくれた人は？」

「ああ、父さんだ。仕事してるから挨拶とか気にしないでいいよ」

「ああ、じゃあちよつと静かにしなきゃだめだね」

リクが気持ち小声になり、サラは黙ってこくこくと頷く。

ヒロトはその様子にまた少し笑ってしまう。

「集中し始めると父さんは仕事のこと以外に構わなくなるから、本当にそんな気にしない方がいいよ」

「それでも一応ね、一応。お邪魔しまーす」

「お邪魔します」

「俺の部屋はこっち」

リクとサラの二人はヒロトの部屋まで黙ってついてきた。

ここでヒロトは過ごしているのか、と感心の雰囲気は纏っていたがわざわざ騒ぐ性格ではない。

ヒロトの部屋の中に入ると、作業机に立っているモバイルドール・イヴを一目見てサラが感嘆の声を上げる。

「凄いいー凄いいー！ヒロト凄いいー！」

サラは目を輝かせてヒロトが作ったイヴの身体に見入っていた。

この身体にどれ程の想いを詰め込んだのか、彼女にはその温かさが伝わっていた。

「ありがとう」

ヒロトがくすぐったさを覚えながらサラの称賛にお礼を言っている間に、リクの方もイヴに近づいて、うわあ、と感嘆していた。

サラはリクの手を借りて机の上にサツと移動すると、イヴの周りをぐるりと回りながら観察し始める。

彼女の機嫌の良さと可愛らしい仕草にリクは微笑みながら、ヒロトに話しかける。

「すごい手間をかけて作ったんだって、一目見たらわかるよ。あ、武装は無し……かな？」

リクが見るにモビルドール・イヴには一つの武装も施されていない。

あのヒロトが作ったモビルドールなので実はとんでもない特殊ギミックを備えている可能性はあるが、その点に関してはリクも見ただけでは流石にわからない。

ヒロトはリクの疑問に対して頷いて答える。

「飽くまでこつちでの生活の為に可動域と丈夫さを目的にして作ったんだ、だからそれ以外は省いた。まあ、作るまでにはいろいろ案はあったんだけど……イヴには自分でやりたい事を決めて欲しいから」「そっか。……そうだね、その方がいいね」

「うん！姉さん、きつとすつごく喜ぶと思う！」

イヴの希望を優先するというヒロトの考えにリクは強く頷く。

サラは興奮が冷めないのか、ヒロトの意見を肯定しながらモビルドールの方に視線をちらちらとむけていた。

ふと思いついた可能性に好奇心が沸いてリクはヒロトに質問する。

「イヴさんがバトルしたいって言ったらどうするの？」

「ん、まあそうなったら、その時一緒に考えて、それ用のガンプラを別に作ると思う」

リクはヒロトのその答えにワクワクと興奮が沸きあがってきた。

「いいね、やっぱりコアガンダムみたいにするの？」

「イヴ次第だけど、多分。でも実際考えたら変わるかもしれない」

「ヒロトとずっと一緒に居たなら、きつと姉さんはガンプラの操縦上手だと思う」

「……どうだろう、少なくともバトルを避けはしないだろうけど」

ヒロトがコアガンダムで戦っていた時、操作分担まではしていなかったが同乗していたイヴに攻め時を示して貰ったり、回避運動を助けて貰ったりする事は日常茶飯事だった。特にイヴの手助けがある時は、彼女の警戒を促す声に応じて最小の動きでの回避し反撃に転じる事が多く、それがいつの間にか咄嗟の時にはコアガンダムの身を逸らす形で攻撃を避けるというヒロトの癖になった。その癖を以前カールナとエミリアに見抜かれて痛い目を見たな、とヒロトは思い出す。危険察知の正確さを見るにイヴにパイロット適正は有るだろうな、とヒロトは考えるが結局やってみたいか彼女に聞くしかない。

ヒロトがイヴの事を考えている間に、リクは屈託なく笑う。

「バトルも一緒にできたらいいね、楽しそうだ」

「そうだな」

リクの笑みにつられてヒロトも笑う。

イヴと肩を並べて戦うという事にヒロトが楽しみを見いだせない訳がなかった。

サラの興奮も少し落ち着いてきたようにヒロトは感じ、そろそろモビルドールを梱包する事に決める。

「イヴの身体、包むから少し待ってくれ」

「わかった、サラ」

「うん」

リクに声を掛けられて、サラが名残惜しそうに机の端に避けていく。

ヒロトが丁寧にモビルドール・イヴを包んでいる間、リクは部屋中に視線を回した。

「ここでコアガンダムが作られたのかあ」

「ああ、……アーマー見る?」

「見る!」

感心しきりのリクに、ヒロトが提案すると、リクは一二もなく頷いた。

コアガンダムは机の上で立っていたが、他のアーマーは今は戸棚の

中だ。梱包をしつかり済ませてから、全てのアーマーを戸棚の中から出す。

全八種類のアーマーをコアガンダムを中心に並べて、見やすいようにする。

リクとサラは感心しきつて、一つ一つに見入っていた。

最後にネプチューンアーマーを見た時、サラがその手を自然と伸ばして、アーマーに触れた。

「夢がたくさん詰まってる、皆で作ったのね。他の子とは少し違う」

「ああ。……ネプチューンは特別なんだ、いろいろ」

「でも心は同じ、皆温かい」

「ありがとう」

ネプチューンアーマーは以前のオフ会の時にさらに丈夫になる様にだけ調整してある。

奇跡にGN粒子を利用する関係から、アーマーにGNドライブを取り付ける案は自然と出た。それに強く反論したのはヒロトではなくメイだった。

例えばイヴが自身を責めていようとも、ヒロトとコアガンダムの声を姉さんが聞かない訳がない、コアガンダムの警告はその点において絶対間違っていると強く主張したのだ、メイはイヴと出会った事は無いがそれでも確信している様子があつた。

粒子の手助けは飽くまでGNのダイバーたちに必要な物であつて、ヒロトとコアガンダムに必要な物ではない。そう断言するメイの前に、GNドライブを取り付ける案は無くなった。

リクもイヴ復活の日取りが何時になるかすでに連絡は受けている、今日ヒロトの家にやって来たのは直接応援の言葉伝えたかったからだ。

「当日、俺達はキョウヤさん達が借りるスタジオムの上でメビウスと一緒にGN粒子を散布する役割になったよ」

「ああ、聞いてる」

計画の実行日のみではあるが、ヒロト達に協力するダイバーの中でGNドライブをフル活用できるメンバーのみ安全地帯でガンプラの

呼び出しと操縦を行う事ができる。

リクが配置されるのはどこよりも人が集まると予想される、AVA LON主催の大会におけるスタジアムの直上だ。

「俺、祈るから、イヴさんが帰ってこられるように」
「私も」

リク達はそのくらいしかできないけど、と心苦しい気持ちであったが、ヒロトにはその言葉は今は何よりもうれしかった。

「ああ、俺もやり切ってみせるよ」

ヒロトの声に一切の迷いはない、リクは思わずヒロトの手を取りグツと握る。

「頑張れ、ヒロト。絶対、絶対できるからー」

ヒロトがイヴと別れてしまった時の気持ちは、リクは自身では計り知れない物だろうと考えてはいた。

出会いと仲間に恵まれて全てが丸く収まった自分と、一度は何もかもを無くしてしまったヒロト。

同情なんてしても、二人が喜ぶ事はない、それは分かっていた。

しかし、考えてしまう二度とサラと会えなくなれば、自分はいったいどうなってしまうのかと。

そんな状況が来れば自分は足掻くだろう、仲間と一緒に足掻いて足掻いて、それでもダメだったら？

身体が震えた。

目の前が真っ暗になった。

少し想像しただけで、まるで自分が空ろな人形になってしまう気持ちだった。

ヒロトはそれよりもずっと辛い状況から、もう一度立ち上がった。彼は強い、リクは紛れもなくそう信じる。必ずイヴを取り戻して帰ってくるかと信じている。

ヒロトは包んだイヴの身体をリクに渡す。

「頼む」

「任せて」

リクに受け取ってもらえた時、ヒロトは必ずコーイチの元に無事に

届けられる事を確信する。

その時ふと、サラが声を上げる。

「あ、ヒロト、コアガンダムが」

「え？」

「一緒に頑張ろうって、そう言ってる。俺達なら、絶対やれるって」

コアガンダムの気持ちは分かっていた、それでもサラの言葉にヒロトはどうしようもなく嬉しい気持ちを覚えた。

どんな困難な場面も、コアガンダムと一緒に乗り越えてきた。彼の言葉は、ヒロトに強く強く届いた。

「ああ、やるぞ、コアガンダム」

ヒロトが声をかけるとコアガンダムが力強く頷いたように彼には見えた。



ヒロトがある程度の分かり易い道まで一緒に行こうかと提案してくれたが、リクはここまで来れた事もあって大丈夫だと断ってヒロトの家から出る事にした。

家の扉が閉まって、サラは楽しそうに話す。

「四人でお茶しようね」

「あ、いいね。俺も二人の出会いとか興味ある」

サラの提案に頷きながら、リクは廊下を歩いてエレベーターの方へと向かう。

イヴが帰って来たら、きっとヒロトの恋人になるだろう。そうすれば自分とヒロトは兄弟のような関係という事になる。

親友や仲間は居ても、兄弟は居ない。兄と姉が一度にできるという事は少しくすぐりたいが、それはそれですごく楽しみだとリクは感じる。

リクがしつかり前を見るとエレベーターの方から一人歩いてくる姿があった。

その女性はちらりとサラの方を見て、一瞬佇むとリク達ににこりと笑いかけた。

「こんにちは」

「こんにちは」

とりあえず二人で挨拶を返すと、彼女はそれ以上何も言わずにリク達の横を抜けていった。

思わずリクは目で彼女を追う、ヒロトの隣の家に入っていったようだ。

ELダイバーを見ると、大半の人間は驚くはずだが彼女にはそういった気配はなく、むしろ親しみの感情すらあったように見えた。

もしかしたら自分達の事を知っているのかもしれない、と考えてリクは気づいた。

「あー今のヒナタさんかな」

「うん、そうだと思う」

サラもリクの思い当たった事に頷いた。

もう少しきつちり挨拶しておけばよかったと、リクは後悔するが、今更追いかけたらそれはそれで変だろう。

BUILD DIVERSのヒナタとはそう何回も会った事はないし、話した事もない。

せいぜい一度か二度顔を合わせて、少し挨拶したくらいだ。そのやり取りの中でヒロトの幼馴染だという事が分かったくらいで関りはほぼ無い。サラという分かり易い存在が居たとはいえ、こちらの素性を素早く判断してにこやかに挨拶してくれたのだから、やはり良い人に間違いはないんだろうなとリクは感じた。

まあそれはともかく、とリクは彼女に対する所感を振り払いあえて大仰に言い表す。

「イヴさんをコーイチさんに送り届けるミッションスタートだ」

「うん！頑張ろう！」

サラはリクの言葉に腕を突き上げてにこりと笑った。

伝わる想い

ヒロトがリク達にモビルドール・イヴを託した日の夜、彼がベランダで仲間たちとメッセージのやり取りをしているといつものように隣の部屋からヒナタが出てきた。

「こんばんは、ヒロト」

「ヒナタ」

二人はお疲れ様と手を軽く振り合って、ベランダに寄り掛かっていたものの姿勢になる。

ヒナタは今日の昼頃にすれ違った二人の事を話すつもりでいた。

「今日の昼、廊下で小さい女の子を肩に乗せた人とすれ違ったけど――」

「ああ、リクとサラさんだ」

「だよーね！二人共あつちと見た目がほとんど一緒にびっくりしたよ、サラちゃんは縮んでたけど」

GBNの中にはアバターの外見をほぼ弄らないダイバーが一定数は存在する、リクやヒロトはそのパターンに当てはまる。逆にこだわりが強くなってくるとカザミの様に体格を変更したり、ファンじゃないと理解できない様な仮面を着けたりもする。他にも獣人型アバターを使用するダイバーもそこそこ居る、加えて着飾れる服装も数多くの種類がある。そんなGBNでは当然ながら外見に統一性などある訳がない。

ヒロトは楽しそうに笑っているヒナタの話に相槌を打つ。

「うん、リクは俺と一緒にアバターの外見にあまり興味が無いんだろ
うな」

「えー、せつかく色んな格好になれるんだから、もうちょつと遊んだら
いいのに」

ヒロトはリアルでも服装にこだわりをあまり持たない。勿論おかしな格好をしているとは思わないがどっちの世界でももう少し外見にも気を遣えばいいのに、とヒナタは思いながら笑う。

ヒロトはヒナタのその言葉を聞いて、イヴにも似たような事を言わ

れたことがあるのを思い出していた。

そう言つてた当の本人は別れるまで服装を変える事は無かったが、その訳も今のヒロトにはなんとなく想像がついた。

恐らく、服装データを購入・変更が気安くできない状態かそういう心境だったのだろう。

そう考えるとあのイヤリングを送った時、彼女は確かにすごく喜んでいたがそれと同時に彼女が自分に課したルールを冒していたのかもしれない。

もしかしたら、もしかしたら、と今になってヒロトはイヴの行動の理由が気になつて仕方がない。

これからも本人と話して確かめたい事は山ほど出てきそうだな、とヒロトは感じた。

ヒロトがそんな風に思いを巡らせていると、ヒナタは彼がまたどこか別の場所を見始めている事に気が付いた。

学校や家で話している時ふとした拍子にヒロトは目の前に居る自分ではなく、別の事に、別の人に目を向けている。最近この様子は特に多くなつてきた。

その目の先に居るのが誰なのか、ヒナタはもう察しがついていた。声をかけるかどうかを彼女が一瞬戸惑っている間に、ヒロトがふと戻つてきた。

「ヒナタ、2週間後の週末なんだけど」

「え、うん、その日がどうかしたの？」

「正午過ぎにGBNにダイブできる？」

「出来ると思うけど……？」

どうしたの？とヒナタが首をかしげるとヒロトはどこから話したいいかを考えながら答え始めた。

イヴが今どんな状況で、ヒロトが何をしているか、ヒナタにはほとんど説明していなかった。

「イヴが帰つてくれるように手を貸してほしんだ」

「あ、あの子見つかつたの？」

それはよかつた、とヒナタはホッと一息をつく。

ヒロトはそんなヒナタに首を振る。

「まだ見つかってない、簡単に言うとは今はイヴの身体は無いんだ」

「……………え？」

「最近GBNでいろいろやってたけど、ようやく目途が立ったんだ。全部話す、ちよつと長いけど聞いて欲しい」

ヒロトがそれから話した内容はヒナタが聞いたこともない話だからで、彼女は色々な事に驚くことになった。

ヒナタはイヴの身体がデータ片になり四散している事を知らない。ヒロトとイヴの間に何かあった事は察しはついていたが、彼女の身に何が起こったのかまでは分かる筈もないので当然だ。

その事だけでも十分に驚く情報だったが、それを超える驚きをもたらしたのはヒロトの行動力だ。

BUILD DIVERSの皆に応援されて、イヴを救う決断をした。

皆と一緒に、彼女を助けるための手段を模索した。

その手段の一部として動画を投稿して、ダイバーたちの注目を集める為に動いた。

そうした努力が実を結び、大きなフォースが力を貸してくれるようになり、運営とも掛け合った。

今も少人数規模の話ではあるが、協力者を地道に増やし続けている。

仲間からの後押しがあったとはいえ、全てはヒロトの決断で動き始めている。

いつの間にか準備を済ませた状況になっている事実自体は、彼の周到さをよく知っているヒナタにとってたいして驚く事ではない。

驚いたのは、ヒロトが動かした人の数だ。

カザミの力を借りてアップロードした動画ページを見せてもらった時に、その事を強く実感した。

「……………今までの話、全部イヴさんの為にやったの？」

ヒナタは衝撃に包まれながら分かり切った事をつい聞いてしまう。

ヒロトは彼女の言葉にキョトンとして、首をかしげる。

頷いてくるだろうと思っ居た彼が予想外の反応をしたことで、ヒナタも首を傾げた。

「違うの？」

イヴの為に今までの全ての行動をしたのか？と聞かれた時、ヒロトはすぐに頷くことができなかった。

今までイヴの事を思い返したり、その行動理由について考えた。コアガンダムからの警告のおかげで、イヴが自分を責めている事に気が付く事が出来た。

自分の行動は彼女の為になるとは思うが、その思いも仲間たちと一緒に推測を立てた後にきつとそうだろうと感じただけに過ぎない。

「うん、違うと思う。……自分の為だ」

「……ヒロトの？」

イヴは自分に救われたいとは思ってないかもしれない、そういう可能性もある。今こうしてヒロトが改めて考えてみて気が付いた可能性。

その可能性に気づいても、彼の気持ちは何ら変わらなかった。話したい事、聞きたい事、見せたい物、やりたい事は何一つ変わらず、数を増やしていくだけだ。

もしかしたらまた痛みを伴う結果に終わるかもしれない、それでも彼は怖くなかった、仲間たちが背中を押してくれたから目を逸らさずに見ていられる。

変わらない自分が少しずつでも変わる為に、何より自分がもう一度イヴに会いたいから。

それは紛れもなくヒロトの、自分の為の行動だった。

「俺は俺の為に、イヴにもう一度会いたい。手を貸してほしい」

「あ」

ヒロトは自分の為に、彼女に会いたいとはつきりと言葉にした。

彼は変わった、とヒナタは強く実感する。

あの日から自分に関心を抱かなくなってしまったヒロトが、自分の為に動くと言いつつ切った。

ヒナタの感情は強く乱れ、言葉が詰まった。

グツと、自分の気持ちを押し殺して、彼女は笑った。

「――応援するよ」

「ありがとう、ヒナタ」

自分の言葉で嬉しそうに微笑むヒロトの姿が、ヒナタにとって今夜は少し辛かった。

◆◆

夕刻、クガ・ユリコは家事を済ませていた。

少しの量の皿洗い、お茶を飲んだ後ついでにやり始めた事だった。洗い物をしていると、玄関とリビングを隔てる扉が開いた。

最近この時間帯でヒロトが帰ってくることはない、オサムは少し前に仕事に戻ったばかりですぐに戻ってこない。

「ヒナタちゃん、お帰り」

「ただいま、お邪魔します、ユリコさん」

見なくともヒナタだとわかったが、声にまるで元気がない事にユリコは気が付いた。

洗い物をしながらちらりと彼女に視線をやってみると、放っている雰囲気はどんよりと重たい物であることに気が付いた。

ヒナタが明らかに何かで思い悩んでいる、そうユリコは感じ取って、その内容も薄々察した。つい先週にヒロトの話を聞いて、その時の息子の顔を見て、遅かれ早かれこの時が来るとは思っていた。

ヒナタはソファの方にふらふらと移動していき、座り込んだ。

ユリコは手早く洗い物を切り上げ、ヒナタの隣に座る。

「隣、良い？」

「……」

ヒナタは何も言わない。

彼女の中で感情と思考がどれほど揺れているのか、完全に把握する事はできない。ともかくユリコは彼女の隣に黙って座り続ける事にした。

ヒナタの今日は散々だった。

消沈した様子にクラスメイトにはずっと心配をかけていたし、ヒロトにも自分が良くない状況になっている事に気づかれかけた。彼か

らの気遣いを今受けたくない、受けたら余計におかしくなりそうだった。必死で平然とした雰囲気を取り繕ったが、正直上手くできていたかはわからない。部活の日だったが部室に入った途端に帰らされた。授業を受けながら、考えずにはいられなかった。

昨日の夜にヒロトが話した事とその時の表情や雰囲気、それらが示す事について。

最近のヒロトの行動力は、一緒に過ごしたヒナタから見ても群を抜いている。

彼はそれを自分の為だと彼は言う。

自分の為にもう一度イヴに会いたいと言う。

それがどんな気持ちから来る思いなのか、分からないほどヒナタは鈍感ではなかった。

ヒナタが思い出すのは、あの雨の日の事。

ずぶ濡れで帰ってきたヒロトは、その日はヒナタの呼びかけには応じず、まるで人形になったかの様にぎくしゃくと家に帰っていった。

それからしばらくふさぎ込んで、碌にご飯も食べずいたが、急にヒロトが普段の生活パターンをなぞり始めた。

両親や自分に心配をかけるわけにはいかないと、無理矢理身体を動かしているようにも見えた。

意気消沈し、まったく笑わなくなり、それでもとりあえず日常へと戻っていった。

自分への関心が消えて、辛い気持ちかマヒしてしまったのかもしれない、と今にしてヒナタは思う。

結局、彼女との間に何があったのかはヒロトからは聞けなかった。深い傷をもう一度開く事になりそうでヒナタは怖かった。

別れ際に酷い喧嘩をしたのかもしれない。

イヴがどのような状況で消えてしまったかなんてヒナタにはわからない、そういう事もあるかもしれないと考えた。

ただ急に別れただけとはとても思えなかった。

仮に喧嘩をして、結果あんなに深く傷ついて、それでも彼女にもう一度会いたいと、ヒロトは言う。

つまりそれは彼女に対する複雑な過去と気持ちを彼は飲み込んで

——それでも、彼女が好きだと、ヒロトはそう言っていたのだ。それがどれほど強い思いなのか、ヒナタには把握できない。

彼の気持ちは遠くに行ってしまった、自分ではもう手が届かない場所、彼女の元へと進んでいった。

一人で家に居る気にもなれず、今日もヒロトの家に来てしまった、どこか納得ができない自分がきつとこの家へと足を運ばせた。

涙が勝手に零れた、少し悔しかった。

「あの子、ちよつとずるい」

ヒロトはヒナタにとってヒーローだった。

幼いころから賢い彼は、ヒナタのピンチ、友達ピンチをあれこれ考えて切り抜けさせてくれた。

そんな他人の為に頑張れるヒーローが、自分の為にと彼女を求めて動いている。

その唯一に長く一緒に過ごしてきた自分はなれなかった。

嫉妬にまみれた小さな自分が、応援するとすぐに返事をしなければならぬのに口を重くさせた。

自分の為に頑張るとヒロトがようやく言ったのに、純粋な気持ちで応援できない自分が嫌だった。

「……………うあ」

ヒナタがぼつりと呟いてから泣き始めると、ユリコは彼女を抱き寄せた。

長い間息子の事を想ってくれていた大事な『娘』にかけられる言葉はいくつでもある。

この状態は鈍感な息子が招いたことに間違いはない、もつと文句を言う権利が娘には有る筈だ。

息子の心をさらっていったあの子に対しても、言いたい事はある筈だ。

全部言っただけになっていい、そう告げる事はできる。

だがそれは甘さだ。

子供を作ろうと決めた時、夫婦二人で決めたルール。

何があっても自分達の子供の味方であり続ける、自分達の子供の意思を尊重する。

これは親として決めたルールだ。

ヒナタを甘やかせば、そのルールを破る事になる。

そして感情を言葉で吐き出させるといふ事は、今すすり泣きながらそれでもこれ以上は二人に対し、悪し様な言葉を並べまいとするヒナタの優しさを侮辱する事にもつながる。

ユリコは何も言わずに、ヒナタに寄り添い続けた。

長く長く、日が暮れても、ヒナタが落ち着くその時までずっと。

声は、伝わって

そろそろ家を出なければならぬ時間だ。正午よりかなり前だが、ヒロトは準備を始める事にした。

今日、G B Nにダイブする場所はいつものG C A F Eからではなく、E Lバースセンターにあるダイブ機からだ。

強制ログアウトの可能性を下げる為にトリーを通して運営に掛け合うと、ヒロトのみ特別に許可を受けダイブ機が用意される事になった。運営側にもここまで準備に協力して置きながらいざ当日に強制ログアウトなどされてはたまらないと判断されたのだろう。

E Lバースセンターの所在地は彼の住むところから少し離れているが、全てがうまくいった後イヴを迎えに行かなければならないので一石二鳥、ヒロトからすると運営の配慮が凄くありがたかった。

彼は立ち上がって服着替え準備を手早く済ませる。ガンプラを入れるためのポーチを腰につけて、机の上に置かれたコアガンダムとネプチューンアーマーを手取る。

「一緒にやろう」

ヒロトはポーチの中にコアガンダムとアーマーを入れ、他の準備物が入ったカバンを持って自分の部屋から玄関に向かう。

リビングで寛いでいたオサムとユリコは息子が出てきたのを見て、彼に向かって笑いかけた。

「がんばれ！」

「行ってくるー！」

ヒロトは両親からの応援に笑って答えると、そのまま家から出ていった。

「いい顔をするようになったなあ」

「そうね。でも——」

オサムは感慨深い気持ちで呟いた。

ユリコはそんなオサムの言葉に微笑み、彼の肩に手を置いた。

「とりあえず身嗜み整えましょうか」

ユリコは普段ならオサムの格好に文句をつけたりはしないが、今日

は特別な日になる。家族が増える、その最初くらいはきつちりとした姿をして欲しかった。

オサムは返事も許されないうまま、ユリコに連行されていった。



ヒロトは前もって念入りに道順を調べていたおかげで道に迷うことなく、かなり余裕をもってELバスセンターへと到着する。施設の前ではコウイチ、『ナナセ・コウイチ』が待機していてすぐに彼を迎え入れた。

軽く自己紹介を交わして、ダイブ機のある一室に案内してもらって最中にヒロトは気になっている事確認する。

「ナナセさん、モビルドールはどうでしたか？」

ヒロトからの当然の質問にコウイチは笑って答える。

「システム側の準備は万端、いつでも彼女を迎え入れできるよ。身体の方は言うまでもないくらい、本当によくできてる」

「ありがとうございます、作業の方よろしくお願いします」
「勿論」

そのままコウイチからの激励を受けている間に部屋に着き、ヒロトはその部屋にあるダイブ機を使うように促され、そこにガンプラと小さくなってしまったイヤリング、使うカプセルをセットする。

「あ、その小さいイヤリング、そうだ、どこかで見た事あるなとは思ってたんだ」

コウイチはメイがこの世界に生まれて来た時の不思議な現象を思い出す。彼女はなぜか用意していない筈のイヤリングを元から手に持っていた。常識外れのELダイバーにもう数えきれないほど関わった事のある彼でも、更に常識外の展開について行けず酷く混乱する事になった。勿論原因を調査する為に大騒ぎになったが、結局それらしい事は見つからずただ徒労に終わったという事実を含めて印象深く記憶に残っている。

イヴの画像を見た時に、彼女の耳にあるイヤリングにコウイチは既視感を覚えたが、サイズ比に差が大きくあるので思い出せなかった。「メイの物です。持って行けって以前に会った時に渡されて」

ヒロトがこの小さくなったイヤリングを受け取ったのは以前のオフ会の解散間際、メイにはオフ会のついでと言わんばかりに渡された。小さくなったイヤリングを見てヒロトは思わず感傷的になってしまったが、その気持ちはすぐに振り払っている。

コウイチは首をかしげてヒロトに質問する。

「そのイヤリングはヒロト君が彼女に送った物なのかな？」

「はい。自分で作って彼女に送りました。……前はもっと大きかったですけど」

彼の答えにコウイチは何か壮大な意思の様なものを感じざる得なかった。

ヒロトがイヴに送ったイヤリングが、メイが生まれた時に実体化し、そのメイはイヴを知らずにヒロトと出会い、今こうしてイヴを取り戻すために協力している。

運命的だ、とコウイチは感じたが、口には出さなかった。それだともまるでヒロトとイヴが別れたのは当然だと、ヒロトに聞こえる気がしたからだ。

「頑張つて！僕もうまくいくように全力祈ってる！」

「はい………」

ヒロトがGBNにダイブする姿を見送り、コウイチは念のため再度ELバスシステムのチェックを行う事にした。



ヒロトはGBNにダイブすると、早速自分のハッチへと向かう。

彼がダイブしたのを確認次第、トーリがヒロトのハッチへカプセルの回収に向かうと事前に話があったのだ。

ヒロトがハッチにワープして、端末でコアガンダムとネプチューンアーマーの調整を再度確認しているといったの間にか来ていたらしいトーリが端末の端に降り立った。

「こんにちは、ミスター・ヒロト」

「こんにちは、トーリさん。今日はよろしくお願いします」

「ええ、こちらこそ。カプセル、見せてもらいますね」

トーリは挨拶もそこそこに早速カプセルの方に飛んでいく。

ヒロトがついて来るまでに、トリーは滞空しながらじつとカプセルの方を見つめシステム面でのスキヤンをかける。

その結果を見てトリーはあら？と声を上げた。

「中はベットのよ様な形になっていると思いましたが、これは椅子ですか？材質は……石かしら？」

「はい、そこにイヴの身体を座らせてください。その椅子、召喚台はエルドラにある物をモデルに作ったんです」

「召喚台？……なるほど、何か意図があるんですね。分かりました、ではその様に」

ネプチューンアーマーのコア部分をモチーフにして、イヴの身体を寝かせるカプセルを作ろうと発案したのはヒロト。それに対してパルがエルドラの古き民を呼び寄せる召喚台を中に入れてはどうかという意見を出し、採用されて今の形に落ち着いた。ともかく少しでも上手く行く様、手を尽くした結果だ。

ヒロトもトリーに聞くべき事があるので、その件について確認する。

「トリーさん、例のディメンションの準備はどうなってますか？」

「すでに星々を各ディメンションへ繋げる工程に進んでいます。正午前までには必ず準備が整う様にします」

「ありがとうございます」

「いえ。では私は仕事に戻ります……頑張って」

トリーは自分のすべき事を済ませると、ヒロトに応援の言葉を残し転移した。



ヒロトがミッションカウンターのあるホールに戻ると、カザミ・パル・メイの三人が連れ合って近づいてきた。

「よお、ヒロト」

「おはようございます」

「ヒロト、忘れ物などないだろうか？」

メイはヒロトに限ってそんな事はあるまいと思いながら、念のため確認する。

彼は頷いて、手に持ったイヤリングを掲げる。

「大丈夫、これもある」

「よし、AVALONのフォースネストで待機させてもらえるんだつたな、移動するぞ」

メイの言葉に三人が頷き、ヒロトがウィンドウを操作してAVALONのフォースネストにワープした。

同盟を組んだことで一時的にはあるが、AVALONのフォースネストのほどこにでも直接ワープできる権利がヒロト達には与えられている。

今日自由に使っていていいと言われている一室にワープすると、部屋の中にはキョウヤと副官のエミリア、カルナが居た。

「やあ、BUILD Divers」

「キョウヤさん、お疲れ様です」

「何を、まだ始まってもないよ」

ヒロトの挨拶にキョウヤはハハハと朗らかに笑い返す。

エミリアが眼鏡の位置を少し上げて、現状の説明をする。

「大会の準備はつつがなく、各地にGNアプソーバーとGNドライブを扱うダイバーの配置準備もすでに。ただまだ時間は近づいていなので、ダイバーは各々ポジション付近で適当に過ごしている様ですね」

「各都市や人口密集地のモニターは時間になったらうちの大会の中継に切り替わる手筈になってるぜ」

カルナが説明の補足を入れる。

AVALONには頼りっぱなしになっているBUILD Diversは四人揃って恐縮するしかない。

「助かります」

「いいっていいって」

カルナが朗らかに笑って答えると、扉がノックされる。

エミリアが扉を開けて、ノックした団員から事情を聞くとキョウヤとカルナに目配せした。

「ちよつと出てくるわ」

「また後で」

三人はそのまま部屋から出ていった。

カザミは頭を掻くと、居心地が悪そうしながらとりあえずソファに座った。

「まだなんかできる事ないかって思っちゃまうな」

「僕たちの今日やる事はヒロトさんのお手伝いですけど、ああやって忙しそうに動いている人を見ると落ち着きませんね」

「彼らを動かしたのは私たちだ、力の入れ所を間違えるな」

カザミとパルが落ち着かない気分では話すと、メイはいつも通り落ち着いた返事をする。

手持ち部沙汰になったヒロトがメッセージウィンドウを開けると、また大量に新規メッセージが届いていた。どれもこれも応援メッセージだ。

「あ、マサキさんからスタンプ来てる」

「あー、熊か？」

「……ベアツガイがファイトーって叫んでる」

「かわいいスタンプ使ってますよね、マサキさん」

マサキの特有のペースに皆が和んだところで、カザミが声を上げる。

「ヒナタは？」

「まだダイブしてない、もう直に来ると思うけど」

「そっか」

カザミはまた一人助力がもらえる事実にあ堵する。

パルは動画サイトを開いて、感嘆の声を上げる。ライブ映像でスタジアムの周りが映されている動画で、集団がそこら中にできていた。

「わあ、まだ時間前なのにスタジアムかなり人が集まっていますね」

「流石トップフォー主催の大会だな」



「お、いたいたー!」

男性ダイバーがスタジアムの近くで友人を探していると、後ろから声が掛かった。

声に反応して男が振り返ると、友人が人を避けながら近づいてくる。

「よお、すごい人の数だな」

「ホントに、エクシアの足元に居るってメッセージが無かったら分かんかったぜ」

大会スタジアムの出入り口前のモニメントとして実寸大のガンダムエクシアが堂々と立っていた。目印としてはかなり役に立つ物だ。

「お前どつから回って来たんだ？」

「いやーそれが出店が結構あって、ぐるっと一回りしてきたんだ」

友人は楽しそうに報告する。

「西出入り口にガンダムDXが立ってた、北はEz8、東がゴッドガンダムだったな」

「ああ、どこも目印があるんだな。……ん？」

「どうした」

友人が見たものを聞いて、なるほどと相槌を打っていた男は違和感を感じて首をかしげる。

友人の怪訝な視線に、男は気が付いたことについて話し始める。

「今日のイベントって今流行ってる動画上げたやつの応援なんだろう？」

「うん」

「DXもEz8もゴッドも主人公の乗機でヒロインを求めてるからな、配置する理由もわかる。けどエクシアはどういう事だ？OOって見た事ないけど、なんかわかりやすいヒロインいなかったらフェルトだっけマリナだっけ？」

「……は？お前何言ってるの？ここに居るじゃん」

「え、いや何処に？」

「ガンダム」

「は？」

「ガンダム」

「……マジで？」

「うん」

「ええ……」

男は何か深い闇の様なものを見た気がした、それに対して友人は声はごく真面目に振舞っていたが徐々に顔が半笑いになる。

その表情を見た事で男は友人にからかわれたことに気が付いた。

「お前からかったな！」

「ごめんごめん！でも割とマジなんだって！見たらわかるって！……まあ実際は今日はGN粒子を撒いて一緒に願事するイベントのついでの大会なんだろう？だからエクシアなんじゃね？」

「GN粒子で、なんだっけ、意識共有？ニュータイプのな？」

「まあ、大体あってる。でもこれをガチでやるとはなあ……」

飽くまで設定の話だろう？と二人は同時に思いを同じくするのであった。



正午まで15分を切った時、ヒロトにトリーからのメッセージが届いた。

素早く彼が目を通すとテイメンションの準備が整った、そちらから返事がきたら転送するという内容だった。

「トリーさんから準備できたって、行こうか」

「よっしゃあ！行こうぜ！」

カザミの声にパルとメイが頷く。

全員の意思が確認できたので、トリーに準備完了とメッセージを送ると、四人の身体を光が包み込んだ。

その次の瞬間には各々が星の海テイメンションで漂っているガンプラの中に転送される。

ヒロトは機体の状況を確認して、プラネッツシステムに異常が無い事を確かめる。

「コアチェンジ・ドッキング・ゴー」

ヒロトの操作によってコアガンダムにネプチューンアーマーが装着されていき、コアガンダムからネプテイトガンダムへと静かに切り替わった。

「各部異常なし、ヴオワチュールリュミエール、起動可能、よし」
まだネプテイトを動かす時ではないが、ヒロトの確認作業に余念はない。

他の三人も各々の機体のチェックを終えて、四人で通信回線を開いた。

「私は問題ないぞ」

「イージスナイトも大丈夫だ。ま、俺とメイはやる事ないけどな」

「僕の方も機体の状態レックスバスターも含めて、オールオツケーです。……といってもネプテイトガンダムの非常用加速補助ですから、やる事ない方がいいんですけど」

「カプセルはまだ出てないか、トリーさん聞いてますか？以前に話した——」

「はい、カプセルを配置したら、一度近くに貴方のガンプラを転送します。カプセルにガンプラで触れば貴方はその中に移動します、テスト代わりに今話した手順でカプセルの中に移動してください。……あとカプセルの中の空間は少し広げているので息苦しくない筈です」
ヒロトが聞きたい事を言い切る前に、その答えになる事をトリーが先回りして全部答えてきた。

彼女はアバターが鳥なので表情や動作が見えないが、いつもより気持ち早口で答えてくるところからヒロトが考えるに作業をまだ他に何かやっているのかもしれない。

「ごめんなさい、その時が来たらまた声をかけます」

「あ」

トリーの通信はそれきり切れてしまった。ヒロトが謝る暇もなかった。

「あつちもこつちも修羅場だな」

「……僕らの出番は後ですし、申し訳ない気もしますが、待つしかないですね」

そうしてやれる事もなく長いようで短い時間が過ぎると、トリーが再度ヒロトに通信をつないでくる。

「やっと落ち着きました、ミスター・ヒロト、ガンプラを転送します」

「お願いします」

「行ってこい」

メイの見送りと共にネプテイトガンダムはディメンションの中央で漂うカプセルの元へと転送される。

ネプテイトの推力だけでも時間は掛かるがたどり着く事はできる、今回の転送は単純に時間短縮が目的だった。

ネプテイトガンダムはカプセルの元へと転送された後、その腕を伸ばし優しくカプセルに触れる。

その瞬間ヒロトはカプセルの中へと転移した。

「……イヴ」

彼女の身体はまるで眠っているだけの様に、召喚台に背中を預けていた。

ヒロトはイヤリングを懐から取り出して、イヴの左耳へとつける。このイヤリングがイヴに対する手助けになる事を願いながら、丁寧に。

「もう少し待っていてくれ」

グツとヒロトが手を握る、握り返してくれる動きはない。

「……戻しますね」

「はい」

トリーの声が響いて来て、ヒロトが頷くとすぐにネプテイトガンダムに戻されてイージスナイトたちが居る元の場所へと転送された。



イベント開始時刻。

スタジアムはざわざわとどこもかしこも騒がしかった。ダイバーたちは各々に話し合い、その中の多くがヒロトたちに付いて話している。

「——AVALON主催イベント大会にご来場の皆さま、本日はお越しいただき誠にありがとうございます。開催前にフォーブススリーダー、クジョウ・キョウヤより挨拶をさせていただきます」

エミリアの声がスタジアム全体に響き渡る。

その声にダイバーたちのざわつきは一瞬止まり、壇上にキョウヤが

立つことで歓声が大きく上がった。

うおおおお！という大きな声がいろいろな場所から上がり、キョウヤはそれに手を振ってこたえる。

「皆来てくれてどうもありがとう！」

彼が手を横に払うと、会場が静まり返った。

「やあ、気を使ってくれてありがとう。そう長く話す気はないんだが、今日は皆に私から少し聞いてもらいたい話がある」

キョウヤが後ろのモニターを指すと、イヴが写った唯一の画像が大きく表示される。

「今回AVALONが大々的にイベントを開かせてもらった理由は、ある一人のダイバーの切なる想いを示した事がきっかけとなる。ここに居る皆の大半は、彼の動画を見てくれていているだろう。その動画内容をかみ砕くと、GBNを守る為に消えてしまったELダイバーを取り戻したい、と彼は言っていた」

キョウヤは一呼吸おいて、言葉が続ける。

「彼の発言について言及するために、今この場に私が立っているわけではない。勿論、彼の言う事は全面的に信用し、手助けするために行動はしているが、それはさておいてね。……私がここに立ったのは君たちの一つの疑問に答える為だ。その疑問とはすなわち奇跡は本当に起きるのか？」

キョウヤが示したその疑問はこの場に居るダイバーの大半が感じている事だった。

ざわざわとスタジアムが再度騒がしくなる、どのダイバーたちも一緒に来た仲間たちと顔を見合わせたり、この件に関して意見を交わしている。

「奇跡は起こせる！それが私の答えだ」

キョウヤが疑問に対してはつきりと答えた。

観衆の目はもう一度キョウヤの方に向き直る。

「その考えの根本にある事は、私がこのGBNのチャンピオンであることは毛頭関係が無い。数々の困難を打ち破って来たからと出た意見でもない。第一次有志連合戦の折り、あの光の翼を見た者も少なか

らずこの場にいるとは思うが、あれとも関係ない、もつと以前に私たちは奇跡を起こしている。とてつもなく大きな奇跡に、今もこの場に居る全員が関わっている」

観衆は、彼が言う事はいったい何の話かと首をかしげる。思い当たる節があるダイバーは一人もいなかった。

「今回の奇跡を起こす際にGN粒子を使って人の想いを束ねる事に、疑問を感じたダイバーは多いだろう。それはそうさ、GN粒子なんて言っただけはいるが、結局はそういう設定を持っただけの光の粒、思い込みでしかない」

キョウヤはあえて今回の奇跡の手段に対し否定の言葉を並べる。

彼の言っている事が反転しつつあることに気が付いたダイバーたちは、また騒めき始めた。

「——ところで、君たちはガンダムが好きかな？どの作品でもいい、ちなみに私はガンダムAGEが大好きだ」

キョウヤの発言に、大半のダイバーはそんな事は知ってると思った。

「ガンプラはどうだろうか、私は自分の作ったガンプラについて丸一週間話し通せる自信がある」

キョウヤは笑った。

「不思議な物だと思わないか？ガンダムだ、ガンプラだ、とは言うがそれこそカタカナ四文字に対するただの思い込みじゃないか」

キョウヤの言葉に、観衆の多くは引き付けられ、すこし考えざる得なくなる。

「思い込みで良いんだ、それで奇跡は起こせる。その思い込みがこの世界が作られる大事な要因になった、多くの人たちの熱意が感動が、想いが詰められてこのGNができた。世界一つ作り上げるくらい私たちはガンダム、ガンプラが大好きなんだ！想いは集まって、こうして奇跡はすでに起きている！君たちはその一員だ！君たちのおかげでGNは続いているんだ！奇跡を私たちはすでに起こしている！」

シンツと静まり返る、誰もが息を呑んだ。

同時にスタジアム直上に居るダブルオースカイメビウスがトランザムインフィニティを発動させ、GN粒子で会場を包みこむ。GN粒子はキラキラと瞬きながら、ダイバーたちの周囲を舞う。

「たと思いい込みでも、世界は変えられる！奇跡は起こせる！難しく考える必要はない！皆で大声で叫ぼう！GNを守ってくれた彼女に伝えよう！私たちは世界を作ってしまった程にガンダムが、ガン普拉が大好きだと！このGNが大好きだと！」

グツとキョウヤは一息吸い込んで、大声で叫ぶ。

「GN、万歳!!!」

その声は

世界に

響いて

「「「「うおおおおおおおおおおおおお」」」」
!!!!!!

「GN大好きだー!!!」

「ガン普拉大好きー!!!」

「イヴちゃん帰ってこーい!!!」

その時、響き渡る声が、確かにGNを、世界を包み込んだ。



「GMー！」

「どうした？」

運営の職員が焦った声を上げ、GMは何事かと問いかける。

「やっぱりそうだ！『花』に各地からGN粒子が集まってきました！」

「何？アブソーパーはまだ起動していない筈、いや、すぐにGNアブソーパーを起動しろ！」

ELSが作った『花』をモデルにしたオブジェクトにGN粒子が勝手に集まりつつある、その報告にGMは面食らうも会場の様子を見てすぐに指示を切り替える。

職員は指示を受けて、すばやく各地のGNアブソーパーを起動させる。その収束の速さはアブソーパーの限界を軽々と超え、見る見るうちに『花』にGN粒子が蓄積されていく。

メインモニターに表示された『花』に入り込むGN粒子の量が示されたゲージがMAXを叩きそうになった時に、GMは指令を飛ばした。

「よし、カプセルに向かって放出！」

「放出します！」

GN粒子は奔流となって、イヴの身体が納められたカプセルに勢いよく流れた。



「リク」

「うん、すごいね」

リクとサラは感動に包まれて、世界を包んだ大きな声を聞いた。

あの光の翼を起こした時以上の奇跡が今まさに起きたと、二人は確信した。

その時、サラが上を向いた。

突然の仕草にリクは驚いて彼女に声をかける。

「サラ？」

「……姉さん？う！？」

ガクンとサラが崩れ落ち、リクは反射的にその体を支える。

サラの頭がずきずきと痛んだ、姉さんが危険だと直感で分かった。

「リク、姉さんが！」

「そっか、でも大丈夫だよサラ、ヒロトを信じよう」

「……うん！」



四人が花から放出されるGN粒子を見て、意識の収束はうまく行つたと確信した直後、メイが頭に痛みを覚えて蹲る。

「う、なんだ!?!」

「メイさん?どうかしたんですか!?!」

「おい、どうした!?!ヒロトもどうした!?!」

パルとカザミが声をかけると、メイはヒロトにともかく伝えようとする。

ヒロトはそれよりもはるかに早くネプテイトガンダムにヴオワチュールリユミエールを展開させる。

強い胸騒ぎが起こり、考える前に腕が動いた。

「ヒロト、姉さんが!」

「分かってる!パル!」

「ツ!?!はい!!」

エクスバルキラランダがネプテイトガンダムの後ろに着き、レックスバスターを構えてガンドランザムを起動させる。

パルは尋常ならざる二人の様子に、自分が疑問を挟み込む余地が無いと素早く判断した。

数秒でネプテイトガンダムがヴオワチュールリユミエールを完全に展開し、固有の光が輪の様にネプテイトの推力になっていく。

「ヒロトさん、行けます!」

「よし頼む!」

「ガンド——」

「まてええい!!!」

カザミが大声を上げて、二人を制止する。

何事か、とヒロトとパルがカザミの方を見ると、カザミはニヤリと笑った。

「……一番大勝負で!今から発進って時に!言う事はそれじゃあねえだろ!」

「……ああ、そうだな」

ヒロトも笑う、焦りすぎた気持ちが風のように静まった。

メイとパルも小さく笑う。

「ネプテイトガンダム！ヒロト、出る！」

「行ってこい、ヒロト！」

「よっしやあ！行ってこい、ヒロトオ!!」

「必ず、二人で帰って来てください！ガンドランザムレックスバスター、シュート!!」

ネプテイトガンダムはエクスヴァルキランダーの後押しを受け爆発的に加速した。

一瞬で三人から離れ、猛スピードでイヴの元へと直進する。

「一緒に行くぞ、イヴの所まで！」

ヒロトの言葉を受けて、ネプテイトはさらに加速していく。

変わる未来

もう家を出ないと、そう思い自室でヒナタは立ち上がった。準備はすでに完了しているが、気分は優れない。

ヒナタがヒロトを応援しようとする気持ちに嘘は勿論ない、全てがうまく行って欲しいと願う気持ちにも嘘はない。

ヒロトと当日の正午付近でGBNにダイブし協力する話はしたが、BUILD DIVERSの皆と一緒に行動するという話はしていない。今日くらいならうまく誤魔化してイヴと顔を合わせないで済むかもとヒナタは思うが、そのうち顔を合わせる時が来る事は確かだった。

『あの子』と会ってもヒナタはあまりうまく話せる気もしない、あまり仲良くできる気もしない、そういう気持ちにどうしてもなってしまう少し憂鬱だった。

ベランダからはカラツとした空が見える、天気は良いようだ。

家から出て扉を閉めると、隣の家の扉が開いた。

ヒナタが目を向けると、ユリコが出てきたようだった。

「おはようございます」

「おはよう、ヒナタちゃん」

ヒナタが見るにユリコは買い物に行く時の装いだった。

G-CAFEにいく彼女と買い物に行くユリコの辿る道はある程度一緒だ。同じ考えに至ったユリコは途中まで一緒に行く?と視線で問いかけ、ヒナタも頷く。

マンションから出て二人は道を辿り始める。ヒナタの足取りは軽くない、ユリコは彼女の歩く速度に合わせる事にした。

ユリコから見る、ヒナタは良い子だ。

愛想がよく、他人に気を配る事が上手い。この子と接する人は皆そう思うだろうと、鼻根目抜きに彼女は感じている。

ずっと前にヒロトが落ち込んで帰って来た時も自分達と遜色ないほど心配してくれた上、その出来事以降も何かと息子を支えてくれた。

そして少し前に心を乱す様な出来事があったにも関わらず、ヒロトを支えようとする態度に変わりはない。

今のヒナタの様子はユリコからすればやはり心配だ。

昔からヒロトの事を手助けしたり、理解しようとして彼女が働き掛けていたをユリコは知っている。その献身的な行いは、同時に自己犠牲の可能性を含んでいる事も。

「私、どうしたらいいのかな」

ポツリとヒナタが呟いたのは、その時だった。

ここ最近自分がどうしたらいいのか、ヒナタは散々考え続けていたが、答えらしい答えは見つからないままだ。

悩みの内容を全て説明するには口が重かった。ユリコなら察してくれるかもしれない、という微かな望みでようやく出た言葉。

小さな声でもすれば聞き逃しそうになる音量だったが、ユリコの耳にははつきり届いた。

ユリコの考えはすでに結論が付いていた。

「そうねえ——」

今までのヒナタとこれからのヒナタ、その差異がどこにあるのかユリコは知っている。

ヒナタのヒロトに接する気持ちは否応なく変化せざる得ない、もうすでに唯一を決めてしまった息子が彼女に目を向ける事はないだろう、好きな事や決めた事には一途、それがヒロトだ。

その事はヒナタ自身も良く知っている筈だ、知ったから傷ついた。

「コミュニケーションが取りにくい人って、どうしたって居るわ。仕事柄色んな人と話したり文通したりするけど、例えば言葉の壁を乗り越えても、良く分からない人はやっぱり良く分からないわよ。ヒナタちゃんはずっとあの子と距離感が分からないから悩んでるんだと思うの」

「……」

「一度ヒロトから離れてみたらどうかしら？」

「……離れる」

ユリコは彼女に対する心配の心と少しの寂しさを覚え心中複雑

だった。もう少し良い言い方はないのかと思いつながらそれでも伝えた。

ヒロトを第一に優先する親として、ユリコがヒナタに伝えられる最大限の言葉と気遣い。

ヒナタの悩み事を正確に捉えていた彼女と同じようにユリコの優しさにヒナタは気づくことができた。

イヴと顔を合わせるかもしれないが、無理して仲良くする必要はない、ユリコの言葉はヒナタにそう伝わった。

そしてそのユリコの答えはヒナタの中でどこか当然になっているヒロトへの歩み寄りについて考え直させる。

距離を取る、ヒナタはその選択肢を示され、どうしようかと思いつむ。

ヒナタがまた別の悩みを抱えた事にユリコも気づく。

多少ヒナタを傷つけかねないが雁字搦めになった彼女に言える事はまだある、ユリコは決心して言ってしまう事にした。

「ヒロトを理由にして無理に仲良くしても苦しくなるだけよ」

「……そうですね」

ユリコの言葉には突き放す響きがあった。

ヒナタが無理をしてイヴと上部の付き合いをしたとして、しばらくは大丈夫かもしれないが何かの拍子にバランスが崩れればイヴは勿論ヒロトや他の友達にまで影響が波及しかねない。それは決してヒナタも望むところではないだろう。

自分の気持ちに整理がつける事の出来る時間と距離がヒナタには必要、それがユリコの答えだった。

ヒナタもユリコの答えを理解して頷く。

自分の為にヒロトは動き出した、なら自分もヒロトの為に言い訳をするのはやめよう。

ユリコのおかげでそんな気持ちが沸き上がってきて、ぐっと気分が楽になった。

「ありがとうございます、ユリコさん。決心を何とかつけてみます」

「……そう、よかったわ」

「でも」

「何かしら？」

「ヒロトの応援はします、やりたい事に変わりはありませんから、それじゃあまた！」

ヒナタは足取り軽く走り始めた。

ユリコはその背中を見ながら、目を細めた。

ヒナタは足取り軽くG-CAFEにたどり着いた、早速手続きを終えてGBNにダイブする。

ヒナタのダイブ位置もミッションカウンター付近に設定されている。

気が重くなつてゆっくり歩いている間に、正午は過ぎてしまい予定よりダイブ時間が少し遅れた。

今ヒロト達がどの段階にあるか分からず、ともかくそれを確かめようとヒナタが考えた時後ろから大きな声が響いた。

「GBN大好きだぁー!!」

「ガンプラ大好きー!!」

「ひゃあ!？」

ヒナタはびっくりして身を縮こまらせて、ふと気付く。

ヒロトが今回の計画内容を話してくれた時は、大きなフォースのリーダーがGBNのダイバーを盛り上げるために演説すると言っていた。今のはその演説の結果だろうか。

ミッションカウンターの上部に案内モニターがある、今回の計画に応じてその上に特設モニターが配置されており、キョウヤの演説は中継されていた。

ヒナタが他のダイバーの視線からその特設モニターを発見すると、ちようど画面が切り替わって大きな花と星々が存在するディメンションが映された。

「……奇麗」

ヒナタは緑色の光を蓄えている花に目を向ける。

あの光がヒロトの言っていた粒子という物だろうか、と彼女は少し感動していた。

次第に粒子は濃くなっていき、ついに花から溢れ出るように一つの大きな流れとなつて星々の先へと向かつていく。

天の川みたいだ、とヒナタは感じた。

その少し後、きらりと天の川に沿って走る、一つの流星を確かに彼女は見た。

「ヒロト」

どうか、彼の気持ちが届きますように。

ヒナタは強く強く、一心に祈った。

◆◆

「各ディメンションからデータの流入が起こり始めています！」

「サーバーへの影響は？」

「大きくはありません、少しグラフィックが乱れる程度です」

「よし、そのまま監視を続けてくれ」

部下からの報告にGMは安堵すると、指示を下す。

そうするとまた別の部下が声を上げた。

「BUILD DIVERSのガンプラが動き始めてます！」

「何？」

「一機がカプセルの方に移動中！」

「どういう事だ、ミス・トーリ、分かるか？」

報告を聞いたGMはトーリの方に目をやる、ほぼ同時にトーリはウィンドウを浮かべて、BUILD DIVERSの会話ログを状況を確認し、ヒロトとメイが何かを察知して行動を起こした事を読み取った。

「ELダイバー・イヴにはまだ何も起きていない筈だが」

「今から何か起こるのかもしれませんが、彼らはそれを察知した様です」

「馬鹿な、と言いたいのが今更か。ELダイバー・イヴから目を離すな！」

トーリがヒロトと通信を繋げようと試みるが、繋がらない。

影響はすでに出始めている。

◆◆

ネプテイトガンダムは猛烈な勢いで直進していた。

星に当たり判定が用意されていないので、避ける必要はない。星一つを突き抜けた時点でその妙な感覚にも慣れた。

今も強い胸騒ぎが、ヒロトの中で渦巻いていた。

仲間たちとの通信はすでに途切れた、普段なら距離が離れすぎているので通信が切れて当たり前だが、今日は運営の力を借りてその限界はほぼ無制限に引き延ばされている筈だ。

異常を察知している筈のGM、トリーからも連絡が来ない。

先を見据えると、何か光の欠片の様なものがどこからともなく流れて来ていた。

その欠片の向かう先は、ネプテイトが進む場所、つまりカプセルの場所に収束しつつある。

つまりイヴは目覚めかけている、そうヒロトが予想した時だった。

徐々にだが視界が暗くなっている事に気が付いたヒロトは恒星を探した。

星の海デイメンションには間隔を開けて恒星がある、発光オブジェクトとして配置されたそれはデイメンション内を一定の明るさに保つ役割を担う為の物だ。

ヒロトが一番近くにある恒星に望遠カメラを向けてみると、光が何かに遮られて弱弱い光になっている。

コアガンダムがヒロトに見せたあの真っ暗な空間は、恐らくこの先にあるのだろう。

そうしている間にもカプセルとの距離は縮まりつつある、そろそろ速度を落とさなければならぬ、ヒロトは判断を下してヴォワチュールリユミエールの出力を落とす。

「操作が効かない……？」

出力が落ちない事を確認し、コアガンダムが拒否しているとヒロトはすぐに察した。

コアガンダムに任せよう、とヒロトが判断を下した時には更に周囲は暗くなっていた。

ガキンツ、と何かが押しつぶされているような音がコックピットへ響く。

「!?」

ネプテイトの右足にダメージが入った。ダメージが入ったのは機体の末端で特に行動に支障はない、とはいえ明らかに異常な現象に、ヒロトは思わず声を上げる。

「コアガンダム、大丈夫なのか!?!」

ヒロトからの操作はやはり効かない。

彼はそのまま直進を続け、それにつれて異音はどんどんと増えていく。

そしてついにはヴォワチュールリュミエールの展開に参与する右腕が完全に圧壊し、システムが強制的にダウンする。

ヒロトの目の前は真っ暗で、コアガンダムのカメラ越しでも何も見えなくなっていた。

その状況になっても、コアガンダムは前に進む。

何があるともヒロトをイヴの元まで送り届ける。

その意思はヒロトにも伝わった。

「ありがとう」

また、背中を押された、ヒロトは確かにそう感じた。

握る操縦桿は、温かかった。

ガキンと、また大きな音が響いた。

その音が響いた直後、急激に浮遊感を覚え、ヒロトが驚きながら操縦桿を握りなおそうとするが手に何も当たらない。

手は動かしていない、周囲を確認しようにも真っ暗で自分の手すら見えなくなっていた。

夢で見た場所だ。とヒロトは違うと首を振る。

あの夢を見る前からここを知っている、ヒロトは確信した。

「イヴ?」

近くに彼女が居る、ヒロトはそう感じ取った。

返事はない、だがすぐ近くに必ず居る。

「イヴ、迎えに来たんだ、返事をしてくれ」

あの夢を見る前から、ヒロトはここがどこなのか知っている。彼女と離れて、一番辛かった時に来た。

ただ暗く。

ただ冷たく。

何もない。

この場所を彼はよく知っている。

こんな場所にイヴを置いてはいけない、一刻も早く、この場から出なければならぬ。

何を言ったら彼女が返事をしてくれるか、ともかくヒロトは話しかけた。

「イヴ、こんな場所に居たらダメだ」

その声をかけた時、懐かしい声が響いた。

「ごめんね、ヒロト」

「――！」

震えて今にも消えそうな、弱い、弱い、小さな声だった。

その声を聞いて、彼女がどれほど自分を責めているか彼にはすぐに分かった。

耳を塞ぎ、目を閉じて、ひたすらに自分を責める。

イヴはこの場所の何処かで蹲っている。

声が響く、一か所からではない。

「ずっと一緒に居たのに隠し事ばかりしていた私はヒロトと会えない」

「そんな事はない！」

探す。

「いっぱいヒロトを傷つけた私に会う資格なんかない」

「資格なんかいらぬ！」

全ての感覚を使って探す。

「自分勝手な私」

例え目が見えなくとも

「臆病な私」

音の方向が判断できなくとも

「醜い、私」

ふと緑色の瞬きが、見えた気がした。

「助けて貰う、資格なんて、ない……!」

「イヴ」

「あ!」

手は届いた。

確かに、彼女の手だ。

イヴはヒロトの手を振り払おうとするが、固く握られて振り払えない。いい。

あの時掴めなかった手を、震えたこの手をヒロトは絶対に離さない。いい。

「俯いてたら、何も見えないよ」

真っ暗で何も見えないが、イヴは俯いているようにヒロトは感じた。

逆の手で、彼女の頬に手を添えるとその手が濡れた。ヒロトが持ち上げようとするが強張って、泣いているイヴの顔は上がらない。

目を合わせたら怒られると震えている子供のよう、今のイヴは頼りない。

「怖い?」

「何で」

「ん?」

「何で怒らないの……?」

イヴは震えて聞く。

「ずっと一緒に居てくれたヒロトに何にも言わなかった!最後の最後に全部押し付けて!いっぱいヒロトを傷つけて!コアガンダムにも酷いことさせた!なのはどうして!?!」

声を荒立たせるイヴとは対照的にヒロトの答えは穏やかだった。

「イヴはもう自分を責めてるじゃないか、それが分かっているのに俺が責める訳ないよ」

「……ヒロトは平気なの?」

イヴの言葉にヒロトは握った手を、自分の頬へと持っていく。

「平気じゃないさ」

「……あ?」

イヴの手はヒロトの頬に触れ、濡れている事を彼女に伝えた。

ヒロトは泣いていた、彼女の手を掴んだ時から彼は涙が溢れて止まらなかった。

イヴはヒロトの涙に手が触れて思わず顔を上げた。

「泣いてるの？」

「目の前で大事な人が居なくなつて、最後にした約束も全部裏切る所だった。自分が嫌いになった！辛かった！苦しかった！悲しかった！平気な訳ないだろ……！」

「あ」

ヒロトは全てを吐き出した、溜まりこんだ感情は仲間のおかげで一度吐き出せた、二度目も今吐き出す事が出来た。

以前よりはつきりと辛かったと言えたのは、自分を変えてくれた仲間たちとイヴが目の前に居てくれるお陰だ。

イヴはヒロトの感情の限りを込めた声に、震えて縮こまる。

「最後まで何も言わなくてごめんなさい」

「うん」

イヴの心からの謝罪を、ヒロトは受け入れた。

「自分勝手なこととしてごめんなさい」

「うん」

ヒロトは傷ついてないから、大丈夫だからと、イヴの言葉を跳ね除けたりしない。

「ごめんね、ヒロト」

「うん」

イヴはヒロトの胸に身体を預ける。ヒロトはイヴの頭に手を置いて頭を撫でた。

彼のその手の優しさが、強く彼女の胸を打った。

こんなに優しい人に隠し事をした自分、傷つけた自分がイヴは許せなかった。

「……ううああああ」

何度も何度も謝って泣くイヴが近くに居る事で、ヒロトは自分の身が割かれるように苦しい気持ちに捕らわれる。

もうこんな声で謝られたくないとヒロトは感じた。

「俺はイヴの事を許すよ、だから——」

「……？」

「イヴも自分の事許していいんだ。俺の方こそ一人でずっと悩ませて、ごめん」

イヴの事情に踏み込まず、最後の最後まで何も聞かなかったのは自分も同じだとヒロトはイヴに謝る事が出来た。

彼の心に棘の様に深く刺さった罪悪感、イヴへの謝罪と共に消えていく。

「助ける事ができなくて、ごめん」

声を上げて足掻けば、『彼』の様にイヴを助けることができたかもしれない、そうすればイヴはこんなに泣かなくても良かった筈だ。ヒロトの後悔は、言葉とともに消えていった。

「……あああ」

「悲しい別れになったのも、半分は俺の責任だ。ごめん、イヴ」

彼女はやりたい様にやった、そう納得していたヒロトは、本当に何も分かっていなかったと実感する。

こんなにも傷ついて、こんなに謝って、こんなに自分を責めるイヴが、やりたい様にやれた訳がないというのに。

イヴは大きく首を振る。

「ヒロトは悪くない」

「イヴも悪くない」

ヒロトの優しい返事に、イヴはグツと息を呑んだ。

「うっうううわあああああ!!!ごめんなさいいいいい!!!」

イヴはついに大声を上げて泣き出した、ヒロトは彼女の身体を抱きしめた。

泣いている人が居る時は、黙って寄り添ってあげる。自分が泣いたときに言われた言葉を思い出しながら、もう彼女が何処にも行かない様に、力強く、優しく抱きしめた。

世界は真つ暗な闇を振り払って、徐々に白い輝きを取り戻した。

「イヴは自分が許せそう？」

ヒロトの言葉に、イヴは大きく首を振る。

やはりそうか、とヒロトは思う。一度自分を嫌いになってから、自分を許すまですいぶん時間がかかった。仲間たちに出会えて、イヴと再会できてようやく自分に刺さった杭が抜けたが、彼女からすればまだ時間も言葉も足りないのだろう。

「そっか、俺も自分が好きになれるまではまだ時間がかかりそうだ」

「……ううう、ヒロトは凄い人だもん、すぐ自分を好きになれるもん、なって大丈夫なんだから」

「俺なんて大した事……ほらまたこれだ」

ヒロトは小さく笑うと、イヴと少し身体を離して目を合わせた。

目を合わせて強く実感する、目の前に彼女が居る事が本当に嬉しかった。

白く輝くこの空間のおかげで、彼女の顔が良く見える。

「変わるう、イヴ」

「変わる？」

「俺達は自分が嫌いだから、そこから一緒に変わるんだ、自分が好きになれるように」

「一緒に？」

「うん」

一緒に、その言葉にイヴは泣きながら笑った、これから先の事を話してもらえたことが嬉しかった。

その笑顔を見て、ヒロトは笑いながら泣いた、この顔をまた見たいと彼はずっと思っていた。

「ヒロトと一緒なら」

「イヴと一緒なら」

一度離れ離れになった二人は、また一緒に笑い合えた。

星の海で

二人で変わる約束をして少し落ち着きを見せて来た時、ヒロトは彼女に声をかけた。

「結局ここはどこなんだろう?」

「分からない。……私が目を覚ました時、なんだかすごい大きな声を聞いたけどあれは?」

「ああ、それは多分、皆の。……いろいろ説明したいけど、先にここから出ないと」

ヒロトはウィンドウを弄ろうとするもそもそもウィンドウが出ない事に気づく。

イヴは辺りを見渡しているが、真っ白な世界に二人以外誰も居ない。

「ゲーム的な操作ができない、コアガンダムの呼び出しもできないな」
「コアガンダムも一緒に来てくれたの?っあ」

ヒロトの現状確認の言葉の一部にイヴは食いつくも唐突に左の方を向いた。

彼女の様子にヒロトが首を傾げる。やっぱりそうだと確信したイヴは自身が感じた事を話す。

「近くで待っていてくれるわ、黙ってたみたい」
「……気を遣われてたな」

ヒロトが苦笑いすると、イヴは嬉しそうに笑う。
「口数の少ない子なのよ、私とヒロトが話してる時は昔から殆ど話さないわ」

「へえ……」

「コアガンダム、おいで、こつちよ。貴方にも謝らせて」
白い空間にコアガンダムが浮き出てくる。

ネプチューンアーマーは圧壊して殆ど原形を止めておらず、コアガンダム本体にも亀裂の様なものが入っていた。

ボロボロだな、とヒロトは素直に思う、こんな状態になつても無事イヴの元に送り届けてくれたのだから、我ながら自慢の相棒だ。

イヴはその傷ついたコアガンダムに目を見張ると、悲痛な面持ちで恐る恐るコアガンダムに歩み寄った。

「ごめんね、コアガンダム……！酷い事してごめんね……！」

痛ましいコアガンダムの惨状に、膝から崩れ落ちたイヴを咄嗟にヒロトが支える。まるで懺悔の祈りの様にコアガンダムに両手を添えて心を通わせる彼女に、ヒロトは静かに寄り添った。

「ありがとう、コアガンダム」

ヒロトの感謝の言葉に対して、傷だらけの無表情な相棒から満足げな雰囲気を感じ取れたのは、きつと気のせいではない。

コアガンダムから手を離れたイヴの表情は暗いままで、再び涙が零れ落ちる。そんな彼女をヒロトはそっと抱き寄せながら慰める。

「何て言ってる？」

「ヒロトが自分の言いたい事を言ってくれたから話す事ないって、凄く怒ってる……」

「ああ……それは……」

最終的に彼女に止めを刺したのはコアガンダムだ。カザミ曰く育ての親にそんな事を強制されれば、臍を曲げて怒っても致し方ないとヒロトも思う。ヒロト自身はイヴの謝罪を受け入れて許したが、相棒の意思ばかりはビルダーの彼でもどうこうできる問題ではない。

どうやって謝ったらいいだろうかとイヴは縮こまったまま、コアガンダムが話したことをヒロトと行う為に彼の手を引っ張る。

「コアガンダムに乗れば出してくれるって」

「ああ、じゃあ行こうか」

コアガンダムに乗り込むと、光の空間からはいつの間にか抜け出していた。

星の大海のデイメンションに戻り、ヒロトが周囲を確認するとGN粒子の殆どが霧散していたが、ちらほらと星雲を彷彿とさせる光景が広がっていた。

イヴの瞳に映った幻想的な煌めきに、彼女はヒロトと再会出来た理由を悟る。

「皆の想いの欠片を感じるわ。あの時の奇跡に似てるみたい。ヒロト

がもう一度起こしたの？」

「君ともう一度会う為に、色んな人と相談して、知らない人に話せる事を話した。皆、力を貸してくれたよ。君の言う通りだった、皆の大好きだという思いが集まれば奇跡だって起こせるって」

ヒロトが微笑みながら話すと、イヴは思わず彼の手を握りなおしていた。

自分との思い出を忘れていなかったヒロトの目を見つめながら、イヴは首を傾げる。

「覚えていてくれたの？」

「覚えてるさ」

ヒロトはイヴの言葉を迷いなく返した。

「ありがとう、ヒロト」

イヴはへにやりと笑う。

彼女は心底幸せそうな笑顔で、それを向けられたヒロトは胸が強く脈打つ程の鼓動を自覚する。イヴの仕事の一つ一つに 受ける衝撃が依然とは比べ物にならず、その理由は彼自身も良く分かつてはいるが、これではまともに話せない。

堪らない気持ちを何とか理性で手懐けつつ、ヒロトは僅かにイヴから目を逸らす。

「……どういたしました」

ヒロトは声が裏返らない様に必死で抑え込んで、仲間とトリーに通信を繋げようとする。

通信はまだ繋がらない。原因になったかもしれないイヴの精神はもう安定している。ヒロトは釈然とせず首を傾げた。

「通信が効かない。でもコアガンダムにこれ以上の負担は――――

あ、

「あら？」

瞬く間にコアガンダムが修復され、完全なネプチューンアーマーが再装着された形に戻った。

事前のトリーとの打ち合わせの際、カザミが今回の計画について星の大海のディメンションに拘る理由を事細かく熱弁していた。この

施しはその熱意に中てられた彼女からの粹な計らいであろうと、ヒロトはすぐに思い至る。

ここに来て、まるで別種の緊張がヒロトに襲い掛かる。

ともかくヴオワチュールリユミエールを展開して、徐々に加速し始めるとネプテイトの背中が何かに押し出されたかのように進み始めた。エクスヴァルキランダーに後押しを受けた時の様な爆発的な加速力程ではないが、それでも十分に速い。惑星間航行を目的とした性能は伊達ではない。

イヴはコアガンダムに今装着されているアーマーに知っている様な、知らない様な不思議な感覚を覚えた。ヒロトと過ごしていた時には間違いなくこの『着替え』はなかった筈と、彼女は記憶を確かめる。「この着替えは？」

「ああ、惑星間航行用のネプチューンアーマー。最初に使った時イヴにも助けて貰ったと俺は感じたけど、分からないか？」

ヒロトはエルドラでの大気圏離脱の瞬間を思い出しながら、イヴに問いかける。

彼女は暫く考えていたが、弱く首を振った。

「……良く分からない、知ってるような知らないような。ねえ、本当に私がヒロトを助けたの？」

「俺はそう感じた。それ以前にも同じような事が何度かあった。……イヴの意識は今まで殆どなかったんだろうな。——それでも、ありがとう、イヴ。君のお陰で此処まで来れた」

イヴが意識を完全に取り戻したのは、今回起こす事の出来た奇跡の後の話だ。

イヴの魂が霧散しているお陰で、自分を消滅させる力が無い事が寧ろ幸運だと感じた事があったが、それ踏まえると今まで自分を助けてくれたのは、イヴの幽かに残った想いの力なのかもしれないと、ヒロトは思う。

過程はどうあれ何度か窮地を救われた事は彼にとって紛れもない事実で、エルドラの大気圏を離脱した際と同じ感謝の言葉を、その時以上の想いを籠めて彼女に贈る。

「ヒロトが助かったなら、お礼なんて……」

イヴは自分を卑下しそうになるが、先程のヒロトとの約束を思い出し、言葉を言い切る前に飲み込んだ。

ヒロトはその素早い適応に感心する。

「凄いな、イヴは」

『自分だったらそのまま言い切っていただろうな』と自覚していたヒロトだからこそ、惜しめない称賛を贈る。

イヴはくすぐったさを覚え、ちよつと期待を含ませながらアーマーの用途ついて質問する事にした。

「惑星間航行用って、あの話も覚えていてくれたの？」

「ああ、君が居なくなる前に作ろうとはしていたんだ、でも俺だけだと作れなかった」

「色んな人意志を感じるわ。ヒロトと……三人？」

「本当に良く分かるな、仲間たちの紹介はまた後でするよ」

「仲間。———そっか」

彼女のガンプラから心を読み取る能力は昔から目を見張るものがある。同じE.L.D.ダイバーでもここまでガンプラの心を読み取れるのは、それこそサラくらいじゃないだろうかとヒロトは感じた。

イヴはヒロトの仲間、という言葉に長い時間が経ったことを実感する。ヒロトを置いて行ったのは自分の方なのに、彼の隣で時間を共にした仲間たちが羨ましくて、なんだか少し寂しくて、そう感じる自分が嫌だった。

コアガンダムはそれなりに早いペースで星の間をすり抜けて、イージズナイトたちが待つ場所に戻りつつある。

「ヒロト、このまままっすぐ行ったら……!」

少し焦った表情のイヴが指し示す先に視線を向けると、一つの星があった。

直進してもすり抜けられるとヒロトは知っていたが、彼女はその事を知らないのだから当然の反応だった。

そんな表情も可愛らしいと不謹慎ながらも微笑ましく思いつつ、ヒロトは笑って答える。

「ああ、すり抜けられるから大丈夫。……でも気になるか」

ヒロトは操縦桿を使ってまだ先にある星の真横を抜けるよう、ネプテイトの軌道を調整する。

イヴはネプチューンアーマーだけでなく、このデイメンションそのものにも疑問を抱いていた。銀河の向こうに行きたい、あの話をヒロトは覚えていてくれた。この星の大海はきつとその話があったからこそ何らかの手段で逃えてくれたのだろう、アーマーの話を含めて考えると、ヒロトは自分を喜ばせようとする為にあらゆる手を尽くしてくれたのではないかと、どうしても考えてしまう。

「ヒロト、あのね」

「ん？」

呼びかけると、自分を助けて、許してくれた、愛しい人は優しく答えてくれる。

「——迎えに来てくれてありがとう」

「ああ」

イヴは自分の聞きたい事を飲み込んでしまう。

助けてくれて、許してくれて、彼は自分の言葉を忘れずにいてくれて、自分の夢を叶えてくれた。

彼女は幸せだった。彼からこんなにもたくさんの幸せを貰ったのだから、『これ以上』は望み過ぎだと自分を戒める。

ヒロトは彼女が嬉しそうにしている事に、心の底から喜びを抱いた。

彼は心の中で一息吐く。

イヴの為の言葉と想いはもう出し切った。此処からは、自分の為に彼女に伝える事があった。

仲間たちとの会話を思い出す。

イヴとの夢である星の大海、そこを泳ぐネプテイトガンダムの中に自分達は居る、他には誰も居ない、仲間からの通信も気を遣われないのか掛かって来ない。

彼女に想いを伝えるなら、今ほどの機会はない。想いを伝える時の言葉も、色々考えて来た。

ヒロトは緊張を滲ませてイヴに声をかける。

「あのさ、俺——」

「うん、なに？」

ヒロトに呼びかけられて、イヴは彼の目を見る。

彼女の目がヒロトは好きだった。このGBNに来た当初、いろんな事に馴染めなかった自分が世界を好きになる事が出来たのは、いろんな事に輝きを感じる事の出来る彼女の目を通して、『色』を見つけられたからだ。

彼女の目を見て、彼は思った事を素直に告げようと決めた。

「イヴが好きだ、これからもずっと一緒にいて欲しい」

「……え？」

飾り気のない、それでも真っ直ぐなヒロトの思いの丈に、イヴは自分の耳を疑った。

自分を戒めたばかりの彼女が思わず身を引こうとすると、恥じらいを捨てた心境のヒロトはすかさずイヴの肩を掴む。

「——私は」

ヒロトとずっと一緒に居たい。夢を話した時からずっと、そう思い続けてきた。

でもそれはどこから来たかもわからない、どこに行くのかも分からない身ではつきりと言う事は出来なかった。

別れの時も、最後まで自分勝手に、酷くヒロトを傷つけた。

イヴの中の冷たい自分が彼女を咎める。

—— 烏澁がましい。

—— 自分は相応しくない。

—— 上手く行く訳がない。

—— 足手まといになる。

あの真っ暗な世界に居た時、何度も何度も自分を咎める声を聞いた。

「わたし、は」

「イヴはどうしたい？」

暗い思考に囚われて、言葉を失ったイヴに、ヒロトは穏やかな表情

で問いかける。

「どう……?」

「自分が嫌いとか、関係ないんだよ。やりたい様にやればいいんだ。だから今、俺はイヴを好きだって言ったんだ」

ヒロトの脳裏に蘇ったのはフレディの言葉だった。

彼は自分が嫌いだとか、自分には無理だとか、そんな考えに捕らわれないイヴの本心が聞きたかった。

自分の為に、願わくば彼女の為に。

イヴの目に、再び涙が溢れてくる。

「やりたい様にやっていたいの?」

「うん」

「また馬鹿な事するかもしれないよ?」

「その前に止める、今度こそ絶対」

「私は地球の人じゃないよ?」

「そんな事関係ない」

イヴは思う。全部受け止めてくれた事がどれほど嬉しいか、彼は分かっているのだろうか。

『やりたい事をやれるように』と、『自分を好きになれるように』と、

『一緒に変わろうと誓い合った約束』も、『また一緒に笑い合えるように』と、それらの全てが彼女を戒めから解き放つ。

自分を咎める冷たい彼女でさえも、溢れんばかりの彼への愛まで咎めることは出来なかった。

「ねえ、ヒロト」

「ん?」

返事はもう、決まっていた。

「大好き、ずっと一緒に居ようね」

ヒロトはイヴの言葉と笑顔を深く心に刻み付けた。

この瞬間を一生忘れない。二人の想いは言葉を交わさずとも一つであった。

イヴはぽつりと呟く、その言葉は幸せを噛み締める様な響きだった。

「やりたい事をやっていいのよね？」

「うん」

「——ならもう我慢しない！」

「えっ？」

イヴが急に奮い立ち、ヒロトは驚いて目を丸くする。

その瞬間、ヒロトの視界がイヴの愛らしい顔に覆われる。

「っん」

「!?」

イヴは自分のやりたい事をやると、その幸せを味わう様に微笑んだ。

「えへへ、やっちゃった」

「ちよ、イヴ！」

「我慢なくていいって、ヒロト言ったもん」

満足げに笑うイヴの頬が赤いのは気のせいではない。ヒロトの方は突然の不意打ちに冷静な判断力を失っていた。

先程までの躊躇いなど無かった様に、彼女は尚も上機嫌のまま。

「初めてだね」

イヴが幸せを確かめる一方で、ヒロトはイヴの大胆な行動に驚きの方が勝っていた。

呆然としたままのヒロトを見て、イヴは少しだけ寂しくなり、悲しくなり、不安げな眼差しで問いかける。

「……嬉しくない？嫌だった……？」

「……そんな事はないけど」

「そう？」

どこか不満げなヒロトの様子にイヴは首を傾げるが、得心が行ったのか両手を小さく打ち合わせた。

「私もやっぱりちよっただけ複雑かな」

「何が？」

「初めてはヒロトからの方が良かったなあ、なんて」

イヴは上目遣いでヒロトの顔をのぞき込む。

いじらしい仕草は、ヒロトからの愛が欲しいと甘える可愛らしいわ

がままで。

「イヴ」

ヒロトの顔が近づいてくると、イヴは待ち焦がれたように目を閉じる。

「んう」

イヴは継るようにヒロトの身体にしがみつき、ヒロトは彼女の身体を抱きしめた。

時間の流れを忘れる程の幸福感が二人を満たし、お互いに名残惜しそうに離れる。

「初めてだね」

「さつきやったる」

「いいの、二人とも嬉しかったから今の方が初めて」

「……無茶苦茶だなあ」

はにかみながらも笑い合う二人は、幸せの余韻に浸るようには抱きしめ合う。

お互いの心臓の鼓動が聞こえてしまいそうな静寂の時間。温もりを分かち合う二人の視界に入ったのは、星々が煌めく大海に揺蕩う美しい『花』であった。

見覚えがある筈のその花の違和感に首を傾げたヒロトは、イヴを抱きしめながらも片手で望遠カメラを起動する。

「色が変わってる？」

ELSの花をモチーフに作られたオブジェクトは色も同一で黄色を基調としていたはずだ。

いつの間にか、雪のような純白に染まっていたそれは、二人の思い出の花のようで――。

「――綺麗」

『この世界』を想うダイバー達からの『大好き』という気持ちを感じ取り、それらに救われたイヴはうっとり目細める。

そんなイヴの様子に、彼女があの花に込められた想いを感じ取ったと確信したヒロトは、文字通り命懸けでこの世界を守ってくれた愛する人に、無限の感謝を伝える。

「GBNを君が守ってくれたお陰だ。——ありがとう、イヴ」

「——そっか……。ねえ、ヒロト」
「ん？」

「GBNはどんなふうに変ったの？サラはどう過ごしてる？ヒロトは、どうしてた？」

「そうだなあ、どこから話そうか」

長い話になるなとヒロトはそう思った、自分の方からもイヴに聞きたい事がたくさんある。

「イヴ」

「なに？」

「俺もイヴに聞きたい事があって」

「そっか、一緒だね」

イヴはヒロトに抱き着いて、幸せそうに笑う。

その笑顔につられて、ヒロトも笑った。

陽気なリーダーの声が飛び込んできたのはその直後だった。

小さな恋人

ヒロトとコアガンダムなら必ずイヴを連れて帰って来る。

星の海、デイメンションでヒロト達を見送った三人は確信していた。帰りを待つ最中、ネプテイトガンダムの反応が完全に消えたところから情報が来た時はすこし面を食らったものの、三人のヒロトへの信頼は揺らぎが無く、少し経てばメイの頭痛が収まった。

ネプテイトガンダムの反応が再度出現し、ダイバーの反応が二つに増えている。その情報が舞い込んだのはしばらく後の事であった。

イヴ復活は成し遂げる事が出来たと、三人は喜びの声を上げ、カザミはすぐさま通信を繋げそうになるも彼自身の意思でグツと堪え切った。

ネプテイトガンダムが三機の望遠カメラで捉えられるようになるまで通信はしない。

ヒロトが一世一代の大勝負をしているかもしれない瞬間をぶち壊しにするわけにはいかない、三人で取り決めた事だった。

トーリも今回の計画を聞いたときに事情はあらかた察した様で、最初から通信を飛ばす事はなく、ネプテイトガンダムの状態を万全に戻し、加速を少し後押しするだけに努めた。

そんな四人の様子にGMはため息をつきながら、星の海と各デイメンションの切り離し作業やダイバー達の想いの籠ったGN粒子の残滓の処理に集中ししばらくは見逃す事に決めた。

そして仲間たちが待ちに待った瞬間はついに訪れた。



「ヒロト！おかえり！」

「ああ、ただいま。……ネプテイトを止めるから少し待ってくれ」

カザミの歓喜の出迎えの言葉にヒロトは冷静に応じながら、ネプテイトガンダムを反転させる。

星の海を泳いでいる内に徐々に加速していったネプテイトはGNのそれなりに長い歴史から見てもトップクラスの速度を誇っていた。

ヴォワチュールリユミエールはしばらく前に停止して慣性飛行に移っており、後は進行方向と逆にスラスターをかけて速度を落としていくだけとはいえ、流石にこれほどの速度になると仲間と話しながら片手間にはできない。

気を抜けば仲間たちを置き去りにして遙か彼方まで進んでしまいそう。そうヒロトが思いながら操作を開始する直前、イヴが機体状況が表示されたモニターを見ながら彼に声をかけた。

「ヒロト、スラスターの出力、少し変えるね」

「ん、任せる」

ヒロトが操縦桿から片手を離すと、操作パネルと彼の身体との間にイヴが素早く体を滑り込ませる。

彼女はヒロトの視界を塞がない様にネプテイトガンダムの各部のスラスターを調整して姿勢バランスの補助を行い、ヒロトは操作のみに集中する。

二人三脚の操作は完全にかみ合って、ネプテイトガンダムは寸分狂わずイージスナイトの横でピタリと停止した。

完璧な機体制御に、パルは言葉も出せずに感嘆の息を呑んだ。

「お帰り、ヒロト、姉さん」

「ただいま、メイ」

「……貴方は？」

メイの出迎えの言葉にヒロトが返事をして、イヴはメイに不思議な感覚を覚えて首をかしげる。

ヒロトはともかく仲間の紹介を済ませる為に話そうとする直前、トリーの声が割り込んできた。

「ミスター・ヒロト、聞こえていますか？」

「トリーさん、聞こえています」

「はい。……私としては貴方たちにもう少し時間を与えたいのですがそろそろ限界みたいです、ELバースセンターと繋がっている場所へイヴと貴方たちBUILD DIVERSを転送します」

「分かりました」

星の海ダイメンションという広大な場所は今回のELダイバー復

活計画の目的に沿う理由を持ちながら、同時に計画の意味のないクオリティを誇っている。それについて文句を言わずに、イヴの復活という目的を終えてもしばらく好きに使わせてくれたのは運営側からの譲歩・彼女に対する報酬だ。

特設ディメンションの貸し出しのタイムリミットは、ヒロトとイヴが帰って来たとBUILD DIVERSの誰かが確認するまで。それがBUILD DIVERS三人とトーリの様子を見てGMが決めた条件だった。

ダイバーたちの想いが籠ったGN粒子はまだ余っている、不確定要素はすこしでも早くサーバーから切り離したい。

意を汲んだ計らいをしてくれたGMからの切実な頼みをトーリは聞き入れる他になく、迅速にヒロト達を転送する事にした。

ヒロトたちとしても、今まで力強くバックアップしてくれたトーリから指示が来れば速やかに従う他にない。

転送される間際、ヒロトの手を状況を飲み込めずにいるイヴが少し不安げに握る、ヒロトは優しくその手を握り返し彼女を安心させるように微笑みかけた。

転送されたヒロトが目を開けて辺りを見渡すが、ここにはELダイバーをGNサーバーから切り離してリアルに移動させる際に使うと思わしき装置以外に何も無い様だった。

イヴと顔を見合わせる時間もなく、周囲に続々と仲間たちが転送されてきた。

「わあ、びつくりした」

BUILD DIVERSの中で現状が伝わってなかったヒナタは、急に目の前の景色が切り替わった事に驚きの声を上げる。

彼女が目を白黒させている内に、ヒロトが声をかける。

「ヒナタ」

「ヒロト？ここは——あつ」

ここはどこ？とヒナタはヒロトに尋ねるつもりだったが、彼と手を繋いで立っているイヴが目に入り思わず口を塞いだ。

ヒロトがヒナタの様子に首をかしげるが、ヒナタは気丈に微笑む。

「うまく行ったんだ、良かった」

「ああ、ありがとう、ヒナタ」

ヒロトが心を入れてお礼を言うと同時に、トーリが転移してきた。彼女は早速作業に取り掛かる為、最低限の説明だけを行う。

「私はトーリ、早速ですが今から行う事の説明をしますね。ここはELダイバー、イヴ、貴方と同じ電子生命体をGBNの外、現実へと移すための場所です」

トーリの説明に、イヴは目を丸くする。

「外の世界、ヒロトが普段過ごしている場所へ行けるの?」

「はい、そうです。……ミスター・ヒロト、彼女をそこへ」

トーリはイヴの感動を含ませた疑問を聞いて、彼女は普通のELダイバーとは違うのではないか?という疑念を更に深めた。聞きたい事は山ほど思い浮かぶが、今はそんな場合ではない。

トーリの指示に従いヒロトはイヴの手を引いて転送装置へと向かう。彼に手を引かれたイヴは素直に足を進め、BUILD DIVE RSのメンバーは口を挟める状況ではないので見守る他にない。

イヴの素直な行動をトーリはありがたく思った。

現実・リアルと言っても生まれたばかりのサラは理解できていなかった、彼女の後に生まれてきたELダイバーもその点は変わらず外の世界をすでに知っていた者・説明されてすぐに理解出来た者は居ない。彼らにとっては何よりこのGBNが現実で、それは当然の話でもあった。

知らない世界に飛ばされることを拒んだELダイバーも数多くいる。運営がELダイバー発見してからELバースシステムに送るまでの時間は今回が史上最短で間違いはない。

ヒロトとつないだ手を離して転送装置の中に入ったイヴは、彼の目を少しだけ不安そうに見た。

彼女の視線に彼は微笑んで頷く。

「俺は向こうで待ってるから、すぐ会えるよ」

「……うん!」

トリーはELバスシステムの状況を確認して、BUILD DIVERSに残された時間を伝える。

「……一分ほどシステムが起動するまで猶予がありません、それまではご自由に」

「あと一分だけ!? あー、全員最短で自己紹介! 俺から!」

トリーから言い渡された短い時間に、カザミが面食らうもできる事をする事にした。

「俺はカザミだ! 俺たち、フォースBUILD DIVERSのリーダー! これからよろしくな! ハイ、次パル!」

「えっ、あ、はい! パルヴィーズです、パルって呼んでください! メイさん!」

「私か。私はメイ、姉、イヴと私の関係性は複雑だ、今は割愛する。ヒナタ」

「ヒナタです。よろしく、イヴさん」

カザミは朗らかに、己の胸を親指で突きながら。

パルは与えられた時間の少なさに驚きつつも、一つの感謝と親しみを込めて。

メイは淡々と、イヴと自身の関係性を説明する機会を後回しに。

ヒナタは複雑な感情を抑え込んで、二人を笑顔で迎え入れる。

ヒロトは全員の短い自己紹介が終わった後にイヴに笑いかける。

「あともう一人いるけど、今は呼べない。——俺の大事な仲間たちだ」

イヴはヒロトの笑顔を見て彼は信頼できる仲間たちと出会えたのだと、今度こそ無上の喜びを得る事が出来た。

沢山の人に応援をしてもらい、自分を救い出す事が出来たと彼は言っていた。

なら答えよう、彼ともう一度会わせてもらった事への精一杯の感謝と、これから自分が変わっていくと強い決意を込めて。

「私はイヴ! 今日には本当にありがとう! これからよろしく!」

ELバスシステムが起動したのは彼女からの返事が皆に届いた直後の事であった。

「E.L.ダイバーをモビルドールに定着させる工程はすでに安定しています、かかる時間は平均三時間程ですね」

場合によって伸びますが、とトリーは話す。

彼女の話を受けたヒロトは、今日まで応援してくれたAVALONを始めとするフォースやダイバーに報告をしなければいけないと当然考えた。

言うまでもなく仲間たちも同じ意志を持っており、早くもカザミが意見を述べる。

「フレディの所に行ってくるわ、あいつ絶対まだ祈ってる」

「ですよ、じゃあ僕はAVALONとか他のフォースに報告しますね」

「E.L.ダイバーたちには私から声をかけて置こう、マ……シドや各個人にもそれぞれ」

最初から決まっていたかのように、パルとメイが自分の仕事を決めていく。

その早さはヒロトに口を挟む暇も与えず、彼がやらないといけないと思っている仕事を全て奪い取った。

事後確認がまだ残っているな、と彼が思い出してトリーに問いかける。

「反動はどうでした？」

「……イヴの再構築に伴うデータ移動においては大きな問題は何も起きてませんが、各ディメンションのオブジェクトの構成データがすこし削れましたがその程度は自動で修復される些末な事です。他の問題としてはダイバーたちの想いが籠ったGN粒子の残滓をどう処理するかで運営は悩んでいます、それは私たちの仕事です」

トリーの答えは貴方たちに気にすることはないと示す気遣いと、素人が口出しできる問題ではないという突き放しの二つの意味が込められていた。

答えは明確で、彼女が言わんとするところをヒロトはすぐに理解した。

これ以上時間を取らせるわけにはいかない、そう判断した彼は深く

頭を下げる。

「今回の事、本当にありがとうございました」

「どういたしまして、彼女が帰って来れて本当に良かった。……報酬はそのうち頂きます、では」

トリーが消え去ると同時にヒロトたち全員がミッションカウンター付近にワープさせられた。

ヒロトは一番仕事量の多いメイに声をかける。

「メイ、俺も報告していくから分担を——」

「いや、ヒロト、お前はもうリアルに戻っておけ」

メイはヒロトの提案を最後まで聞かず、彼のやるべき事を告げた。カザミとパルもうんうんと頷く。

「メイの言う通りだな、戻っとけ」

「僕も同意見です」

「礼は後で纏めて受け取ろう、今はいらん」

畳みかけるように言われてしまえば、ヒロトも頷かざる得ない。

「すまない、皆本当にありがとう」

「だから後でいいって。じゃあ、またな」

カザミがひらひらと手を振ると、ヒロトは素早くログアウトした。

その後すぐにヒナタがおずおずと意見を出した。

「ごめんなさい、私も抜ける」

「おう、お疲れー。今日は来てくれてありがとうな！」

「……お疲れ様です」

「ではまたな」

申し訳なさそうに手を振った後、ヒナタはゆっくりとログアウトしていった。

「反動……」

「ん、パルなんか言ったか？」

「いえ、AVALONに報告するならエミリアさんが最初でしょうか？」

「そうだな、彼女から拡散してもらえば間違いはないだろう」

「じゃあ、一旦解散な。やる事終わったら各々フオーって事で」

カザミは大雑把に行動の指針を決めると、エルドラへと移動していった。

メイは早速近くにある適当な椅子に座って作業を開始する。

GBNとは関係ない反動があるかもしれない、という疑念を浮かべていたのはメンバーの中でパルだけだった。

彼はヒナタがヒロトに好意を向けているのではないかとふとした瞬間に気づいていた。

パルにその確証はなかった。仮にあってもイヴを助けたいというヒロトの意思を後押しする事に迷いはなかっただろう。

もしかしたら、ヒナタとは二度と会えないかもしれない。

少しでもだけ苦い思いを抱く自分を身勝手に感じながら、パルはやるべき事をやる為にメイの隣で作業を始めた。



ヒロトはGBNから戻ってくると早速ELバスセンターの作業室を探すために部屋から出る。

すると前を通りかかったELバスセンターの職員であろう男性がヒロトをちらりと見て、不機嫌を隠さず注意してくる。

「お前に今やれる事は何もない、その部屋で待ってろ。うろちよろすんな、邪魔になる」

彼の物言いは乱雑で、ヒロトは目を丸くして驚いた。

だが言ってる事は正論で、頷く他にない。コウイチに話しかけても、今の注意と内容だけは同じ答えが返ってくるであろう事は読めていたし、彼の様子によつては声をかけるのを控えようと考えてたからだ。

ヒロトが返事をする前に、その職員はさっさと別室に入ってしまった。

トリーは三時間程度は作業に時間を要すると言っていたな、とヒロトは記憶を反芻する。

身体が落ち着かない、気持ちもまだ騒めいている。

人生で一番長い時間になりそうだ、そう感じながらヒロトは部屋に戻っていった。

そうしてひたすらそわそわしながら三時間半を過ごし、窓から見える景色が夕焼けに染まる頃、ようやくドアが開かれた。

ヒロトはコウイチの顔を見て、全てがうまく行ったことを確信した。

「ヒロト君、今まで声もかけないでごめんね。さあ、着いてきて」

「はい、ありがとうございます！」

「いえいえ」

コウイチは足取り軽く、ヒロトを別室へと導いた。

彼は二回扉をノックすると、自分は壁に背を預けて、指でどうぞと示した。

ヒロトが目線で再度感謝の意を伝えると、彼はクスクスと笑った。

部屋の中は見た事もない機材やそれを操作するために必要なPCが置かれていて机は一つ椅子は二つしかないこじんまりとした印象だった。

今の心境で部屋の中など気に留めれる訳がないヒロトは早速声をかける。

「イヴ？」

彼女を目で探してみても一瞬居ないと思い、ヒヤリとしたがよく見ると液晶モニターの後ろからチラリとこちらを覗いていた。

「イヴ、なんで隠れてるんだ？」

「……ヒロト。あのね、うう、ちよつとこつち来ないで」

イヴは心底困ったように返事をして、モニターの後ろに隠れてしまった。

ヒロトが戸惑って足を止めて、再度彼女に声をかける。

「どうしたんだ？」

「ちよつと準備が」

「もしかして身体に何かおかしい所があった？」

イヴの身体を作り上げる全ての工程で細心の注意を行い、完成した後何度も確認したはずだ。そう振り返りながらも、彼女の様子に不安になり、彼は少し声を震わせた。

「違う、問題ないの！」

「じゃあ何が――」

「でもこの身体、すごい強い思いが籠ってて、ものすごく籠ってて！」「モニターの陰からチラリとイヴは顔をのぞかせて、またすぐに引込んだ。

彼女の仕草と発言を組み合わせて考える、答えを悟ったヒロトは自分の頬が緩むのを感じた。

「あー、嬉しくない？」

「嬉しいに決まってるよ！でも嬉しいから困ってるの！あー、ヒロト絶対分かってるのに聞いてる！」

隠れていた時は何事かと驚いたが、蓋を開けてみれば恥ずかしがっているだけのようだ。

ヒロトは余裕を取り戻すと、机の近くにある椅子に座り、彼女が隠れているモニターに手を出した。

「喜んでくれたらいいなって思って作った」

「そんな事もう知ってるもん」

「でも恥ずかしがるとは思わなかったな」

「……あんまり意地悪言うなら出て行ってあげない」

「困ったな。イヴは一緒に帰りたくない？」

「それも意地悪……」

ムスツとしたイヴがヒロトの掌にヒョイと乗る。

ちよつと怒ったイヴを見て久しぶりにむくれてる所を見たな、と小さく笑いながら自分の元に彼女を寄せる。

居心地悪そうにもじもじしているイヴを見て、ついにヒロトは吹き出してしまった。

「自分だけ楽しそうにしないでよう」

「いや、ごめん、可愛くて、くっ」

「もおー、ばか」

イヴはヒロトの顔を見れずに俯いていたが、彼が可愛いと言ってくれたことですこし上機嫌になった。

ヒロトにその言葉を言われた事は今までなかった、できればもう少し真面目に言ってほしかったが、それでもすごく嬉しい気持ちがいヴ

の中に沸き上がった。

「じゃあ、帰ろうか」

「うん」

イヴを大事に手に乗せてヒロトは部屋を出る。

前ではコウイチが半分笑いながら立っていた。

「お手数おかけしました」

「いえいえ、ELドライバーって皆恥ずかしがったりしないからいいもの見れたよ」

二人はしばらく笑いかみ殺せずにいたが、イヴがどんどんむくれていくのを見て真面目に振舞う事に決めた。

コウイチは真剣な顔つきに戻ると、ヒロトに注意を促す。

「ヒロト君も分かっているとと思うけど、世の中面白がってとんでもない事する人間はそこら中に居る。彼女は君が守るんだ、いいね？」

「はい」

「まあ、やり方は君に任せるよ。何かあったらすぐ連絡して、特にイヴさんはサラちゃんと同じで普通のELドライバーと少し違う、不調があったらすぐ僕にも連絡して欲しい」

「分かってます」

「後々、GBN運営からいろいろ連絡や書類が来るけど、親御さんとよく相談して返事をしてね」

「はい、今日はありがとうございました」

「上手く行って本当に良かった、二人共また向こうでね」

コウイチは笑って軽く手を振ると作業室の方に入ってしまった。

ヒロトはイヴを連れて、持ってきた物が入ったカバンを回収してELバスセンターの出入り口の前で止まった。

「このカバンじゃ窮屈か」

「そうかも。……じゃあ、ポケットに入れて欲しい」

「うん」

ヒロトは自分が着ているパーカーのポケットにイヴを寄せる、彼女は自らポケットに身体を入れてしばらくもぞもぞと動いてから彼に声をかけた。

「ヒロト、もう大丈夫」

「苦しくない？」

「何も見えないだけだから大丈夫」

ヒロトがイヴの入っているポケットに手を少し入れると、彼女はギョツとその手に引っ付いた。

彼女の行動に微笑みながら、ヒロトはE.L.バースセンターから出る。夕焼けが指している道は家に帰った頃には夜になっていることを示していた。

リアルにもイヴが居てくれるなら、こちらの世界でも『色』を新しく見つけれそうだとヒロトは感じ、早めに彼女が世界を見れるように専用のポーチを用意しようとする。

「明日にでもイヴが窮屈じゃないポーチ見つけてくるよ」

「うん、ありがとう。ヒロト、でもね——」

「ん？」

「こうやってヒロトの手にくっついてるの、幸せ」

「俺も、幸せだよ」

ポケットの中に入るくらいの小さな恋人は、とても大きな幸せをヒロトに齎していた。

家族

電車やバスを乗り継いで自宅の前までたどり着くと、ヒロトはイヴを自分の肩に乗せた。

イヴは今からヒロトの両親と会う事に緊張していた。彼を深く傷つけた事への申し訳ない気持ちがある中で自身の特殊な生い立ちもあるとくれば当然の事ではあった。

彼は硬い彼女を解す為に、優しく声をかけた。

「もう親には話してるから、そう重く考える事ないよ」

「……うん。もう大丈夫」

ヒロトの指先で頭をなでられたイヴは意思を固め、挑むような面差しで彼の家に入る事を決意した。

家の中に入ると二人分の足音がバタバタと玄関まで向かってくる。

ヒロトはそんな急がなくてもと苦笑し、イヴはプルプルと首を振って先程から付きまといってくる悪い想像を振り払う。

「ふっ」

「こら、笑う事はないだろ！」

「やっぱり変よね、ふふ」

いつものぼさぼさとした髪がある程度整っている父親の姿を認めた瞬間にヒロトが嘔き出し、自分でも居心地悪そうなオサムが彼を窘めた。オサムの身嗜みを自分の手で整えて置きながら、ユリコもこの掛け合いは起こるだろうと予想していた。

もうすでにかなり気の抜けた雰囲気になったが、酷く緊張しているイヴは空気を把握できず上ずった声で座ったまま頭を下げる。

「イヴです、初めましてー」

「クガ・オサム、ヒロトの父親です、よろしく」

「クガ・ユリコ、ヒロトの母親です、よろしくね、……で、どうなったの?」

対するヒロトの両親たちの態度は柔らかく、あまり緊張を感じさせない。

ユリコはヒロトが少し前に話していたことを思い出しながら、視線

で問う。

視線の意味を組んだヒロトは少しだけ気恥ずかしい感情を抱きながら、頷いた。

「……イヴは俺の恋人になってくれたよ」

「よおしーよくやった、ヒロト!」

彼の報告を聞くやオサムは声を上げて喜んでヒロトを褒めた。ユリコもそれでこそ我が息子と言わんばかりに満足げに頷いている。

イヴもようやく息子に変わった恋人ができた事について異様に軽い雰囲気に対応する二人に気づき、本当にいいんだろうかと首を傾げた。

そんな時、ヒロトのお腹がグウと音を立てた。

イヴを取り戻し、告白するという大勝負の日に食事が喉を通る筈がなく彼は今日ほとんど何も食べていなかった。

ユリコはその音を聞いて微笑むと、イヴの方に掌を差し出した。

「先にお風呂入っちゃいなさい、ご飯の準備はできてるわ」

「分かった。……気を付けて」

「分かってるわよ、こっちにどうぞ、イヴちゃん」

ユリコに促されてイヴは少し戸惑うような素振りを見せたが、決意を固めて彼女の掌に移った。

息子に話は聞いていたが、いざこうして小さな彼女に触れてみるとユリコが随分と昔に見た漫画やアニメの妖精をどうしても思い出してしまい感激してしまう。

良く知らない人の掌に乗る事に対する戸惑いやいきなりヒロトと引き離されてしまった不安感が彼女から伝わってくる。

ヒロトがイヴに視線を送りながらかなり未練がましい足取りで風呂場へといった後、ユリコは掌に彼女を乗せたままリビングの机へと戻った。

オサムはイヴにいろんな事を聞きたい気持ちでうずうずしていたが、先にやるべき事を済ませる為今はグツと堪えた。

「イヴちゃん、貴方の事はヒロトから聞いているわ。どんな出会い方をして、どんな別れ方をしたのか、大体ね。あの子が落ち込んだ理由も

良く分かつてるつもり」

ユリコの発言にイヴは息を呑んで、ともかく謝ろうとする。

オサムはそんな彼女の様子を見て、謝罪を制する事にした。

「ごめ——」

「ああ、僕らには謝らなくていいんだ、ヒロトからはイヴは自分をひどく責めていると聞いている、君はヒロトに謝ってヒロトは君を許しているんだろう？なら、僕らが外からとやかく言う事じゃないし、イヴさん、君が気にしすぎる必要はないんだよ」

「……でも」

「そうだなあ、僕らがどんな仕事をしてるか、ヒロトからは聞いた？」

話題が急に入れ替わった事に戸惑いを覚えながらもイヴはオサムの質問に頷く。

「両親は物語を作る仕事に関わってる、と聞いてます」

「うん、大体そうだ。僕らがやってる仕事は、大雑把に言ってしまうとどれだけ多くの人に認めてもらえられるかで良し悪しが決まる。良い評価を受けた事だつてあるし、そりゃあもう酷い評価を受けた時もある。それこそ自分の人生丸ごと否定されたようなきつつい言葉も言われる」

オサムはジツとイヴを見つめる。

「そういう厳しい経験を乗り越えて、僕は今ここに居る。いや、今もそういう世界と戦ってる。息子に辛い経験をしてほしくない気持ちは親だからね、勿論あるさ。でもヒロトは今一番人生で晴れやかな顔をしているよ、心だつてずっと強くなった、喧嘩や別れは悲しい事だけど、だからって悪い事ばかりじゃない」

オサムもユリコも脚本家と翻訳家で立場はかなり違うが、日頃から創作物に触れて生きているという事には変わりはない。

異星からの迷い人、なんて設定はオサムも考えた事のある言っしまえばありきたりな物だ。その迷い人の心情はどんなものかを考えた事もある。

仕事でラブロマンスの翻訳を手掛ける事もあるユリコも同じく、重い過去を背負った登場人物の心情を翻訳したり、人の葛藤や悩みの形

をよく考えている。

異星から地球に迷い込み、当然身寄りもない。その状況を想像の世界で理解した気になってるのは彼女には失礼な話かもしれない、だがヒロトの話聞いて理解した時彼らは同じ様な気持ちを抱いた。

彼女は心細く、辛かっただろう。どうすればいいかとずっと悩んでいたはずだと。

「イヴちゃん、貴方が私たちに引け目を感じる必要はないわ。自分に納得ができる様に考えてみて。これから先時間はいくらでもあるんだからね」

「ありがとうございます」

イヴは二人から『変わろう』と約束してくれたヒロトと同じ温かさを感じ取り、深く頭を下げた。

オサムはそんな彼女の様子に打ち解けるにはまだ時間がかかりそうだな、と感じながら話す。

「最終目標は家族かな、ヒロトと一緒に居るなら、娘も同然だよね？」
「そうね、きつと楽しくなるわ。これからよろしくね、イヴちゃん」
ユリコが差し出してくれた指を、イヴはギュツと両手で握った。

彼女は親になってくれると言ってくれた二人に、胸いっぱい嬉しさを感じた。その気持ちは言葉に言い表す事が出来ず、声が出なかった。

寂しい気持ちをずっと我慢して、間違えてしまったけどそれでも一人で頑張った。

イヴが『両親』にそう伝えたのは、いつかの未来の出来事。

◆◆
「……外、高いし危ないから、イヴちゃんをベランダに出さないようにしなさいね」

「うん、分かってる、おやすみ」

ヒロトが風呂から上がり、夕食を食べた後。

イヴに関して両親と相談する事はまだ残っているが、ユリコからしばらく余計な事考えずに休んでなさいと言われた為、ヒロトは彼女を手に乗せて自室へと引つ込んだ。

自分が居なくなった間にあの両親が豹変するとはとても思えないが、一応イヴに伺いを立てる。

「どうだった?」

「ヒロトのお父さんとお母さんなんだなーって思ったよ」

「なら、良かった」

優しい、温かい。それがイヴの感想だった。

打ち解けるにはまだ時間がかかるだろうが、イヴと両親ならいつの間にか仲良くなってそうだな、とヒロトは予想する。

彼女は掌の上でヒロトの部屋を隅々まで眺めて、あ、と声を上げた。

「……久しぶり、ごめんね」

「少し話す?」

「うん、ありがとうヒロト」

「俺は少しベランダに出るけど、すぐ戻るよ」

ヒロトは今日家を出る前にネプチューンアーマー以外は机の上に並べて置いた。イヴが帰ってきたら、アーマー達とお互いに積もる話もあるだろうと配慮しての事だ。彼が机にイヴを下ろすと、彼女は一番近くにあるアースアーマーに手を置いて座る。

コアガンダムとネプチューンアーマーも近くに置くと、イヴの集中を乱すかもしれないという配慮と仲間に感謝のメッセージを送るという目的も含めてヒロトはベランダに出た。

メッセージ欄を覗いてみると、カザミ・メイ・パルがやり取りしている最中のようなだった。

イヴを取り戻すという大きな目標を遂げて、ずいぶん久しぶりな感覚を覚えるような気楽なメッセージが溜まっている。

ヒロトは未読の場所からざっと目を通す。

『打ち上げやろうぜ!』

『AVOLONからもう誘いかかってますけど、どうしましょう?』
『報告のメッセージはパルが送っていたが、顔も見せたほうが良いだろうな』

最初は比較的真面目な物もだったが、物の数コメントのやり取りの内に話の内容がまるで違うものに移っていく。

『フォースネストは遺跡っぽい所がいいな』

『いいですね！秘密基地みたいな雰囲気のところを探しましょう！』

『近々ディメンションがまた増える、とか噂が立ってるが探索してみるか？』

『そーいやイヴさんってガンプラどうすんのかな？ヒロトと同乗する？もしくは別に作る？』

一番最新のコメントはこんな内容になっていた。

ヒロトは手早く文字を打つと、カザミの質問に答える。

『今日ありがとう。あとその辺りは未定』

『よう、大将、おつかれー！』

『イヴさんは大丈夫ですか？』

『無論身体の方ではないぞ』

ヒロトがコメントを打つと三人からポンポンとコメントが返って来て、しばらく返事をするだけで手がいっぱいになる。

部屋の中を見てイヴが各アーマーと順に会話している事を見守りながら、仲間たちとやり取りをしていると隣の部屋からヒナタが出てきた。

彼女と目が合って早速ヒロトは今日の感謝を告げる。

「今日ありがとうヒナタ」

「ううん、お礼なんていいよ」

ヒナタは今日、イヴの為に祈っていない。ヒロトの気持ちが届くように願っただけだ。

彼女の事を含んでいる感謝は受け取れない、ヒナタはそう感じて首を振る。

ヒナタが自分の目でイヴを見たのはほんの数分間の事。

その間に感じる事はいくつもあった、ヒロトとイヴの間にある強い絆、二人の間にある感情。

ヒロトは好きな人の前ではこんな顔をするのか、と自分が知っている彼との違いに驚いた。

あの時の彼の顔を見て、自分は失恋したのだと込み上げてくるものがあった。

それでも表面上取り繕えたのは、彼女を見る前に失恋を悟れたことと、ユリコのお陰だ。

ユリコの意見を貰って、自分の為に動いてみようと考えて、今日の経験でこれからやる事は決めた。

「ねえ、ヒロト」

「何？」

ヒナタはベランダの縁にもたれかかるのをやめてヒロトから見えないところに背を預ける。

顔は、見られなくなかった。

「ヒロトは自分の事、大切にできる？」

「……難しいけど、やっていくよ」

「そっか」

彼は変わっていく、強くなっていく。

自分の為と彼女の為、どちらかに偏っている事はない。

私も変わろう、ヒナタは再度決意を深める。

小さな嫉妬にかられずにイヴをありのままで見れるように、これが自分だと胸を張ってヒロトとイヴに誇れるようになる。その為に二人からは一度離れて、自分にある物とやりたい事を探す。

「私しばらくGBNから離れようと思う、もっといろんな事をやってみたいの」

「えっ？」

「変わりたいんだ、私も。ヒロトみたいに」

「……わかった、ヒナタがそうしたいなら、俺は応援する。皆には俺から伝えておくよ」

「うん、ありがとう」

私の家族、私の兄弟、私の初恋の人。

深く聞いてくれなくて、ありがとう。

「じゃあ、またいつか話そうね」

強くなったら会いに行こう、彼女は自分と約束する。

「うん、また」

彼女が今流した涙は誰にも見られる事はない。



「話は終わった?」

「うん、まだ皆いろいろ私に言いたい事あるみたいだけど、今日はもう休めって」

イヴはもう少しお話ししたかったんだけど、と困った顔で言う。

ヒロトはアーマー達が自分の両親と同じような事言っている事に少し笑った。

「明日もあるんだ、焦る事ないよ」

「うん、えへへ」

イヴは小さい身体でヒロトの手に縋りつく。

彼女が機嫌がよく笑っているのは、明日があるというヒロトの言葉が嬉しかったからだ。

ヒロトも愛らしい仕草をする彼女の頭を逆の手の指で撫で、二人で幸せに浸った。

「ふぁ」

ヒロトが普段寝る時間からすればまだ早いくらいだが、彼は眠気を感じ始めていた。

イヴは彼があくびをする様子を見ながら、今日の夕方彼女に降りかかった有る事への仕返しを思いついた。

「ヒロトヒロト」

「ん?」

ちよいちよいと、耳を寄せると彼女が示してくるのでヒロトはそれに従ってイヴの顔へと耳を寄せた。

周りに誰も居ないし、コアガンダムやアーマー達が聞き耳を一々立てるとは思わないけど、と彼は思いもしたがイヴがなんだか楽しそうな顔をしているので素直に従う事にした。

「今日一緒に寝ても良い?」

囁くような声で思わせぶりな事を言われて、ヒロトは驚いて顔を赤くしてしまう。

イヴはヒロトの反応にクスクスと笑って満足気だ。

「照れたヒロト可愛い」

夕方の仕返しか、と察したヒロトはならばと彼女の身体を万一にも壊さないようにしながら手で包み込んだ。

そのまま力加減をしながらイヴの身体をこすると、彼女は楽しそうに歓声を上げる。

「きゃあー」

「……まったく」

適当にお仕置きを切り上げて、イヴを肩に乗せる。

コーイチから事前に送られていたELダイバーのワイヤレス充電器を手にとって、部屋にある延長ケーブル越しに壁と枕の間に置いた。

「一緒に寝るのは初めてだね」

「うん、GBNの中だと眠れないからな」

GBNにダイブ中は寝落ち防止用のセーフティが常にかかっている。

リクからヒロトが聞いた話によればサラはGBNで寝ていたらしい、しかしイヴが寝たところを彼は見た事が無かった。

ふと、エルドラでほんの少しだけ気絶したことがあるのを思い出し、あそこなら寝れるのか？と疑いを覚えながら部屋の電気を消す。

「暗いの怖くない？」

ヒロトはあの真つ暗な空間を思い出して、イヴに尋ねる。

彼女は彼の気遣いに微笑んで首を振る。

「ヒロトと一緒になら大丈夫」

「わかった、一緒に居る。……そういえばおはようも言った事ないか」「うん、ヒロトがGBNにくるのは早くても昼過ぎだったから、こんにちは、こんばんは、しか挨拶は言った事ないよ」

イヴは充電器の上で横になりながら、明日も楽しみだねとほほ笑む。

ヒロトは硬い充電器を見て、これもどうかしないとな、とイヴの快適な生活の為やれる事を考えながら頷いた。

「おやすみなさい、ヒロト。また明日ね」

「おやすみ、イヴ。また明日」

ヒロトの寝顔可愛かったよ、と彼女に悪戯気に微笑まれるのは明日の朝の話だった。

一緒に歩く未来

イヴが戻ってきて仲間内で自己紹介を済ませたり、エルドラで起きた事を話している内に二週間が過ぎた。

ヒロトは体を覆うローブを着て目深にフードをかぶった彼女の手を引いて、ある場所へと向かっていった。

イヴ復活計画の準備段階で派手に動いた余波がまだ冷めず、イヴはGBN内のどこに行っても人目を浴びる。しばらく顔を隠していた方がいいだろう、と判断したのはヒロトだった。

賑やかな催しに参加する時は二人とも楽しめるが、二人を中心にしているで知らないダイバーたちが騒がしくなるのは避けたいという気持ちは彼ら二人に共通する感覚だった。

ヒロトは随分久しい気分で『本日貸し切り♡』の札を見る、このバーのマスターが所望している話が自分達にできるかは分からないが、感謝の形の一つとして今日は約束を果たしに来た。

「ここ?と首をかしげるイヴに頷いて、ドアを開けて中に入る。

「お邪魔します」

「いらっしやーい、ヒロト君」

「お久しぶりです」

「元氣そうでよかったわ、でも久しぶりって言うほど時間たつてないわよ」

色んな事があったし、気持ちは分かるけど。そうマギーは朗らかに笑い、バーカウンターから出るとイヴの前まで移動する。イヴは自分の身体を覆うローブを解除して、いつものドレス姿に戻った。

「初めまして、マギーよ。会えて嬉しいわ」

「イヴです、初めまして」

イヴの手を取って握手しながら、マギーは彼女の目や表情を観察する。

マギーは二人を自分の店に招くこと際、事前にメイからイヴの様子について聞いている。そんな理由から今日の話題は出来るだけ明るい方向にしようと決めていた。

マギーは飲み物を取りに行く前に二人に席を勧める。

「さあ、お好きな所にどうぞ」

「じゃあ、テーブルの方で」

ヒロトはイヴを連れてテーブル席の方へと移動して隣に並んで座った。

マギーが見てない間に野暮つたいローブから解放されたイヴがこっそりとヒロトに寄り掛かっていたが、飲み物を持ってきた時には姿勢が戻っていた。

ヒロトに渡された飲み物は前にも飲んだブルーハワイ。

イヴに渡されたのはレモンティーだった。

対してマギーの飲み物は透明で味の想像ができないもので、ヒロトは多分お酒だろうかと予想した。

乾杯して三人が一口飲んで会話が始まる。

「アップデートが今までも色々あつてその中じゃ些細な変化だけど、味の表現が深まって地味に差が出るのよね」

マギーは目を細めて自分が飲んだ飲み物に感心する。

イヴもマギーの言葉に同調して頷く。

「昔はもつと甘い物は甘い、辛い物は辛い、みたいに分かり易かった」
「ああいう雑な時代に戻りたくなる時つてあるのよねー」

そんなに昔と違うだろうか？とヒロトは内心思いつつも、その疑問は口に出さずにとりあえず頷いておく。

イヴはそんなヒロトをチラリと横目で見て、ふふつと小さく笑った。

「頷いてるけどヒロトはあんまり分かってないでしょ」

「何でそう思った？」

「そういう顔してる」

「なるほど、これがまさしく愛ね」

マギーからすればヒロトはいつも通りの振る舞いだったが、イヴには通じないらしい。

照れ隠し代わりに彼がぺたぺたと自分の顔を触ると、見ている二人は声をそろえて笑った。

GBN内での食事について話している内に、マギーはここでヒロトを抜いた三人がイヴの復活手段を模索していた時の事を思い出す。

「食事・昔といえばGBNの初期の頃からある月面都市の喫茶店ソレル・カフェね、二人は知ってる？」

「ああ、行ったことありますよ。二人で遊んだ後最後にそこに行くのが少しの間定番になってました、ケーキが美味しくてイヴが夢中になってたんです」

「あらそうなのね、また行ってみるといいわ。あそこは少し設備が変わって個室に入れる様になったから、貴方たちも気が楽でしょうし」
「また行こうね、ヒロト」

「うん」

懐かしい話を聞いてイヴは嬉しそうにヒロトと約束を交わす。

昔の話をするくらいなら特に問題なさそうだと彼女の様子を見て判断したマギーは兼ねてから聞きたかった事を二人に質問する事にした。

「貴方たち、どこで最初に会ったの？」

「俺がGPDからGBNに移行してすぐです、コアガンダムの試運転中に一回飛べなくなってそこにイヴが」

「へー、なら練習用のデイメンションで会ったのね。やだもー懐かしいわー、最初は練習用デイメンションも種類全然なかったわよね」

話している内にヒロトは頭に気になる事が沸き上がった、イヴに聞いてみたいとは思うが一方で彼女の心の状態が常に気になっている。

ヒロトと一緒に居る時は罪悪感からくるイヴの自己嫌悪は基本的に鳴りを潜めているが、どの程度安定しているか彼にも判断は難しい。彼女の過去を深く掘り返す質問はストレスになると判断したヒロトは気になった事を黙殺した。

そんな過保護とも取れる彼の判断の意味は、マギーにたやすく碎かれてイヴに質問が向かった。

「イヴちゃんは何でそこに居たの？」

ヒロトが気になっていた事がそのままマギーの口から出てしまった。

イヴはヒロトの方に目を向ける。

「一目惚れしたとか？」

マギーはその視線に何を思ったのか、そう尋ねる。

ヒロトはイヴとの初対面のやり取りを思い出して、それは違うだろうと感じた。

イヴも首を振って否定する。

「コアガンダムに惹かれたの」

「……そうだろうな」

会った当初イヴはコアガンダムを作った俺に興味はあったが、俺自身にはさほど興味があつたようには思えない。過去を思い返してヒロトは感想を浮かべ、同時になぜだか少し悲しくなった。

少し凹んだ彼には目をくれず、イヴはコアガンダムに惹かれた理由についてぽつぽつと話し始める。

「私、その時は何処から来たのか分からなくて、自分が地球の人じゃないって確信だけは持ってた」

エルドラの事はもうすでにイヴに話してある。

ヒロトは今はまだイヴをエルドラに連れて行っていない、古き民が残したシステムを介してエルドラに向かう関係上彼女にどんな影響が出るか良く分からないからだ。イヴからは大丈夫だと思おうと所感を告げられているが、そこまで急ぐ必要はないというのが彼と仲間の総意で決まった。

「気が付いたころには何でここに居るんだろうってずっと考えてた。そうしてる間にGBNがどんどん広がっていろんな思いが集まって、ここはそういう好きな気持ちが集まってできたんだって思えて——」

ヒロトとマギーはイヴの話を聞いて、彼女はGBNが開発されている時のどこかで迷い込んできたのだなと何となく理解した。

ガンダムやガンプラについて理解していたのはGBNの開発時のデータを取り込んだのではないかとヒロトは更に予想を深めた。

「GBNには夢みたいの世界だって、何でもできる世界だって、そう感じた。それで思ったの、私には何ができるんだろうって」

「——！そうか、君は」

「うん、そう。コアガンダムも自分に何ができるのか、ずっと探していたもの。だからあの子に惹かれて、ヒロトとコアガンダムの近くに出ってきた」

「なるほどねえ……」

三人の雰囲気がいんまりとしたもの変わる、過去にイヴの投げ所のなさに当てられてしまったようだ。

それを感じ取ったマギーは話を変える事にした、今日は楽しい話甘い話を聞きたいのであって、今の質問の答えは興味深くは有れど自分の目的とずれていた。

「じゃあ、イヴちゃんはいっからヒロト君が好きだったの？あ、まって先に最初の印象から聞きたいわ」

「んぶっ」

「最初の印象……？」

咽そうになったヒロトを置いて、イヴは首をかしげる。

「ヒロトもコアガンダムと一緒に何ができるかを探していたから……」

「同志みたいなの？」

「そうかも。あと、なんだか手を引いてあげたくなって」

「手のかかる弟みたいなの？」

「むしろ大人し過ぎ？」

「完全に姉目線ね！」

イヴに実際に手を引かれたり、あれこれと意見を貰ってGBNを巡っていた身として口が挟めるわけもなく、ヒロトは黙って二人の会話を聞いていた。話を振った方のマギーは完全に面白がって合の手を入れながら聞いている。

「名前もなかったの」

「……？」

「どこから来たのか分からなくて、何をすればいいのかも分からない、名前も分からない」

イヴは隣に座るヒロトの手をギュツと握る。

その仕草から不安に近い物を感じ取ったヒロトは彼女の顔を見る、イヴはほほ笑んでいた。

「君は誰？つてヒロトが聞いてくれた、だから私はイヴになれた。ずっと一緒に居て、いっぱい名前を呼んでくれた、そうしてると、いつの間にか」

マギーはほお、と息をついた。

いつから好きだったのかはハッキリとしないが、そのきつかけになつたのは出会いの時だった。

答えになつてる？とイヴが首をかしげると、マギーはうんうんと頷いた。

「素敵ね」

マギーの感想は端的な物だったが、満足感に満ち溢れていた、感謝代わりの話としては十分だ。

一方でヒロトは彼女の今の話を少し考えて、イヴの不安の源がようやく見えてきた気がした。

見当違いならむしろそのほうが良い、話さないと、そう感じたヒロトはバーを出す事にした。

「今回の事、協力本当にありがとうございます」

「どういたしました、いいお話だったわ」

バーに来てそう時間は経っていないが、ヒロトが会話を切り上げたと思つてる事を察したマギーは彼に合わせる事にした。最後にこれだけは、とマギーはイヴにある感謝を伝える。

「イヴちゃん、この世界を守ってくれてどうもありがとう。おかげで今楽しめてるわ」

「―――！」

「なんて言われても、まだ色々思う所が有るでしょうけど。それでも私は貴方たちの幸せを祈つてるわ、どうか自分を大切にね」

「ありがとうございます」

「……そこは胸張ってどういたしました、でいいの。イヴちゃん、貴方のやり方がベストだったと私は思わない。自分を責める気持ちをすぐに無くせなんて言わないわ。でもね他人の為に頑張つて、なのに自

分を褒めれないのは、とても悲しい事よ。世界一つ守って、今こうして再会して二人で居る。それでいいじゃない、他人に恥じる事なんてないわ」

やだもー、説教臭い。そう言いながらマギーは立ち上がる。

ヒロトはイヴと一緒に立ち上がってマギーにもう一度頭を下げた。

マギーは店先まで出てきて、またおいでなさいねー!と気軽に声を上げながら二人を見送った。

イヴは手を引かれながら、ヒロトに声をかける。

彼の足取りはいつもより少し早い、普段から彼女の歩くペースを基準にしている彼のこの行動は滅多にない事でイヴは不思議に思った。

「ヒロト、怒ってる?」

変わると約束したのに、マギーの感謝を受け止められなかったことで怒ったのかもしれない、と彼女は考えた。

ヒロトはイヴの方を見て首を振る。

「まさか、怒ってないさ」

「そう?」

二人はそのままミッションカウンターに移動すると、ヒロトが手続きを素早く済ませて練習用ディメンションに移動する。星空が見える夜の平原、二人にとっては色々と思入れの深い場所。

湖の近くに現れると、ヒロトはイヴと向き合った。彼の目を見て、彼女は一見何でもなさそうに首をかしげる。

「どうしたの?」

「誰かの為に頑張れる俺でいて欲しい」

「――!」

ヒロトの過去を思い出させる言葉に、イヴは驚いて目を丸くする。

その表情がヒロトの思う通りの意味なら、いきなりこの話をした事の驚きではなく、有る事に気付かれたのではという驚きだろう。

「――誰でもない自分より、か?」

あの言葉の前は、こうだったんじゃないのか?とヒロトが告げると、イヴは困った様に頷いた。

「うん、ごめんね。……でも今はそんなこと思っていないから、大丈夫」

「嘘だ」

イヴの表情を見て悟ったヒロトは断言する。

「平気じゃないんだろ？」

「……言っただうにかなるの？」

ヒロトが居てくれるから今まで目を逸らしてきたことを彼に突き付けられ、暗いイヴの心が表面に出てくる。

「平気じゃないって言ったら、ヒロトはどうするの？」

今までも溢れるほど彼に優しくしてもらった、それでもイヴの不安はなかなか消え去らない。

ヒロトはグツとイヴを抱き寄せた。

「イヴはここに居るって、何度でも言う。イヴが不安を感じる度に伝える、何百回でも、何千回でも！」

「……そんなに頼ってばかりしていると、いつかヒロトに嫌われちゃう」

「そんな心配はいらない」

「でもヒロトに嫌われたら、私は何も無いわ……！」

なぜイヴは自分を頼ってくれなかったのか、ヒロトはいつか聞きたいと思っていた。

その答えは彼の胸に身を預け震えるイヴが示してくれた。ヒロトはイヴの頭を少し撫でた。

「なら同じくらい何度もイヴが好きだって伝えるよ」

「ヒロトは、優しすぎだよ、なんでそこまでしてくれるの？」

イヴは震えた声で、ヒロトに問いかける。

彼は優しく微笑んで、迷いなく答えた。

「誰かの為に頑張れる自分でありたいと思ってるから、だけど君の為ならもっと頑張れる」

「ううううーもおーもおーもおー！」

イヴは彼から無上の愛を感じ、どう返せばいいのかすごく困った声で唸る。

大好きとか、愛してるとか、そんなことを言うだけではまるで返事にならないと彼女は思った。

ヒロトはそんなイヴを愛おしく思い、約束通り言葉にすることにし

た。

「好きだよ、イヴ」

「もー！私の方が好きなんだから！」

イヴはヒロトにキスをする。

心を精一杯込めて想いが少しでも伝わる様に。

どんな世界に生きる人よりも、二人は誰よりも幸せを感じ取っていた。



「ただいま」

「あら、おかえり、メイちゃん」

「それは写真か？ヒロトと姉さん？」

「うん、そう。もうちよつと落ち着いて撮れたらよかったんだけど」

「いい写真だな」

「そうかしら、もっとしつかり横に並んでくれた方が私としては良かったんだけど」

「いや、これで良い、ほら」

「あ、確かに！私もまだまだだね」

「不思議だ」

「何が？」

「ママは二人と同じくらい喜んでるように見える」

「そりゃあ、晴々とした人の表情見る為に、悩み相談とか初心者支援やってるんですもの」

「謙虚だな」

「えー、他人の人生をつまみにお酒飲んでるんだから、強欲もいいところだと思っけど」

「万事上手く行く様に取り計らって、よく言う」

「そんなの出来る範囲での話よ、頑張ったのはあの子達だわ。ま、それはそれとして誉め言葉はありがたく受け取っておくわ。さあ今日は戻って祝い酒よー!」

「ほどほどにな、また吐くぞ」

「……それは言わないでよお」

二人が帰っていくときに、マギーはすかさず二人の後ろから写真を一枚とっていた。

ヒロトがイヴの手を引いて、どこかへと連れていく。

イヴがヒロトの手を引いたあの写真とは自然と対になっていた。

写真はヒロトとイヴがまたマギーのバーを訪れた時に渡されて、二人にとって大切な思い出の一つになった。

今、この空の下で 打ち上げ

イヴに仲間たちからの自己紹介を含めここ2年間で起きた事を説明する間、ゆつくりと話していくと早くも2週間が経過した。そしてイヴの不安を根源から解消していく為、ヒロトがある種羞恥心を捨てた決断をして早一週間。

BUILD DIVERSへのイヴの紹介を兼ね、今回のイヴ復活計画に関わった主なフォースとの合同打ち上げがAVALONの野外会場にて行われることになった。

そんな都合から3週間ほど遅れての打ち上げになりヒロト達としても心苦しい気持ちがあつたが、どのフォースからも『まずはイヴのケアが第一』と温かい言葉を貰っている。

そうしてついに合同打ち上げ会が開催となった日、AVALON上空でアースアーマーに乗ったコアガンダムの中にヒロトとイヴの二人が居た。

夜空の下の野外会場ではBUILD DIVERSのガンプラ三機がモニメント代わりに三か所にそれぞれ配置されていた。

「そろそろかな」

ヒロトが見るに野外会場ではフォース同士の壁がすでに無くなり、場は暖まりつつある様だった。

イヴも同じように会場を上空から見てニコニコとほほ笑む。

「皆楽しそう」

「そうだな」

その時、バン！と大きな音と共に空に花火が一斉に上がった。

会場に立っているイージズナイトが持つピーコックスマッシュヤーを改造した花火砲が火を噴き上がった物だ。

着陸しろと言う合図が来た、と確認したヒロトはアースアーマーを操作して会場の中央に設置されたステージの後ろへと着陸させる。

「行くうか、イヴ」

「うん！」

ヒロトがイヴに手を差し出すと、彼女はその手をギュッと握る。

二人がステージの中心に降り立ち、息をそろえて頭を下げると大きな歓声が一斉に響いた。

盛大な拍手と数人のダイバーが吹いた高い口笛が鳴り響く。

ヒロトとイヴは会場が合図の後降りてこいとカルナから言われてはいたが、その後ステージの上で何かを話せとまでは言われていない。

大勢の人が注目する中、ステージに備え付けられた階段を下つていくと同時に群集が誰かを通すために自然と道を開けていく。

道を開けられヒロトとイヴの目の前に出てきたのはリクとサラだった。

ヒロトとリクが万感の思いを込めて目を合わせている間に、サラが目には涙をあふれさせながらイヴに向かって駆け出して飛びつくように姉を抱きしめた。

「姉さん！」

「サラ」

自分より背が高い妹をイヴは精一杯受け止め、優しく名前を呼ぶ。

サラは小さい姉にしがみつく様に身を縮こまらせていた。

「姉さん、ねえさん、ねえさん……！」

サラの声は感情と共に震え、その内に込めた感情がイヴにしつかりと伝わった。

「ごめんね、もう大丈夫、ごめんね、サラ」

次第にイヴの声が妹と同じように震え、泣いてる事がヒロトに伝わって来た。

その周囲では感受性豊かなモモに加え普段クールなアヤメも理性が限界を迎えて泣き始め、お互いに抱き合っていた。

他にも少なからずこの場に居る女性ダイバーや涙もろい男性ダイバーが次々に涙腺を決壊させて、その仲間が肩を叩いていた。

多くの人たちが二人の再会を一緒に喜んでる事にヒロトが純粹に喜びを覚えている最中、リクが明るく声をかけてきた。

「おかえり、やったね」

「ああ、待たせてごめん」

イヴが復活した後自分達は彼女に会えることが分かっている中ほんの一月にも満たない日を耐えただけで、もう会えることはない絶望に瀕した筈のヒロトに『待たせた』なんて謝られてもリクは首を振るしかない。

「ううん、いいんだ」

ヒロトが目を向けた時にはリクの目の端にも少し涙が浮かんでいたが、彼はすぐに拭い取ってしまった。

リクは泣いて抱き合う姉妹二人を見て、心の底から感じる。

「ヒロトは凄いなあ」

「俺だけの力じゃないよ」

ヒロトも姉妹を見て微笑んだ。

「いや、ホント、すご」――――」

唐突に言葉が途切れたリクに再度ヒロトが目を向けると、彼の目からぼたぼたと涙が零れて来ていた。

「大丈夫か？」

自分と同じような立場のリクは今回の件で思う所が沢山あったのだろうと、ヒロトは思う。

顔を抑えて首を振るリクに、ヒロトはどうしたものかと苦笑した。

情緒に富むとはいえ男としてのプライドがあり、加えてヒロトが戸惑うと思って泣くのは必死にこらえていたリクであったが恋人の感情に誘発されるとどうしても涙が止まらなかった。

ヒロトが涙を流さない分も含めているかのようにリクが声を漏らさずに泣いていると、いつの間にか周囲に大勢いた人影がそれぞれ適当に散らばっていた。しかも誰が用意してくれたのか衝立が周囲に置かれて、ダイバーたちからの視線を遮ってくれている。

唯一近くに立っているキョウヤが気を効かせ身振り手振りで群集を散らせてくれたのだろう。そうヒロトは考えると、キョウヤに頭を下げる。

「キョウヤさん、色々お世話になりました、すみません気を使っても

らって」

「いや、こつちこそ見世物みたいにして申し訳ない」

イヴが戻ってきたことを分かり易く示す為に劇的な登場を演出してみたが、あまり良くなかった様だ。キョウヤはそんな気まずさを覚えながら頭を掻いた。

「ともかく三人共落ち着いたら戻ってくるといい、私たちは適当に楽しんでるから気にしなくていい」

「また後で向かいます」

「うん、待ってるよ」

キョウヤは明るく笑い、会場の方へと戻っていった。

リクはそんな話をしている間に何とか普段通りに感情を戻して、サラの肩に手を置く。

「サラ、そろそろ、おっと」

彼女は顔を上げてリクの方を見ると、そのまま彼の胸に縋りついてしまった。

どうしたものかとリクが戸惑いながらもサラの背中に手を回している間に、ヒロトがイヴに声をかける。

「イヴ？」

「……私は大丈夫」

彼女は気丈に振舞い、少し残った涙を自分で拭う。

イヴはヒロトの手を握ると、リクに優しく笑いかけた。

「妹の事、どうかよろしく」

「っはい！また後で！」

「じゃあ、先に出てる」

ヒロトはリクに軽く手を振って、衝立の隙間から二人で外側に出ていった。

外に出てみると場の空気が覚めている様な事はなく、どのダイバーも好き勝手にいろんな場所で話し合っている様だった。

一番近い集団の中からエミリアが二人の前に抜け出てくる。

「もう大丈夫かしら？」

「いえ、中にリクとサラさんが」

「ああ、じゃあもう少し待ってるわね」

衝立を配置してくれたのはエミリアで彼女はどのタイミングで衝立を片付けるか測りかねていた。

片手間でその事について、エミリアはイヴに笑いかける。

「初めまして、フォースAVALONの副隊長エミリアです」

「イヴです、初めまして。色々お世話になりました」

「あ、エミリアさん、少しお願いがあるんですが」

「あら、何かしら？」

「実は――」

ヒロトとイヴは二人で考えた事をエミリアに説明する。

全てを聞き終えてエミリアは迷いなく二人の頼みを快諾する。

「いいわね！もちろん協力するわ！」

「じゃあ、お願いします」

「まだ時間は掛かるでしょうけど、日取りが決まったら教えてね」

「はい」

「じゃあ、楽しんで」

「またよろしくお願いします」

エミリアは二人に笑いかけると元居た集団へと戻っていった。

彼女を見送りながら次はどこに行こうかとヒロトが考えていると、視界の端で手を振っているカザミを捉えた。

その集団の中にはカルナとパル、他にAVALONのフォースメンバーが数人いる。

ヒロトとイヴがその集団へと向かい、一通り挨拶を終えた後カルナはニヤリと笑ってヒロトの顔を見る。

直前にイヴと手を繋いでいる事を見ていたのでその辺りの弄りが来るな、とヒロトは何食わぬ態度で予測する。

そんなヒロトの考えを見越してかカルナはカザミに問いかける。

「ここ三週間で二人さんの仲良しエピソードとかあった？」

「そりゃまあ、いろいろ」

心なしかカザミはげんなりした様子で含みを持たせて返事をする
と、当然カルナが深く掘り込んでいく。

「ほおほお、例えぼ?」

「んーそうだなあ」

カザミはある時の事を思い出しながら、身振り手振りを加えた演技をしながら語り始める。



とあるミツシヨンが終わった後、BUILD DIVERSの新規メンバーとして加入したイヴを加えた五人はテーブルを囲んでのんびりと話をしていた。

意気揚々と自分の戦果について語っていたカザミも落ち着きを見せて彼が椅子に座ったまま背筋を伸ばした後、話題は次の物へと移る。

「そういや、イヴに聞いてみたいんだが」

「うん、なに?」

カザミがイヴを呼び捨てにするようになったのはつい最近、彼女の方から仲間になるのだから敬称はいらないと言われたのがきっかけで、それでも根っから物腰丁寧なパルは敬称をつけたまま、メイは姉さんと呼ぶ事から、イヴへの呼び方が変わったのはカザミ一人だけであった。

メイ以外の仲間内でのイヴへの好感や評価は最初はヒロトありきの物であった。

しかし自己紹介ついでに各々がガン普拉をイヴへ見せた時に、彼女はガン普拉の声を伝えるという方法でカザミとパルの心を早くも掴んだ。

「ヒロトってなんかミスしたことないの?すげーしよぼい奴とか」

「小さいミス?うーん」

ヒロトとそれなりに時間を共にしたカザミでも彼が小さい明らかミスを犯した瞬間を見た事は無かった。

イヴが顎に手を当てて思い出している間に、ヒロトが肩をすくめてカザミに尋ねる。

「何でそんなこと聞くんだ?」

「んなもん思い付いたからに決まってるだろ」

「確かコアガンダムの着替えを間違えた事あったと思う。……そう、アースとマーズで、ほら」

「あー……」

イヴが言った事をヒロトはぼんやりと思い出し始めた。

その時二人で行っていたミッションは比較的簡単な物で、ミッションの合間に銀河の向こうまで行く方法を考えて油断している間に敵がレーダーに引っ掛かった。それで咄嗟にコアエンジするとアーマーを間違えていたのだったなどヒロトは振り返る。

「あつたな」

「懐かしいね。ヒロトあの時自分でビックリしてたから、珍しいなあとは思ってたの」

「今では起こりえないミスだな」

メイが感心しているとカザミはケラケラと笑う。

「やっぱヒロトでもしよぼいミスはするんだな」

パルはこの会話を楽しそうに聞いていたが、ふと時間を確認して仲間を声をかける。

「あと一回くらいなら短いミッションはこなせそうですけど、行きます?」

「おー今日はそれで最後にするか」

ヒロトが時刻を確認すると日頃の解散時間にはまだ少し時間があつた。

彼がカザミに同調しようとした時、テーブルの影でヒロトのポンチョがくいつくいつと軽く引かれる。

隣にイヴが座っていたので誰がやったのかは考えるまでもなく、とりあえず彼が目を向けてみると彼女はチラリと目線を合わせてすぐに逸らせてしまう。

彼女のある種あざとさを感じさせないじらしい仕草で一瞬彼の頬が緩みそうになるも、ヒロトはすぐに表情を引き締めて先ほどまで持っていた意見をひっくり返した。

「悪いけどもう俺達は抜ける」

「そうですね、じゃあ解散ですね」

パルは少し残念そうであつたものの、また明日もあるかと特に氣にした風ではない。

カザミの座っている角度からは彼自身の背が高い事もあつてその二人の無言のやり取りが絶妙に見えており、ヒロトをからかつてやろうと思つたがあえてグツと堪えた。彼なりに引き離されてた二人を慮つての事だつた。

「じゃあ解散だなあ、また明日な」

「お疲れ、姉さん、ヒロト」

「うん、またねメイ、二人共」

ヒロトとなんだか機嫌よさげなイヴの二人が立ち去っていくと、カザミは思わずハア〜とため息をついた。

そんな彼にメイが眉を上げる。

「どうかしたのか」

「なんでもねえよ、んじゃあまた明日な」

マイヤに会いに行くにしても許された残り時間が微妙で、カザミはさすがごと一人でログアウトするのであつた。



「——つてな感じだつた」

「キヤー！・ヒロト君素敵い！」

カルナは裏声で甲高く声を上げるとヒロトの背中をバシバシと叩いた。

仮にここがエルドラならそれなりに痛みを感じそうな勢いであつたが、GBNでは痛覚遮断のセーフティが働いているのでそんな心配はない。

だがヒロトはその判断を下したことについては特に後悔をしておらず、イヴはその辺りの行動についてからかいを受けて動揺するような性格でもない。その結果二人の反応は少し周りの期待するものは逸れていく。

「何か問題あつたか？」

普段通りの表情のヒロトに、カザミはある種感心したように笑う。
「お前変わったよなあ」

とカザミは呟いてしまいが、その後に元々こんな感じだったのかもな、と心の中で呟いた。

今まで感情を押し殺して行動する事の多かったヒロトが多少我儘をやり始めている事を喜んだほうが良いのだろうか、カザミはそう感じたのだ。だがそれはそれとして見えないところでやってほしいと彼は同時に思っていた。

カルナもヒロトの変化を面白半分ではあったが確かに喜んでいた。

「そういえば、カルナさんに少しお願いがあるんですけど」

「お？なんだ？」

「実は――」

エミリアに頼んだことと同様の事をカルナが聞くと、見る見るうちにやる気をみなぎらせて力強く頷いた。

「勿論いいぜ！準備できたらいつでも言っ来て来いよ！」

「ありがとうございます」

「……でもそんな秘密めいたやり方する必要あるのか？」

「考えている事があって」

ヒロトは衝立から出てきてキョウヤと話しているリクとサラに少しだけ視線を飛ばす。

すると彼の視線からカルナは全てを察して、テンション高く頷いた。

「おお！なるほどそう言う事か！いいねえ、俄然燃えてくるじゃん！」

「一発かましてくるぜ！」

ドンつと胸を叩くカザミにカルナはうむ、と頷く。

「気合も十分だな！当日が楽しみだ」

今度は激励の意味でヒロトの背中を叩いたカルナと機嫌良く分かれて二人が会場をまた歩き始める。

しばらくするとメイがアヤメとモモの二人と話をしている様だった。

「そっかー。じゃあ、お姉ちゃんとはうまく行きそうなんだ、良かったあー！」

「喧嘩するような動機が無いぞ」

「どーかなあ、男女のあれやこれやとか」

「こら、モモ」

モモがすこし意地の悪い笑みを見せるとアヤメがすかさずその額をはじいた。

そのタイミングでメイがヒロトを見つけて、軽く手を振る。

「ヒロト、姉さん」

「ごめんなさい、この子が妙な事メイに吹き込もうとしてて」

アヤメは少しため息をついて二人に謝る。

イヴはすぐに首を振ると、アヤメに笑いかける。

「イヴです、初めまして。メイの好きなようにすればいいと思うので、私ごとやかく言う気はないわ」

「そう？ならいいけど……いや良くないわ。ともかく、アヤメよ、リクの仲間。よろしくね」

「同じく、モモですー！」

三人が挨拶をした後メイが少し呆れた表情をする。

「まず姉さんが好きにするという事を覚えるべきだろう」

「あら」

「メイ」

言葉尻が強いと感じたヒロトがメイを諫めると、彼女は少しムツとする。

「なんだ、私が間違っているのか？」

「ううん、メイが正しいわ。でもそれなりに好きに動いてるのよ？」

「分かりにくい」

ズバツとメイは断じ、イヴは困ったように笑う。

メイなりに姉の事を心配して話している事で、その気持ちはイヴに伝わっていた。

「じゃあもつと頑張る、ありがとうメイ」

「うむ」

メイがどっしりと重く頷く姿に、モモはどっちが姉なのか良く分からないなあ、と感じながら場を盛り上げる為ここは一つどうでもいい話をすることにした。

「ヒロトとメイってなんだか似てるよねー」

「あ、それ私も思う」

モモの話題にアヤメが食いつく。

「クールでちよつとわかりにくいけど優しいし」

「うんうん、私よくお世話になるから感謝してる」

モモとアヤメがヒロト・メイと肩を並べて戦った回数は少ない。だがそんな少しの機会でも二人は無駄口を叩くことなく仲間に目を配り、必要があればフォローに回っていた。特に勢いがついてそのままミスすることが割とあるモモは大層二人に世話になっている。

「大した事はしていない」

息をそろえたわけでもなく、同じタイミングでヒロトとメイは返事をする。

同調した二人の言葉がモモのツボをついて、彼女はキャツキャツと笑った。

「あはは！ほら、やっぱり似てる！」

「息ぴったり」

アヤメが感心すると、イヴはほんの少しだけムツとしてヒロトの手を強めに握った。

彼がイヴに目をやると、彼女はツーンとしてヒロトから目を逸らしていた。

そんなイヴの様子に、この子もやきもち焼く時もあるんだなあ、とアヤメが感心しているとその耳に掛かったイヤリングが目に入った。

「そういえばそのイヤリング、メイが持ってたのよね？」

「そうだ、私が生まれた時からな」

「不思議だよねー」

「イヴのデータ片がメイに取り込まれたんだと思う」

ヒロトが解釈を述べると、モモがふーんと頷いてハツとする。

何やら彼女は凄い事に気が付いた様に少し興奮していた。

「イヴさんはメイのお母さんだった？」

「「え？」」

意表を突かれる意見に三人が声をそろえてポカーンと呆ける。

そうして数秒が立つ間に、まあそう言えなくもないか、とヒロトが他人事のように思っているとメイがイヴをじつと見て気持ちの赴くままに呼んだ。

「母さん」

「――！なあに、メイ？」

「……おお」

育てのママがメイには居る、だが当然産みの親に会えるとは思ってもしなかった。

メイは最近の一連の計画があつても、そういう解釈に至る事はなかったので目から鱗が落ちた気分だった。

返事をしたイヴは、ヒロトに似ていると言われたメイが自分の因子を少しでも持つて生まれてきた事を改めて実感し、母と呼ばれて胸がギュツと掴まれた様な感動を覚えた。

モモはそんな二人を見守りながらなんだか感動した気分で頷いている。

「ならヒロトが父さんか」

「え!？」

最近恋人ができたばかりなのに娘が出来たらしいヒロトは流石に表情を崩して戸惑いを見せる。

冗談よ、とモモが会話を切り上げようと動くより早くにイヴがヒロトの手を引いて少し悲しそうに首をかしげる。

「嫌?」

「嫌じゃないけどー」

イヴの悲しそうな顔に思わずヒロトは首を振る、すると狙ったかのようにメイが彼の精神状態をさらにかき乱す様な言葉を投げかけてきた。

「父さん」

「――ちょっと待ってくれメイ!」

ヒロトの精神状態が安定して話の收拾がつくまでそのまましばらくの時間を要した。



「キョウヤさん」

「やあ二人共。——どうしたんだ、ヒロト。なんだかすごく疲れてそうだが」

「まあいろいろあって。……もう大丈夫です」

「そうか。……改めてAVALONのフォーリーダー、クジヨウ・キョウヤだ。キョウヤでいい、よろしく」

「イヴです、初めまして。お世話になりました」

「いやいや、戻って来てくれてよかったよ」

イヴが感謝の気持ちを込めて頭を下げると、キョウヤは朗らかに返事をする。

キョウヤと一緒に居たリクはすかさず後に続いた。

「リクです、よろしくイヴさん。さつきは碌に挨拶できなくてごめんなさい」

「ふふっ、いいのよ、これからよろしく、リク。いろいろ、ありがとう」

二人が挨拶を交わしているとサラからヒロトに声がかかる。

「ヒロト、ありがとう」

「ああ、俺からもありがとう」

言葉はわずかであったが、二人の気持ちのやり取りはそれだけで済んだ。

ヒロトとサラは自分の大事な人に、また大切な縁が生まれた事が嬉しかった。

「リク達は何の話をしてたんだ？」

「うん、以前の大会のメインイベントについて話してたんだよ」

「ああ、それか」

イヴ復活計画のAVALONイベント大会では目玉イベントとして、スタジアムにいるダイバーを百人ランダムで選んで宇宙デイメンションに転送し、それをキョウヤが一人で相手にとるといふ彼がどうあがいても勝ち目がなさそうな内容の物が行われた。

キョウヤに勝てばその百人に商品がそれぞれ贈られるとあってダイバーたちの士気は高く、AVALON側も実際勝つつもりはなかっただろう。

「百人抜きしたんですよね、キョウヤさん」

「いやー、直前にエミリアから計画に成功を告げられて気持ちが高ぶってしまって、つい」

「つい、で済むような事ではないだろう、その場にいる四人の気持ちはまったく同様の物だった。」

後のGBN内のメディアアフォー스는大惨事メインイベントを高々と取り上げていて、チャンピオンはこれだからと笑いを誘っていた。

「最後の十人が特に手ごわくてね、危うく落とされるところだったよ」「……片腕切られただけじゃないですか」

リクは苦笑いしながら呟くも、キョウヤはまるで聞こえていないかのように話を続ける。

「いやあ、あのシドというドライバーは特に厄介だった、今度AVALOに勧誘してみようか。あの獰猛な動きは味方にすれば心強いと思うんだが、ヒロトはどう思う?」

「まあ、確かに」

ヒロトは多分勧誘できないだろうな、と考えながらも割と適当に返事をした。

打ち上げは盛り上がりが覚めぬまま全ガンダムシリーズ〇×クイズが行われた。

後日、キョウヤがシドに勧誘をかけようとするも彼の独特な雰囲気、飲み込まれて、そしてなぜかそのまま一対一で勝負して固く握手をし、再戦を誓い合って別れたらしい。

「やっぱり勧誘できなかったんだな、とヒロトはその無茶苦茶な顛末に笑うしかないのだった。」

夏のある日・前編

「なー、おっちゃんこの山なんだ？」

「使い道が分からない遺物をここに集めてんだよ、どれもこれも大したカラクリもないガラクタさ」

「ふーん」

「お前さん達にはいろいろ恩があるしな、好きに持って行ってくれていいぞ」

「え、これ全部おっちゃんの物なのか？」

「違う」

「おい！」

「でもなくなったところで誰も気にせんわ！」

「そりやそうか、なんせどれもこれもガラクタだしな！」

カザミと熊の様な見た目をした山の民はガハハ！と大声で笑い合
い、男の方はそのまま何処かへと立ち去って行った。

ガラクタの山を目の前にしてカザミは全体にざつと目を走らせる。
カザミから見ても機械仕掛けの様なものは確かに見当たらず、小さい
椅子の様なものや、テーブルのような物、材質不明の板や箱がわんさ
と積まれている。

彼がボケーつとしながらガラクタの山に見入っていると、呆れたマ
イヤが肩をすくめた。

「私、買い物したいんですけどー！」

「お、すまん。行くーん？」

カザミはガラクタの山の一部に目をつけると、テーブルと言うには
歪に中が凹んでいる物を組み上げた。

「これってもしかして」

「どうしたのよ？」

「なあ、網どつかにないか？網の板みたいなやつ」

「えっ？うーん、あーこれ？」

二人でガラクタの山を見つめると、マイヤの視界の端に山から少し
飛び出た場所にカザミの言う物があった。

思わず声を上げて、山からヒョイと引つ張り出す。彼女がカザミにその網の板を渡すと、彼はなんだかすごく喜んでる様だった。

「やっぱりあるじゃん！なあマイヤ、炭ってどっかで手に入るか!？」

「この町のどこかで売ってると思うけど」

「おお、いけるかもしれない！後肉と野菜と——」

テンションが上がり切ったカザミに押され、マイヤは戸惑いながらもともかく話を聞くことにした。



そんなカザミとマイヤのやり取りが行われる少し前の日。

今日もテーブルを囲っているBUILD DIVERSではパルは手を上げて皆に意見を伝えていた。

「そろそろクアドルンさんの偽翼、取り外してもいいと思います」

最近エルドラに行く度にパルはクアドルンの翼がどの程度治っているか確認している。クアドルンはまだ余裕があると言っていたが、そろそろ窮屈になってくるだろうと目途が立った。

メイも彼の提案を妥当と感じた。

「そうだな。……あの翼を取り付けてからもう四カ月程度だ、十分役目は果たしただろう」

「あー、もうあの時から四カ月もたったのか、時間過ぎるのってはいえーよな」

アルスとの戦いが決着したのが春の事で、いつの間にかもう真夏になってる。カザミの言う通り時間の流れを改めて感じたヒロトはリアルでの日差しの強さを思い出して、心の底からボヤク。

「外は暑い」

「わかるー!」

「ヒロト、いっぱい汗かいてたよ。皆も、熱中症だっけ、気を付けてね」
「ありがとうございます、気を付けます」

リアルでは基本気温を感じる事の出来ないイヴだが、オサムやユリコと一緒にテレビを見てみるとその手の注意報は良く目につく。三人への注意喚起は当然の事で、パルはうんうんと頷いていた。

メイがボードに適当に表示されている現在GBNで表示されている

るイベントを改めて見ると、変わった物ではガンプラススキー大会で涼もう！inキリマンジャロイベントや真つ当に海でのレイドボスイベントなど夏に染まっている。

「エルドラもそれなりに暖かくなって来たな」

「確かに。あー、夏らしい事がしたい」

「なんだそれは？」

「決まってるだろ、泳ぐ」

海の男カザミ、ならば泳ぎは当然得意、と言う訳ではない。小さい頃は何でもできる優秀な子供として持て囃されてきたが、水泳が上手くできない事起点にして燻ってしまった過去がある。

夏休み中の暇があればGBNにダイブしつつ、彼は他にも水泳に対する特訓を行っていた。仲間たちと出会う以前に彼に染み付いていたかっこいい自分であり続けるという固執や力みが抜けて、最近の大きな計画を成功させる元となった『やれる事をやってみる』という精神が関与したのか、彼は短期間のうちにするすると人並みに泳ぐ事が出来る様になっていた。

好調な彼はいろんな場所で泳いでみたいと考え、GBNでの水泳を試してみるがこちらではリアルと感覚に差があつて微妙に馴染まない。それについては最近考えている事があつた。

「向こうなら気分よく泳げるんじゃないかな、どう？」

「エルドラか……」

「私もやってみたい！」

ヒロトがエルドラで泳ぐことを考え始めると、イヴは期待に満ちた表情で答える。

そんな彼女を思わずヒロトは止めてしまいそうになる。

イヴが泳げる・泳げないという話ではなく、まずエルドラに行く事が彼女にとって初めての事になるからだ。

「ヒロト」

「うーん」

エルドラからGBNに来たことはまず間違いないイヴがああ星に戻ったらどうなるかヒロトには予想が付かない。

イヴが帰って来てからしばらくは彼女の精神状態が不安定な事も考慮してエルドラには近寄らせない事にしていたが、そろそろその理由で遠ざけるのも限界が来ていた。

加えて以前やりたい事をやれば良いと伝えておいて、危ないからと彼女の意思を無碍にする訳にはいかない。

「ダメ？」

ヒロトがダメって言うなら我慢する、そう思ってしよんぼりしながら未練がましく上目遣いをするイヴ。

自分に対してはとてつもなく厳しい彼の理性だが、彼女に対しては十秒もかからず白旗を上げる。

「わかった」

「やった！」

心からの喜びを携えて身体を寄りかからせてくるイヴをヒロトが受け止め今考えた条件を伝える。

「泳ぐこととクアドルンさんの翼の取り外しを一日でやる必要はないだろう、それに翼の取り外しは時間がかかる。先に翼の取り外しを行う前にイヴをエルドラに連れて行って、異常が無いか確認する、いい？」

「うん」

また一つ願いが叶ったイヴは機嫌よく頷いた、その事をヒロトは確認して

「皆もそれで——」

他の仲間に目をやるとすぐ生暖かい目がヒロトに集中していた。

完全にイヴに視線と思考が持っていかれていた彼は仲間たちがやけに静かにしている事に気が付かなかった。

「いいかな？」

その確認に気恥ずかしい気持ちは籠っていない、少なくとも表面上には無い。

ヒロトがイヴを見る眼はカザミに言わせれば『もうお前誰だよ』くらい優しい物であるが、この切り替えの早さが何より凄いのかもしれないとカザミとパルは思った。

彼の提案は妥当な事で、まるつきり空気になっていた三人はそのまま無言で頷いた。

「じゃあ行こうか、エルドラ」

「うんー」

「「おー」」

メイはいつも通り淡々とした返事で、カザミとパルは何となくその調子に合わせて腕を突き上げた。

エルドラに行く前に、クアドルンの偽翼を取り外すために必要な多彩な工具を精密に扱えるハロフイッターを利用出来る様にパルがハロになった。

ハロになると転がったり跳ねたりして移動する事になる。ハロになったパルを移動しにくいだろうと気を効かせたメイが腕に抱えて運ぶ。

堪らず妙な声を上げそうになったパルは必死に我慢して大人しくすることに徹した。

路地裏に着いて、少し佇んでいると黒いウィンドウが浮かび上がった。

もしイヴに何かあったら、そう思うと不安を感じずにはいられないヒロトの手をイヴがギュッと握る。

「大丈夫、ね？」

「うん」

パルがウィンドウに触れる前に、クアドルンに声をかける。

「今日はもう一人います」

「……確認した」

いつも通り深みのある落ち着いた声が短く返ってくると、五人の転送が始まった。

「――！」

イヴは目を見開きクアドルンを見上げる。

クアドルンもイヴの事をジッと観察し、どう声をかけるか迷っている様だった。

ヒロト達は固唾を飲んで見守るしかない。

イヴはおずおずと自分よりはるかに巨体の竜へと言葉を伝える。

「イヴです、初めまして」

その自己紹介を聞いたとき、クアドルンはほんの少しだけ沈黙する。

「私の名はクアドルン、好きに呼べ」

納得の様な諦めの様な、複雑な感情を込めた返答だった。

イヴは目を伏せると少しだけ頭を下げた。

出会った事も言葉を交わしたこともある、そういう懐かしさだけがイヴに湧き出てきて、それでも彼の名前は思い出せなかった。イヴとしてではなく古き民の誰かとしてのせめてもの謝意だった。

「二度と会えぬ事も覚悟して別れた、何処かで生きてくれればいいと望みながら」

だから気にするな、望みは叶っている。クアドルンは言葉の外でそう伝えていた。

「———ありがとう、クアドルン」

「それでいい。———ここで過ごすなら下手にあの様な石板に触るな」

「うん、わかった」

クアドルンが視線で示したのは、ヒロト達がエルドラに召喚される時の全てを司っているシステム、その端末と思われる石板だった。イヴも今自分に異常は起きていないと確信しているが、クアドルンに示されたあの石板には『今』触れたくないという感覚がある。

「イヴ、大丈夫か？」

「うん！」

「よし、じゃあ俺は一度戻ってハロに変わってくる。……カザミ」

「はいはい、目は離さねえよ」

「ありがとう、クアドルンさん、手間ですがよろしく願いします」

「翼の件か、いいだろう」

パルがこの球体になっている事からクアドルンは今から彼らが何をしたいのかを手早く把握した。

ヒロトがエルドラから出ていく間に、イヴは自分の手を握ったり開

いたり、身体をもぞもぞと動かした。

メイはイヴのその仕草から、エルドラに來た当初の自分と同様の事を感じているなど判断する。

「今感じているのは多分リアルの感触と言う奴だろう」

「そっか、さつきヒロトの手を握ってた時もなんだか違うなーって思ってたの」

メイの表現にイヴは少し感動したように頷く。

いつの間にかメイの身体に密着する形になっていたハロパルは、その話を聞いて彼女に抱えられている状況に気恥ずかしい物を感じていた。

「あのー、メイさん、そろそろ降ろしてくれませんか」

「ん？ああ、すまない」

パルが今身体の後ろ辺りに感じてる感触は大の男ならお金を払う位に心地良い柔らかさがあつたが、まだ幼さを残した彼にとってははどうしても気恥ずかしい気持ち湧き出てきて我慢できない。

パルのあのポジションは絶対役得だろうなあ、とかカザミは思ってたが流石にそれを口に出すほど愚かではなかった。

そうこう言っている間にハロになったヒロトが戻ってくる。

その瞬間イヴが目を輝かせて、ふらふらと惹かれる様にハロヒロトに近づいて返事も待たずに抱き上げた。

「かわいいー」

「ちよっ、イヴー」

手も足もない身体ではイヴをはねのける事も出来ず、ヒロトはされるがままイヴに頬ずりされていた。

エルドラとGBNでは感覚に差があり、こうして露骨に彼女の身体を感じてしまえば彼も当然落ち着きを失う。

普通ならもうすでに顔が真っ赤になっていただろうが、ハロの姿ではそういう感情表現ができない事が彼にとっては功を奏していた。

「と、ともかくー降ろしてくれーイヴー」

「やーちよっとくらい良いでしょー？」

カザミはそんな二人に肩をすくめると、以前二人がハロになった時

の事を思い出す。

「マイヤに会って、休憩がてら食べるものないか聞いて来るわ」

「暇そうならフレディを連れてくると良い、イヴに会いたがっていただろう」

「そうだな、オツケー、じゃあ作業は任せたぜー」

騒がしくなったな、とクアドルンが呆れた五分後によくヒロトが解放されて作業開始となった。



「泳ぐなら水着が要るな」

「そうね、メイは泳いだことあるの?」

「GBNでやれる事は一通りやった、泳ぎ方もまあ通用するだろう」

メイはイヴに母さんはどうなんだ、と目線で問う。

「泳いだ事はないわ、着替えた事ないから」

「……そうか、なら水着はどんなものがいいか、ママに聞いてみようか」

衣装に関してはマギーのセンスに任せて問題ないだろう、メイは自分で考える事をすぐに投げた。自分達だけで考えて母親に妙な水着を着せてしまつては申し訳ないし、だからと言ってアヤメに聞けばモモが付いてきて無駄に時間がかかりそうだ。

「ヒロト、可愛いって言つてくれるかな?」

「なんだ、言われたことないのか?」

親子にも姉妹にも見える二人の会話はそれなりに弾んでいた。

それなりに騒音を出しながらの作業で普通なら二人の会話は聞き取れないはずだが、仲間の声が良く聞こえる様に通信回線を開いているハロヒロトとハロパルは二人の会話が良く聞こえていた。

「ヒロトさん、手が止まっていますよ」

パルは笑いをこらえながら指摘する。

「あ、すまない」

「泳ぐの楽しみですね」

イヴが着替えているところを見た事がないヒロトは、勿論彼女の水着姿を見た事が無い。

そもそも肌の露出があまりないイヴが水着を着るといふ事に男子としては色々考える事があり、集中が途切れてしまった。

「……パルは泳げるのか？」

「昔は泳げてましたから、大丈夫だとは思いますが」

パルは気楽に答えながら、深い所に行き過ぎず、浅瀬で遊ぶくらいなら問題はないだろうと判断する。

ヒロトも彼なら自分のやれる事をはっきり把握できていると信頼しているので、過剰に心配しすぎないようにした。

「ここ頼む」

「はい。……ヒロトさんは泳げますか？」

「人並みには、よし外すぞ」

「はい！クアドルンさん外します」

「分かった」

のんびり話しながら作業は順調に進んでいた。

そうしてしばらく作業を続けていると、イージスナイトが戻って来てカザミが下りてくる。

彼はバスケットに片手でつまめる軽食を入れていたが、フレディは来なかった。

「ただいま。フレディは村の手伝いだってよ、井戸がどうのこうのらしい」

「おかえり、そうか、なら仕方ないな」

「この後もどうせ暇なんだし、これ終わったらあっち行くか？」

「ふむ、おい、二人共休憩だ」

メイが声を上げると、作業の音がすぐに止んだ。

偶然ではあったがヒロトやパルから見えてちょうどキリの良いタイミングで声がかかったお陰だった。

ハロローダーとハロファイターそれぞれからハロヒロトとハロパルがスポンと抜けてくると、待ち構えていたイヴにヒロトが捕まった。そうして抱きかかえられたまま、彼女がメイと一緒に座っていたマットの上まで連れていかれる。

もはやヒロトは無言でされるがままだった。

そして軽く跳ねながらパルがマットの上まで来ると、何を思ったのかメイがパルを捕まえて膝の上に乗せてしまった。

「えーっと、なんでですか?」

「なんとなくだ」

ヒロトを膝に置いたイヴの横でパルを膝の上に置くメイ、母親の真似をする娘の図。

気恥ずかしそうなパルに、カザミはニヤリと笑みを向けながら彼を慰める。

「まあまあ我慢しろよ」

嫌な気分がしてるわけでもあるまい、とカザミは確信している。

「笑って言わないでくださいよ……」

「前だつてヒロトと一緒にメイにアーンってされてたじゃん、大差ないって」

「ええ、結構違うと思うんですが」

「てかあれ何で食えるんだろうな、味したんだろ?」

「まあ、確かに、どうなってるんでしょうね、この身体」

パルの気恥ずかしい気持ちは話が逸れて行くにつれて少しずつ削がれていった。

イヴはそんな会話の流れに少しだけ眉を上げる。

「アーンって、食べさせてもらったの?」

「ん?まあ、手が無いからな」

「ふーん」

ちよつとだけ不機嫌そうな声を上げるイヴにヒロトは少し焦るも、努めて冷静にその時の事を説明する。

「……メイに、だけど?」

「それとこれとは別なの」

この後イヴからのアーン攻撃が連続で行われたのは仕方のない事だった。

夏のある日・後編

クアドルンの偽翼の取り外し、エルドラで心地よく泳げそうな場所をカザミが中心となって探して周り、彼の眼にかなう場所を見つけた。事が出来た。

その合間にイヴとメイが水着を準備する為にマギーと出かけて、三人と別ルートでヒロトとパルも水着を手に入れた。

エルドラで遊ぶので勿論フレデイに声をかけ、その場に同席していたマイヤも一緒に湖に向かう事となる。

山の民に水泳の文化は浸透していない、当然二人は泳げないがフレデイは水泳にかなり乗り気で彼の水着の調達もGBNから持つてくるだけで済む。

同時に彼とイヴは挨拶を済ませ、お互い友好的な姿勢ですぐに打ち解けた。

当初はお弁当を持って行って向こうで食べる計画だったが、カザミが凄腕を見つけたから俺に任せろと声を大にした事で食事の準備は彼に一任する事となった。

それ以降彼は何度もエルドラに向かつてはマイヤと何かを作り、その成果が上がるまで更に時間を要した。

そして偽翼の取り外しを行った数日後、エルドラでの日帰り旅行の日がやってきた。

合流してすぐにイヴとメイが自身の髪の毛の長さがある程度短くしていたり、獣耳や尻尾が泳ぐときに邪魔になるだろうと判断したパルがその部分を消す等特有の準備を行う。他にも全員がエルドラにいった後着替えやすい恰好になっていた。

水着関連や身体を拭くものをハンドバックに入れて路地裏で準備を完了させる。

食材の準備があるカザミは先にエルドラへと向かって、この場に居るのは彼を抜いた四人。

装いと場所が完全にミスマッチで、客観的に見れば明らかにおかしなダイバーの集団ではあったがこんな所にはヒロト達以外は誰も来

ない。

この時点でイヴの服装が切り替わっていつものドレスから涼し気な白のワンピースと少し厚底のサンダルになっていた。

イヴの普段のドレスは肌の露出が少ない。そんな彼女が着替えた事で白い腕や艶やかな鎖骨周りと細い足がヒロトの目に飛び込んできて、彼の思考は一瞬止まった。

その時ヒロトは仲間に気付かれればすぐさま押搦れそうな顔をしていたが、メイの一声のお陰で全員の視線がすぐに一か所に集中し、運よく誰にも気づかれることはなかった。

「では、いくぞ」

「行きましょうー」

パルもいつもより元気に返事をし、メイがウィンドウを触ると転送が始まる。

普段と装いの違う四人をクアドルンは一瞥するがそのまま何も言わずに目を閉じて眠ってしまった。

四人はなるべく静かにガンプラへと移動して予定ポイントまで飛翔する。

「泳ぐって初めてだから楽しみ」

「……」

「ヒロト？」

「あ、ああ、そうだな」

移動する最中にイヴの水着を見るときに視線が泳がないようにしないと、とヒロトが意志を固くする。傍から見ればずいぶん牧歌的な決意ではあったが本人としては戦場に出る前並みの緊張を感じていた。

そうして目標ポイントにたどり着くと、湖の畔でイージスナイトが膝立ちになって大きな日陰を一つ作っていた。

少し離れたところにコアガンダムとエクスバルキラランダの二機で更衣室代わりの空間を作り、男性陣はそこで着替える事にした。エルドラの湖には人気がまるでなく、貸し切り状態ではあったが流石に野晒しで着替える気にはなれなかった。女性陣はコックピットの中

で着替えて出れば誰にも見られる余地が無く更に安全が考慮されている。

男二人の着替えは五分とかからない、イヴとメイよりはるかに早くカザミと合流する。

彼はフレデイと話しながら浮き輪を膨らませている様だった。

バーベキューコンロと思わしき物の近くでマイヤが火の調子を見ていて、カザミが見つけた凄い物とはこれの事だったのか、とヒロトとパルが感心する。異星人で根本から違う文化を持つが、娯楽や食事の行きつくところは似たような物なのだろう。

「こんにちは、マイヤさん」

「こんにちは、あら、もう二人は？」

「まだ着替えています、マイヤさんは泳がなくて良かったんですか？」

「うーん、私は遠慮しとくわ。やっぱり怖いし」

パルとマイヤの会話を聞きながらヒロトは近くに会ったクーラーボックスを開けてみる。

GBNでは野外キャンプをモチーフにしたフォースネストに置かれるイミテーションに過ぎない物だが、中にしっかりとエルドラ産の肉と野菜が詰まり保冷もされてその務めを果たしている。

そうしている内にフレデイがヒロトとパルの方に気が付いて手を振ってきた。

「ヒロトさん、パルさん！」

「こんにちは、フレデイ」

「わー、ホントに耳も尻尾もないんですね！」

フレデイは耳も尻尾もないパルにいたく感心している。

カザミはヒロトを手で呼ぶと凹んだ浮き輪を渡してくる。

「膨らませるアレがないってのに嵩張るからって下手に空気抜くんじゃなかったぜ……」

「ああ、アレか。まあ、やってしまったものは仕方ないな、交代でやっていこう」

足で踏むと空気が送れるアレを思い出しながら、ヒロトは思いっきり息を吹き込んだ。

一回やっただけでもそこそこの負担を感じるが分かつてはいたがあまり膨らんでいない。周囲にあるすでに膨らんだ浮き輪達からカザミとフレデイの苦勞が滲み出ていた。

「パル、お前浮き輪なしで行けそうなら先に軽く泳いでみ」

「え、僕も膨らませますよ！」

「いやいいから、感覚取り戻してこいって。危なそうならすぐ戻って来いよ」

「……じゃあ、お先に」

パルはカザミの言葉に従って泳いでみる事にした。

話を聞いていたフレデイの目が輝く、僕も行きたい！と言わずとも身体が話していた。そんな微笑ましい様子にヒロトは微笑んで手近にある膨らみ切った浮き輪をフレデイに渡す。

「フレデイ、浮き輪を絶対離しちゃだめだぞ」

「はい！パルさん待つてくださーい！」

フレデイがびゅーんと走っていくのを見送り、ヒロトとカザミは遊ぶ前の一仕事に取り掛かり始めた。

浮き輪は残り一つしかなく、二人で交代しつつに息を吹き込んでいけば膨らみ切るまでそう時間は掛からなかった。

仕事をやり切った時にヒロト達の後ろから軽い足音がした。

「ねえ、メイ、私、変なところない？」

「……もうその質問は三度目だ、答えも変わらない」

その二人の声に、思わずヒロトとカザミが同時に振り替える。

メイが着ていたのは黒を基本にして緑のラインが入ったスポーティーなワンピースタイプの水着で、彼女のシュツとしたスタイルとかなり大きめの二つの『山』が目立つ。カザミは思わずおおうと感動しかけたが、遠目からマイヤが睨んでいる気配がしたので湖の方に素早く退散した。気の利いた発言は無かったが、余計な波風も立てなかった。

メイもカザミの感想などに興味がある訳もない、彼女は『処理落ちしているヒロト』の横をスタスタと通り抜けともかく一度泳いでみる事にした。

イヴの水着は白いゆったりとしたビキニで腰には少し短めのパレオを巻いている。彼女はその水着とセットと思わしき白くつばの広いピクチャーハットをかぶっていて、まるで何処かのお嬢様が屋敷からはるばる避暑地にやってきたようにヒロトは感じた。

細い腰や普段なら見えない小さな臍が目について視線のやりどころに困ったヒロトはともかくイヴの顔に集中するしかない。

「似合ってる、奇麗だ」

「――！」

気恥ずかしいし齒の浮くセリフだと感じながらも、それを堪えてヒロトは率直に感想を述べる。どこがどう似合う、とは流石に表現できなかったが彼はこれで精いっぱいだった。

『かわいい』ではなかったものの、彼の心底からの感想にイヴは目を輝かせ胸いっぱい喜びを感じた。

「ありがとう、ヒロト」

えへへ、と笑う恋人に強い動悸を感じたヒロトは我慢できずに思いつき目を逸らした。

ヒロトとイヴが自分達だけの空間を作っている間に、少し泳いだパルが手ごろな岩の上で座って休んでいるとGBNでの水泳との誤差を早くも埋めたメイがやってきた。

「素敵な水着ですね、格好良くて奇麗ですよ、メイさん」

「そうか、ありがとう。パルは大丈夫か？」

「久しぶりでもう少し疲れましたけど、溺れる事はなさそうです」
「ならいい」

畔にいるヒロトとは比べ物にならないほどすんなりと賛辞を贈るパルにメイは淡々と頷いて、やり取りをしていると急にフレディが大声を上げた。

「ほわー!?!」

バシャーンと大きな音がと水しぶきが上がる。

どうやらカザミが勢いよくフレディを押し上げて彼の身体を打ち上げたようだ、対して高く飛び上がる事は無かったがすぐ浮き輪に

戻ってきたフレディは明るく笑っていた。

「あははは！今の楽しいですね！」

「だろ？どうだ！もっかいやるか？」

「やってくださーい！」

「よっしや、任せろ！——おらあー！」

「ほわー!!」

ぎゃーぎゃーと湖の中で騒いでいる二人を眺めながら、元気だなあとパルが微笑んだ。

「……私が打ち上げてやろうか？」

「へ?!いえ、見てるだけでいいんで！」

フレディを羨んでいると勘違いしたメイに気を使われてパルは焦って断った。

ああいった事はされたことが無いし、その点は羨んでいると百歩譲っても認めてもいい。だがそれならカザミに打ち上げてもらうのが絶対条件、今の彼女に触れられると自分がおかしくなりそうだとパルは思わざる得ない。

「皆楽しそう」

「だな」

騒がしい湖を見ながら、イヴは微笑んで湖へと寄っていく。

ここはそこまで大きな湖ではない、今日は風もほとんど無く波もなかった。少し近寄っただけで溺れるなんて言う理不尽は起きるはずもないので、ヒロトは彼女の行動を見守るつもりだったがそれがまじり過ぎた。

溺れる危険性と言う話ではなく、通り過ぎたイヴを目で追ってしまっただけだ。

背中では彼女の金の髪が目隠しになってくれたが、パレオからすしし出ているお尻はそうもいかない。

イヴ本人の視線も周囲の仲間の視線もない環境、健全な男子高校生のヒロトが注目しない訳がなかった。

「冷たい、ふふっ」

「——」

小さなそれをたつぷり十五秒は見つめた後に、ヒロトは何とか気を持ち直してイヴの隣に移動する。

イヴが湖に足をつけて、ゆったりと遊んでいると何かを踏んで驚いたのか急に片足を上げてそのままバランスを崩しかけた。

「ひゃー！」

「イヴ！」

すかさずイヴの肩をパツと掴んでヒロトが支える。

「ありがとう」

「いや、いい気を付けて」

イヴの肩はヒロトの身体に完全にくっ付いていた。

咄嗟に支えたのは良かったが、小さい肩と腕が自分の肌に吸い付いてきて彼の心臓が急に早くなる。

このまま今の感情任せに抱きしめてしまってもイヴは嫌がらないだろうな、と少し考えはしたがこんな所でこれ以上くっ付いていたら流石に仲間からの目が向くだろう。

「イヴ、一緒に浅瀬で歩いてみよう」

「うん！」

改めてイヴの水着を見ると泳ぐより水遊びを重視している様に感じられ、もしかするとマギーは自分が水泳のレクチャーをする余裕がなくなる事を見越していたのではないかとヒロトは思う。そうとしか思えない水着のチョイスに彼は苦笑するしかなかった。

マイヤが頃合いを見て調理を開始し始めると、カザミが肩を息で上げらせながら湖から上がってきた。

彼女は遠めに見ていただけだが、どうやらメイと競争をしていた様だ。

「ハアツ、あいつ、泳ぎ、初心者って、マジかよ、速過ぎだろ」

「なんか楽しそうだったわねー？」

「何怒ってんだよ……？」

「べっつにー？」

メイの水着を見た時にカザミの鼻の下が伸びた事を本能的に察知したマイヤは、彼がメイと競争して遊んでいる事が何となく気に食わ

なかった。

カザミとしては競争した事は意図があつての事なのでその点に關してのみ弁明する事にした。

「次ここにきて、その時村のチビ共も連れてくるってなるかもしれないんだから、俺らの内の誰がどれだけ泳げるか見といたほうが良いだろ？」

「あ、意外に考えてたんだ」

「ひでえ」

マイヤはカザミの言い訳を話半分で聞きながらコンロの上に薄めに切った肉や野菜を並べていく。

彼女が湖を眺めている時についていた事はもう一つあつた。

「イヴさんって彼と恋人なの？」

「そりゃ見ればわかるだろ」

「まあね」

マイヤからするとヒロトは表情をあまり変えず淡々と物事を解決する印象であつたが、彼女に対しては随分感情が豊かに見えた。

「まあ、あいつらはいろいろあつたんだよ。ホントに、いろいろな」

「———そう、でも今楽しそうだしいいんじゃない」

カザミの言葉に途轍もなく重い物を感じ取つたが、自分には殆ど關係のない話だろうと判断し彼女は深く聞かなかつた。

マイヤの感想は適当な物であつたがカザミは不思議ととても嬉しい気持ち湧いてくる。

「だよな、確かに今楽しんでるに越した事ねえや」

ヒロトとイヴがいちやいちゃしてて気まずいのだの、バーベキューに合うタレがエルドラでなかなか作れなかつただの、最近はどうでもいい悩み事の方がずっと多い。今もこうやってマイヤと肉と野菜焼いて、仲間たちが近寄つてくるのを待っている。マイヤと一緒に作ったタレは絶対に皆に受ける筈だとカザミは確信している。

「平和だなあ」

誰に聞かせるまでもなく、彼は眩く。

エルドラの空は今日も高く、青く澄み渡つていた。

デート

「今日はどうしよっか?」

GBNにダイブしてすぐ、イヴはヒロトの意見を伺った。

BUILD DIVERSのフォースリーダーであるカザミとメンバーのバル、二人は今日ダイブできない事情があるらしくGBNに来ていない。メイは前日に明日はモモとアヤメと行動すると予定を立てていたらしく、今日はヒロトとイヴの二人きりで行動する事になった。

ヒロトがミツシヨンカウンター上方のモニターを見てみると、救難信号が発生しているミツシヨンやイベントミツシヨンの情報が表示されている。

「イヴは何かやりたい事ある?」

どれか適当にミツシヨンをこなすのもいいかもしれないと考えつつ、彼が質問を返すとイヴはにっこりと笑顔になってすぐに答える。

「ヒロトとデートしたい」

「っ、そうか、じゃあ——」

イヴからストレートに可愛らしい希望を伝えられて、ヒロトの頬が俄かに赤くなった。

恋人の愛らしい行動に胸を打たれて彼は一瞬言葉に詰まったが、二人で向かえばまず間違いなく楽しめる場所が脳裏によぎった。

「ペリシアに行こうか」

「うん！行こう！」

二人で行き先を決めている内にヒロトはふと周囲から視線を感じる。

彼がそれとなく周りを伺っていると、イヴに視線が集まっている様に見受けられた。件の動画の影響はまだ収まりきっておらず、このままここでジツとしていると誰かが声をかけてきそうだ。

そう判断したヒロトは、イヴを促して早速移動する事にした。

ペリシアデイメンションの端までワープするとイヴがヒロトに一つ提案する。

「ヒロト、街まで車で行かない？」

「車？」

固有のフォースネストを所持していないBUILD DIVER Sでは直接ワープする事はできない。

それを前提にしてペリシアの中心街に移動する事の出来る手段は二つ。ガンプラを使って移動するか、車など乗り物を使って移動するかのとちらかだ。

地図を碌に確認せず徒歩で向かうというのは初心者やりがちな物で、デイメンションで途方に暮れているダイバーが稀にいる。

ペリシアは中立地帯でガンプラでの移動がダイバーのランクによって制限されており、地形への対策を怠っていると砂でガンプラが固まってしまう事もある。尤もヒロトにとってその程度は問題なく対処できる。

「うん、せっかくだし懐かしい手段で向かいたいなって」

ダメ？とイヴに視線で問うが、ヒロトには首を振る理由が無い。

「ん、わかった」

彼が領いて砂漠に適應できる乗り物を自身のアイテムインベントリから実体化させる。

ヒロトがまだGBN を始めて間もない頃は当然ゲーム内の資金がなく自分では車を手でできず、余り他人と深く関りを持たないプレイスタイルだったので誰かに乗せてもらうという事もなく、ペリシアには行く手段が無かった。

始めてペリシアに向かったのはGBNを始めて少し経ってからの事で、その頃にはヒロトとイヴはそれなりに打ち解けていた。

ヒロトが乗り物を出している内に、以前エルドラに泳ぎに行くときにも来ていた涼し気なワンピースに着替えたイヴは実体化した乗り物を見て首をかしげた。

彼がインベントリから出した乗り物は車ではなく、ホバークラフトだった。

「こういうの前から持ってたの？」

「いや、以前のGBNには無かった」

アップデートを重ねるうちに実装されたこのホバークラフトは全地形に対応できる便利な移動アイテムで動力は無害化された疑似GN粒子を使用している、と言う設定になっている。

自身の服装や外見にGBN内の資金を使わずにいる分他のダイバーよりお金が余る、その余剰で購入した乗り物がこのホバークラフトだった。乗員は四人まで、操作性や速度は良好でしかもごく短時間であるがトランザムを発動させることのできる高性能マシンになっている。

性能についてヒロトはわざわざ語らず、イヴを促してホバークラフトに乗り込んだ。

彼がアクセルを踏むと揺れもなく滑らかに加速していく。

以前の車で移動したときは当然微振動やエンジン音がしていたが、今回は音すらほとんどない。

イヴの服装が変わって咄嗟に反応できなかったヒロトは何か気の利いた事を言おうと考え、横目でチラリと彼女を見る。するとイヴは追加でリボンで飾られた麦わら帽子を被っていた。

水着を見た時はヒロトの青少年の心に避けようの無い衝撃が走って落ち着かない気持ちになったが、水着を見るという事を経験できたお陰で普段より多少肌を露出している程度の服装になら彼の心に耐性が付いた。

同様が余りないとはいえ誉め言葉という物が上手く思いつかず、ヒロトはともかく質問する。

「水着を買いに行ったときにその服や帽子も買ったのか？」

「うん、色んな服装持ってた方が便利だし、ヒロトも喜んでくれるって言われて」

イヴは水着を入手しに行くときに付き添いをしていたマギーに勧められるがまま買ったようだった。

マギーには何かと親切にしてもらっていて、何度感謝を伝えても足りそうにない。

この服はどうか、とちよつと不安そうにしているイヴはヒロトにとって水着姿よりは幾分か子供っぽく見えた。

「可愛い、と思うよ」

「――！」

パアツと周囲まで明るくなるような笑みを浮かべたイヴは嬉しい気持ちで全身で表す為にヒロトに飛びついた。

「ヒロト！」

「うわっと！」

ハンドルを握っていたヒロトは横から思わぬ衝撃を食らってホバークラフトの軌道が荒ぶる。

ペリシアまでの道は砂地で周囲には誰も居らず障害物も無い為、今のような無茶な軌道をしてても周囲の迷惑にはならない。

「ふふっ」

ここ最近で一番機嫌のいいイヴに引つ付かれながらもヒロトはホバークラフトの制御をすぐに取り戻す。

彼は左腕の動きを制限されたまま、ペリシアの中心街までのんびりとホバークラフトを運転した。



「アプサラス……？」

ペルシアの中心街にたどり着き、展示スペースが多く置かれた広場に移動すると入り口に一番近い場所で展示されていたのは『アプサラスI』だった。

メイン武装であるメガ粒子砲の発射口が赤いハッチで閉じられていて『アプサラスII』と見間違える余地が無い。とても良くできたガンプラではあるが武装に関しての改造は施されていないようだ。

いきなり変わったMAが出て来たな、とヒロトとイヴがひとしきり感心してから広場の奥に目を向けると今日の展示テーマはどういう物か何となく理解する事が出来た。

「大きい子だけね」

「今日はMAの日か」

MAビルダーの有志が示し合わせてこうなったのか、今日のペリシア広場はどの展示もMAだ。

二人がぎつと目を走らせた場所に展示されていたのは『ビグロ』『サ

イコガンダムⅡ(リフレクタービット付き)』『ラフレシア』『デンドロビウム』『ディープストライカー』『ヴェイガンギア・シド』『ハシユマル』等、些か宇宙世紀出のMAが多い。

どの機体もその巨体からそのままのスケールでは展示されず縮小されている様だ。

「どの子も好きって気持ち溢れてる」
「うん」

MAはその巨体故パーツ数も必然的に多くなつて組むだけでも非常に手間暇がかかり、プラモデルを買う時の費用も跳ね上がる。出来上がってからGBNに持っていくだけでも一苦労だ。

今日は見ごたえがありそうだな、とヒロトが少し期待に胸を膨らませていると後ろから肩にポンと手を置かれた。目を向けると立っていたのは獣耳を生やした美青年だった。

「シャフリさん」

「やあ、ヒロト君、イヴさん、こんにちは」

「こんにちは」

シャフリヤールはヒロトたち二人に微笑んで挨拶してきた。

彼はイヴ復活計画序盤から『奇跡』を起こす為の協力を積極的に申し入れてくれたダイバーでどうやらパルと何らかの繋がりがあるらしいという事が分かっている。

「今日は見ての通りMA祭り、どのガンプラも見ごたえがあつて楽しい日だ。……君のコアガンダムとプラネッツアーマーもぜひここでじっくり見させて貰いたかったが、タイミングが悪かったね」

「また機会はあるでしょうから、その時はお互いに」

「いいね」

世界的ビルダーであるシャフリヤール作のガンプラとなれば、当然ヒロトも一度はじっくり見てみたい。

好感に満ちた表情で頷くシャフリヤールもヒロトが作ったコアガンダムと各アーマーに興味がある。あまり人目に付かない場所に居る筈の彼が広場に入ってきて間もないヒロト達にすかさず声をかけたのはその興味と期待の表れだ。

「そういえば、イヴさんのガンプラは別枠で考えているのかい？」

「——はい」

だとすればそれはそれで興味深いガンプラが見れそうだけど、とシャフリは期待を込めてヒロトに問いかける。

ヒロトは一応周囲を見渡してから、こつそりと頷いた。

そのヒロトの仕草にシャフリヤールはおや？と首をかしげる。

「聞かれたら困る事だったのかい？」

「実は——」

ヒロトはイヴのガンプラを作っている事を隠している理由をシャフリヤールに説明した。

それを聞いてシャフリヤールはなるほど、と納得した。

「当日は私も応援に向かわせてもらおうよ」

「ええ、待ってます」

シャフリヤールはヒロトとイヴが自然に手を繋いでいる事に気付いて、少しわざとらしく声を上げた。

「おつとこれはいけない。デートの邪魔をしてすまなかったね。ゆっくり楽しんでいくと良い」

彼は微笑むとスタスタとどこかへと去っていった。

ヒロトがイヴの顔を伺うが彼女はキョトンとしていて、不機嫌な様子は見受けられない。

スマートに二人の意識を元に戻して立ち去っていたシャフリヤールからは、パルの紳士然とした行動と似たものが見受けられた。

「じゃあ、ちよつと見て回ろうか」

「うん」

『アプサラスI』に近いガンプラは『ビグロ』と『ヴェイガンギアシド』の二機でかなりコアなファーストファンのヒロトがまずビグロの方に足を進めたのはやむを得ない事だった。



MAビルダーとペリシアに観光に来たダイバーたちのやり取りをBGMに二人は気分の赴くままペリシアの展示広場を隅から隅まで楽しんだ。

途中にイヴに視線を向けるダイバーもいたがペリシアに居る以上目的は展示されたガンプラで、イヴに気が付いたダイバーの視線が外れる時間はそう長くなかった。

一周し終えた後に、イヴは何かに目を向けて立ち止まってヒロトの手を引く。

「あそこ、お店がある」

「ん？」

広場の奥の路地裏と言っている店がある。板が掛かっている店がある。

看板は紫を地にして○だけが描かれていた。

「確か、昔はあんなところに店は無かったな」

「どうする？行ってみる？」

如何にも怪しげな店なのでイヴは一応ヒロトに伺いを立てたが、面白そうな場所を見つけた事でイヴの目は輝いていた。

ここは中立地帯ペリシアの中心街、一つの店に入っただけで罨に引っ掛かるような展開はシステム上あり得ない。

ヒロトも少し興味を覚え、一応安全面を考慮してからイヴの意見に賛成する事にした。

「よし、行ってみようか」

「うん」

ヒロトがイヴの手を引いて進みだす。恋人になる前まではほとんどイヴがヒロトの手や腕を引いていたが、二人の関係性が変わってからリードする役割は反対になっていた。

そんな自分達の変化も『変わる』事に含まれているのかな、とイヴは考える。彼の優しい手はグングンと彼女を違う所に連れ出した。

軒先に掛かった薄いカーテンを抜けた店中にはそこら中に小物が商品として陳列されていて、しかしごちゃごちゃとした印象はなくどこかさっぱりとした印象だった。

「やあ、いらっしゃい」

白髭をたっぷり蓄えターバンを巻いた姿の男性ダイバーが歓迎の言葉を二人にかけた。落ち着いた声色で、怪しい店の見た目とはまる

で無縁の様に愛想よく微笑む。

「(´▽｀)は……?」

「見ての通り雑貨とアクセサリーを売っておる」

店主の答えにあの看板の○はリングをかたどった物か、とヒロトは今になって理解した。

その間にイヴはざっと商品を眺めてすぐに確信する。

「ほとんど手作りね」

「おや、分かるのかい?」

ヒロトは手近にあつた髪飾りを手に取って観察し、かなり細かい模様が描かれている事に気が付いた。

商品棚に掛けられた値札の額が少し張るのも仕方ないと思えるくらいにクオリティだ。

「お嬢さんのイヤリングも手作りじゃな」

「分かるの?」

「勿論、その程度の目は持つておるよ、良くできておるな」

店主はにつこりとほほ笑む、深く思い入れのあるイヤリングを褒められたイヴは嬉しそうに頷いた。

そんな二人の手が固く繋がれているのを見て、店主は答えを薄々察しながらヒロトに質問する。

「坊主が作ったのか?」

「はい」

ヒロトの答えに店主は内心であちゃーと声を上げる。この店の商品の半分は客の二人にとっては目に留まる物であっても買う事はほばないだろう、と判断出来たからだ。

「ここではいつからこのお店を?」

「一年程前からじゃな、ガンプラを作るのもいいがこういった細々とした物を作るのが性にあっててな」

店主は所詮ゲームの中の事なので売り上げなどあまり気にしてはいないが、売れたら楽しい遊びとしてこの店を構えていた。

「どれも素敵、貴方に作られて幸せだって言ってる」

「ほ?」

小さなアクセサリーには微かではあるがそれぞれに意志が宿っている、イヴはそれを感じる事ではぼすべての商品が手作りである事を察していた。

細工が細かいですね！等、客から称賛の言葉をいくつも貰った事がある店主だが商品の気持ちを代弁されたことは流石になかった。

店主はここ最近有名になったイヴの件に関りを持たず彼女の事も勿論を知らないダイバーであったが、一風変わった称賛の言葉に目を丸くし頷いた。

「ありがとう、お嬢ちゃん。お礼に安く商品を譲りたいが、恋人からの手作りプレゼントにはどれも見劣りするじやろうのう」

「ええ」

悪びれ無く頷いてしまうイヴに店主はワハハ！と大笑いした。

そうして結局冷やかしただけで店を出る事になったイヴはヒロトの手を引いて立ち止まる。

「ねえ、ヒロト」

「ん？」

イヴは自身の左耳につけられたイヤリングに触れる。

このイヤリングは自分とヒロトをもう一度結び付けてくれた、大事な物だ。

「メイにお返ししたいの」

「……うん、実は俺もその話しようかと考えてた」

メイはあるべき物があるべき所に戻るだけ、と気にした風でもなかったが彼女の一部分として再度生まれてきたイヤリングであることに間違いはない。

イヤリングへの思い入れを二人が再度認識し、メイに何かお礼をしようと考えるのは自然な話だった。

「一緒に何か作ろうか」

「ね、だったら、三人で御揃いにしない？」

「……それはちよつと」

イヴとメイが親子のような関係性を築く事に否やは無いが、三人で家族になる事はちよつとまだ受け入れる事がヒロトには出来なかつ

た。

メイの右耳にイヴのイヤリングと似たデザインの青いイヤリング
がつけられるのはこれからしばらく後の事であった。

お茶会

何か右手の中で動いている、とヒロトは感じて眠りから目を覚ました。

寝起きのぼんやりとした意識を振り払う為にもかく目を開けてみる。

「あ、起きた。おはよう、ヒロト」

「……おはよ、イヴ」

おはようと挨拶を交わせる些細な時間がイヴにとっては毎朝の楽しみだ。

なので普段はヒロトの小さな恋人は毎朝彼より早くに目を覚まし、ベットの上でちょこんと座りながら彼の覚醒を待っているが今日は珍しくイヴは寝ころんだまま。

その理由は寝ている間にヒロトの右手が彼女に覆いかぶさって体を起こす事が出来なかったという些細な物である。

イヴの身体に自分の右手が重なっている事に気が付いた彼はすぐに身体を起こした。

「ごめん、苦しくなかった？」

「ううん、全然」

イヴとしてはスリープ状態が解けてすぐヒロトの手の中に居る事が出来て心地良くむしろ、起きたヒロトがすぐに手をどかしてしまった事が彼女からすると名残惜しく少し残念と感じたくらいであった。

今日は平日で当然ヒロトは学校がある、ベットから出て手早く着替える。彼の着替えが済むまでイヴは大人しくしていたが、つい昨日マギーとやりとりする中で知った事を試してみようと決意する。

「ヒロト、ヒロト」

「ん？」

小さな彼女のチョイチョイと音が聞こえそうな手招き応じてヒロトは手を差し出す、何かこっそり伝えたい事があるのだろうかと思察しての行動だった。

ヒロトは嬉しそうに手に乗ってくるイヴを自身の顔の近くまで寄

せる、日頃からこうした事はよくする様になったが2割くらいの確率で彼女の発言は彼にとって衝撃的な物になる時がある。

寝起きで多少ぼーっとしたままのヒロトはその警戒を怠っていた。

「早く帰って来てね」

「っう?!」

イヴの甘い声でのおねだりにヒロトが思わずぞくつとした感覚を覚えた瞬間、間髪入れずに頬に軽い感触があった。

行ってらっしゃいのキス、イヴの今の言葉と行動を一度に表すならそれ以外にない。

「っ!?!」——どこで覚えて来たんだ?」

「嫌だった?」

「そんな事ないけど……!」

この後ヒロトは何で朝からそんな上機嫌なの?とユリコに質問されて、ありのままを答えようとするイヴを必死で押しとどめる事になった。

なお、学校から帰ってくるときの彼の足はいつもの1.5倍程度は速かった。



そんな事があった日の夕刻、GBNの月面都市にあるソレル・カフェ。

それぞれのダイバーに割り当てられる客室でリクとサラは人を待ちながらのんびりと過ごしていた。

「あ、これ美味しい」

プリンが団子状に丸まった『お月見プリン』を食べてサラは目を輝かせる。リアルでは即型崩れを起こすレベルの軟体が丸いまま形を損なわず、皿の上で積み重なっているデザートは仮想空間の環境を大いに活かして考えられたものだ。

「こっちも美味しいよ、栗はいいね」

カプルをモチーフにデザインされた『カプル・モンブラン』は可愛いらしい見た目をしていて最初はどうか食べたものかとリクは悩んでいたが、思い切って一口食べてしまえば見た目より味の方に彼の意識は

持っていかれた。

リクが感想を述べていると『お月見プリン』の一つがスプーンに乗って彼の前に差し出される。

「リク、あーん」

「あー、うん、美味しい。中にカラメルが入ってるんだ、なるほど」

サラの行動に特に恥じる事もなく、リクはヒョイとプリンに食いついた。

お返しに、とリクがモンブランの一部を掬い上げてサラの前に差し出す。

「はい」

「——美味しい！もつと早くここに来ればよかった」

「確かに、ちよつと惜しいこととした気分。まあでもまた来ようよ」

「うん！」

隣に並んで座ってる二人に『距離近いんだからお互いの皿からデザートを直接取ればいいのでは？』と冷めた意見を口にできる人間は誰も居なかった。

リクとサラがそうして仲良くしていると不意に二人のダイバーが個室に入ってくる。

「ごめん、待たせた」

「二人共、こんにちは」

手を繋いでワープしてきたのはヒロトとイヴの二人だった。

リクとサラはパツと顔を明るくして、示し合わせるまでもなく同じ返事をする。

「そんなに待ってない」

「あら、息ぴったり」

二人の様子にイヴはクスクスと笑う。

同様に微笑んだヒロトに促されてイヴが先に席に着き、ヒロトがその隣に座る。

「とりあえず何か頼む？」

リクが今来た二人に聞くと、ヒロトとイヴはそろって頷く。

ヒロトがデザートを注文するためのウインドウを表示し、すぐに感

心して眩く。

「かなりメニュー増えたな」

「うん、昔の倍はあるね」

ヒロトがウインドウを操作して、実装順にメニューを並べ替えて古い物から先に表示させる。

そのウインドウをイヴが隣で覗き込んで、楽しそうに声を上げた。

「あった、これ」

「ん？ああ、懐かしいな、イヴはこれにする？」

「うん！」

「よし、じゃあ、俺は……これでいいか」

二人が注文を決めると数秒以内に品物がテーブルに届いた。

出てきたのは見た目がまるで凝られていないシンプルなイチゴのショートケーキとエクレアだ。

余りのシンプルさにリクとサラは逆に目を見張る。

「……なんか普通だね」

「まあ、確かに」

ヒロトからすればGBNの黎明期からあったデザートにデザイン性はないのは致し方ない事と思うが、細かい物が充実してきた頃にGBNを始めたリク達からすれば確かに驚くようなものかもしれない。

「昔はこのくらいしかなかったの」

イヴはそう言って一口食べると、んー！と声を上げた。

イチゴ！クリーム！という分かり易い味が彼女の口の中に広がる、妙に中毒性のある刺激が懐かしい。

ヒロトはそんな彼女を横目で見ながらエクレアを一口食べて『雑な味ってこの事か』と今になって実感した。

「雑だ」

「ふふっ、やっと分かった？」

イヴはショートケーキを少し切り取って、ヒロトの前に差し出した。

二人きりならともかく、今はちよつと。彼はそう断るかどうかで逡巡する、彼女は悪戯っぽい笑みを浮かべてヒロトの口にケーキを寄せ

てきた。

食べるまで引かないか、とヒロトが半ば諦めてケーキを食べるとイヴは嬉しそうに笑う。

「美味しい?」

「……まあ」

ちよつと気まずい感覚を覚えながらヒロトが頷く。

席の正面で座っているリクとサラはついさっきまで自分達が行っていた事を棚に上げ、微笑ましい物を見る目でヒロトを見守っていた。生暖かい、『うわあ……』みたいな感想がありありと浮かんでないだけまだマシなような、これはこれでくすぐったい様な複雑な気持ち
が彼の中に沸き上がる。

リクとサラは仲良くしている二人を見ただけで嬉しいと感じる。打ち上げの時もヒロトとイヴのは手を繋いで行動していたがあこの時は大勢のダイバーが居て二人の様子をじっくり伺うチャンスがリクとサラには無かった。

少し感動している二人の視線を浴びているヒロトはしばらく沈黙状態になってしまったがイヴは止まらない。もう一回ケーキを少し切り取ると今度はサラの前に持って行った。

「はい、サラも」

「いいの?」

「勿論」

「ありがとう!」

イヴの差し出したケーキにサラはパアツと相好を崩すと素直に受け入れる。

リクとヒロトはその様子をぼんやり眺めながら『絵になるなあ』とほぼ同時に同じことを考えていた。

四人の今日のお茶会の目的は二つ、その一つはもっぱら雑談だ。「新規ディメンションが実装されるって話があるけど、あれ本当かな?」

リクが適当な話題を上げると、ヒロトもその話題乗る事にした。「新しいディメンションって形になるのかはともかく、あのGN粒子

の受け皿を作る必要はあるんじゃないかな、それが噂の元になったとか……?」

「あー、確かにかなり余ってそうだったね」

うんうんと頷くりクは脳内でイヴ復活計画の残滓である白い花に蓄えられたGN粒子を思い浮かべる。

GBNに対するダイバーたちの愛情が強く籠った、あの粒子を運営がどう処理したのかと言う話は四人の耳に入っていない。それとなくヒロトがキョウヤに聞いて見たが、彼も一向に首をかしげていた。

現時点では妙なバグの温床にはなっていないらしい、とだけキョウヤは述べていた。その点についてはヒロトも安堵を覚える他にない。

四人はその後新しいデイメンションに対する意見を交わし、一頻り時間が経つうちに話題が切り替わる。

「へえ、じゃあイヴさんはヒロトと一緒に暮らしてるんだ!」

「素敵!」

話題はリアルに関する内容。二組のカップルが会話を交わしていくとお互いの日々の過ごし方に注目し合うのはごく自然な事で、更に誰の目にも触れない環境となれば忌憚のない踏み込んだ内容になるのは当然だった。

リクとサラが暮らしている日々をヒロトは二人との今までの付き合いの中で凡そ把握していたが、ヒロトがイヴと暮らすようになってからの話は今日まであまりする事が無かった。

勿体ぶって場所を整え聞いた方が面白くなるだろうと、あえて二人で示し合わせて普段の暮らしについての質問を控えていたリク達は今知った情報だけでも大いに関心を示した。モビルドールを作成していたのはヒロト自身で、そうなると思えば確信に近い予想はしていたが、いざ一緒に暮らしている事を耳にすればやはり感動を覚えるものだ。

まさしくおはようからお休みまで一緒に二人にサラは羨ましさを素直に感じていた。モモ・アヤメ・ナミの家を巡って 日々を過ごすのは心の底から楽しい、とはいえ別れ際にもうちよつとリクと一緒に居たいと考える日も良くある。

目の前で幸せそうに微笑んでいる姉を見てみると、その気持ちが急激に膨れ上がるのも仕方のない事だった。

「いいなあ……」

唇を尖らせてちよつと拗ねたような口調になったサラがリクにチラリと視線を送る。

サラが視線で伝えてる事にうぐつと困った顔になるリクにヒロトが小さく苦笑してすぐにフォローに回った。

「サラさん、リクも考えてると思うよ」

「焦らせたらダメよ、サラ」

サラの気持ちは良く分かるとはいえ、イヴは心を鬼にして妹に釘を打つ。生まれが漠然とした自分を受け入れてくれたヒロトの両親は格別に大らかで、リクの両親はまた別の性格をしているのだろうと判断しての事だ。

イヴに注意されたサラはしょんぼりと肩を落として頷く。我儘が過ぎる事を感じて落ち込みながら、それでも内心の羨ましさはやはり消せない。

リクはそんなサラの様子を見て、まだ先の話だとか、叶うかどうか確約はできないしとか、彼なりに色々考えてサラに話さずにいた事をもう我慢せず言ってしまう事にした。

「サラ、俺、大学入ったら一人暮らしするからさ」

「――！」

「まだ待たせちゃうけど。その時ちゃんを迎えに行くよ」

リクもやはりヒロトが羨ましかった。

サラと毎日一緒に居れる、少し考えただけでもリクの思考は甘く痺れる。言葉にして伝えた以上何としても叶えよう、以前から考えていた事に対する決意を彼は更に強くする。

リクに合わせて体を成長させ立ち振る舞いもそれに応じる様に落ち着いてきたサラだが、今の彼の言葉に堪え切れない気持ちが溢れ出した。

「リク大好き!!」

「うわあ!?!」

体当たりもかくやと言う勢いで飛びついてきたサラを受け止めて、リクは必死で踏ん張って耐えた。

飛び込む仕草にイヴとの類似性を見たヒロトはこの後しばらく二人はくっ付いたままだろうかと予想した。

イヴは心底幸せそうな妹の姿を見る事で、ヒロトへの感謝の気持ちがより強くなった。

彼が助けてくれなければ、こうして直に妹とその大事な人を見てその幸せにあやかる事なんてできなかった。

『俯いてたら何も見えない』と彼は言っていた。

ヒロトの傷も気持ちも、今のGBNも、増えていく大切な人たちも、妹の姿も、顔を上げる事が出来たから、勇気を彼が与えてくれたから見つける事が出来た。

胸を張っていいとマギーがイヴに伝えてた時、彼女は上手く返事が出来なかった。

今なら少しは誇らしく答える事が出来るだろうか、とイヴは思う。

ヒロトはイヴの様子を見て、なんとなく肩を抱き寄せる。心細い気持ちになっていのではないか、という確信があるわけでもないただの感任せの行動。

されるがままにヒロトにもたれかかったイヴは彼の温かさを感じた。

「ありがとう」

「イヴはここに居るよ」

「うん」

リクとサラの目が逸れている内に、ヒロトの頬に柔らかい感触が伝わった。



四人がそれぞれ二人の空間に閉じこもってしまう時間がしばらくあったが、その内に話は再会されて飛ぶように時間が過ぎて気が付けばもうそろそろログアウトして家に帰らなければならぬ時間になっっていた。

今日来た目的は雑談と、それ以外でもう一つ。

別れ際に差し掛かり、その話はお互い示す事なく行われた。

姉妹であろうとも、兄弟のような関係であろうともここから先は意味をなさない。

「準備はできてる?」

リクはヒロトに問う。

十全か? 怠りは無いか?

「ああ」

ヒロトは迷いなく頷く。

ここから先は、敵同士。

「五対五、一度落とされれば復活無しのデスマッチ」

フォースバトル、条件は明確。

「メンバーは俺、ユツキー、モモ、アヤメ、コーイチ」

フォースメンバーの選出。

「こちらからは、俺、カザミ、メイ、パル、イヴ」

この場に居る四人に肌にビリビリとした感覚が走る。

イヴがどれほどパイロットとして動けるか、ガンプラはどういう性能か一切の情報は明かしていない。フェアでない条件がこの勝負が本気である事を示している。

「勝負は週末の正午、使用するディメンションは直前にランダムで決定、準備時間は十分のみ」

ヒロトの冷たい声に、リクは硬く頷く。

そして獰猛に告げる。

「容赦はしない」

「望むところだ」

どちらが強いか、この戦いで決める。

BUILD DIVERS VS BUILD DIVERS
魂をかけた一戦が静かに火蓋を切った。